

深谷市

上敷免遺跡

一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告

— V —

(第4分冊)

1993

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



第 2 号方形周溝墓出土壶形土器



上敷免遺跡出土石製品

目次

序
例言
凡例

(第1分冊)

I	調査の概要	1
1	発掘調査に至るまでの経過	1
2	発掘調査および整理・報告書刊行事業の組織	2
3	発掘調査および整理・報告書作成作業の経過	3
4	発掘調査の方法	4
II	遺跡の立地と環境	6
III	縄文・弥生時代の遺構と遺物	13
1	縄文時代の遺構と遺物	16
2	弥生時代の遺構と遺物	16
IV	谷及びグリッドの出土遺物	38
1	谷	38
2	グリッド	85
3	土製品・玉類	103
4	石器	105
V	縄文・弥生時代のまとめ	115
1	土器について	115
2	底部圧痕について	147
3	石器について	158

(第2分冊)

VI	古墳時代以降の遺構と遺物	175
1	第1発掘区	175
2	第2発掘区	405

(第3分冊)

3	第3発掘区	639
4	第4発掘区	813

(第4分冊)

5	第5発掘区	897
6	第6発掘区	1097
7	石製品	1153
8	土製品	1167
9	鉄製品	1175
10	灰採遺物	1181
VII	まとめ	1182
VIII	附篇	1207

挿 図 目 次

【第4分冊】	
第699図	第5区発掘区全測図……………898
第700図	第207号住居跡……………899
第701図	第207号住居跡出土遺物(1)……………900
第702図	第207号住居跡出土遺物(2) および遺物出土状況……………901
第703図	第208号住居跡および川土遺物……………903
第704図	第209号住居跡……………904
第705図	第210・211号住居跡および 第210号住居跡出土遺物……………905
第706図	第211号住居跡出土遺物……………906
第707図	第212号住居跡および川土遺物……………907
第708図	第213号住居跡……………908・909
第709図	第213号住居跡出土遺物……………910
第710図	第213号住居跡カマド(上) および竈み物石川土状況(下)……………912
第711図	第214号住居跡および川土遺物……………913
第712図	第215号住居跡および川土遺物……………914
第713図	第216・217号住居跡……………915
第714図	第216号住居跡出土遺物……………916
第715図	第217号住居跡出土遺物(1)……………917
第716図	第217号住居跡出土遺物(2)……………918
第717図	第218号住居跡……………921
第718図	第218号住居跡出土遺物(1)……………922
第719図	第218号住居跡出土遺物(2)……………923
第720図	第219号住居跡カマド……………925
第721図	第219号住居跡……………926
第722図	第219号住居跡出土遺物……………927
第723図	第220号住居跡……………929
第724図	第220号住居跡出土遺物(1)……………930
第725図	第220号住居跡出土遺物(2)……………931
第726図	第220号住居跡出土遺物(3)……………932
第727図	第220号住居跡出土遺物(4)……………933
第728図	第221号住居跡カマド……………937
第729図	第221号住居跡……………938
第730図	第221号住居跡出土遺物(1)……………939
第731図	第221号住居跡出土遺物(2)……………940
第732図	第222号住居跡……………942
第733図	第222号住居跡出土遺物(1)……………943
第734図	第222号住居跡出土遺物(2)……………944
第735図	第222号住居跡出土遺物(3)……………945
第736図	第223号住居跡……………948
第737図	第223号住居跡出土遺物……………949
第738図	第224号住居跡……………950・951
第739図	第224号住居跡出土遺物……………952
第740図	第225号住居跡……………954
第741図	第225号住居跡出土遺物……………955
第742図	第226号住居跡……………956
第743図	第226号住居跡出土遺物……………957
第744図	第227・228号住居跡および 第228号住居跡出土遺物……………959
第745図	第229・230号住居跡……………960・961
第746図	第229号住居跡出土遺物(1)……………962
第747図	第229号住居跡出土遺物(2)……………963
第748図	第230号住居跡出土遺物(1)……………965
第749図	第230号住居跡出土遺物(2)……………966
第750図	第230号住居跡出土遺物(3)……………967
第751図	第230号住居跡貯蔵穴……………970
第752図	第231号住居跡……………971
第753図	第231号住居跡出土遺物(1)……………972
第754図	第231号住居跡出土遺物(2)……………973
第755図	第232号住居跡カマド……………975
第756図	第232号住居跡……………976・977
第757図	第232号住居跡出土遺物(1)……………978
第758図	第232号住居跡出土遺物(2)……………979
第759図	第232号住居跡出土遺物(3)……………980
第760図	第232号住居跡出土遺物(4)……………981
第761図	第232号住居跡出土遺物(5)……………982
第762図	第232号住居跡出土遺物(6)……………983
第763図	第232号住居跡出土遺物(7)……………984
第764図	第233号住居跡および川土遺物……………989
第765図	第234・235号住居跡出土遺物……………990
第766図	第234・235・236号住居跡……………992・993
第767図	第236号住居跡出土遺物……………994
第768図	第237・238号住居跡……………995
第769図	第237・238号住居跡出土遺物……………996

第770回	第239号住居跡	998
第771回	第239号住居跡出土遺物(1)	999
第772回	第239号住居跡出土遺物(2)	1000
第773回	第240号住居跡および出土遺物	1002
第774回	第241号住居跡	1004
第775回	第241号住居跡出土遺物	1005
第776回	第242・243号住居跡	1006・1007
第777回	第242号住居跡出土遺物(1)	1008
第778回	第242号住居跡出土遺物(2)	1009
第779回	第242号住居跡出土遺物(3)	1010
第780回	第243号住居跡出土遺物(1)	1013
第781回	第243号住居跡出土遺物(2)	1014
第782回	第244号住居跡	1016・1017
第783回	第244号住居跡出土遺物(1)	1018
第784回	第244号住居跡出土遺物(2)	1019
第785回	第244号住居跡出土遺物(3)	1020
第786回	第244号住居跡出土遺物(4)	1021
第787回	第244号住居跡出土遺物(5)	1022
第788回	第245号住居跡	1027
第789回	第245号住居跡出土遺物	1028
第790回	第246号住居跡	1031
第791回	第246号住居跡出土遺物	1032
第792回	第247号住居跡	1034・1035
第793回	第247号住居跡出土遺物	1036
第794回	第248号住居跡	1037
第795回	第248号住居跡出土遺物	1038
第796回	第249号住居跡および出土遺物	1040
第797回	第250号住居跡	1041
第798回	第250号住居跡出土遺物	1042
第799回	第251号住居跡	1042
第800回	第252号住居跡	1043
第801回	第252号住居跡炭化物出土状況	1044
第802回	第252号住居跡出土遺物	1045
第803回	第253号住居跡および出土遺物	1046
第804回	第254号住居跡および出土遺物	1047
第805回	第255号住居跡および出土遺物	1048
第806回	第256号住居跡および出土遺物	1049
第807回	第257号住居跡	1050・1051
第808回	第257号住居跡出土遺物(1)	1052
第809回	第257号住居跡出土遺物(2)	1053

第810回	第258号住居跡	1055
第811回	第258号住居跡出土遺物	1066
第812回	第259号住居跡	1057
第813回	第259号住居跡出土遺物	1058
第814回	第260号住居跡および出土遺物	1059
第815回	第6号掘立柱建物跡	1061
第816回	第5発掘区土坑(1)	1062
第817回	第5発掘区土坑(2)	1063
第818回	第5発掘区土坑(3)	1064
第819回	第5発掘区土坑(4)・ピット	1065
第820回	第5発掘区土坑出土遺物(1)	1066
第821回	第5発掘区土坑出土遺物(2)	1067
第822回	第5発掘区土坑出土遺物(3)	1068
第823回	第5発掘区ピット出土遺物	1071
第824回	第17～19号溝 および第19号溝出土遺物	1072
第825回	第20・21号溝	1073
第826回	第20号溝出土遺物	1074
第827回	第22・23号溝	1075
第828回	第22・23号溝出土遺物	1076
第829回	第24号溝	1077
第830回	第25～27号溝	1078
第831回	第25～27号溝出土遺物	1079
第832回	谷出土遺物(1)	1080
第833回	谷出土遺物(2)	1081
第834回	谷出土遺物(3)	1082
第835回	谷出土遺物(4)	1083
第836回	谷出土遺物(5)	1084
第837回	谷出土遺物(6)	1085
第838回	谷出土遺物(7)	1086
第839回	谷出土遺物(8)	1087
第840回	谷出土遺物(9)	1088
第841回	第5発掘区グリッド出土遺物	1095
第842回	第6発掘区全測図	1098
第843回	第1号古墳跡	1099
第844回	第1号古墳跡出土遺物	1100
第845回	第1号方形周溝墓	1101
第846回	第2号方形周溝墓	1102
第847回	第2号方形周溝墓出土遺物	1103
第848回	第3号方形周溝墓	1104

第849回	第3号方形周溝墓出土遺物	1105
第850回	第4号方形周溝墓および出土遺物	1106
第851回	第5号方形周溝墓	1108
第852回	第6号方形周溝墓	1109
第853回	第7号方形周溝墓および出土遺物	1110
第854回	第8号方形周溝墓出土遺物	1111
第855回	第8号方形周溝墓	1112・1113
第856回	第9号方形周溝墓	1114
第857回	第261号住居跡	1115
第858回	第262号住居跡	1115
第859回	第263号住居跡	1116
第860回	第263号住居跡出土遺物	1117
第861回	第264号住居跡	1118
第862回	第265号住居跡	1119
第863回	第265号住居跡出土遺物	1120
第864回	第266号住居跡および出土遺物	1121
第865回	第267号住居跡	1122・1123
第866回	第267号住居跡出土遺物	1124
第867回	第268号住居跡	1125
第868回	第268号住居跡出土遺物	1126
第869回	第269号住居跡	1127
第870回	第269号住居跡出土遺物	1128
第871回	第270号住居跡	1129
第872回	第271号住居跡	1129
第873回	第272号住居跡	1130
第874回	第272号住居跡出土遺物	1131
第875回	第273号住居跡および出土遺物	1132
第876回	第274号住居跡	1133
第877回	第7号掘立柱建物跡	1134
第878回	第8号掘立柱建物跡	1135
第879回	第9号掘立柱建物跡	1136
第880回	第10号掘立柱建物跡	1137
第881回	第7・9・10号 掘立柱建物跡出土遺物	1138
第882回	第128号土坑遺物出土状況	1139
第883回	第6発掘区土坑(1)	1140
第884回	第6発掘区土坑(2)	1141
第885回	第6発掘区土坑(3)	1142
第886回	第6発掘区井戸	1143
第887回	第6発掘区土坑・井戸出土遺物	1144

第888回	第28号溝	1146
第889回	第29号溝	1147
第890回	第30号溝	1148
第891回	第31号溝および出土遺物	1149
第892回	第6発掘区全景	1150
第893回	第6発掘区グリップ出土遺物	1151
第894回	板碑	1152
第895回	石製品(1)模造品	1154
第896回	石製品(2)未製品	1155
第897回	石製品(3)下型	1156
第898回	石製品(4)「玉	1157
第899回	石製品(5)紡錘車・石錘	1158
第900回	石製品(6)砥石	1159
第901回	石製品(7)砥石・すり石	1160
第902回	土製品(1)模造品	1167
第903回	土製品(2)土錘	1168
第904回	土製品(3)土錘・その他	1169
第905回	土製品(4)紡錘車	1170
第906回	土製品(5)貝塚穴敷泥岩	1171
第907回	鉄製品(1)刀子	1176
第908回	鉄製品(2)鎌・その他	1177
第909回	表採遺物(1)	1179
第910回	表採遺物(2)	1180
第911回	古墳時代前期の上敷免遺跡	1184
第912回	古墳時代中期前半の上敷免遺跡	1185
第913回	古墳時代中期後半の上敷免遺跡	1186
第914回	古墳時代後期前半の上敷免遺跡	1187
第915回	古墳時代後期後半の上敷免遺跡	1188
第916回	7世紀前半の上敷免遺跡	1189
第917回	7世紀後半の上敷免遺跡	1190
第918回	8世紀前半の上敷免遺跡	1191
第919回	8世紀後半の上敷免遺跡	1192
第920回	9世紀前半の上敷免遺跡	1193
第921回	9世紀後半の上敷免遺跡	1194
第922回	10世紀代の上敷免遺跡	1195

目 次

【第4分冊】

巻頭図版4 第2号方形周溝墓出土彩色土器
上敷免遺跡出土石製品

図版160 第5発掘区谷全景

第5発掘区遺構群

図版161 第207号住居跡

第207号住居跡カマド

第210・211・212号住居跡

第213号住居跡

第214号住居跡

第215号住居跡

第217号住居跡

第218号住居跡

図版162 第219号住居跡

第220号住居跡

第221号住居跡

第222号住居跡

第223号住居跡

第224号住居跡

第225号住居跡

第226号住居跡

図版163 第227・228号住居跡

第229・230号住居跡

第231号住居跡

第232・233号住居跡

第232号住居跡

第232号住居跡カマド

第234・235・236号住居跡

図版164 第237・238号住居跡

第239号住居跡

第241号住居跡

第242・243号住居跡

第244号住居跡

第245号住居跡

第246号住居跡

第247号住居跡

図版165 第248号住居跡

第249号住居跡

第251号住居跡

第252号住居跡

第252号住居跡炭化物出土状況

第257号住居跡

第258号住居跡

第259号住居跡

図版166 第260号住居跡

第72号土坑

第73号土坑

第77号土坑

第78号土坑

第101号土坑

第102号土坑

第128号土坑

図版167 第5発掘区 土師器 坏(1)

図版168 第5発掘区 土師器 坏(2)

図版169 第5発掘区 土師器 坏(3)

図版170 第5発掘区 土師器 坏(4)

図版171 第5発掘区 土師器 坏(5)

図版172 第5発掘区 土師器 坏(6)・蓋

図版173 第5発掘区 須恵器 坏皿

図版174 第5発掘区 土師器 碗

図版175 第5発掘区 土師器 鉢他・須恵器 匙

図版176 第5発掘区 土師器 类瓶(1)

図版177 第5発掘区 土師器 类瓶(2)・飯

図版178 第5発掘区 土師器 类瓶(3)

図版179 第5発掘区 土師器 类瓶(4)

図版180 第5発掘区 土師器 飯・支脚

図版181 第6発掘区遺構群

第6区発掘区方形周溝墓群

図版182 第1号古墳跡

第1号方形周溝墓

第2号方形周溝墓

第2号方形周溝墓遺物出土状況

第3号方形周溝墓遺物出土状況

第4号方形周溝墓

第5号方形周溝墓

第8号方形周溝墓

- 図版183 第9号方形周溝墓
第263号住居跡
第265号住居跡
第267号住居跡
第268号住居跡
第269号住居跡
第272・273号住居跡
第7号楕円柱建物跡
- 図版184 第6発掘区出土遺物(1)
- 図版185 第6発掘区出土遺物(2)
- 図版186 石製模造品
石製模造品(未製品)
- 図版187 石製下類
石製紡錘車・石錘
- 図版188 石錘・砥石
土製品
- 図版189 土錘
土製紡錘車
- 図版190 鉄製品(刀子)
鉄製品(鎌その他)
- 図版191 鉄製品X線写真

5 第5発掘区

第5発掘区は、X軸の439～464にあたる。遺構確認面における標高は34.5mと若干高い。ほぼ中央部に発掘区を南北に横切って谷が確認された。遺構はこの谷の両側を中心に分布しているが、東側の集中区はその分布が非常に密で、切り合いも著しい。これはこの部分が土取りによる削平を受けていないことに起因するものと考えた方がよい。谷の両側の遺構集中区では、噴砂と同様に、地震に伴う液状化現象によって下層の黒色土が噴き上がった亀裂が、帯状になってほぼ南北に走っている。この黒色土帯は遺構に大きな影響を与えているが、これを切って構築されている住居跡も認められ、興味深い。

第5発掘区で検出された遺構は、住居跡54軒（第207～第260号）・掘立柱建物跡1棟（第6号）・土坑53基（第69～第121号）・溝11条（第17～第27号）である。

住居跡は、分布が密な東側で特に切り合い関係が著しい。確認されたほとんどのものが北側若しくは東側の辺にカマドを構築している。これらの時期別の内訳は、古墳時代中期4軒、後期29軒、奈良時代8軒、平安時代前期10軒、不明3軒である。

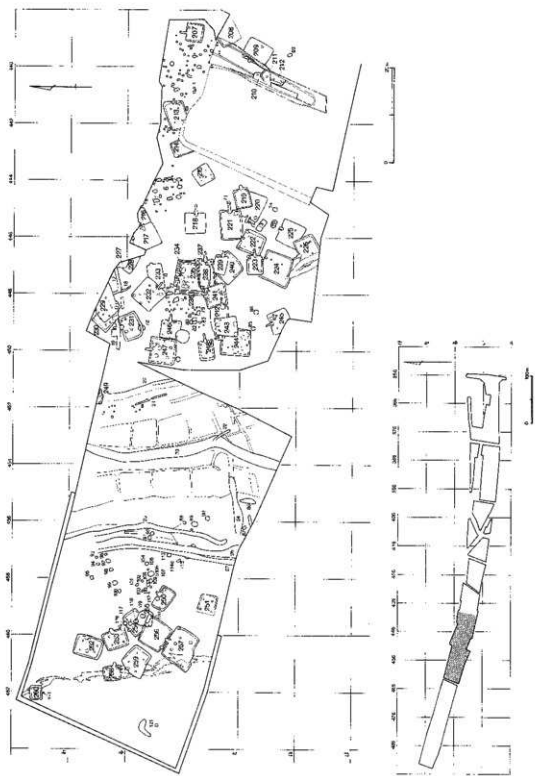
掘立柱建物跡は谷の東側に1棟確認された。建物の方向は方位に忠実で、二間二間の建物と推定される。出土遺物はほとんどなく、その時期は不明である。

土坑は、その規模・形態等さまざまで、谷を挟んだ2つの住居跡群内と、東端部に集中して分布している。うち19の土坑から図示できる遺物が出土しているが、その性格を類推する資料に欠ける。しかし、時期的には住居跡の属する時期と大差はなく、3群ともに住居跡の近辺に分布することから、これらの土坑群の多くは生活に関連した、なんらかの意味をもつ遺構と考えられる。なお、東端部に位置する群はおもにピット群として整理したが、これは発掘調査時の分類に準じたもので、そこに質的な違いを認めている訳ではない。

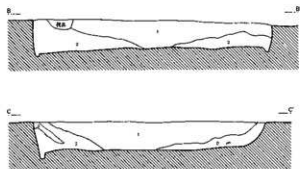
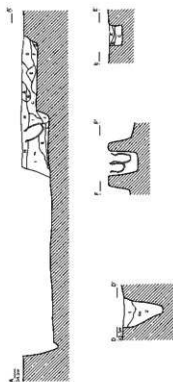
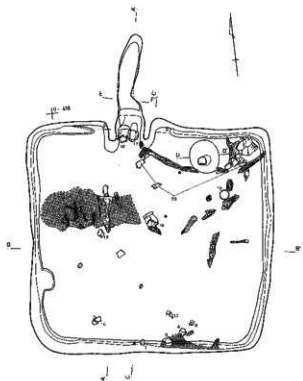
溝もまた性格は不明であるが、多くは谷と並行もしくは直行する方向に走っており、排水溝といったような性格をもっていた可能性がある。出土遺物からみると、おもに奈良～平安時代にかけて機能していたものと考えられる。

発掘区の中央に形成された谷部からは、縄文時代後晩期の遺物とともにそれとほぼ同じ量の土器器および須恵器が出土した。これらは主に東斜面から出土しており、その時期は古墳時代後期から平安時代にいたる。縄文時代の遺物を含む層とはおおむね区別がつくが、古墳時代以降の包含層を層位的に細かくおさえることはできなかった。集落が営まれていた時期には、土器が廃棄され続けていたものと考えられるが、谷が埋没してから形成された溝（第22・23号溝）の出土遺物と、谷包含層から出土したもっとも新しい土器群の示す時期が一致することから、その遺物の示す時期、9世紀後半にはほぼ埋没状態にあったものと推測される。

なお、谷部の確認面には畦状の痕跡が認められたが、水田など生産遺構として明確にとらえることはできなかった。出土遺物もないのでその時期は明らかではないが、おそらくは近世のものと考えられる。



第699图 第5区发掘区全测图



第207号住居跡

1. 暗褐色土 炭化物・黄褐色土粒をわずかに含む。しまりよし。
2. 暗褐色土 炭化物・黄褐色土粒子を多く含む。しまりよし。
3. 暗褐色土 2層中で特に黄褐色土粒下を多く含む部分。

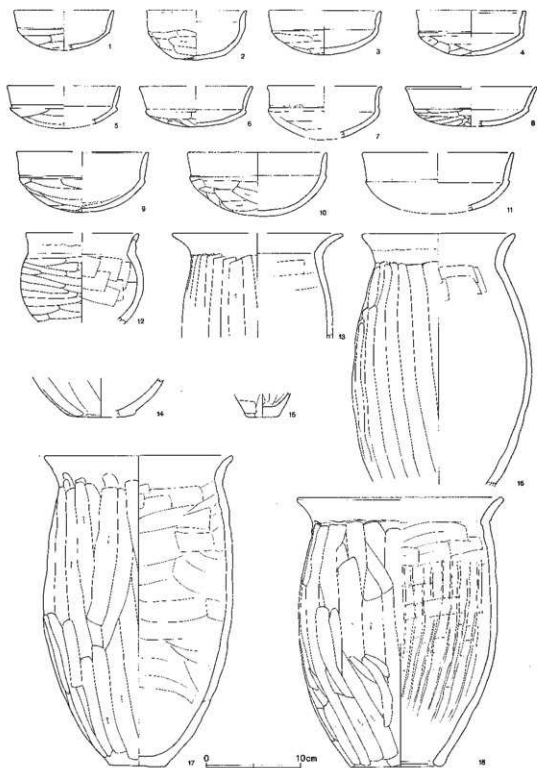
第207号住居跡貯蔵穴

1. 茶褐色土 黄褐色土粒子(径1~2mm)を全体的に多量に含み、炭化物をわずかに含む。やや粘性があり、堅固。
2. 暗茶褐色土 茶褐色土を基本に黄褐色土粒子(径1~3mm)を少量、同ブロック(径1~2cm)を少量含む。炭化物粒子を多く含む。やや粘性があり堅固。

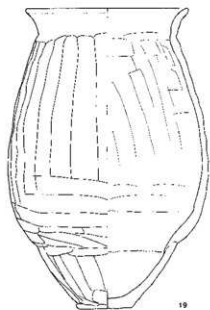
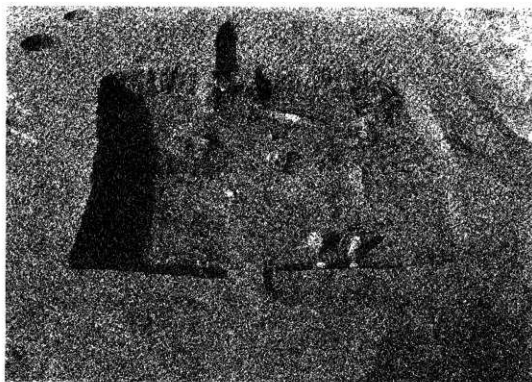
第207号住居跡カマド

- A. 黄褐色土 茶褐色土を基本に黄褐色土ブロック(径5mm~1cm)を多く含む。
- B. 赤褐色土 焼土ブロックを主体に黒色土を少量含む。
- C. 黒褐色土 黄褐色土粒子(径3~5mm)・炭化物を多量に含む。
- D. 茶褐色土 黄褐色土粒子(径1~3mm)を全体的に多量に、焼土・炭化物を若干含む。
- E. 黄褐色土 茶褐色土を基本に黄褐色土ブロック(径5mm~1cm)を多量に含む。
- F. 明黄褐色土 黄褐色土ブロック(径1~2cm)を基本に茶褐色土を若干含む。焼土ブロックが上部に集中する。
- G. 黄褐色土 黄褐色土ブロック(径1~2cm)を基本に茶褐色土を少量含む。
- H. 暗茶褐色土 黄褐色土粒子(径3~5mm)を多く、焼土粒子をまばらに含む。
- I. 黒褐色土 黄褐色土粒子(径1~3mm)をまばらに、炭化物粒子を多く含む。
- J. 黒褐色土 基本的にI層と同じだが、焼土ブロックを多く含む。
- K. 暗茶褐色土 基本的にI層と同じだが、炭化物・焼土粒子を多く含む。
- L. 灰褐色土 明茶褐色土を基本に炭化物を多く含む。粘性低くしまりなし。



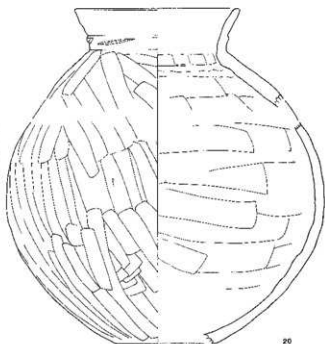


第701图 第207号住居跡出土遺物(1)



19

0 10cm



20

第702図 第207号住居跡出土遺物(2)および遺物出土状況

第207号住居跡 (第701・702区)

No.	器 種	大きさ(cm)	胎 土	色 調	残存率(%)	備 考
1	坏	口(10.4) 高(4.2)	R+W'	橙~にふい黄橙	40	№13. 体部外面風化によりケズリ不明瞭。
2	坏	口10.5 高5.2	B+W	橙~黒褐	100	№23. 口縁部~体部内面ナデ。風化。
3	坏	口11.9 高4.7	B+R+W+W'	にふい橙	90	体部外面風化によりケズリ不明瞭。
4	坏	口11.6 高4.8	B+R+W	にふい黄橙~黒	100	№17. 口縁部ヘラアテ面取り。
5	坏	口(12.0)	W+W'	橙~にふい橙	20	口縁部ナデ。体部外面風化著しくケズリ不明瞭。
6	坏	口(12.0) 高4.2	B+R+W+W'	橙~黒	20	口縁部面取り。体部外面風化著しくケズリ不明瞭。胎土中の含有物量多い。
7	坏	口(12.2) 高(5.6)	W+W'	橙	30	内面風化顕著。外面もほとんど調査見えない。
8	坏	口(14.0) 高(4.2)	B+R+W	灰褐	25	№18. 口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
9	坏	口(14.0) 高6.4	B+R+W	明赤褐	70	№15. 口縁部ヘラアテ面取り。体部内面ヘラナデ。
10	坏	口14.8 高6.7	B+R+W	橙	100	№21. 口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
11	坏	口(16.0)	R+W'少+W'少	橙	35	口縁部面取り。風化により器面ツルツル。
12	小型罐	口(12.0)	B+R+W+W'	橙	30	№8. 胴部外面細かいヘラケズリ。内面ヘラナデ。
13	罐	口(18.0)	B+R+W+W'+橙	橙	上半部 15	№16. 風化著しく器面ザラザラ。
14	罐	底7.6	B+R+W+W'	明赤褐	底部 50	胴部外面ヘラケズリ。底部外面多方向のヘラケズリ。
15	ミニチュア	底3.4	R+W+W'	(内)橙 (外)明黄褐~黒	底部 100	外面ヘラケズリ後ナデ。内面ヘラナデ。
16	罐	口16.0 胴19.0	B+R+W+W'	にふい橙~灰褐	80	№2・7・11. 口縁部外面輪痕み痕。胴部内面ヘラナデ。
17	罐	口19.8 底6.0 高32.6 胴20.1	B+R+W'多	褐灰	100	№1・2. 胴部内面粗いヘラナデ。
18	甗	口21.4 底9.5 高26.3	B+R+W	にふい橙~黒褐	100	№24. 胴部外面ヘラケズリ。内面粗いヘラナデ後粗いミガキ。
19	甗	口17.0 底5.5 高31.5 胴21.0	B+R+W+W'	明赤褐~褐灰	95	№2. 胴部外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。胎土中の含有物量多い。
20	甗	口17.5 底(10.6) 高(35.1) 胴33.1	B+R+W+W'	橙~黒褐	80	№4・6・22 カマド。口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。口縁部~胴部上半と胴部下半境点なし。

(1) 住居跡

第207号住居跡 (第700区)

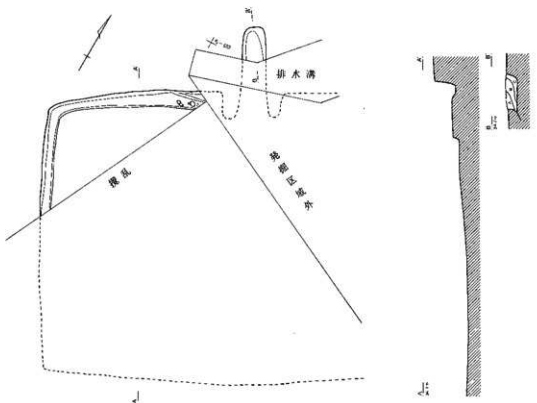
ち・りー438・439Gridに位置する。形態は正方形に近い。長軸3.8m、短軸3.6m、主軸の傾きはN-10°-Eである。床面までの深さは44cmで、覆土は自然に埋没した状態を示している。床面と壁は焼けている箇所があり、また、炭化材が散乱していることから、焼失家屋の可能性が高い。

カマドは北壁のやや西寄りに設けられ、補は地山の造り出しである。燃焼部はほとんど掘り込まれておらず、長差2個体が並列正位で検出された。支脚には石が使用されている。貯蔵穴はカマドの右側、住居の北東隅に設けられている。規模は46×53cm、深さは60cmで、底に近づくにつれて幅が狭くなっている。壁溝はほぼ全周している。柱穴は確認されなかった。

遺物はそう多くはないが、残存率は良好である。土器以外には編物石が3点出土している。

第208号住居跡 (第703図)

と一438・439Gridに位置する。大半が調査区域外や大きな攪乱部分にかかり、北西コーナーと、カマド煙道部の一部が検出されたのみである。規模、形態は不明である。カマドは北壁に構築されている。検出された範囲には浅い壁溝が巡っている。出土遺物は少なく、すべて破片である。



第208号住居跡カマド

- A. 暗褐色土 少量の焼土ブロック (厚3~5cm) と少量の炭化物粒子を含む。
しまり良し。
- B. 暗褐色土 Aよりも炭色味が強い。焼土粒子・炭化物粒子を多量に含む。しまり弱。
- C. 褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を少量含む。粘性ややあり。

0 2m



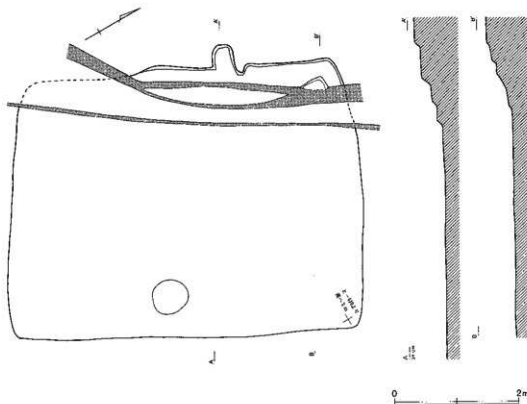
第703図 第208号住居跡および出土遺物

第208号住居跡 (第703図)

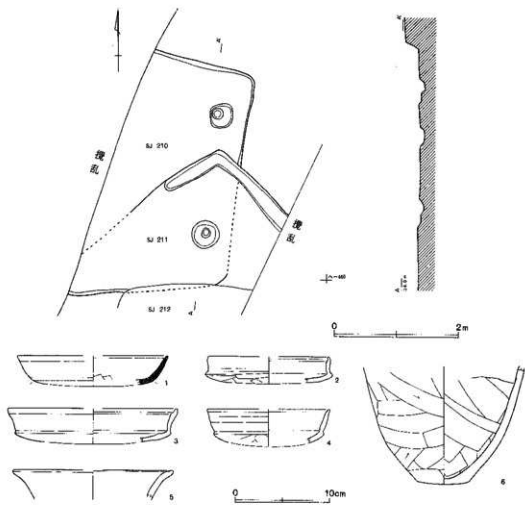
No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口(14.0) 高(3.6)	W	橙	20	カマド。口縁部ナデ。体部外面ヘラズリ。
2	坏	口(11.0) 高(3.6)	B	橙	10	内面風化。
3	坏	口(12.0) 高3.9	B+W	(内)黒褐色 (外)にふい黄褐色	40	№2-4。底部回転糸切り後、高台ナデつけ。
4	坏	口(12.0) 高(5.3) 胴(12.2)	R+W	橙~灰褐色	20	№3。口縁端部ヘラアテ。
5	高坏	口(18.0) 高5.5	R多+W	にふい橙	坏部 20	カマド。体部外面ナデ。内面風化。
6	壺	底(6.0) 高2.8	砂	(内)にふい橙 (外)橙	底部 10	カマド。胴部外面ヘラズリ。内面ナデ

第209号住居跡 (第704図)

ほ・へ—439Gridに位置する。長軸5.7m、短軸4.3mの長方形を呈する。床面の一部が噴砂によって大きな段差がついており、大半は削平されている。主軸の傾きはN-61°-Wである。カマドは西壁やや北寄りに構築されているが、袖が右側にわずかに認められる程度である。その他の内部施設は確認されなかった。遺物はまったく出土しなかった。



第704図 第209号住居跡



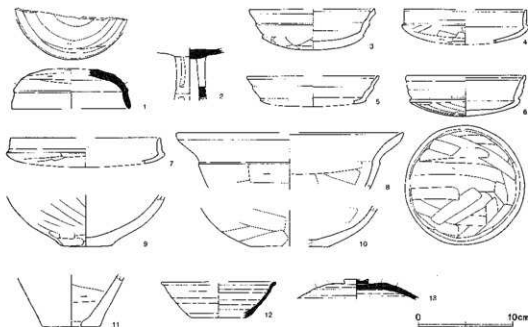
第705図 第210・211号住居跡および第210号住居跡出土遺物

第210号住居跡 (第705図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口(18.0) 高(3.2)	砂	灰白	10	体部外面ヘラケズリ。
2	坏	口(13.0) 高(2.9) 胴(13.4)	Ⅱ	褐灰～橙	20	No.4・6。口縁端部ヘラアチ。
3	坏	口(18.0) 高(3.7)	Ⅱ	橙	20	No.4～6。
4	坏	口(13.0) 高(3.9)	R	にぶい橙	20	口縁部ナデ。
5	甕	口(17.0)	砂	橙	口縁 20	風化顕著。胎土中の含有物量多い。
6	甕	底5.4	砂	(内)橙 (外)にぶい褐	下半部 30	胎土中の含有物量多い。

第210号住居跡 (第705図)

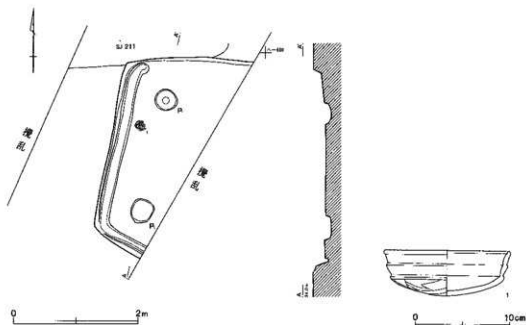
へー440Gridに位置し、第211・212号住居跡と切り合っている。第211号住居跡とは床面の高さに差がないため、新旧関係ははっきりしない。柱穴と考えられる浅いピットが2基確認されたが、



第706図 第211号住居跡出土遺物

第211号住居跡 (第706図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	蓋	口(12.6) 高(4.2)	B+W	灰	30	天井部回転ヘラケズリ。左回転ナデ。
2	高坏	脚基部3.2	W	灰	脚部上半 80	№2。脚部三方に二段の透かし。胎土中の含有物量多い。
3	坏	口(13.2) 高4.3	B	明赤褐	20	口縁端部ヘラアテ。
4	坏	口(13.0) 高(3.7) 胴(13.4)	R	にふい登～浅黄橙	20	№3。
5	坏	口(14.0) 高(3.2)	R	にふい登～にふい 褐	10	口縁端部ヘラアテ。
6	坏	口12.8 高4.3	B	橙	100	№4。胎土中の含有物量多い。
7	坏	口(16.0) 高(3.1) 胴(16.8)	R	にふい登～黒褐	20	口縁部ナデ。
8	椀	口(24.0)	B+R+W	(内)橙 (外)にふい 橙	口縁 10	№1。口縁端部ヘラアテ。
9	壺	底5.4	R	にふい赤褐	底部 60	胴部内面ナデ。胎土中の含有物量多い。
10	壺	底(6.0)	W	明赤褐	底部 30	胴部内面ナデ。
11	甔	底(6.0)	B+R+W	(内)橙 (外)にふい橙	底部 10	胴部外面丁寧なナデ。袋付着。
12	坏	口(12.0) 底(6.0) 高3.8	W	灰	20	口縁部外面重ね焼き痕。混入。
13	蓋	つまみ2.6	W	灰	30	左回転ナデ。天井部ロクロナデの後回転ヘラケズリ。中央部回転糸切りの痕跡混入。



第707図 第212号住居跡および出土遺物

第212号住居跡 (第707図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口13.2 高4.8	B+K多	橙	90	瓶1.

カマドなどの施設は確認されなかった。

出土遺物は少なく、破片のみである。図示したもの以外に須恵器大甕の胴部破片が数点出土している。

第211号住居跡 (第705図)

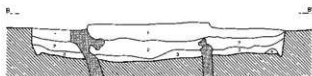
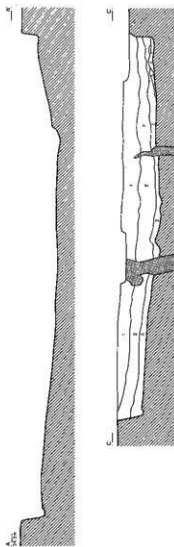
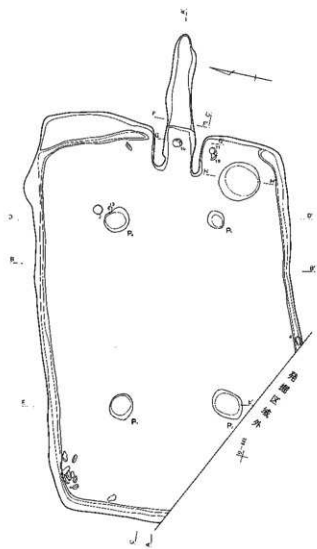
へ—440Gridに位置する。第210・212号住居跡と切り合い、かつ擾乱を受けているので、全容は不明である。壁溝が一部で検出されたにすぎない。

出土遺物は少なく、混入もあるが、陶器編年というTK10式期に相当する須恵器蓋が出土している。遺物からは第210号住居跡よりも古い様相を呈している。

第212号住居跡 (第707図)

へ—440Gridに位置し、北壁を第210号住居跡と接し、東半は擾乱を受けている。確認された一辺は3.3mである。柱穴は2基検出されたが、10cm程の浅い落ち込みである。壁溝は西壁から南西コーナーにかけて確認された。ほぼ一定の幅で、深さは5cmである。

出土遺物は極めて少なく、土師器坏が1点図示できたにすぎない。



第708图 第213号住居跡



第213号住居跡

1. 基層色土 黄褐色土粒下(径1~3mm)・同ブロック(径5mm~1cm)を全体的に多量に含む。白色炭粒子を多く含む。やや粘性があり堅緻。
2. 緑黄褐色土 黄褐色土ブロック(径5mm~1cm)を多量に、炭化物粒子をわずかに含む。やや粘性があり堅緻。
3. 黒褐色土 緑黄褐色土を基本に黄褐色土ブロック(径5mm~1cm)を少量、炭化物粒子を多量に含む。粘性があり堅緻。
4. 黄褐色土 黄褐色土ブロック(径1~2cm)を基本に黒褐色土を若干含む。
5. 黒灰色土 灰を基本とし焼土粒子・黄褐色土粒子をわずかに含む。

第213号住居跡カマド

- A. 緑褐色土 黄褐色土粒子(径1~2mm)・炭化物粒子を少量含む。堅緻。
- B. 緑褐色土 黄褐色土粒子(径1~5mm)を多量に、炭化物粒子・焼土粒子をわずかに含む。堅緻。
- C. 褐色土 黄褐色土粒子(径1~3mm)を少量含む。焼土ブロックを下層部に含む。粘性があり堅緻。
- D. 黒褐色土 灰層。炭化物粒子・焼土粒子を多量に含む。粘性なくもろい。
- E. 焼土ブロック・炭化物・黄褐色土の混合物。やや粘性があり堅緻。
- F. 緑褐色土 黄褐色土粒子(径2mm)・焼土粒子をわずかに含む。粘性があり堅緻。
- G. 暗褐色土 F層に比べ黄褐色土粒子・焼土粒子を多量に含む。
- H. 暗褐色土 黄褐色土粒下(径1~3mm)を多量に、焼土粒子を少量含む。粘性があり堅緻。

第213号住居跡貯蔵穴

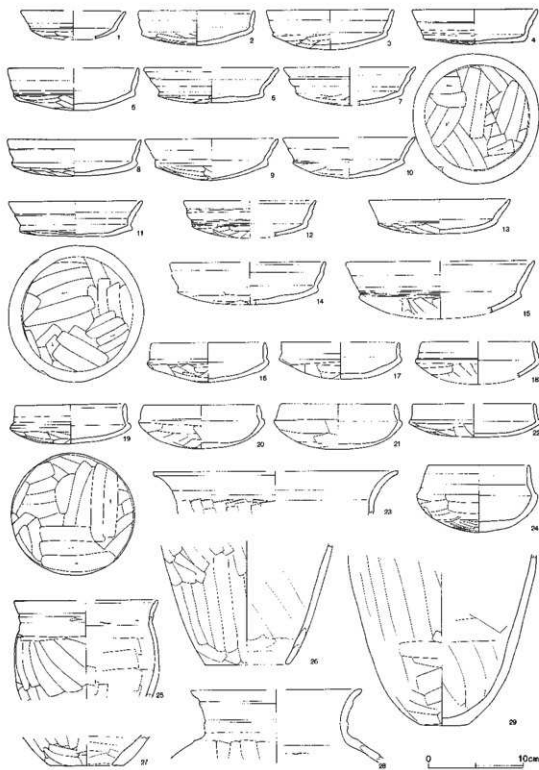
1. 暗黄褐色土 黄褐色土粒子(径3~5mm)を全体的に多量に含む。焼土粒子をわずかに含む。やや粘性があり堅緻。
2. 暗黄褐色土 黄褐色土ブロック(径1~2cm)を基本に暗黄褐色土を少量含む。粘性強くよくなる。

第213号住居跡 (第708図)

ち・り—440—442Gridに位置し、南西コーナーは調査区域外にかかる。長軸6.2m、短軸4.1mの長方形を呈するが、噴砂による浸食を受けているため、いびつな形態をしている。主軸の傾きはN—80°—Eで、床面までの深さは50cm前後である。床面はしっかりとしているが、噴砂の影響で落ち込んでいる部分がある。

カマドは東壁中央に構築されている。袖は地山の造り出しで、燃焼部は浅く掘り込まれている。煙道は煙出しにむけて徐々に浅くなっており、確認時には天井部が一部に残存していた。柱穴は4基確認されている。いずれも深さ20cm前後と浅く、柱痕も明瞭ではないが、バランスよくほぼ定位置にある。貯蔵穴はカマドの向かって右側、南東隅に設けられている。規模は62×67cm、深さ30cmで、底は平らである。壁溝は幅が狭く、浅いが全周するものと思われる。北東コーナー部分では壁よりも内側を巡っているが、このラインが本来の住居跡のプランであった可能性はある。

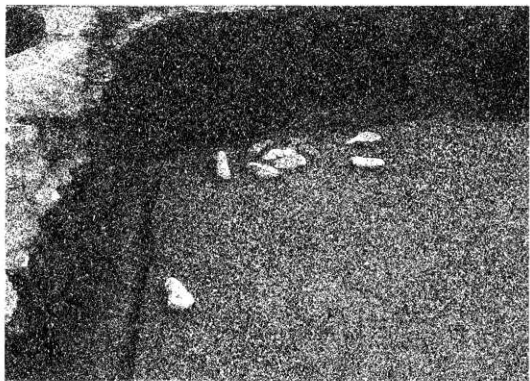
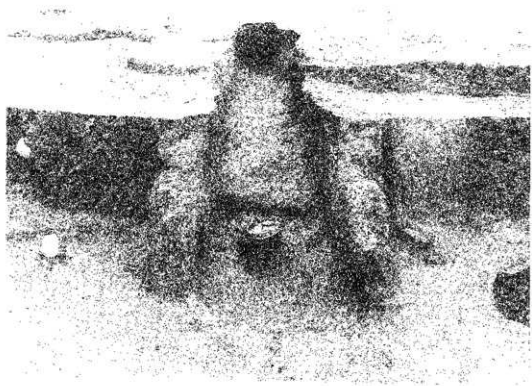
遺物は主に覆土から出土したが、貯蔵穴・柱穴・壁溝内から完形の上鉢器坏が出土している。坏類の出土がめだつ。土器以外には上鉢が1点覆土から出土した。また、北西コーナーから福物石が9点集中して出土した。



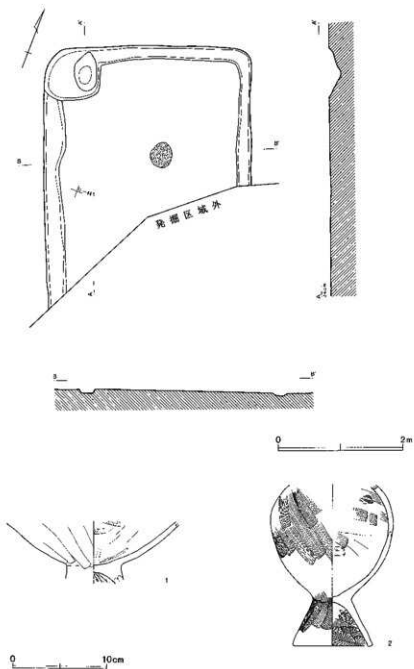
第709图 第213号住居跡出土造物

第213号住居跡(第709図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口(11.0) 高(3.1)	B+R少+W	橙	25	口縁部ナデ。風化。
2	坏	口12.4 高3.7	B+R多+W+W'	橙	90	%5。口縁部弱いヘラアテ。
3	坏	口13.4 高4.2	R少+W+W' 少	橙～黒	90	口縁部ナデ。風化。
4	坏	口13.2 高3.7	B+R多+W	橙	95	%1。体部外面丁寧なヘラケズリ。
5	坏	口(13.8) 高4.6	B+R+W	にふい橙～にふい黄橙	20	口縁部ナデ。風化。
6	坏	口(14.2) 高3.7	B+R+W	にふい黄橙	30	口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。体部外面ヘラケズリ。
7	坏	口(14.0) 高(4.1)	B+R少+W少	にふい橙	15	口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。体部外面風化によりケズリ不明瞭。
8	坏	口14.2 高3.9	B+R+W	にふい黄橙	60	口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。
9	坏	口14.0 高4.4	B+R+W	橙	80	口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。内面風化顯著。
10	坏	口(14.0) 高4.3	B+R少+W	にふい黄橙～黒	15	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
11	坏	口14.0 高3.7	B+R少+W	にふい黄橙～黒	100	%2。体部外面丁寧なヘラケズリ。
12	坏	口(14.0) 高(3.9)	B+R+W	橙	20	口縁部ヘラアテ。口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。
13	坏	口15.0 高3.8	B+R+W	にふい黄橙	90	%5。体部外面風化によりケズリ不明瞭。
14	坏	口(17.0) 高(4.5)	B+R多+W	灰褐	10	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
15	坏	口(20.0)	B+R少+W少	橙～にふい褐	15	口縁部ヘラアテ。体部外面風化によりケズリ不明瞭。
16	坏	口12.0 高4.2	B+R少+W	にふい橙	90	%4。口縁部弱いヘラアテ。
17	坏	口(12.4) 高3.9	B+R+W	にふい褐	60	口縁部～体部内面中位ナデ。
18	坏	口(12.0)	B+W	にふい黄橙	20	口縁部弱いヘラアテによる段をもつ。
19	坏	口11.8 高4.1	B+W	にふい黄橙	100	%3。口縁部～体部内面中位ナデ。
20	坏	口13.0 高4.6	B+R+W+W'	橙	70	体部内面ヘラナデ。
21	坏	口12.0 高4.8	B+W	灰黄褐	70	口縁部～体部内面中位ナデ。
22	坏	口(14.0) 高3.8	B+R+W	にふい黄橙	40	体部外面ヘラケズリ。風化顯著。
23	甕	口(26.0)	B+R少+W	褐灰	口縁 15	口縁部面取り。
24	甕	口10.6 高7.0	B多+R+W+W'	にふい黄橙～黒	90	体部外面ヘラケズリ。下位のおへらミガキ。
25	甕	口15.2	B+R+W	橙	上半部 40	口縁部ヘラアテ。胴部内面ヘラナデ。
26	甕	底(9.0)	B+R+W+砂	橙	下半部 20	胴部外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ後ミガキ。
27	甕	底(8.0) 孔(5.4)	B+R+W+砂	(内)黒 (外)明赤褐	底部 25	胴部内面ヘラナデ。底部外面ヘラケズリ。
28	甕	口(18.0)	B+R+W	橙～にふい赤褐	口縁 20	口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。
29	甕	底5.2	B+R+W+砂多	橙～黒褐	下半部 20	貯蔵穴。底部外面一方のヘラケズリ風化により基部ザラザラしている。



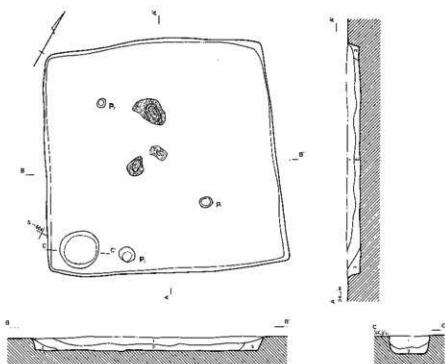
第710図 第213号住居跡カマド(上)および漏み物石出土状況(下)



第711図 第214号住居跡および出土遺物

第214号住居跡(第711図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	台付甕	脚基部5.8	B+W+砂多	にぶい黄裡	底部 15	脚部内面ヘラナデ、一部ハケメ。脚部内面ハケナデ。
2	台付甕	胴(13.0) 脚5.4	B+W	にぶい赤褐	30	脚部内外面・脚部内外面細かいハケメ。

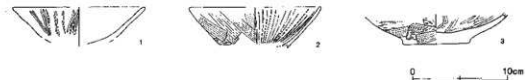


第215号住居跡

1. 褐色土 茶褐色土ブロック・同粒子を多く含む。炭化物を少量含む。
2. 暗褐色土 茶褐色土ブロックを少量、炭化物・炭化材が多く含まれる。
3. 暗黄褐色土 茶褐色土粒子を多量に、炭化物を少量含む。砂質の強い層。

第215号住居跡貯蔵穴

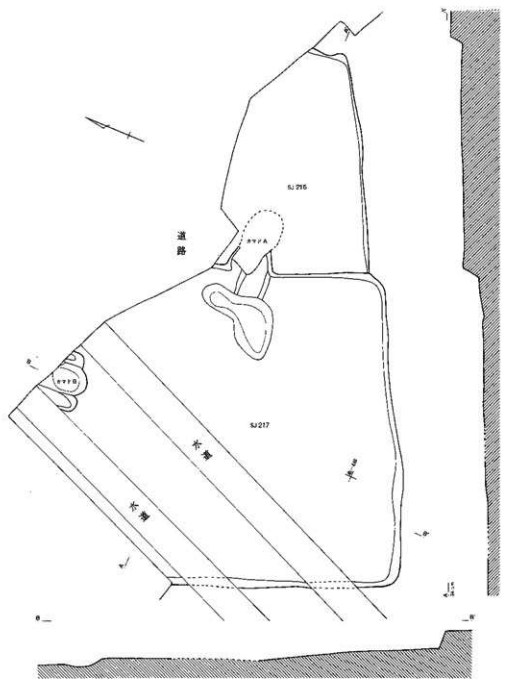
1. 暗褐色土 茶褐色土ブロックを少量、炭化物を多量に含む。
2. 暗黄褐色土 砂質土で、茶褐色土粒子を多く含む。炭化物はほとんど含まれない。



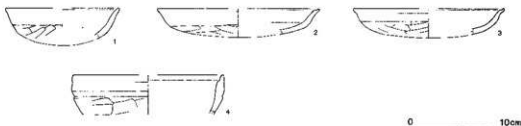
第712図 第215号住居跡および出土遺物

第215号住居跡 (第712図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	高坏	□(14.0)	B+R+W	橙	坏部 15	口縁端部ナデ。体部外面粗いヘラミガキ内面風化。
2	高坏	□(14.0)	B+W	橙	坏部 20	口縁部外面ハケメ。内面直文状のヘラミガキ。割れ口に粘土の接合面が観察できる。
3	壺	底7.0	B+砂	(内)淡黄橙 (外)橙	底部 100	外面割削部〜底部ハケメ。割削内面粗かい単位のヘラミガキ。



第713図 第216・217号住居跡



第714図 第216号住居跡出土遺物

第216号住居跡 (第714図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	□(12.0)	B+R+W+W'	橙~灰褐	20	□縁端部ヘラアテ。体部外面ヘラケズリ
2	皿	□(17.2) 高(3.0)	B+R+W+W'	橙	20	□縁端部強いヘラアテ。
3	皿	□(16.0)	B+R+W	橙	15	□縁端部ヘラアテ。体部外面ヘラケズリ
4	坏	□(16.0)	B+R+W	橙	10	□縁端部ヘラアテ。体部外面ヘラケズリ

第214号住居跡 (第711図)

ち・り-442・443Gridに位置し、南半は調査区域外にかかる。検出された一辺は長さ3.3mで、西壁の残存状況から南北に長い長方形を呈すると推定される。長軸の傾きは $N-22^{\circ}-W$ である。覆土はほとんどなく、確認面と床面のレベルはほぼ同一であった。中央部軸線上に地床炉が確認されている。壁溝は幅23cm前後、深さ6cmで、検出された範囲で全周する。

出土遺物はごくわずかであったが、台付甕が2個体確認された。

第215号住居跡 (第712図)

と・ち-443・444Gridに位置する。長軸3.8m、短軸3.6mのほぼ正方形を呈し、長軸の傾きは $N-29^{\circ}-W$ 、床面までの深さは20cmである。覆土は自然に埋没した状態を示している。

炉は中央部に3箇所確認されている。いずれも地床炉であり、掘り込みはあまり深くない。ピットは3基検出されているが、いずれも浅く、本住居跡に伴うものかどうか不明である。貯蔵穴は南西隅に設けられている。規模は径60cm、深さは30cmで、底は平らである。

出土遺物はほとんどなく、すべて破片である。かろうじて高坏など3点を復元実測することができた。

第216号住居跡 (第713図)

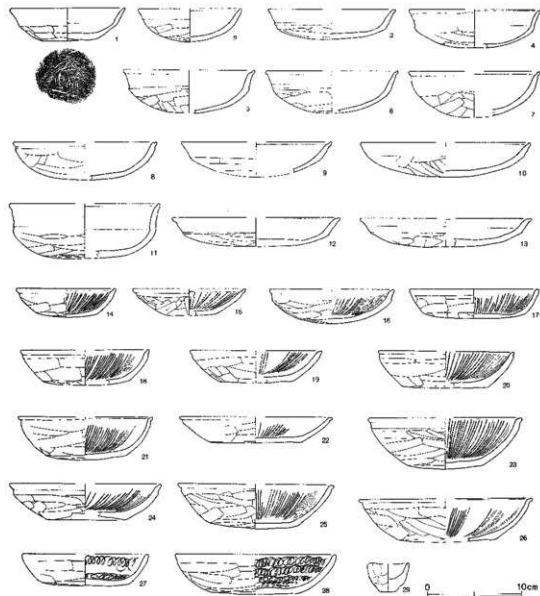
ぬ-445Gridに位置する。あまり明瞭ではないが、第217号住居跡に切られているようである。北半が道路にかかっているため、その全容は明らかでない。住居内の施設も確認されなかった。

出土遺物は少なく、すべて破片である。土器以外には土製紡錘車が覆土から出土している。

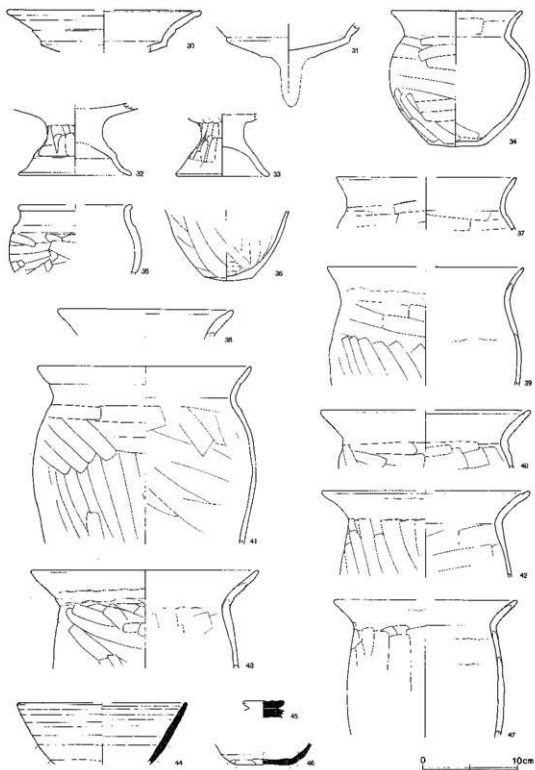
第217号住居跡 (第713回)

リ・ぬ—445・446Gridに位置し、道路と水道によって壊されている。検出された市壁の長さは5.0mであるが、カマドの位置からみて南北方向に長い長方形を呈するものと考えられる。床面までの深さは30cmである。主軸の傾きはカマドAでN-89°-E、カマドBでN-1°-Eである。

カマドは東壁(A)と、北壁(B)に構築されているが、互いの新旧関係は不明である。カマドAは燃焼部の掘り込みをもたず、はっきりとした袖は存在しない。煙道部にかけては攪乱をうけており、明らかでない。カマドBは袖をもち、燃焼部は浅く掘り込まれている。その他の施設は確認さ



第715図 第217号住居跡出土遺物(1)



第716图 第217号住居跡出土遺物(2)

第217号住居跡(第715・716図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口12.2 底5.0 高3.5	B+W	橙	70	底部静止未切り。
2	坏	口(11.0) 高3.5	B+W+W'	橙	40	口縁部ヘラアテ。
3	坏	口(13.4) 高3.2	B+R+W	(内)黒(外)橙	30	口縁部ヘラアテ。体内内黒色を呈する。
4	坏	口(14.0) 高(4.0)	B+R少+W少	橙～浅黄橙	10	口縁部ヘラアテ。
5	坏	口(14.0) 高(4.5)	B+R+W+W'	(内)黒(外)橙	20	口縁部ヘラアテ。口縁部～体部外面中位ナデ。
6	坏	口(14.0) 高(4.4)	B+R+W+W'	(内)黒(外)橙	20	口縁部ヘラアテ。
7	坏	口(14.0) 高4.8	B+R少	(内)黒(外)橙	30	口縁部ヘラアテ沈線。
8	坏	口(15.2) 高(4.0)	B+W	橙	40	口縁部ヘラアテ。風化著しく唇面凹凸している。
9	坏	口(18.0)	B+W+W'	橙	15	口縁部ヘラアテ。内面風化。
10	皿	口(18.0) 高3.6	B+R+W少	にぶい黄橙	15	内面風化著しく唇面凹凸している。
11	坏	口(18.0) 高(5.8)	B+R+W+W'	橙～黒	10	口縁部ヘラアテ。
12	皿	口(17.8) 高3.0	B+R+W+W'	(内)黒(外)橙	35	口縁部ヘラアテ。体部外面ヘラケズリ
13	皿	口(18.2) 高(3.0)	B+R少+W	(内)橙 (外)にぶい黄橙～黒橙	10	口縁部～体部内面ナデ。
14	坏	口10.4 底9.4 高3.0	R少+W少+砂	橙	50	口縁部ヘラアテ。内面放射状増文。
15	坏	口(12.0) 底(5.2) 高2.8	B+R+W	橙	25	底部外面一方のヘラケズリ。平底。内面放射状増文。
16	坏	口(13.6) 高3.6	B+W	(内)黒(外)橙	30	内面放射状増文。
17	坏	口13.6 底11.0 高3.1	B多+R+W	にぶい橙	90	口縁部ヘラアテ。内面増文。底部外面一方のヘラケズリ。
18	坏	口(13.6) 高(3.8)	B+R+W+W'	(内)黒 (外)にぶい黄橙	30	口縁部ヘラアテ。内面増文。
19	坏	口(14.0) 高(3.4)	W+砂	橙	25	内面増文(数条ずつのブロックになっている)。底部外面ヘラケズリ。
20	坏	口(14.4) 底(9.0) 高(3.9)	B+W+W'	(内)黒(外)橙	40	口縁部ヘラアテ。内面放射状増文。底部外面ヘラケズリ。
21	坏	口(14.2) 高4.5	B+R+W+W'	にぶい橙～黒	30	口縁部強いヘラアテ。内面増文。
22	坏	口(16.2) 底9.8 高2.7	B+W	にぶい赤褐	20	口縁部強いヘラアテ。内面増文。底部外面一方のヘラケズリ。
23	椀	口(16.2) 底(8.0) 高5.4	B+R+W	橙～黒	20	口縁部ヘラアテ。内面増文。底部外面ヘラケズリ。
24	坏	口(16.0) 底(8.0) 高3.8	W+W'+砂	橙～黒	30	口縁部強いヘラアテ。内面ナデ後増文。底部外面ヘラケズリ。
25	坏	口(16.6) 底9.2 高4.7	B+R+W	橙	70	口縁部強いヘラアテ。内面増文。底部外面ヘラケズリ。
26	坏	口(18.2) 高(4.6)	B+W	橙～黒褐	20	口縁部強いヘラアテ。内面増文(数条ずつブロックになっている)。
27	坏	口(13.4) 底(9.0) 高3.3	B+W	橙～黒	15	内面2本の螺旋状増文。底部外面一方のヘラケズリ。
28	坏	口17.0 底9.2 高3.2	B+W	橙	100	内面5本の螺旋状増文。底部外面ヘラケズリ。
29	手づくね	口(4.4) 底1.6 高3.0	B多+R+W	黄	30	外面指オサエ。

30	高环	口(20.6)	R多+W	橙	口縁 16	口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。
31	高环		R+W	橙	坏部 20	坏部と脚部を接合する突起状の面が残存している。
32	高环	脚(12.0)	B+R+W+W'	橙～淡黄	脚部 25	脚部外面ヘラケズリ。脚部内外面ナデ
33	台付甕	脚(10.0)	B+R+W	橙	脚部 20	脚部外面ヘラケズリ。脚部内外面ナデ
34	甕	口13.8 底8.0 高14.3	B+R+W+W'	にぶい橙	70	胴部内面ヘラナデ。底部外面一方向のヘラケズリ。
35	碗	口(12.0)	B+R+W	橙	口縁 25	口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。
36	甕	底5.2	B+R+W+W'	にぶい赤褐～にぶい黄橙	底部 100	胴部内面ナデ。底部外面一方向のヘラケズリ。
37	甕	口(19.0)	B+R+W+W'	橙～黒褐	口縁 20	口縁部ナデ。胴部内面ヘラナデ。
38	甕	口18.6	B+R+W+W'	にぶい橙～胡羯灰	口縁 75	口縁部弱いヘラアテ。口縁部ナデ。
39	甕	口(20.8)	B+W少	にぶい橙	口縁 30	口縁部外面輪痕み痕。胴部内面丁寧なナデ。
40	甕	口(22.2)	R+W+W'	橙	口縁 40	口縁部外面ヘラアテ。胴部外面ヘラケズリ内面ヘラナデ。
41	甕	口22.6	W+砂多	橙	上半部 60	口縁部ナデ。胴部内面ヘラナデ。
42	甕	口(22.0)	B+R少+W+W'	橙	口縁 10	口縁部強いヘラアテ。胴部内面ヘラナデ。
43	甕	口24.0	R少+W+W'	にぶい橙	25	口縁部外面輪痕み痕。胴部内面ヘラナデ
44	碗	口(18.0)	W	灰	10	体部外面下位四転ヘラケズリ。胎土中の含有物量多い。
45	蓋	つまみ4.4	W	灰	つまみ 80	胎土中の含有物量多い。
46	坏	底(5.6)	R+W	灰白	20	体部外面最下位。四転ヘラケズリ。底部四転未切り。
47	甕	口(19.4)	B+W	橙～薄灰	口縁 40	胴部内面輪痕み痕。風化顕著。

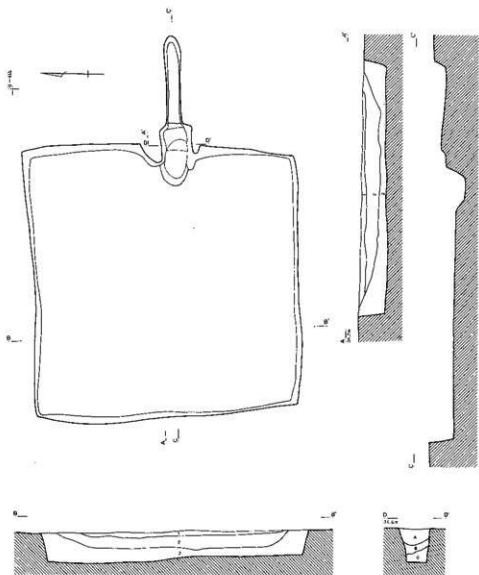
れていない。

遺物はすべて覆土から出上したが、その量は比較的多い。暗文の坏類が多いが、放射状の暗文をもつものに混じって、本遺跡では珍しい螺旋状の暗文を施した坏が2点みられるのが注目される。また、鉄製品として刀子の刀身部の破片が出土している。

第218号住居跡 (第717図)

ち-445Gridに位置する。長軸4.4m、短軸4.3mで、形状はほぼ正方形を呈している。主軸の傾きはN-89°-Eで、床面までの深さは42cmである。カマドは東壁中央に構築されている。燃焼部は深く掘り込まれ、袖は小さく造り出されている。本住居跡は礎層にいたるまで掘り込まれているため、壁溝や柱穴などの施設は確認できなかった。

出土遺物の量は比較的多いが、破片が多く、接合率はあまり良好ではない。若干の混入が認められるようである。また、土鍾が2点覆土から出上している。



第218号住居跡

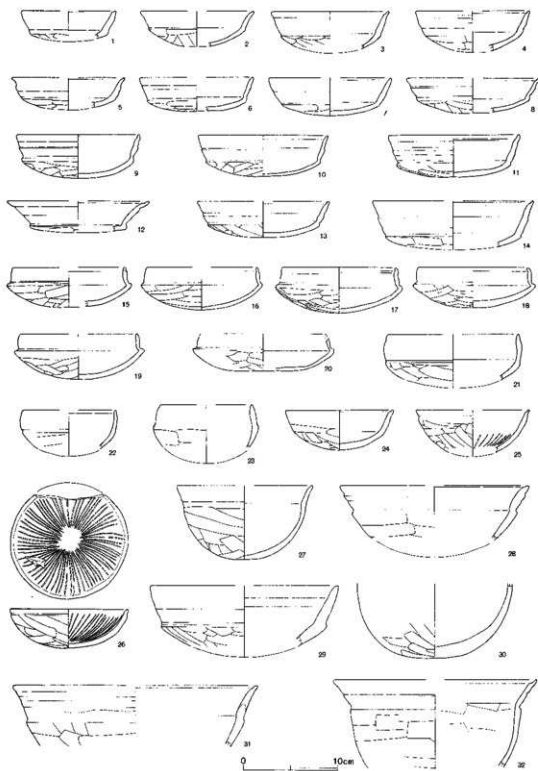
1. 暗褐色土 焼土粒子・炭化物を多く含む、砂を少量含む。
2. 黒褐色土 薪灰の層・焼土粒子・炭化物を多く含む。土器片が多く含まれる。
3. 黒褐色土 礫および細砂を多量に含む、少量の焼土粒子・炭化物を含む。

第218号住居跡かマド

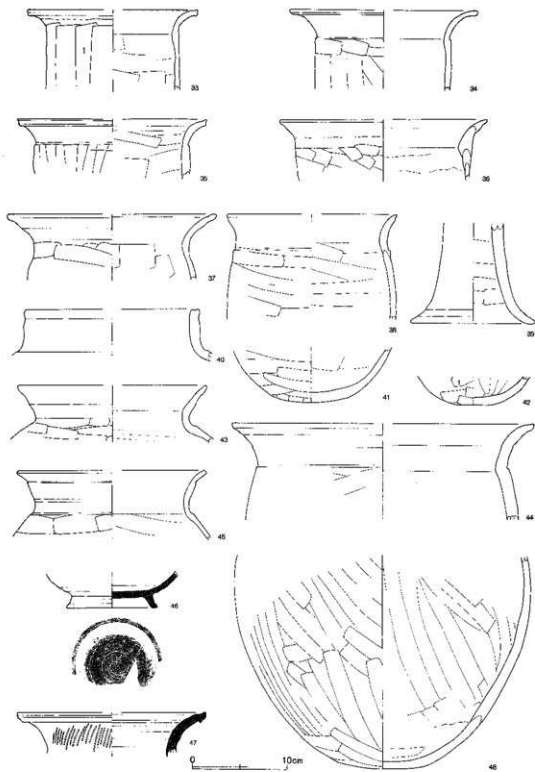
- A. 黒褐色土 焼土ブツツク（径5mm～1cm）を多量に含む、小礫（径5mm位）を全体的に含む。
- H. 暗褐色土 黒褐色土を基本に暗褐色土粒子を少量含む、小礫（径5mm～1cm）を多量に含む。
- C. 暗褐色土 小礫（径1～1.5mm）と砂を基本に黒褐色土を少量含む。



第717図 第218号住居跡



第718图 第218号住居跡出土遺物(1)



第719图 第218号住居跡出土遺物(2)

第218号住居跡(第718・719図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口(10.0) 高(3.2)	B+R+W	におい赤褐～黒褐	口縁 25	口縁端部ヘラアテ取り。体部外面ヘラケズリ。
2	坏	口(12.0) 高(3.7)	B+R+W	橙～黒	35	口縁部～体部内面ナデ。
3	坏	口12.4 高(4.4)	B+W	におい橙～褐灰	70	口縁端部ヘラアテ。口縁部と体部の境目ヘラアテ。
4	坏	口(12.0)	W+W'	(内)黒 (外)におい褐	45	口縁端部ヘラアテ。
5	坏	口(12.0) 高(3.4)	B+W'	浅黄橙～灰黄褐	28	口縁端部ヘラアテ。口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。
6	坏	口(12.0) 高(3.5)	B+R+W+W'	橙～浅黄橙	20	口縁部～体部内面ナデ。口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。
7	坏	口(13.0) 高4.0	B+R+W	におい赤褐	25	口縁部外面弱いヘラアテによる段をもつ
8	坏	口(14.0) 高(3.7)	B+R多+W	浅黄橙	20	口縁端部ヘラアテ。口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。
9	坏	口13.0 高4.6	R+W	におい赤褐	60	口縁端部強いヘラアテ。口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。
10	坏	口13.6 高4.4	B+W	橙～黒	70	口縁端部ヘラアテ。口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。
11	坏	口14.0 高4.4	B+R+W	におい黄褐	90	口縁端部ヘラアテ。口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。
12	坏	口(15.0) 高(3.3)	R+W	明赤褐	口縁 30	口縁端部ヘラアテ。口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。体部外面ヘラケズリ。
13	坏	口(14.0) 高3.8	B+R+W	におい赤褐～灰褐	20	口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。
14	坏	口(17.0)	B+W+W'	におい黄橙	15	口縁端部弱いヘラアテ。体部外面風化によりケズリ不明瞭。
15	坏	口(12.0) 高(4.2)	B+R+W	橙	20	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
16	坏	口(12.0) 高4.5	B+W	橙	40	口縁端部弱いヘラアテ。体部外面ヘラケズリ。
17	坏	口12.0 高4.8	B+R	橙～におい橙	90	口縁端部強いヘラアテ。
18	坏	口11.6 高4.2	B+W+W'	橙～におい橙	95	口縁部と体部の境目強いヘラアテ。
19	坏	口12.2 高4.6	B+R少+W	橙～におい橙	70	口縁部～体部内面中位ナデ。
20	坏	口(13.2)	B+R+W	におい黄橙	20	口縁端部欠損。体部外面風化著しくケズリ不明瞭。
21	坏	口(14.0)	B+R+W	橙	15	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
22	坏	口(9.8)	B+W	におい黄橙	口縁 25	体部外面ヘラケズリ。内面風化により調整不明瞭。
23	坏	口(9.8)	B+R+W	橙	25	口縁端部ヘラアテ。体部外面ヘラケズリ内面風化により調整不明瞭。
24	坏	口11.4 高4.2	B+R+W	(内)黒 (外)におい橙	95	口縁端部ヘラアテ。口縁部～体部内面ナデ。
25	轆	口(12.0)	B+R+W	浅黄橙～褐灰	25	口縁端部ヘラアテ。内面磨文。
26	轆	口12.5 高4.1	B+R+W	橙	90	口縁端部取。内面放射状磨文。
27	轆	口(14.4) 高7.6	B+W+W'	橙	25	外面底部付近風化。
28	轆	口(20.0)	R+W	橙	20	口縁端部ヘラアテ。口縁部外面取本の強いヘラアテによる段をもつ。風化顯著。
29	坏	口(20.0)	B+R+W	橙～におい橙	15	口縁部～体部内面ナデ。

30	壘		B+W+W'	にふい黄橙	下半部 70	底部外面ヘラケズリ。胴部内外面風化により番面凹凸している。
31	鉢	口(26.0)	B+R+W	浅黄橙	口縁 20	口縁端部弱いヘラアテ。口縁部外面数本の弱いヘラアテ。
32	鉢	口(21.6)	B+R+W	橙	80	口縁端部ヘラアテ。口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。胴部内面ヘラナデ。
33	壘	口(18.0)	W+W'+塵	橙~灰褐	口縁 30	口縁端部ヘラアテ。胴部内面ヘラナデ。
34	壘	口(20.0)	B+R+W+W'+砂多	橙	口縁 25	口縁端部ヘラアテ面取り。口縁部と胴部の境目に強いヘラアテによる段をもつ。番面ザラザラしている。
35	壘	口(20.0)	B+R+W	橙	口縁 25	口縁端部強いヘラアテ面取り。胴部内面ヘラナデ。
36	壘	口(22.0)	B+R少+W+砂	橙	口縁 20	胴部内面輪縁み痕可瞭。内面風化。胎土中に含有物量多い。
37	壘	口(22.0)	B+R+W'+砂	橙	口縁 30	口縁端部強いヘラアテ沈積。番面ザラザラしている。
38	壘	口(18.0)	B+R+W+塵	橙~黒	上半部 30	口縁端部弱いヘラアテ。胴部内面ヘラナデ。
39	高坏	脚(13.2)	B+W	浅黄橙	脚部 40	脚部外面風化により番面ツルツル。脚部内面ナデ。
40	壘	口(18.6)	B+W+W'	橙~にふい橙	口縁 20	口縁端部強いヘラアテ。胴部外面ヘラケズリ。
41	壘	底2.0	B+R+W	橙	下半部 80	底部外面一方向のヘラケズリ。底部を僅かに作り出している。
42	壘			橙~黒	底部 100	胴部外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。
43	壘	口(20.0)	B+W少	橙	口縁 25	口縁部ナデ。胴部内面ヘラナデ。
44	壘	口(32.0)	B+W+W'	橙~褐灰	口縁 10	口縁端部ヘラアテ面取り。胴部外面ヘラケズリ。内面風化により調整不可瞭。
45	壘	口(20.0)	B多+W	にふい黄橙~黒褐	45	口縁端部ヘラアテ面取り。口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。胴部内面ヘラナデ。
46	高台付物	高台9.6	W	緑灰~灰	高台部 55	底部回転糸切り後。高台ナデつけ。
47	壘	口(20.0)	W	灰	口縁 15	口縁部外面斜方向の工具アテ痕をめぐらす。
48	壘	底2.5	B+R少+W	にふい黄橙	胴部 40	底部外面ヘラケズリ。底部を僅かに作り出している。

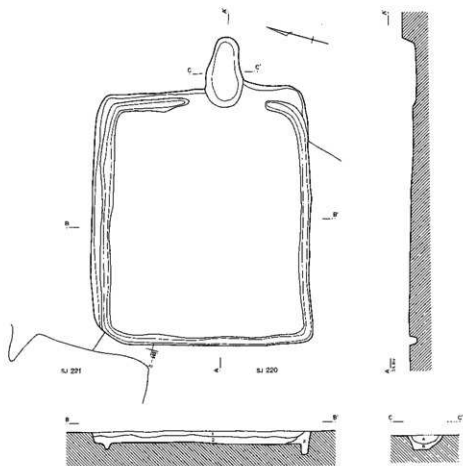


第720図 第219号住居跡カマド

第219号住居跡 (第721図)

へ・と—444Grid に位置し、第220号住居跡を切って構築されている。形態は長方形で、規模は長軸4.1m、短軸3.5m、主軸の傾きはN—77°—Eである。床面までの深さは23cmである。カマドは東壁やや南寄りに構築されている。燃焼部は浅く掘り込まれ、袖は存在しない。壁溝は狭いが深く掘り込まれており、ほぼ全周する。礎層に掘り込まれているため、他の内部施設の存在を明らかにすることができなかった。

出土遺物は少ないが、6世紀前半と考えられる須恵器蓋が出土している。



第219号住居跡

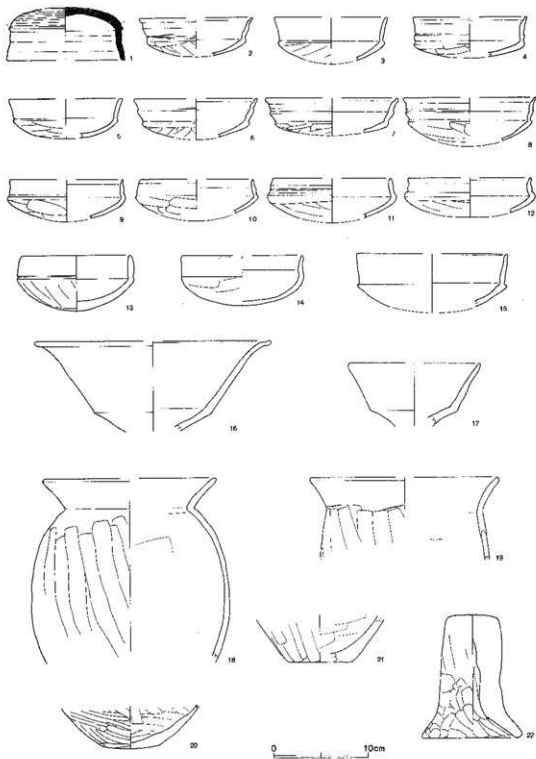
1. 黒褐色土 焼土粒子・炭化物を少量含む、小礫を含む。
2. 緑褐色土 焼土小ブロックを少量含む。炭化物を多く含む。炭化物は1層より大きくなる。礫も大きくなり1層より多く含まれる。
3. 黒褐色土 茶褐色土粒子・焼土粒子を少量含む。

第219号住居跡カマド

- A. 黒褐色土 焼土小ブロックを多量、炭化物・小礫を少量含む。
- B. 緑褐色土 焼土粒子・炭化物が若干含まれ、礫はほとんど含まれない。



第721図 第219号住居跡



第732号 第219号住居跡出土遺物

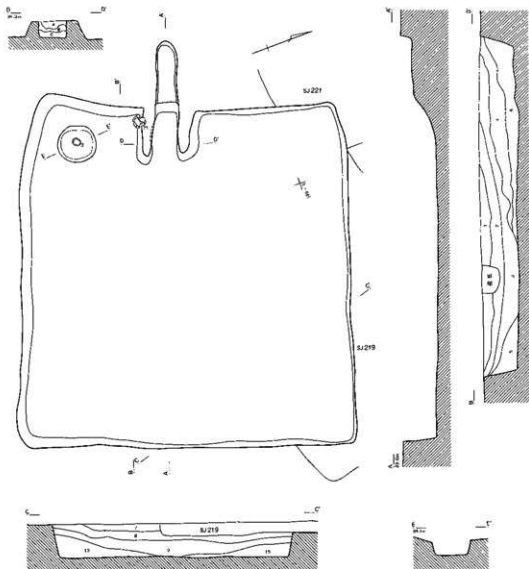
第219号住居跡 (第722回)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	蓋	口(12.4) 高5.6	W	灰	40	天井部回転ヘラケズリ。
2	坏	口(12.0) 高(4.1)	B+R	にふい黄橙	25	口縁部ヘラアテ。体部外面ヘラケズリ
3	坏	口(12.0) 高(4.9)	B+R+W	橙	25	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
4	坏	口(12.0) 高(4.3)	B+R+W+W'	橙～にふい黄橙	25	口縁部ヘラアテ。口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。体部外面風化によりケズリ不明瞭。
5	坏	口(12.0) 高(4.2)	W+砂多	橙	20	口縁部ヘラアテ。体部外面ヘラケズリ
6	坏	口(13.0) 高(4.3)	B+R少+W	橙	30	口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。
7	坏	口(14.0) 高(4.0)	B+R+W	淡黄橙	30	口縁部ヘラアテ。口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。
8	坏	口(14.0)	B+W	明焼灰～黒褐	15	口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。体部外面風化によりケズリ不明瞭。
9	坏	口(12.0) 高(4.4)	B+R+W	にふい褐	20	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
10	坏	口(12.0)	B+R+W	洗黄～黒	20	体部外面風化著しくケズリ不明瞭。
11	坏	口(12.4)	B+R+W	にふい橙～淡黄	20	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
12	坏	口(13.0)	B+R+W	橙	30	口縁部ヘラアテ沈線。
13	坏	口11.4 高5.8	R多+W	橙	70	口縁部と体部の境目強いヘラアテ。
14	坏	口(13.0) 高5.2	B+R+W	橙	30	口縁部ヘラアテ面取り。体部外面風化著しく器面ツルツル。
15	坏	口(16.0)	R+W+W'	にふい橙～にふい黄褐	15	壁溝。口縁部ヘラアテ面取り。風化顕著。
16	高坏	口(25.0)	B少+R+W	橙～にふい黄橙	坏部 20	口縁部弱いヘラアテ。口縁部内外面ナデ。
17	高坏	口(14.0)	B+R多+W	にふい橙	25	口縁部内外面ナデ。
18	甕	口(18.4)	R+W	にふい黄橙～灰黄褐	40	胴部外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。
19	甕	口(20.0)	黒	にふい黄橙	口縁 20	口縁部面取り。風化著しく器面ザラザラ。胎土中の含有物量多い。
20	壺	底8.0	B+R+W少	にふい黄橙	底部 50	外面胴部～底部ミガキ。胴部内面ヘラナデ。
21	甕	底(7.0)	B+R+W+砂多	橙	底部 45	胴部内面ヘラナデ。底部一方のヘラケズリ。
22	支脚	上端5.2 下端10.6 高12.9	B多+W	橙	70	外面ヘラケズリ。内面指ナデ。凹凸している。

第220号住居跡 (第723回)

へ・と—444・445Gridに位置し、第219・221号住居跡に切られる。長軸5.4m、短軸5.3mの正方形に近い形態を呈する。主軸の傾きはN—70°—W、深さは60cmである。礎石を掘り込んで構築されており、床面に砂を敷いている箇所がみうけられた。

カマドは西壁南寄りに構築されている。軸は地山の造り出して、燃焼部は煙道に向かって緩やかに立ち上がっている。貯蔵穴はカマドの向かって左側、南西隅に設けられている。規模は58×60cm、深さは25cmで、底は平らである。その他の施設は検出されなかった。



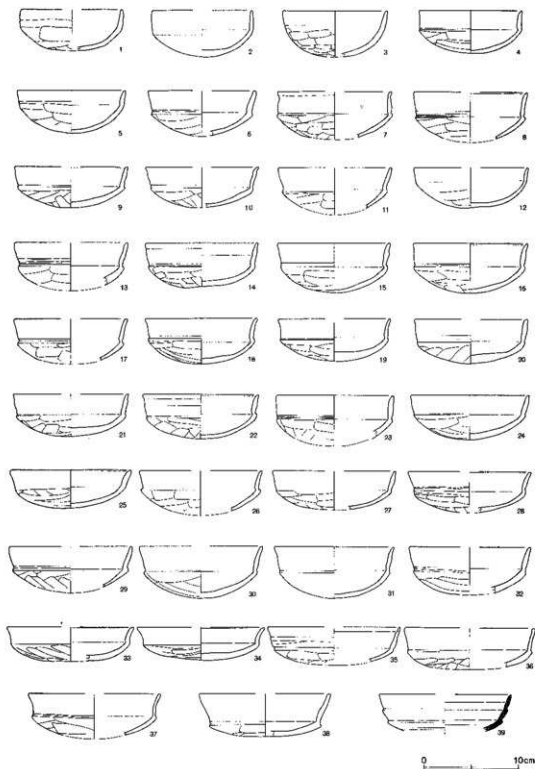
第220号住居跡

1. 茶褐色土 黄褐色土粒子(径1mm以下)を全体的に少量に含む。炭化物粒子・小礫を多く含む。粘性なく堅縮。
2. 暗茶褐色土 茶褐色土を基本に黄褐色土ブロック(径5mm~1cm)を少量に含む。焼土粒子をまばらに、小礫を多く含む。粘性なく堅縮。
3. 黒褐色土 黄褐色土粒子(径1~3mm)および焼土・炭化物粒子を多量に含む。上部を多く含む。礫は他層に比べ少ない。粘性なく堅縮。
4. 黄褐色土 黄褐色土ブロック(径1~3cm)を基本に茶褐色土をまばらに含む。小礫を少量含む。粘性なく堅縮。
5. 暗黄褐色土 暗茶褐色土を基本に黄褐色土粒子(径1mm以下)を少量含む。炭化物粒子をまばらに含む。
6. 黒色土 焼土・炭化物粒子多量に含む。黄褐色土粒子(径1~3mm)をまばらに含む。他層に比べてしまりがなく粘性がない。硬質。

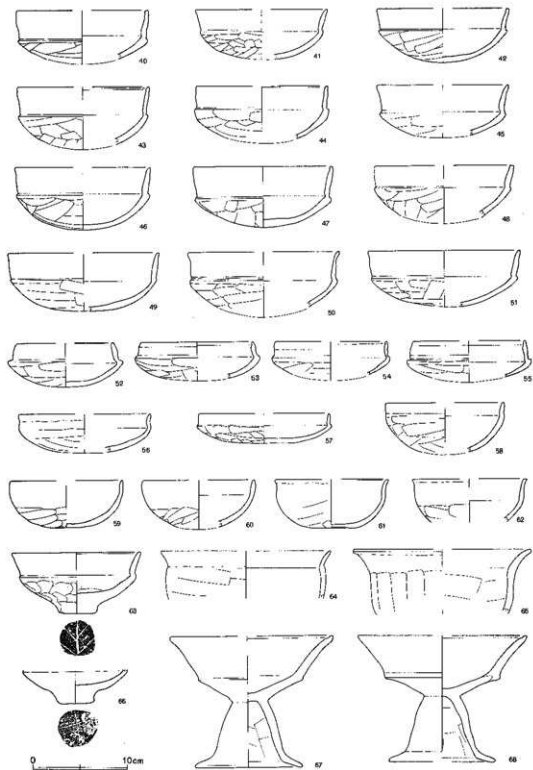
第220号住居跡カマド

- A. 暗黄褐色土 赤褐色焼土ブロックを多量に、茶褐色土小ブロックを少量含む。
- B. 暗褐色土 焼土小ブロックを少量、灰を若干含む。
- C. 黒褐色土 灰を多量に、焼土粒子を少量含む。

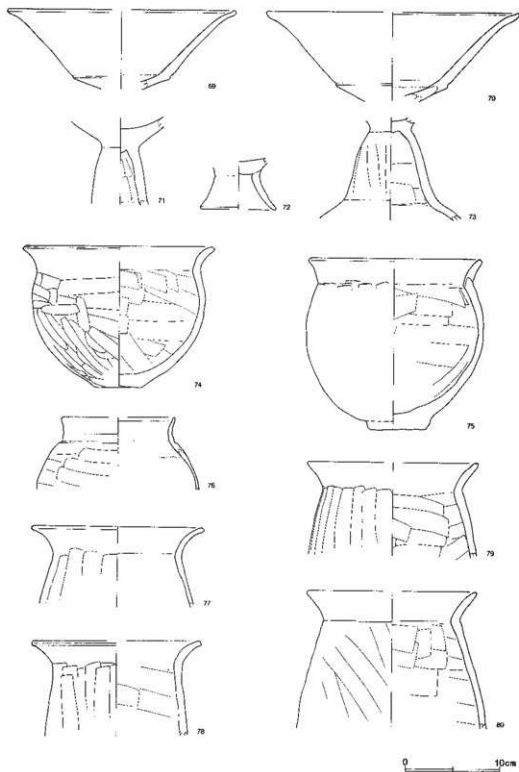
0 2m



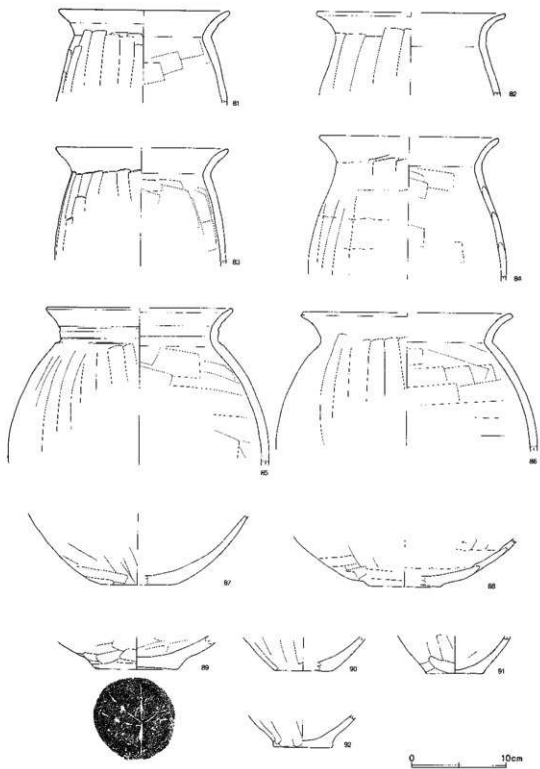
第724図 第220号住居跡出土遺物(1)



第725图 第220号住居跡出土遺物(2)



第726图 第220号住居跡出土遺物(3)



第727图 第220号什居跡出土遺物(4)

第220号住居跡(第724~727図)

No.	器種	大きさ(cm)	絵土	色調	残存率(%)	備考
1	环	□10.8 高(4.3)	R+W	にふい赤褐〜黒	50	口縁部〜体部内面中位ナデ。
2	环	□(10.6) 高4.9	B+R多+W	赤〜橙	70	風化著しく調査不明。
3	环	□11.0 高(4.9)	R+W	にふい赤褐	50	口縁部面取り。体部外面ヘラケズリ。
4	环	□10.8 高4.5	B+R+W少	橙	70	口縁部〜体部内面中位ナデ。体部外面ヘラケズリ。
5	环	□11.4 高4.5	B少+R+W少	橙〜褐	80	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
6	环	□(11.4) 高(4.8)	B+R多+W	橙	40	口縁部面取り。体部外面ヘラケズリ。
7	环	□(12.0) 高(5.1)	B+R+W	橙	30	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
8	环	□(12.0)	B+W	橙〜灰褐	25	口縁部ヘラアテ。口縁部〜体部内面ナデ。
9	环	□(12.0) 高4.3	R+W	橙	20	口縁部面取り。
10	环	□(12.0) 高(4.3)	B+R+W	橙	25	体部外面ヘラケズリ。風化顯著。
11	环	□(12.0)	R+W+砂	にふい黄橙	35	口縁部面取り。口縁部外面風化著しくケズリ不瞭。
12	环	□(12.0) 高4.2	B多+W	橙	10	風化著しく器面ツルツル。
13	环	□(12.0)	B多+W	橙	25	体部外面風化によりケズリよく見えな
14	环	□12.0 高4.6	B+R+W	にふい黄橙	60	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
15	环	□12.0 高5.3	R+W	橙	80	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
16	环	□12.2 高5.2	B+R多+W+W'	橙	100	口縁部ヘラアテ面取り。体部外面風化によりケズリよく見えな
17	环	□(12.0)	R+W+W'	橙	30	口縁部面取り。口縁部と体部の境目強いヘラアテ。
18	环	□12.0 高4.8	B+R+W+W'	洗黄橙	70	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
19	环	□(11.8) 高4.4	R+W	にふい黄橙〜橙	60	体部外面風化によりケズリよく見えな
20	环	□(12.0) 高4.7	R+W	橙〜にふい黄橙	25	口縁部面取り。体部外面風化著しくケズリ不瞭。
21	环	□(12.2) 高4.4	B多+W	にふい黄橙	40	口縁部面取り。絵土中の含有物量多い
22	环	□12.2 高4.7	R+W	橙	60	口縁部ヘラアテ。体部外面ヘラケズリ
23	环	□12.4	B+R+W	橙	60	体部外面風化著しくケズリ不瞭。
24	环	□12.6 高4.7	B多+W	橙	70	口縁部ヘラアテ面取り。
25	环	□12.8 高4.0	B+R+W	橙〜黒褐	60	口縁部ヘラアテ。
26	环	□(13.0)	B+R+W	橙	40	体部外面風化によりケズリ不瞭。
27	环	□(13.0) 高(4.1)	R+W	橙	30	口縁部面取り。体部外面風化によりケズリ不瞭。
28	环	□(13.0) 高(4.3)	R+W+砂	にふい橙〜黒褐	20	口縁部面取り。体部外面ヘラケズリ。
29	环	□(13.0)	B+R+W+W'	にふい橙	30	口縁部ナデ。内面風化。

30	环	□(13.0)	高5.4	R+W'少	橙	30	体部外面風化によりケズリ不明瞭。
31	环	□12.8	高5.4	R多+W	橙	90	風化著しく調査不明。
32	环	□(13.0)	高(5.0)	R+W'少+砂	にふい橙	35	□縁部面取り。体部外面ヘラケズリ。
33	环	□(13.4)	高(3.6)	R+W	黒褐	40	□縁部ヘラアテ。体部外面ヘラケズリ
34	环	□(13.6)	高3.4	R+W	黒褐	40	□縁部ヘラアテ。体部外面ヘラケズリ
35	环	□(14.0)		B+R少+W'少	にふい黄橙～灰白	20	□縁部ヘラアテ。体部外面風化によりケズリ不明瞭。
36	环	□(13.8)		B+R+W+W'	橙	35	□縁部面取り。
37	环	□(14.0)		B+W	橙	30	□縁部面取り。体部外面ヘラケズリ。
38	环	□(14.0)	高(4.5)	R多+W+W'+砂	橙	25	□縁部ヘラアテ面取り。
39	高环	□(14.0)		W	青灰	环部 10	□縁部に強い稜をもつ。ロクロ成形。
40	环	□(14.0)		B+R+W+W'	にふい橙	25	□縁部面取り。体部外面ヘラケズリ。
41	环	□(14.0)	高(5.3)	B+R+W	橙	40	□縁部～体部内面ナデ。
42	环	□(14.0)	高5.7	R+W+W'	にふい橙	20	□縁部ヘラアテ面取り。□縁部と体部の境目強いヘラアテ。
43	环	□(14.0)		B+R+W	橙～にふい黄橙	25	□縁部ヘラアテ面取り。
44	环	□(14.0)		W	にふい黄橙	25	□縁部面取り。体部外面ヘラケズリ。
45	环	□(14.0)		R+W	橙	30	□縁部面取り。体部外面風化によりケズリ不明瞭。
46	环	□(14.4)	高6.6	B+R多+W+W'	橙～にふい黄橙	70	□縁部面取り。
47	环	□14.8	高8.4	R+W	明赤褐	70	□縁部面取り。
48	环	□14.8		B+R+W	橙	50	□縁部ヘラアテ面取り。
49	环	□(16.0)	高(6.1)	R+W+W'+砂	橙～褐	30	体部外面風化によりケズリ不明瞭。
50	环	□(16.0)		B+R+W+W'	にふい橙～灰褐	20	□縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
51	环	□16.0	高(6.0)	B+R+W'少	橙	90	□縁部面取り。
52	环	□(10.2)	高4.6	R+W	黒褐	40	□縁部ヘラアテ面取り。
53	环	□12.0		B+R+W	橙～浅黄橙	50	□縁部ヘラアテ。
54	环	□(12.0)		B+W	灰黄褐	25	体部外面風化によりケズリ不明瞭。
55	环	□(12.0)		R少+W+W'	にふい橙～黒	25	□縁部弱いヘラアテ。□縁部と体部の境目強いヘラアテ。
56	环	□(14.0)	高(4.1)	R多+W	橙	15	体部外面風化によりケズリ不明瞭。
57	环	□(14.0)	高3.1	B+R+W	橙	25	□縁部ナデ。胎部外面ヘラケズリ。
58	环	□(12.6)		R+W	橙～黒	45	□縁部弱い面取り。体部外面ヘラケズリ。
59	环	□(12.0)	高5.0	R+W	橙	30	□縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。

80	环	口(12.0)	R多+W	橙	30	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
81	碗	口(12.0) 底(4.0) 高(5.1)	W+砂	橙	15	口縁端部ヘラアテ面取り。底部外面ヘラケズリ。体部と底部の境不明瞭。
82	碗	口(12.0)	R+W	橙	20	口縁端部ヘラアテ。
83	鉢	口13.6 底4.0 高5.4	R多+W+W'	橙	90	体部外面指ナデ。底部木葉痕。
84	鉢	口(18.0)	R+W	にふい橙	35	口縁部ナデ。風化顯著。
85	鉢	口(19.0)	B+W	橙〜にふい赤褐	口縁 25	口縁部ナデ。体部外面風化によりケズリ不明瞭。内面ヘラナデ。
86	小型壺	底4.0	R+W	橙〜灰褐	底部 80	胴部中位で強く屈曲する。底部木葉痕。
87	高环	口(7.2) 脚11.4 高13.8	B+R多+W	橙	60	口縁端部ヘラアテ。脚部外面ナデ。
88	高环	口(17.8) 脚(11.2) 高(13.3)	B+R多+W	橙	50	口縁端部ヘラアテ。脚部外面ナデ。
89	高环	口(24.2)	R+W	橙	环部 30	口縁端部弱い面取り。口縁部ナデ。
70	高环	口(26.6)	B+R+W	橙	环部 30	風化著しく調整不可瞭。
71	高环	脚基部4.0	W+砂	橙	30	环部内面風化により器面凹凸している脚部外面ナデ。
72	高环	脚(6.0)	R+W+砂	にふい橙	脚部 30	脚部内外面ナデ。
73	高环	脚基部4.4	B+R+W	にふい褐	脚部 80	环部と脚部の境目ナデ。脚部内面ヘラナデ。
74	壺	口20.2 底5.0 高14.9	B+R多+W	橙〜暗赤褐	60	口縁端部ヘラアテ面取り。底部外面一方のヘラケズリ。
75	壺	口18.4 底5.0 高18.0	R+W+砂多	橙〜にふい黄橙	80	Ha1。口縁端部ヘラアテ面取り。胴部外面風化により器面ザラザラでケズリ不明瞭。底部外面一方のヘラケズリ。
76	壺	口(12.0)	B+R+W	淡黄橙	上半部 20	口縁端部ヘラアテ。体部外面風化によりケズリほとんど見えな。
77	壺	口18.2	R+砂	にふい橙	口縁 55	口縁端部弱い面取り。風化顯著。
78	壺	口(18.0)	R+W	にふい橙	口縁 15	口縁端部ヘラアテ面取り。
79	壺	口(18.0)	砂	橙〜黄灰	口縁 55	口縁端部面取り。胴部内面ヘラナデ。
80	壺	口(18.0)	B+R少+W+W'	にふい橙	口縁 30	口縁端部ナデ。胴部内面ヘラナデ。
81	壺	口18.2	B+R+W+W'+砂	橙	口縁 80	口縁部ナデ。胴部内面ヘラナデ。
82	壺	口(20.0)	B+R+W+砂多	橙〜灰褐	20	口縁部ナデ後。胴部外面ヘラケズリ。
83	壺	口(18.2)	R+W+砂多	にふい橙	口縁 45	口縁部ナデ。胴部内面ヘラナデ。
84	壺	口(19.0)	R+W+砂	にふい橙	上半部 25	胴部輪郭のみ痕可瞭。風化顯著。
85	壺	口(19.6)	B+R+W	橙	口縁 40	口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。胴部内面ヘラ木目痕可瞭。
86	壺	口(22.0)	B+R+W	にふい黄橙	口縁 20	口縁端部面取り。胴部内面ヘラナデ。
87	壺	底5.0	B+R+W	淡赤橙〜にふい橙	底部 50	底部外面ヘラケズリ。内面風化。
88	壺	底(8.0)	B+R+W+砂	橙	底部 30	胴部外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。風化。
89	壺	底5.6	R多+W	橙	底部 100	胴部外面風化。底部木葉痕。

90	竪	底(6.0)	B+R+W少	橙	底部 20	胴部内面ヘラナデ。底部外面ヘラケズリ
91	壁	底5.0	B+W	橙	底部 100	胴部外面風化によりケズリ不可辨。底部外面一方向のヘラケズリ。
92	竪	底6.2	B+R+砂多	にふい黄橙	底部 80	風化著しく調整不可辨。

本住居跡の覆土には多量の礫とともに、多くの土師器が含まれていた。破片が多く、接合率もあまり良好ではない。土師器以外には須恵器の破片が1点出土している。小破片であるためはっきりとはしないが、口縁に明瞭な段をもつその形態から、おそらく無蓋高坏の坏部破片と推定される。6世紀初頭頃のものであろうか。

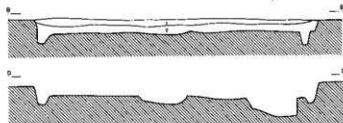
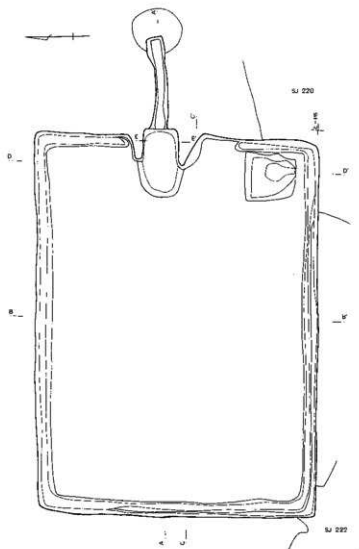
第221号住居跡 (第729図)

へ・と-444・445Gridに位置し、南東コーナーが第220号住居跡と、南西コーナーが第222号住居跡と切り合い関係にある。長軸6.0m、短軸4.5mの長方形を呈し、主軸の傾きはN-85°-E、床面までの深さは23cmである。

カマドは東壁やや北寄りに設けられている。袖は地山の造り出しで、燃燒部は明瞭に掘り込まれ

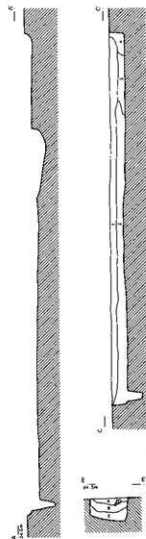


第728図 第221号住居跡カマド



第221号住居跡

1. 茶褐色土 黄褐色土粒子(径1~2mm)を全体的に多く含み、炭化物粒子をまばらに含む。礫を少し含み、粘性なく堅緻。
2. 暗褐色土 褐色土粒子(径1mm以下)を少量、礫を多量に含む。粘性があり堅緻。
3. 黒褐色土 茶褐色土を基本に焼土および灰を多量に含む。中や粘性があり堅緻。
4. 黄褐色土 茶褐色土を基本に黄褐色土ブロック(径5mm~1cm)を多量に含む。粘性なく堅緻。

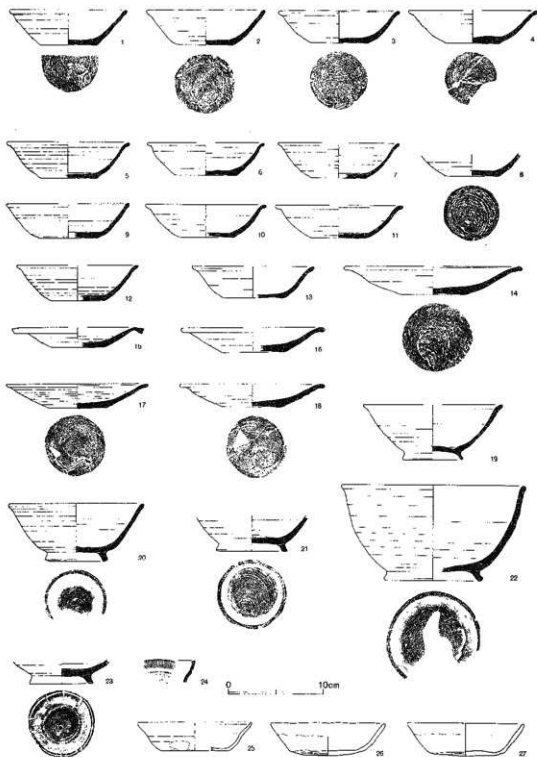


第221号住居跡カマド

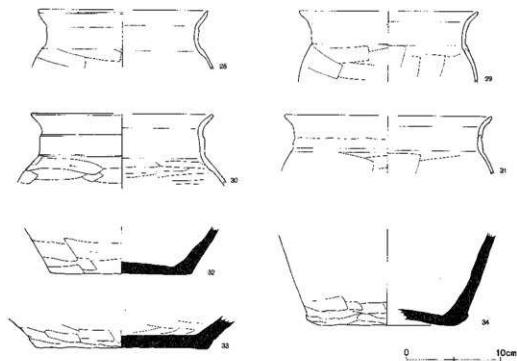
- A. 暗褐色土 焼土粒子を少量、炭化物を若干含む。
- B. 褐色土 焼土小ブロックが多量に含まれ、若干の炭化物を含む。礫を多量に、焼土ブロックを若干含む。しまりはあるが粘性に欠ける。
- C. 暗褐色土

0 2m

第729図 第221号住居跡



第730图 第221号住居跡出土遺物(1)



第731図 第221号住居跡出土遺物(2)

第221号住居跡(第730・731図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口(12.2) 底(6.0) 高3.7	B+W	灰	45	底部回転糸切り。
2	坏	口12.4 底6.2 高3.7	B+W	灰オリーブ	70	底部回転糸切り。
3	坏	口12.6 底6.0 高3.4	B+W+V'	暗オリーブ灰	80	貯蔵穴。底部回転糸切り。
4	坏	口(13.8) 底5.8 高3.5	R+W少	灰白	15	底部回転糸切り。
5	坏	口(13.0) 底6.0 高3.8	W	灰	20	底部回転糸切り。
6	坏	口(12.4) 底(6.6) 高3.4	W	灰	40	底部回転糸切り。
7	坏	口(12.8) 底(5.8) 高(3.7)	W	灰白	30	底部回転糸切り。
8	坏	底5.8	W	灰	底部 100	底部回転糸切り。口縁部欠損。
9	坏	口(13.0) 底(6.2) 高(3.6)	R+W	灰	35	壁溝。底部回転糸切り。
10	坏	口12.8 底5.7 高3.4	B+W	灰	60	底部回転糸切り。
11	坏	口(13.6) 底(5.6) 高3.4	B少+W	灰	15	底部回転糸切り。
12	坏	口(12.8) 底(5.6) 高3.7	W	灰	30	貯蔵穴。底部回転糸切り。
13	坏	口(13.0) 底(6.4) 高3.3	W+W'	縮緑灰	40	底部回転糸切り。
14	皿	口(18.8) 底6.7 高3.0	B多+R+W	浅黄～灰	40	貯蔵穴。底部回転糸切り。置む焼きの痕跡あり(径8.0cm)。風化顕著。

16	皿	口(14.0) 底(5.4) 高(2.1)	B+W	灰	15	底部回転糸切り。
18	皿	口(15.0) 底(6.6) 高2.6	B+R+W+V'	にふい黄褐〜灰	35	底部回転糸切り。酸化変焼成。
17	皿	口15.0 底6.3 高2.5	B+W+V'	灰	80	底部回転糸切り。
18	皿	口15.2 底6.3 高2.4	B+W+V'	灰	70	底部回転糸切り。
19	高台付鍋	口(14.6) 高5.8 高台(6.4)	B+R+W+V'	灰黄	15	底部回転糸切り後、高台ナデつけ(風化により見えない)。
20	高台付鍋	口14.0 高6.1 高台6.8	B+W+少量	オリーブ灰	85	底部回転糸切り後、高台ナデつけ。
21	高台付鍋	高台7.6	V+少量	緑灰	高台部 100	底部回転糸切り後、高台ナデつけ。
22	高台付鍋	口19.4 高10.0 高台10.5	B+W+少量	灰	65	底部回転糸切り後、高台ナデつけ。
23	高台付鍋	高台6.8	B+W	灰	高台部 100	カマド。底部回転糸切り後、高台ナデつけ。高台端部ヘラナデ。
24	壺			青灰		口縁端部外面柳葉状。内面に自然釉付着。
25	坏	口(12.0) 底(7.0) 高(3.0)	B+R+W	橙	20	口縁部ナデ。底部外面ヘラケズリ。風化顕著。
26	坏	口12.0 底7.8 高3.4	B+W	橙	95	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
27	坏	口12.3 底7.8 高3.4	B+R+W+V'	にふい豊	75	口縁部外面ヘラアチによる段をもつ。胴部内面ヘラナデ。
28	壺	口(18.0)	B+R+W+V'	橙〜にふい橙	口縁 25	口縁端部ヘラアチ沈線。胴部外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。
29	壺	口(19.0)	B+R+W+V'	橙	口縁 35	口縁部ナデ。胴部外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。
30	壺	口(19.2)	B+R少+W+V'	にふい赤褐	45	カマド。口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。
31	壺	口(22.0)	B+R+W+V'	橙	口縁 25	口縁部ナデ。胴部外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。
32	壺	底(15.4)	B+W+少量	灰	底部 65	胴部外面ヘラケズリ。底部外面ほぼ一方肉のヘラケズリ。
33	壺	底(18.0)	B+W+少量	暗青灰	底部 30	胴部外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。
34	壺	底(17.0)	V+少量	暗青灰	底部 25	輪積み成形。胴部下端ヘラケズリ。底部外面多方向のヘラケズリ。

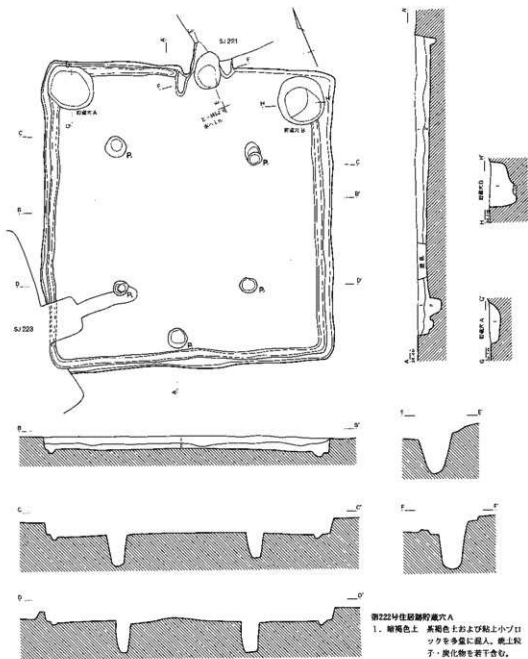
ている。なお、煙出しは第71号土坑を切って構築されている。壁溝は西側と南側からは明瞭に認められたが、ほぼ同じ幅で全周するものと考えられる。貯蔵穴はカマドの向かって右側、南東隅に設けられている。方形のプランで、規模は82×73cm、深さは30cmである。底部の掘り込みは若干だがない。柱穴は確認することができなかった。

遺物は主に覆土から出土したが、須恵器坏類が多量に含まれていた。壁溝内からも須恵器坏の出土をみる。

第222号住居跡 (第732区)

へ・と—445・446Gridに位置し、第221・223号住居跡に切られる。規模は長軸4.8m、短軸4.6mで、形態は正方形に近い。主軸の傾きはN—4°—E、床面までの深さは20cmである。覆土は一部擾乱の影響を受けている。

カマドは北壁中央に位置するが、煙道部のほとんどが第221号住居跡によって切られている。然



第222号住居跡

1. 褐色土 赤褐色土ブロック・同粒子を多量に、焼土粒子を少量含む。
2. 暗褐色土 赤褐色土粒子を少量、同ブロックは若干含まれる。焼土粒子は1層より多くなる。

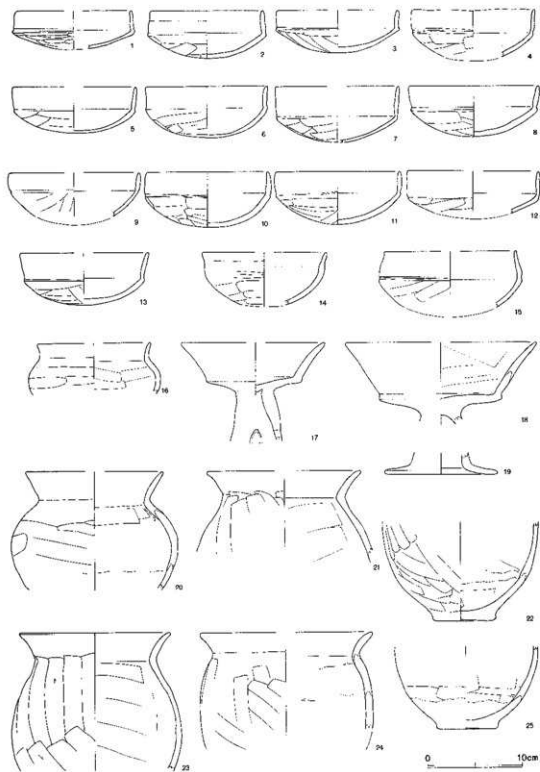
第222号住居跡の竈穴A

1. 暗褐色土 赤褐色土および粘土小ブロックを多量に混入。焼土粒子・炭化物を若干含む。

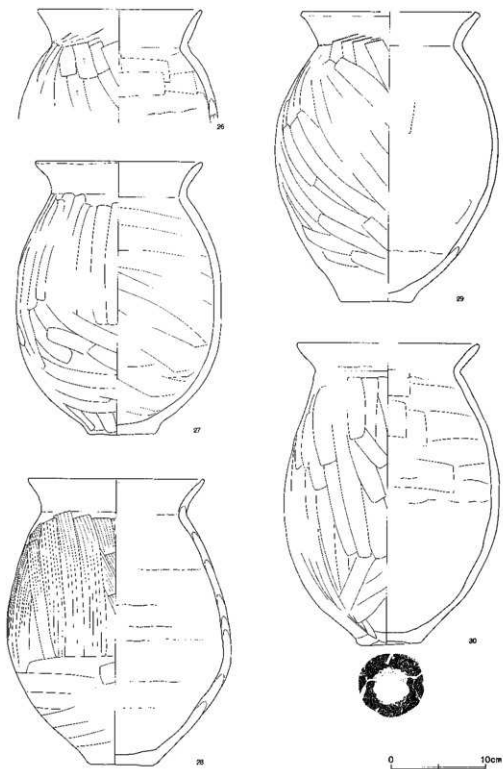
第222号住居跡の竈穴B

1. 褐色土 焼土ブロックを多量に、炭化物を少量含む。しまりよく粘性に富む。

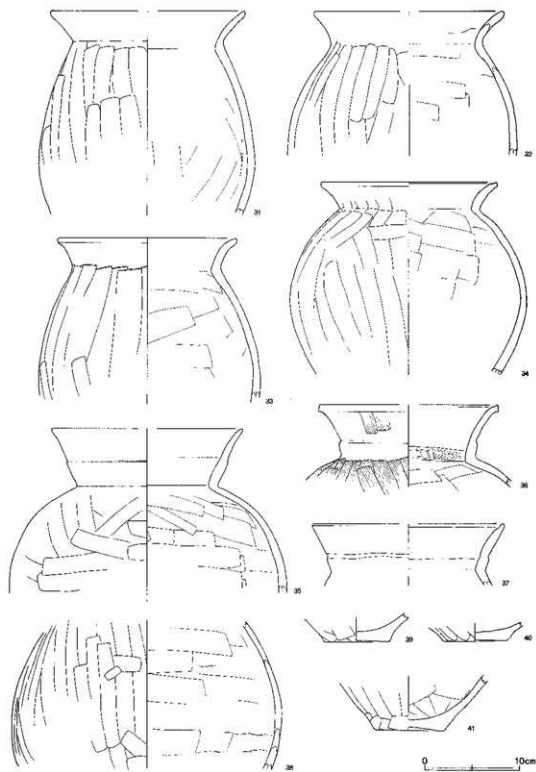
0 2m



第733图 第222号住居跡出土遺物(1)



第734图 第222号住居跡出土遺物(2)



第735图 第222号住居跡出土遺物(3)

第222号住居跡(第733~735号)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口(12.0) 高(4.1)	B+R+W	橙	30	体部外面細かいヘラケズリ。
2	坏	口12.0 高5.0	R+W	橙	50	口縁部~体部内面中位ナデ。やや風化。
3	坏	口(12.6)	R+W+W'	橙	45	風化顕著。
4	坏	口(13.0)	B+R多+W	にふい黄橙	20	口縁部と体部の境目ヘラアテ。
5	坏	口(13.0) 高4.9	B+R多+W	橙~黒	50	風化著しく調整不明瞭。
6	坏	口13.0 高5.4	R多+W	にふい黄橙	80	口縁部ナデ。風化顕著。
7	坏	口(13.0) 高(5.9)	B+R+W少	にふい黄橙	30	口縁部~体部内面ナデ。
8	坏	口13.6 高5.3	R+W	橙~にふい黄橙	70	体部外面ヘラケズリ。風化顕著。
9	坏	口(14.0)	B+R多+W	にふい橙	25	風化顕著。外面一部剥離している。
10	坏	口12.6 高5.8	B少+R+W	にふい赤褐	90	口縁部ナデ。体部外面風化によりケズリ不明瞭。
11	坏	口13.0 高5.5	B+R多+W	にふい黄橙~黒	50	体部外面風化によりケズリ不明瞭。
12	坏	口(14.0)	B+R+W	橙	20	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。風化
13	坏	口(13.8) 高(5.5)	B+R多+W	橙	30	体部外面風化によりケズリほとんど見えない。
14	坏	口(13.2) 高(5.7)	R+W少	橙	40	風化著しく調整ほとんど見えない。
15	坏	口(14.0)	R+W	橙	15	口縁部と体部の境目ヘラアテ。
16	碗	口(12.0)	R+W	橙	上半部 20	胴部外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。風化。
17	高坏	口(15.0)	R多+W	橙	70	胴部中位に三角形の透かしが2ヶ所認められる。風化顕著。
18	高坏	口(22.0)	B+R+W	橙	坏部 40	口縁部内外面ナデ。
19	高坏	脚12.0	R+W	橙	胴部 70	胴部内外面ナデ。
20	壺	口(14.6) 脚(17.6)	B+R多+W	橙~にふい黄橙	40	胴部内面ヘラナデ。風化。
21	甕	口(16.2)	R+W+砂	にふい黄橙	口縁 40	口縁部ナデ。胴部内面ナデ。
22	甕	底6.6	B+R+W+砂	橙~黒褐	下半部 40	胴部内面ヘラナデ。底部外面ナデ?やや風化。
23	甕	口16.0	B+R+W+砂	にふい橙	30	口縁部ナデ。胴部内面ヘラナデ。
24	甕	口(18.2)	R+砂多	橙	上半部 30	胴部外面ヘラケズリ。風化顕著。
25	壺	底6.2	B+W+砂多	(内)にふい黄橙~黒褐(外)橙	下半部 70	風化著しく器面ザラザラしている。胴部に輪痕み痕。胎土中の含有物量多い。
26	甕	口17.2	R+甕	洗黄	上半部 70	胴部外面ヘラ工具痕。胎土中の含有物量多い。
27	甕	口17.6 底7.2 高28.7	B+R多+W+W'	にふい黄橙	50	底部外面はほぼ一方のヘラケズリ。
28	甕	口(18.6) 底6.6 高30.0	W+甕多	橙	70	胴部外面上半部粗いケメ。下半部ヘラケズリ。凹み痕。風化。胎土中の含有物量多い。
29	甕	口(18.8) 高30.8 脚23.6	B少+R+W	洗黄橙	70	口縁部内面取り。胴部内面輪痕み痕。底部風化により調整不明瞭。

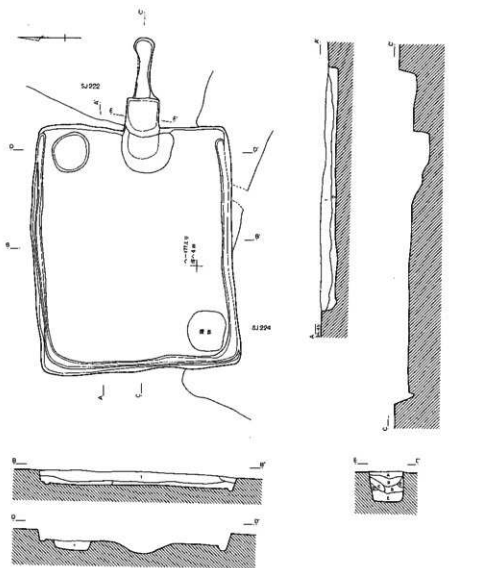
30	竪	口(19.2) 底6.6 高31.8 胴22.6	R+W+砂	灰黄～にふい橙	70	底部周辺ヘラケズリ。凹み底。風化。
31	竪	口(20.6)	R+W+砂多	橙	30	風化著しく器面ザラザラ。胎土中の含有物量多い。
32	竪	口(20.0)	B+R少+W+W'	にふい黄橙	上半部 60	胴部内面ヘラナデ。
33	竪	口19.0	R多+W+砂多	浅黄	上半部 70	胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。
34	壺	口18.6 胴(25.0)	B+R+W	にふい赤褐	35	№7。口縁端部ヘラアテ。胴部内面ヘラナデ。
35	壺	口(20.2)	B+R+W多	にふい黄橙～黒	上半部 30	口縁部外面弱い段をもつ。胴部内面ヘラナデ。
36	壺	口(18.8)	R+W	橙	口縁 15	口縁端部ヘラアテ面取り。口縁部外面一部・胴部内面ハケメ。胴部外面ハケメ内面ヘラナデ。
37	壺	口(20.2)	砂	にふい橙	口縁 60	口縁部外面ヘラアテにより段をもつ。
38	壺	胴28.5	B+R少+W+砂	にふい橙	胴部 70	胴部外面風化によりケズリ不明瞭。
39	壺	底6.8	B+R+W	(内)灰黄褐 (外)にふい赤褐	底部 100	胴部内面ヘラナデ。風化顯著。
40	壺	底6.4	W+W'+塵	橙	底部 90	胴部内面ヘラナデ。
41	壺	底7.4	B+R少+W+W'	橙～にふい黄橙	底部 100	貯蔵穴B。底部外面ヘラケズリ後ナデ。

焼部もまた後世の擾乱をうけており、残存状態は良好ではない。小さく造り出された袖が片側にかろうじて確認することができた。柱穴は4基、深さはいずれも40～50cmである。その位置は典型的でバランスのとれた配置である。

壁溝は幅29cm、深さ15cmで、一部を除いて全刻する。貯蔵穴は2箇所 に設けられている。貯蔵穴Aはカマドの向かって左側、北西隅にある。規模は73×70cm、深さは18cmである。貯蔵穴Bはカマドの向かって右側、北東隅にある。規模は76×75cm、深さは42cmである。ともに覆土は均一であるが、貯蔵穴Bの覆土には多量の焼土ブロックが混入しており、住居跡に伴わない後世の土坑である可能性がある。また、カマドの対面南壁際には主柱穴よりも浅いピットが検出されている。これはおそらく人口の施設に伴うものと考えられる。

出土遺物は多く、プラン確認時にも多量の遺物が出土した。主として土師器の破片であるが、甕壺類の出土がめだっている。

さて、第219～222号住居跡の新旧関係は、平面におけるプランの確認および覆土断面の観察から、(旧→新) 220→219→221、222→221という関係を明らかにすることができた。これは各住居跡の出土遺物からも裏づけることができよう。



第223号住居跡

1. 暗褐色土 焼土粒子・炭化物を少量含む。
2. 暗茶褐色土 茶褐色土ブロック・炭化物を多量に、焼土粒子を少量含む。

第223号住居跡貯蔵穴

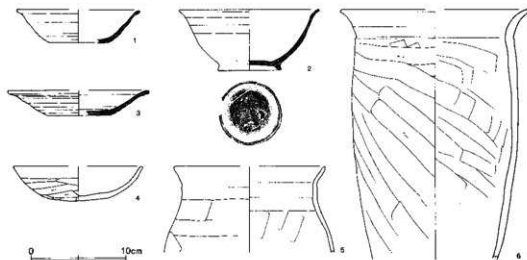
1. 暗褐色土 茶褐色土ブロック・同粒子を多量に、炭化物・焼土粒子を少量含む。

第223号住居跡カマド

- A. 褐色土 茶褐色土粒下を多量に、炭化物を少量含む。
- B. 暗褐色土 焼土粒子をやや多く、炭化物を少量含む。しまりよし。
- C. 暗褐色土 ②層に焼土ブロックが多量に含まれる。天井の崩落したものを、しまりなく、炭を多量に含む。焼土ブロック・炭化物を多めに含む。
- D. 黒褐色土 よくしまった上で、茶褐色土ブロックを多量に、炭化物・焼土粒子を少量含む。

0 2m

第736図 第223号住居跡



第737図 第223号住居跡出土遺物

第223号住居跡 (第737図)

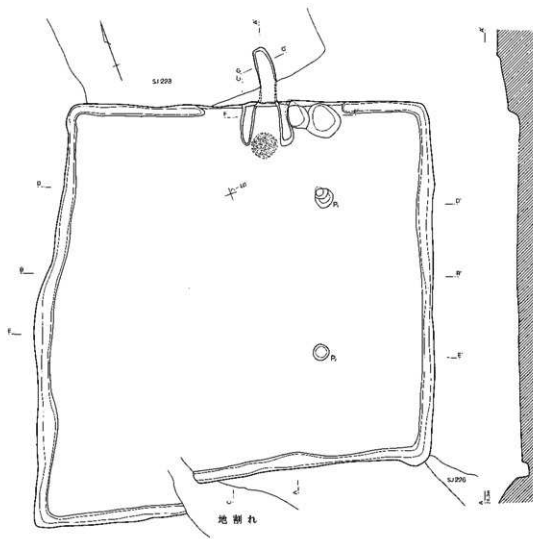
No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口(13.0) 底(8.4) 高(3.5)	W	灰白	30	カマド。底部回転未切り。
2	高台付碗	口14.8 高6.4 高台9.7	B多+W	灰白	60	底部回転未切り後高台ナデつけ。風化顯著。
3	皿	口(15.0) 底(8.8) 高2.8	W	灰	40	底部回転未切り。
4	坏	口(13.7) 高3.6		橙~にふい黄橙	50	口縁部~体部内面ナデ。
5	碗	口(18.0)	B+R+W+W'	橙~にふい橙	口縁 15	口縁部ナデ。胴部内面ヘラナデ。風化顯著。
6	羹	口(20.0)	B+R+W+W' 少	橙~褐灰	30	口縁端部接合せず復元実測。

第223号住居跡 (第736図)

へ—446・447Gridに位置し、第222・224号住居跡を切る。形態は短い長方形を呈し、長軸3.9m、短軸3.2mである。主軸の傾きはN—90°—Eとほぼ真東を向く。床面までの深さは23cmである。覆土の層は単純で、自然に堆積した経緯を示している。東南コーナーと南西コーナーに攪乱をうけている。

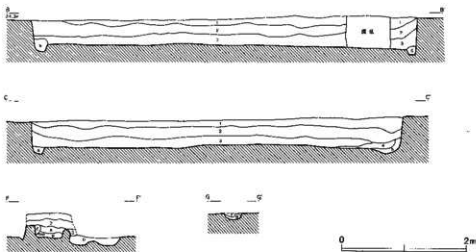
カマドは東壁中央に構築されている。袖はなく、燃烧部は深く掘り込まれている。壁溝はカマドのある東壁を除いて検出された。幅18cm、深さは6cmである。貯蔵穴はカマドの向かって左側、北東隅に設けられている。規模は64×60cm、深さは14cmと浅い。床面を精査したが柱穴は確認されなかった。

出土遺物は破片で量は少ないが、土器以外に用途不明の鉄製品が出土している。



0 2m

第738图

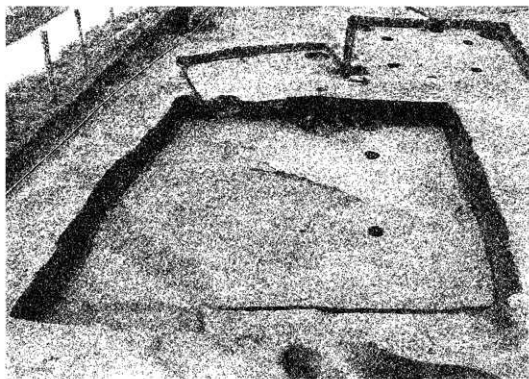


第224号住居跡

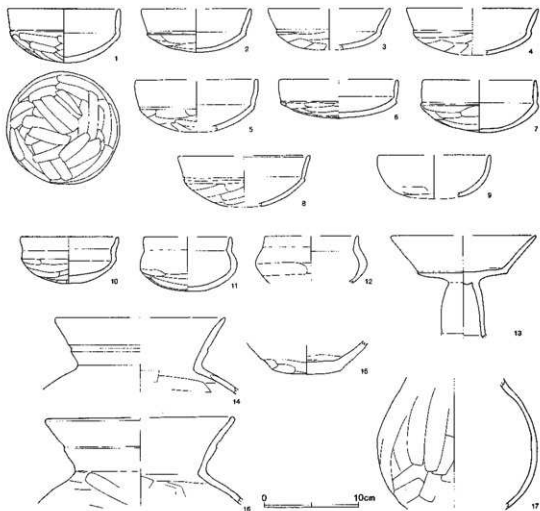
1. 暗赤褐色土 炭化物・焼土粒子をわずかに含む。
2. 褐色土 蒸褐色土粒子を多量に、炭化物・焼土粒子をごくわずかに含む。
3. 褐色土 蒸褐色土粒子・炭化物・焼土粒子を2層より多く含む。
4. 暗褐色土 砂を多く含み、炭化物・焼土粒子を多量に含む。
5. 暗褐色土 砂を多く含み、炭化物・焼土粒子を少量含む。蒸褐色土が厚さ～7cmのブロック状に散入。
6. 褐色土 蒸褐色土粒子・炭化物を少量含む。

第224号住居跡カマド

- A. 黄褐色土 カマド天井面。上部が赤色に焼けている。
- B. 灰褐色土 炭化物・灰を多く含む。しまりに欠ける。
- C. 赤褐色土 カマド本体の崩落土。
- D. 灰褐色土 灰・炭化物・焼土を多く含み、しまりに欠ける。



第224号住居跡



第739図 第224号住居跡出土遺物

第224号住居跡（第738図）

ほ・へ—446・447Gridに位置し、第223・226号住居跡に切られる。噴砂を伴う地割れによって南壁が大きく歪んでいる。本来は一辺5.8m程度のほぼ正方形の形態であったと推測される。主軸の傾きはN—22°—Eで、床面までの深さは40cmである。覆土は均等な埋没状態を示しており、地割れは本住居跡が完璧に埋没したあとでおきた現象と考えられる。

カマドは北壁ほぼ中央に構築されている。袖はほぼ床面の高さで確認されたもので、実体はほとんど残っていない。燃烧部は掘り込まれていないが、焼土の薄い堆積がみられた。煙道は四角くくり抜かれており、わずかに屈曲している。

柱穴は東側に2基確認された。地割れのために確認できなかったが、西半分にもおそらく存在していたであろう。壁溝は幅20cm、深さ10cmで、全周している。カマドの右側に土坑が2つ並んだ状

第224号住居跡 (第739図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口12.0 高5.7	B+R+W	橙	90	体部外面丁寧なヘラケズリ。
2	坏	口(11.6) 高4.6	B多+W	橙	30	風化著しく調整不明瞭。
3	坏	口(13.0) 高(4.4)	B少+R+W少	橙〜にふい縄	10	口縁部面取り。体部外面ヘラケズリ。
4	坏	口(14.0) 高(5.0)	B多+W	浅黄橙	20	風化著しく調整不明瞭。
5	坏	口(13.0) 高(5.6)	B+R+W	橙〜浅黄橙	25	口縁部面取り。風化。
6	坏	口(12.6) 高4.1	B多+W	橙〜黒	50	体部外面風化によりケズリ不明瞭。
7	坏	口(12.0) 高5.5	W+W'	橙〜にふい黄橙	40	体部外面風化著しくケズリ不明瞭。
8	坏	口(14.0) 高(5.4)	B少+R+W少	橙	25	口縁部面取り。口縁部と体部の境目ヘラアテ。体部外面風化によりケズリ不明瞭。
9	坏	口(12.0) 高(4.6)	B多+W	橙	25	風化著しく調整不明瞭。
10	坏	口10.2 高4.9	B+R多	橙	60	口縁部内面に稜をもつ。
11	椀	口(9.2) 高5.7	R+W	橙〜灰褐	45	体部外面下半ヘラケズリ。
12	椀	口(10.0)	B+R+W	橙	上半部 40	口縁部〜体部上半内外面ナデ。体部外面下半ヘラケズリ。風化。
13	高坏	口(15.4)	B多+W	橙	15	風化著しく調整不明瞭。
14	壺	口(18.0)	W+煤多	橙	口縁 40	口縁部外面ヘラアテ。風化著しく器面凹凸している。
15	壺	底7.0	B+R+W+砂多	橙	底部 100	胴部外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部外面一方向のヘラケズリ。
16	壺	口(20.2)	W+砂	橙〜にふい黄橙	口縁 35	口縁部面取り。風化顕著。
17	壺	胴部(16.6)	砂	橙	胴部 60	カマド。風化顕著。胎土中含有物量多い

態で設けられている。深さは12cmと浅いが、覆土には灰や焼土が多量に含まれていた。貯蔵穴とは異なる性格をもつ土坑と考えられる。

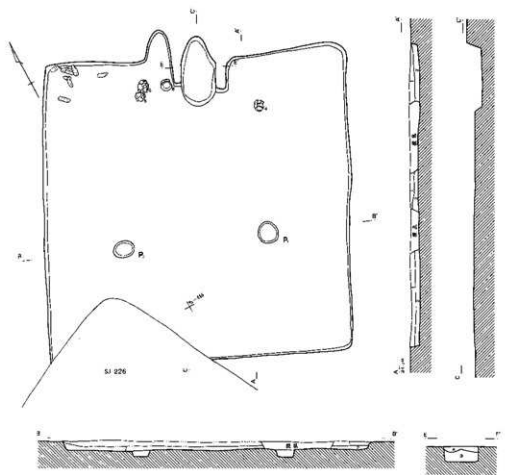
住居跡の規模や深さのわりに遺物はそう多くはなく、床面直上やカマド内からの土器の出土はみられなかった。土器の出土が貧弱であるのとは対照的に、滑石製の白玉が壁溝内から大量に出土したことは特筆される。白玉は地割れに切られた南西コーナー近くの西壁の壁溝内に集中して発見された。径が4mm程度の小さな遺物であったことに加え、湧水などの悪条件のため、残念ながら正確な方位をおさえることができなかった。これらの白玉は破片を含めると90個以上にもなり、1軒の住居跡から出土した石製品としては、本遺跡ではもっとも多い。白玉と同じ地点から薄鉢状の滑石製品も1点出土している。

第225号住居跡 (第740図)

に・ほ-445・446Gridに位置し、第226号住居跡に切られている。南壁のラインは浅く不明瞭であったが、形態は一边4.8mほどのほぼ正方形を呈していると思われる。主軸の傾きはN-29°-

E、床面までの深さは13cmである。部分的に後世の攪乱を受け、あるものは床面下まで達しており、状態は悪い。カマドの左側に突出部があるが、これは本来の住居に伴うものではない。

カマドは北壁中央に構築されている。袖は地山の造り出して、燃焼部は大きく掘り込まれている。ピットは2基確認されたが、深さは8-10cmと浅く、柱穴ではない可能性もある。位置的にいうとカマドよりに柱穴が存在してもよいが、確認されなかった。貯蔵穴もなく、攪乱に切られた可能性も考えられる。



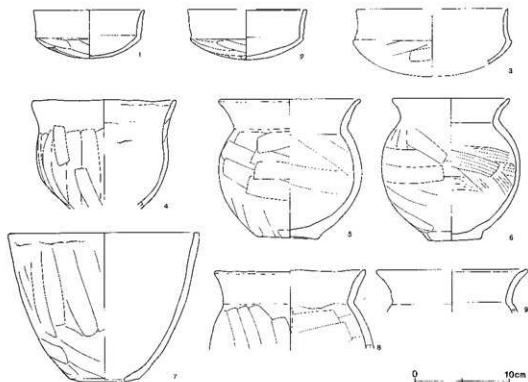
第225号住居跡

1. 粘黄褐色土 黄褐色土粒子(径2-3mm)を少量、焼土粒をわずかに含む。粘性なく堅緻。
2. 粘黄褐色土 茶褐色土を基本に黄褐色土ブロック(径5mm-1cm)を多量に含む。粘性なく堅緻。

第225号住居跡カマド

- A. 粘黄褐色土 黄褐色土粒子(径3-5mm)を全体的に多量に、焼土粒を少量含む。粘性なく堅緻。
- B. 粘黄褐色土 黄褐色土ブロック(径1-2cm)を主体に茶褐色土を少量含む。やや粘性があり堅緻。

0 2m

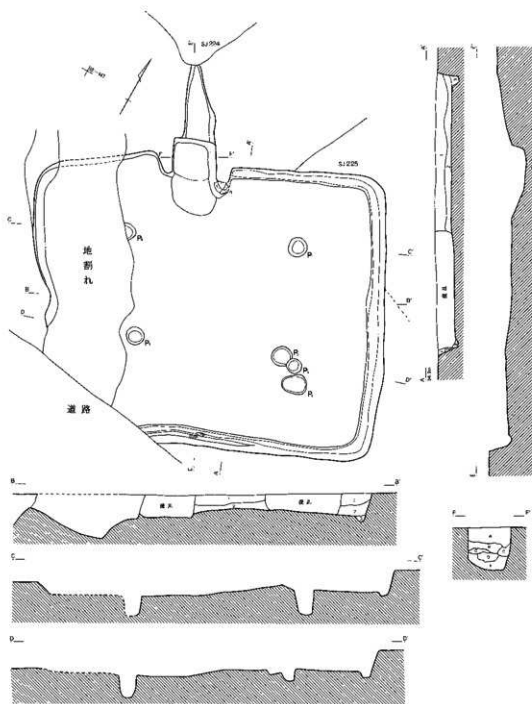


第741図 第225号住居跡出土遺物

第225号住居跡(第741図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	□11.6 高5.1	B+R多+W+	橙	90	内面風化。
2	坏	□(12.4) 高5.3	R多+W	橙	40	口縁端部即取り。
3	坏	□(16.0)	R多+W	橙	15	風化著しく調整不詳。
4	甕	□15.0	R+W+砂多	橙~にふい黄橙	80	No.1. 内面輪積み痕。
5	甕	□15.0 底8.8 高14.6	W+砂多	橙	60	No.3. 口縁部ナデ。胴部内面ヘラナデ 底部外面ヘラケズリ。
6	甕	□12.4 底5.5 高14.9	W+砂多	橙~暗赤褐	90	No.4. 口縁部ナデ。胴部内面板状工具 によるナデ痕。底部外面丁寧なヘラケズリ 調整。
7	甕	□20.2 底7.4 高15.7	B+R多+W	橙	55	口縁部外面輪積み痕。胴部外面風化によ りケズリ不明瞭。内面ヘラナデ。
8	甕	□18.0	B+R+W+	にふい橙~橙	口縁 100	No.2. 口縁部ナデ。胴部内面ヘラナデ。
9	甕	□(16.0)	B+砂多	橙	口縁 35	口縁端部ヘラアテ。口縁部内外面ナデ。

遺物の量は少ないが、カマド付近から残りの良い土師器が出土した。また、北西隅の床面直上から福物石が9個→部重なり合って出土している。



第226号住居跡カマド

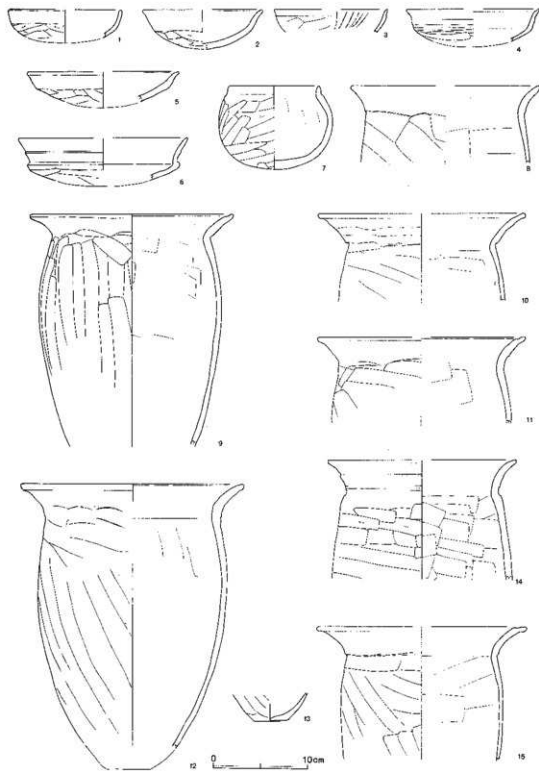
- A. 褐色土 茶褐色土粒子・焼土粒子を少量含む。
- B. 暗赤褐色土 茶褐色土粒子と焼土粒子が1層より多く含まれる。
- C. 暗赤褐色土 カマド土層の腐落土。よく焼けている。
- D. 灰褐色土 上部が灰層で下部が炭化物層となっている。
- E. 暗赤褐色土 焼土を大量に、炭化物をわずかに含む。しまりよし。

第226号住居跡

- 1. 暗褐色土 茶褐色土粒子を少量、炭化物・焼土粒子を若干含む。
- 2. 暗褐色土 茶褐色土粒子を多く含む。炭化物等は1層より少ない。
- 3. 褐色土 茶褐色土粒子・小ブロックを多めに含む。しまりよし。

0 2m

第742図 第226号住居跡



第743图 第226号住居跡出土遺物

第226号住居跡 (第743図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	環	口(12.0)	B+W	におい橙	20	地割れ出土。口縁部～体部内面ナデ。
2	環	口(12.7) 高(4.2)	B+W	明赤褐	40	地割れ出土。口縁部ヘラアテ。
3	環	口(12.0)	R+W	橙	15	内面暗文。体部外面ヘラケズリ。
4	環	口(14.0)	B+R+W	におい橙	30	口縁部弱いヘラアテ。
5	皿	口(16.0)	B+W	橙	20	地割れ出土。口縁部ヘラアテ。
6	環	口(18.0)	B+R+W	橙	口縁 20	地割れ出土。口縁部ヘラアテ。
7	小型壺	口9.2 高8.7	B+R少+W+W'	橙～黒	100	貯蔵穴。口縁部ナデ。外面胴部～底部ヘラケズリ。
8	壺	口(20.0)	B+W	橙	口縁 20	内面風化。
9	壺	口21.6	B+R+W+W'	橙	70	№1 カマド。口縁部弱いヘラアテ 胴部内面ヘラナデ。
10	壺	口(22.0)	B+W'+W	橙	口縁 20	地割れ出土。口縁部外面ナデのこし部分あり。
11	壺	口(22.0)	B+R+W+W'	橙	口縁 20	地割れ出土。口縁部ヘラアテ。
12	壺	口(23.6) 胴19.9	B少+W+W'	におい橙～橙	40	地割れ出土。風化。
13	壺	底(3.6)	B+R+W	におい黄橙～黒褐	底部 25	底部外面ヘラケズリ。
14	壺	口(20.0)	B+R少+W	橙	口縁 15	口縁部外面弱い段をもつ。胴部内面ヘラナデ。
15	壺	口(22.4)	B+R+W+W' 多	橙	口縁 55	口縁部ヘラアテ。胴部外面ヘラ工具痕 胴部内面ナデ。

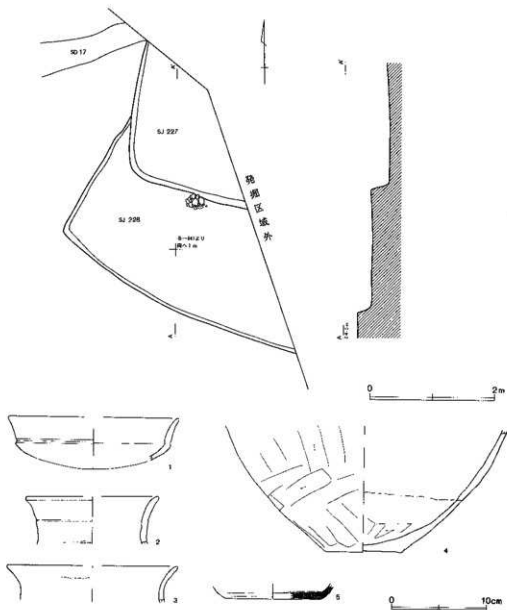
第226号住居跡 (第742図)

に・ほ—445・446Gridに位置している。規模の大きい地割れにより、西壁が分離してしまっている。南西隅は道路にかかっている。規模は長軸およそ5.7m、短軸4.5mである。主軸の傾きはN—29°—W、深さは22cmである。床面には地割れの爪痕がなまなましく残っており、さらに後世の擾乱を各所を受けているため、遺存状態は良好ではない。

カマドは北壁に構築されている。右側の袖には壺が使用されていた。地山の造り出しで、燃焼部の掘り込みは深いが焚口に行くにつれて浅くなっている。煙出しの先端は第224号住居跡を切っている。ピットは6基検出されたが、主柱穴はピット1～4と考えられる。壁溝は、一部地割れにより切断されているが、カマドの向かって右側の北壁から南壁にかけて巡っているものと思われる。貯蔵穴は確認されなかったが、地割れの内部に堆積している土の中から土器がややまとまって出土していることから、地割れによって破壊されたものと思われる。

第227号住居跡 (第744図)

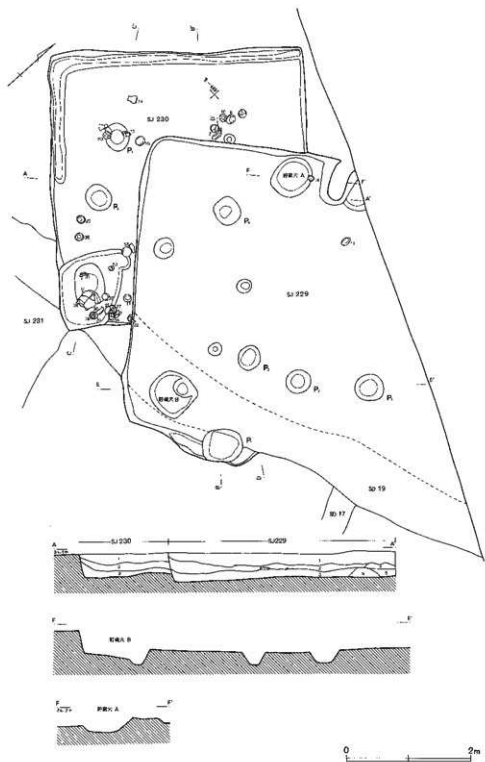
ぬ・る—446・447Gridに位置し、第228号住居跡を切る。大半が調査区域外にかかり、規模・形態とも不明である。深さは50cmである。住居内の施設は確認されず、遺物も出土しなかった。



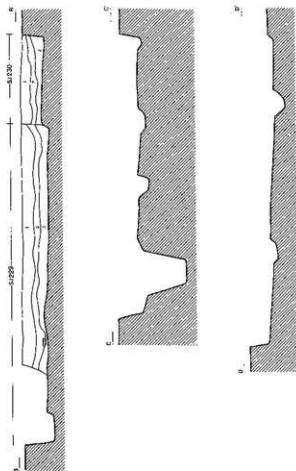
第744図 第227・228号住居跡および第228号住居跡出土遺物

第228号住居跡 (第744図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	□(18.0) 高(5.5)	B多+W+W'	橙	口縁 10	体部外面風化によりケズリ不可辨。
2	碗	□(14.0)	B少+R少+W+W' 少	橙	口縁 20	口縁部内外面ナデ。口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。
3	碗	□(18.0)	B+W+W'+砂	(内)浅黄橙 (外)淡橙	口縁 15	口縁部内外面ナデ。
4	壺	底8.0	B多+W+W' 少	橙	底部 70	No.1。胴部内面ヘラナデ。底部外面一方 向のヘラケズリ。風化。
5	坏	底(10.0)	W+針多	灰	底部 25	底部回転糸切り後、周辺左回転ヘラケズ リ。



第745图 第229・230号住居跡



第229号住居跡

1. 褐色土 茶褐色土小ブロックを若干含む。
2. 黒色土 炭化物を多く含む層を成している。
3. 黄褐色土 茶褐色土小ブロックを多量に含む。しまり・粘性ともに強い。
4. 黄褐色土 炭化物・焼土粒子を少量含む。カマド天井部の崩落土。
5. 黒褐色土 多量の炭化物と焼土粒子を含み、灰を多く含む。
6. 黄褐色土 カマド袖の部分であり、詰じりの少ない黄褐色土で形成される。

第230号住居跡

1. 褐色土 茶褐色土小ブロックを少量含む。炭化物・焼土粒子を若干含む。
2. 黒褐色土 少量の炭化物を含むが、大きくなる。焼土ブロックを少量含む。
3. 茶褐色土 茶褐色土小ブロックを多量に、炭化物粒子を若干含む、しまり・粘性に富む。

第228号住居跡 (第744図)

ぬ・る—446・447Gridに位置し、第227号住居跡に切られている。大半は調査区域外にかかり、南西コーナー部分しか検出されなかった。深さは22cmである。住居内の施設はまったく確認されていない。

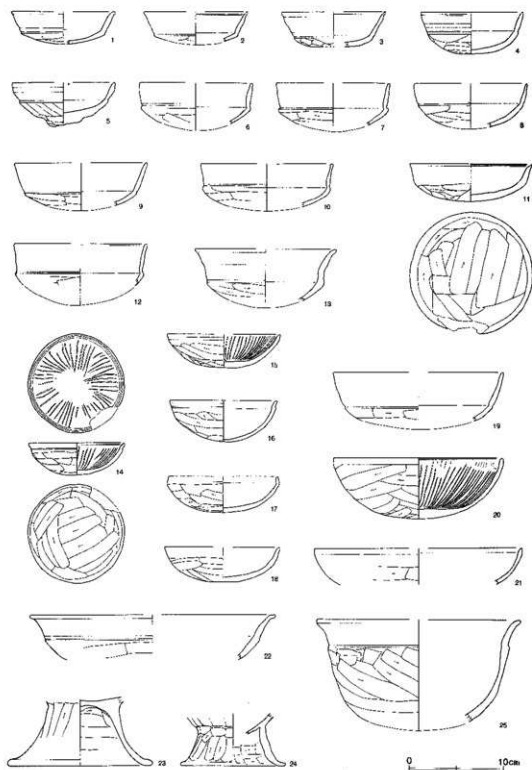
出土遺物は少なく、主に覆土から破片が出土したにすぎないが、検出部分中央の床面直上から土師器の下半部(4)が出土している。

第229号住居跡 (第745図)

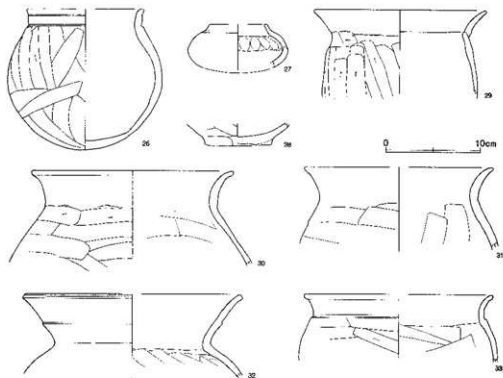
る・を—447・448Gridに位置し、東側は調査区域外にかかる。南壁は第19号溝によって切れ、確認されなかった。第230号住居跡を切って構築されている。規模は西壁で長さ4.6mで、カマドの位置からすると東西に長い長方形を呈していたと考えられる。主軸の傾きはN—26°—W、床面までの深さは43cmである。

カマドは北壁に構築され、左袖と燃焼部の一部が確認されている。袖の残っている部分は地山を造り出したものである。燃焼部の掘り込みはほとんど認められない。貯蔵穴はカマドの向かって左側に1基設けられている。規模は60×66cm、深さは18cmである。もう1基は南西隅に確認されたが、溝に切られているため痕跡しか残っていない。ピットは数基検出されているが、柱穴として確実なものは見当たらない。

出土遺物は覆土からのものが多いが、完形に近い環(14)がカマド脇から出土している。また、土器以外の出



第746図 第229号住居跡出土遺物(1)



第747図 第229号住居跡出土土遺物(2)

第229号住居跡(第746・747図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口(11.0) 高(3.4)	B+W少+V'少	橙	25	口縁端面取り。
2	坏	口(11.0) 高(3.5)	B+R少+V'少	橙~にふい橙	20	口縁端面内面に面取り。体部外面ヘラケズリ。
3	坏	口(11.0) 高(3.6)	B+W+W'	橙	20	口縁端面強いヘラアテ。体部外面細かいヘラケズリ。
4	坏	口10.8 高4.4	B多+W	明赤褐	75	口縁部強いナデ。
5	坏	口(11.0) 高4.5	B+W+W'	(内)黒褐(外)橙	55	口縁部ナデ。体部ケズリ出す。
6	坏	口(12.0) 高(5.0)	B+R+W少+V'少	橙	20	口縁端面取り。体部外面ヘラケズリ。
7	坏	口(12.0) 高(5.1)	B+W+W'	橙	20	口縁端面ヘラアテ面取り。
8	坏	口(12.0) 高(4.8)	B少+R+W少	橙~浅黄橙	30	口縁部弱い面取り。
9	坏	口(14.0)	B+W	にふい黄橙	45	口縁部と体部の境目ヘラアテ。
10	坏	口(14.0) 高(5.0)	B多+W+W'少	橙~黒褐	20	口縁端面取り。口縁部と体部の境目強いヘラアテ。
11	坏	口13.0 高3.9	B多+W+W'少	橙~黒	100	№2。口縁端面ヘラアテ。体部外面一部剥離。風化。
12	坏	口(14.0) 高(6.5)	B+R+W少	橙	口縁 20	口縁部ヘラアテ面取り。体部外面ヘラケズリ。
13	坏	口(15.0)	B+W+W'	明赤褐	口縁 25	風化顕著。

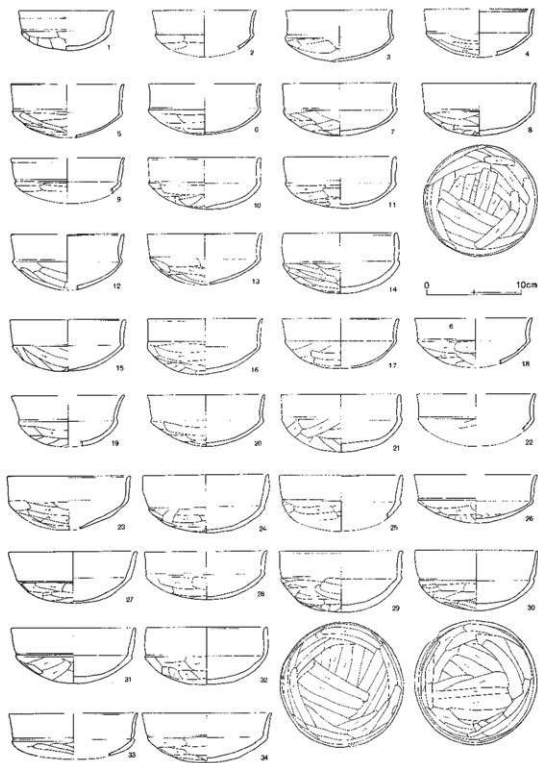
14	环	口10.2 高3.5	B+W少	橙	95	胎1。口縁部ヘラアテ。内面放射状瘤文。
16	环	口(12.0) 高3.5	B+W	灰褐	60	内面放射状瘤文。
18	环	口11.4 高4.4	B多+W+W'	橙	95	内面瘤文の残跡。風化顯著。
17	环	口(11.8) 高3.8	B+W+W' 少	にふい橙	50	口縁部ナデ。僅かに内縁する。
18	环	口(12.2) 高3.7	B多+R少+W+W'	褐灰	70	風化顯著。
19	环	口(18.0) 高(8.0)	R多+W	(内)にふい黄橙 (外)橙	口縁 10	口縁部全面取り。風化。
20	碗	口18.0 高6.4	B+W+W'	灰褐	70	口縁部ヘラアテ面取り。内面放射状瘤文。
21	环	口(22.0)	B+W少	(内)灰白 (外)黒	5	口徑残存部少ないため推定。体部外面ヘラケズリ。
22	鉢	口(26.0)	B+R少+W+W'	にふい橙	口縁 10	口縁部強いヘラアテ面取り。
23	高环	径15.4	B多+R少+W	浅黄橙	脚部 100	カマド。脚部外面ヘラケズリ。内面ケズリ。
24	台付鉢	径11.2	B多+W+W'	赤橙	脚部 90	脚部内面ヘラナデ。
25	鉢	口(21.8)	B多+R少+W+W' 少	にふい黄橙	40	体部外面ヘラケズリ。
26	短頸甕	口(12.4) 高14.9	B+W+W' 少	にふい褐	45	口縁部外面・口縁部と体部の境目ヘラアテ。
27	短頸甕	口(6.0) 高(5.2)	R少+R+W少	橙~にふい黄橙	30	口縁部ナデ。脚部外面ヘラケズリ後ナデ内面上部増殖オサエ。
28	甕	径7.0	B+R多+W+W'	(内)橙 (外)浅黄橙	底部 100	やや上げ底。底部外面周部ヘラケズリ
29	甕	口18.2	B+R少+W少	にふい黄橙	口縁 80	P-8。風化顯著。
30	甕	口21.4	B多+R少+W+W'	橙	口縁 90	P-8-9。胎土中の含有物量多い。
31	甕	口(20.0)	B+W+W' 少	黒褐	口縁 35	口縁部弱い面取り。風化顯著。
32	甕	口(23.0)	B少+W+W'	黒褐	口縁 50	口縁部ヘラアテ面取り。口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。
33	甕	口(20.0)	B	灰白	口縁 10	脚部内面ヘラナデ。

土遺物として滑石製白玉2・土玉2・土製紡錘車1、および襷物石1が覆土から出土している。

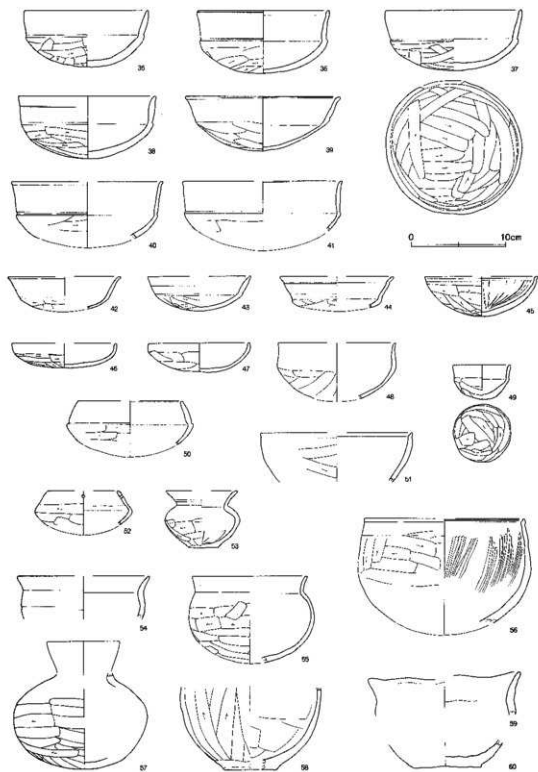
第230号住居跡 (第745図)

る・を—448・449Gridに位置し、第229号住居跡に切られる。長軸4.4m、短軸4.1mの正方形に近い形態をしている。カマドは確認されなかったが、おそらく北東側に構築されていたと考えられる。ピットは数基検出されているが、確実に柱穴と認定できるのはピット1と2の2基である。切り合っているため、第229号住居跡のピットが本住居跡に伴う可能性もある。壁溝は深さ6cmと浅く、西壁から南壁の半分まで延びている。貯蔵穴は南東隅、住居の壁際に設けられており、溝と切り合うが、掘り込みが深いためよく残っていた。規模は115×100cmと幅広く掘り込まれている。深さは75cm、底は平らである。

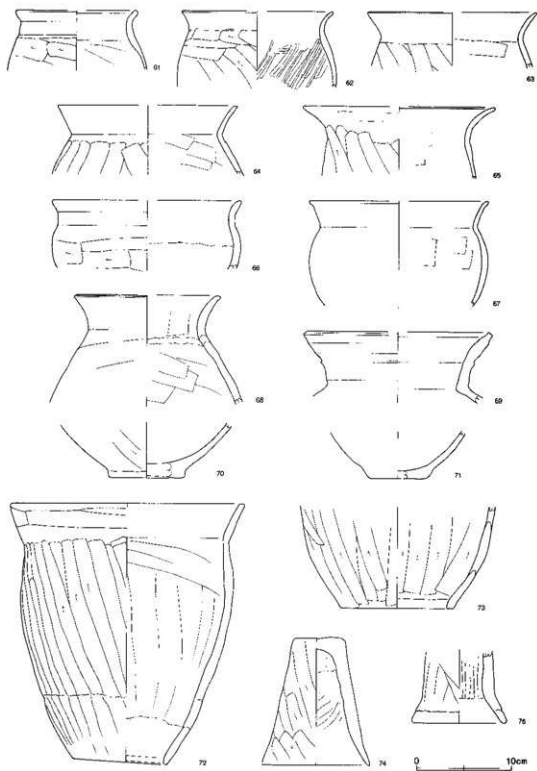
出土遺物の量は多く、接合率も比較的良好である。特に、貯蔵穴上層から土器器坏などがまとまって出土した。また、工具痕跡のある大きな軽石が床面直上から出土している。



第748图 第230号住居跡出土遺物(1)



第749图 第230号住居跡出土遺物(2)



第750图 第230号住居跡出土遺物(3)

第230号住居跡(第748~750区)

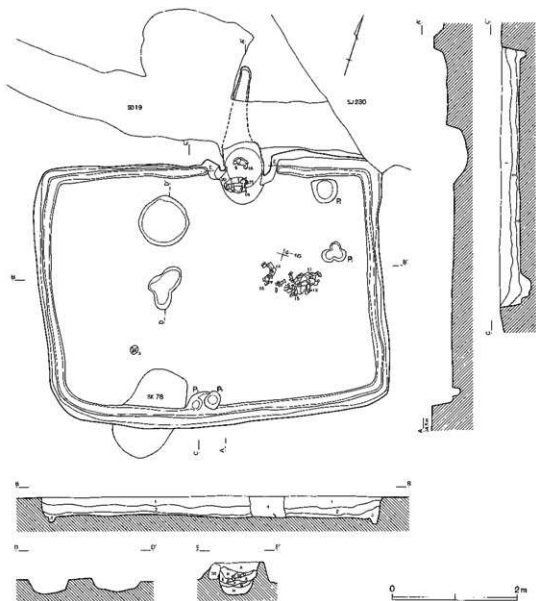
No.	器 種	大きさ(cm)	胎 土	色 調	残存率(%)	備 考
1	环	□10.1 高4.2	B多+W	にふい橙~灰褐	75	体部外面ヘラケズリ。風化顯著。
2	环	□(13.0) 高(4.9)	B少+R+W+W'	橙	30	口縁部面取り。体部外面ヘラケズリ。
3	环	□11.2 高5.4	B+R少+W+W'	橙	90	口縁部面取り。風化著しく調整不明瞭
4	环	□(11.6)	B+R少+W+W'	橙	30	口縁部面取り。
5	环	□(12.0)	B+W少	橙	30	口縁部面取り。体部器面薄い。
6	环	□(12.6) 高5.3	B+W少	橙	25	口縁部面取り。体部外面風化によりケズリ不明瞭。
7	环	□12.8 高5.5	B+R少+W+W' 少	にふい橙	100	№4。口縁部ヘラアテ面取り。風化顯著。
8	环	□12.8 高5.5	B+R少+W少+W' 少	橙~黒	95	№2。体部外面丁寧なヘラケズリ。
9	环	□(12.0) 高(4.8)	B少+R+W少	橙	20	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
10	环	□12.8 高5.4	B+R+W少	にふい橙~黒褐	100	№3。口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
11	环	□11.8 高5.4	B多+R少+W+W'	にふい橙~灰褐	100	№15。風化。
12	环	□(12.0) 高(5.9)	B+W少+W'	橙	40	口縁部ヘラアテ痕。
13	环	□10.2 高(5.4)	B+W少+W' 少	橙~褐灰	85	№7。口縁部ヘラアテ面取り。風化顯著。
14	环	□12.8 高5.4	B多+R+W+W'	にふい赤褐	75	№28。口縁部面取り。器壁やや厚い。
15	环	□12.2 高5.4	B多+R+W+W' 少	明赤褐~にふい橙	80	口縁部面取り。
16	环	□12.2 高5.8	B+W+W'	にふい黄橙	55	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
17	环	□(12.4) 高(5.3)	B+W	橙	25	口縁部面取り。風化顯著。
18	环	□(12.0)	B+W+W' 少	橙	35	口縁部ヘラアテ面取り。風化。
19	环	□(12.0)	B少+W+W'	橙	20	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
20	环	□12.4 高5.4	B+R多+W+W' 少	橙	95	№8。風化顯著。
21	环	□12.8 高5.1	B+R少+W+W' 少	橙	100	№18。風化著しく器面ザラつく。
22	环	□(12.6) 高5.6	B多+W	橙	口縁 30	口縁部面取り。体部外面風化著しくケズリ不明瞭。
23	环	□13.0 高(5.7)	B+R+W+W'	にふい黄橙	75	口縁部面取り。
24	环	□13.4 高5.1	B+R	にふい橙	80	№21。口縁部ナデ。風化。
25	环	□13.0	B+R+W+W' 少	明赤褐	60	口縁部面取り。
26	环	□(13.0) 高5.1	B+R少+W+W' 少	橙~黒	45	口縁部面取り。体部内面ヘラナデ。
27	环	□13.8 高5.4	B多+R少+W+W'	にふい橙~灰褐	100	№17。口縁部ナデ。風化。
28	环	□(13.0) 高5.1	B少+R+W	にふい橙	80	体部外面ヘラケズリ。風化。
29	环	□13.0 高6.6	B少+W+W'	明赤褐	100	№10。器壁厚い。体部外面丁寧なヘラケズリ。

30	坏	□13.0 高6.3	B+R少+W少	におい燈	100	№21. 口縁部と体部の境目強いヘラアテ。
31	坏	□13.2 高5.8	B+W'	明赤褐	100	№1. 貯蔵穴。口縁部と体部の境目ヘラアテ。
32	坏	□12.8 高6.0	B+R+W少	灰黄褐～黒褐	70	№18. 口縁端部面取り。
33	坏	□(13.6) 高4.9	B+R多+W	橙	20	口縁端部面取り。体部外面ヘラケズリ。
34	坏	□13.6 高5.2	B+R少+W+W' 少	明赤褐～灰褐	80	№22. 口縁部と体部の境目ヘラアテ。
35	坏	□13.2 高6.0	B+R少+W	明赤褐	100	№11. 器壁厚い。
36	坏	□12.0 高6.6	B+R少+W+W'	赤褐～暗赤褐	95	№23. 口縁端部ヘラアテ。体部外面ヘラケズリ後、上位ナデ。
37	坏	□14.4 高6.4	B+R+W+W' 少	におい燈	95	№2 貯蔵穴。口縁端部面取り。風化。
38	坏	□14.4 高6.8	B+R少+W+W'	明赤褐～黒褐	100	№4・14・21 貯蔵穴。風化。
39	坏	□18.4 高5.8	B+R少+W+W'	暗赤褐	70	口縁端部ヘラアテ。風化。
40	坏	□(18.0) 高(7.0)	R+W少	橙	10	口縁端部面取り。体部外面風化。
41	坏	□(18.8)	B+R+W少	明赤褐	口縁 40	口縁端部面取り。風化。
42	坏	□(12.0)	B+W	におい燈～黒褐	25	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
43	坏	□(11.0) 高3.6	B+W多+W'	におい黄褐	60	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
44	坏	□(12.0) 高(3.7)	B+R+W	橙	10	口縁端部弱い面取り。口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。
45	坏	□(12.0) 高4.2	B+W少	橙	45	内面放射状増文。
46	坏	□(11.0) 高2.8	B+W少+W' 少	橙	25	口縁ナデ。体部外面ヘラケズリ。
47	坏	□10.8 高3.1	B+W+W' 少	橙	70	体部外面ヘラケズリ。風化。
48	坏	□(12.4) 高(6.2)	B+R少+W	明赤褐	25	体部外面ヘラケズリ。風化顯著。
49	坏	□6.0 高3.6	B多+R+W	明赤褐	100	小型品。口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
50	坏	□(11.0) 高(5.9) 肩(13.4)	B+W少	橙	10	№18. 口縁端部面取り。口縁部と体部との境目強いヘラアテ。
51	碗	□(18.0)	B+砂少	灰白	10	口縁端部ヘラアナ面取り。体部外面ヘラケズリ。
52	坏	□(7.4) 高4.7 肩(10.2)	B+W+W' 少	橙	20	口縁部付近直径4mm程の穿孔。
53	小型壺	□(7.5) 底3.0 高6.0 肩7.9	B+W+W'	明赤褐	80	№14. 口縁部ナデ。肩部外面ヘラケズリ後ナデ。底部外面一方のヘラケズリ
54	碗	□(14.0)	R少+W	橙	口縁 25	口縁部～体部内面ナデ。体部外面にヘラアテ。
55	小型壺	□12.2 高9.2	B+W少	橙	65	№5. 口縁部ナデ。肩部外面ヘラケズリ。
56	鉢	□(17.0)	B+R少+W少	(内)黒 (外)におい黄橙	20	口縁端部ヘラアテ沈線。体部内面ミガキ
57	小型壺	肩14.1	B+R少+W少	橙	肩部 100	№12. 肩部外面上半ヘラケズリ後ナデ。
58	小型壺	底(5.6)	B+R+W少	橙	底部 50	肩部内面ヘラナデ。底部外面一方のヘラケズリ。
59	鉢	□(18.0)	B+W+砂少	橙～褐灰	口縁 20	口縁部空んでいる。胎土に気泡が点在風化顯著。

60	鉢	底(7.0)	W多+砂	橙〜褐灰	底部 50	粘土に気泡混在。風化著しく調査不明。
61	小型壺	口(13.0)	B+W' 少	(内)黒褐 (外)橙	口縁 25	口縁部ナデ。胴部内面ヘラナデ。
62	小型壺	口(16.0)	B+W' 少	浅黄橙	口縁 20	胴部内面ミガキ。
63	壺	口(18.0)	B+W' 砂多	赤褐	口縁 25	口縁端部面取り。胴部内面ヘラナデ。風化。
64	壺	口(19.0)	B+W' 少+W' + 砂少	浅黄橙	口縁 25	口縁端部ヘラアテ面取り。風化。
65	壺	口20.4	B+R' 少+W' 多+W'	明赤褐	口縁 25	口縁端部ヘラアテ。粘土中の含有物量多い。
66	鉢	口(20.0)	B+W' +W' 砂多	明赤褐	口縁 25	体部内面輪縁み度。
67	小型壺	口(19.0)	B' 少+W' +W'	明赤褐	口縁 25	胴部外面風化著しく調査不明瞭。
68	壺	口(15.0)	B+R' 少+W' 少+W' 少	浅黄橙	口縁 40	口縁端部面取り。胴部外面風化著しくケズリ不明瞭。
69	壺	口(20.0)	R' 少+W' + 砂多	橙	口縁 25	貯蔵穴。口縁端部ヘラアテ面取り。
70	壺	底(8.0)	R' 少+W' +W'	(内)灰黄褐 (外)橙	底部 25	胴部外面ヘラケズリ。風化顯著。
71	壺	底(6.0)	R+W' +W'	橙	底部 30	風化著しく調査不明。
72	瓶	口24.8 底9.8 高27.1	B+R' 少+W' +W'	明赤褐	100	No.3 貯蔵穴。蓋埋深い。口縁端部面取り。口縁部外面ナデ後、横方向のヘラケズリ。
73	瓶	底(12.0)	B+W' 砂多	橙	底部 10	胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。底部面取り。
74	支脚	上端5.0 下端11.2 高13.3	B多+W' +W' + 砂	橙	100	No.5。外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ粘土中の含有物量多い。
75	支脚	下端(10.0)	B+W'	にぶい橙	脚部 30	内面ヘラ調整。外面ヘラケズリ後ナデ裾部輪縁み度。風化。



第751図 第230号住居跡貯蔵穴



第231号住居跡

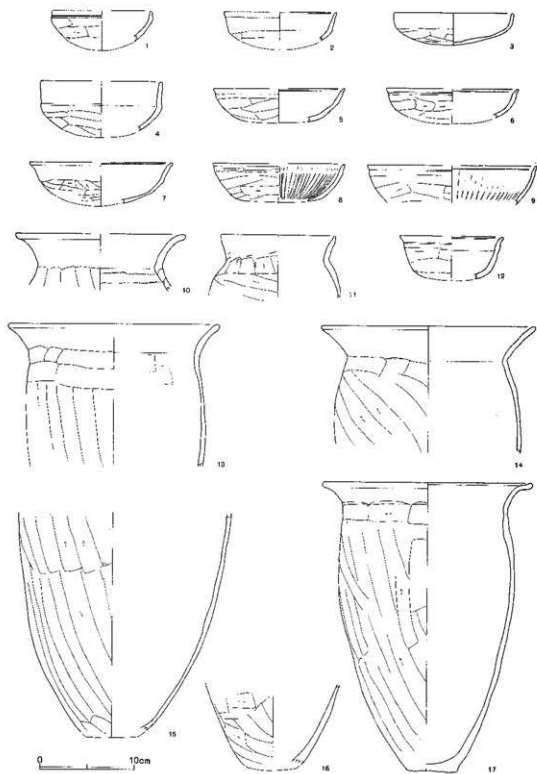
1. 暗褐色土 炭化物を少量含む、黄土小ブロックを多めに含む。
2. 褐色土 黄土小ブロックが少なくなり、炭化物が多くなる。
3. 暗黄褐色土 黄褐色土ブロックを多く含む、粘性・しまり強い。
4. 黒褐色土 焼土粒子・炭化物を少量含む、壁土への切り込み。

第231号住居跡カマド

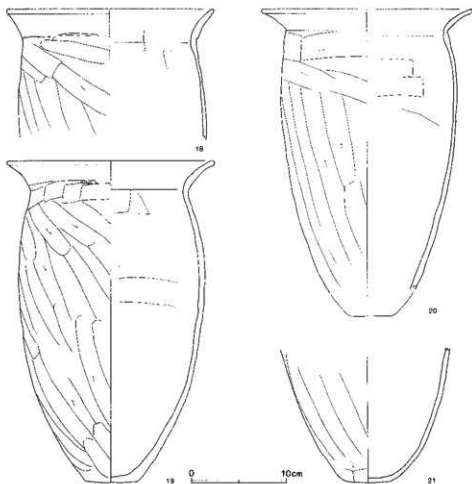
- A. 茶褐色土 炭褐色土粒子（径1mm以下）を少量、白色微粒子（径1mm以下）を全体的に多量に含む。焼土粒子をまばらに含む。
- D. 黒褐色土 黄褐色土粒子（径1～3mm）を少量、焼土粒子をまばらに含む。

- C. 暗茶褐色土 黄褐色土粒子および焼土粒子（径2～3mm）を多く含む。
- D. 黄褐色土 黄褐色土ブロック（径1～2cm）を基本に茶褐色土を少量含む。
- E. 赤褐色土 黄褐色土ブロック（径1～3cm）を基本に焼土ブロック（径5mm～1cm）を多量に含む。
- F. 暗茶褐色土 基本的に3層と同じだが、黄褐色土粒子（径2～3mm）と焼土粒子をより多く含む。
- G. 暗赤褐色土 焼土を基本に黄褐色土粒子（径3～5mm）をまばらに含む。
- H. 暗黄褐色土 黄褐色土ブロック（径5mm～1cm）を多量に含み、焼土・炭化物粒子を多く含む。

第752図 第231号住居跡



第753图 第231号住居跡出土遺物(1)



第754図 第231号住居跡出土遺物(2)

第231号住居跡 (第752図)

ぬ・る—448・449Gridに位置する。第230号住居跡・第78号土坑を切り、第19号溝に切られる。規模は長軸5.5m、短軸4.2mの長方形で、主軸の傾きはN—16°—W、深さは30cmである。

カマドは北壁やや東寄りに構築され、煙道の一部が第19号溝によって切られている。袖の残りは地山の造り出しで、燃焼部は深く掘り込まれている。左袖に甕を使用しており、燃焼部にも甕が倒れた状態で出土した。ピットは4基確認されているが、柱穴と断定できるものは見当たらない。この他に、床を掘り込んだ土坑が2基検出された。少なくとも1基は覆土を切っており、新しいものであることが判明している。壁溝はきれいに全周する。幅30cm以下、深さは9cmほどである。

出土遺物の量は多くはないが、甕の残りがよい。カマド袖、カマド内、床面直上から出土している。土器以外にはピット1内から土製紡錘車の破片が、覆土から土玉1・砥石片1・編物石1が出土している。

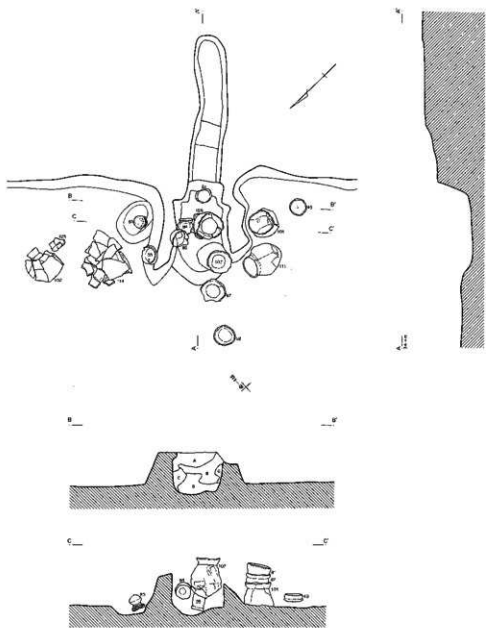
第231号住居跡 (第753・754図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口(10.6)	B+R+W少+W'	(内)黒 (外)橙	20	口縁部と体部の境目ヘラアテ。
2	坏	口(12.0)	B+W	橙	口縁 10	口縁端部ヘラアテ。風化顯著。
3	坏	口12.6 高3.4	B+W+W' 少	におい橙	80	№8。体部外面風化著しくケズリ不連続。
4	坏	口(13.0)	B+W	橙	口縁 20	口縁端部削取り。
5	坏	口(14.0)	B+W少	橙～黒	口縁 25	口縁端部強いヘラアテ沈線。内面縦文痕。
6	坏	口(14.0)	B+W+W' 少	橙	口縁 20	口縁端部ヘラアテ。内面縦文痕。
7	坏	口(15.4)	B+W+W' 少	(内)黒 (外)におい赤褐	50	口縁端部ヘラアテ。
8	坏	口(14.0) 高(4.1)	B+W少+W' 少	(内)黒 (外)橙	25	平底。内面放射状文。
9	椀	口(18.0)	B少+W+W'	橙	口縁 20	内面縦文。
10	壺	口(18.0)	B+W少+W'	赤褐	口縁 30	胴部内面輪積み痕。
11	小型壺	口12.0	B+W少	橙	30	口縁部ナデ。胴部外面ヘラケズリ。
12	椀	口(11.0)	B+R少+W+W'	橙	30	口縁端部ヘラアテ。体部外面ヘラケズリ
13	壺	口22.4	B+W多+W'	橙	35	№4・5。胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。
14	壺	口22.6	B多+W+W'	明赤褐	35	№4～7。
15	壺 底(5.4)		B+W少	橙	40	№3～7 カマド。胴部内面風化。
16	壺 底(5.0)		B+W+W'	におい赤褐	胴部 25	№6。カマドと接合。
17	壺	口22.0 底5.2 高30.2	B+R少+W+W'	橙	65	№4・5。口縁端部ヘラアテ。胴部外面横方向のヘラケズリ。風化。
18	壺	口21.8	B少+R少+W+W'	橙	35	№1 カマド。胴部内面ヘラナデ。
19	壺	口22.0 高33.8	B+R少+W+W' 少	におい橙	80	№3 カマド。胴部外面横方向のヘラケズリ。
20	壺	口(22.6)	B+R少+W+W'	橙	80	№2 カマド。胴部内面ヘラナデ。風化。
21	壺 底5.0		B+W+W'	におい橙	30	№3 カマド。風化著しく調整不連続。

第232号住居跡 (第755・756図)

り・ぬ—447・448Gridに位置し、第223号住居跡に切られる。正方形に近い形態で、規模は長軸5.4m、短軸5.2mである。主軸の傾きはN—132°—Eで、床面までの深さは38cmである。床面には炭化物が一面に付着しており、遺物の出土状況からも、焼失家屋であった可能性がある。

カマドは東壁や南寄りに構築されている。袖は地山の造り出して、燃焼部ははっきりと掘り込まれている。主柱穴は4基検出されている。ほぼ定位置にあり、深さは40～50cm、柱痕も観察することができる。貯蔵穴は2基設けられている。貯蔵穴Aはカマドの向かって右側、東南隅にある。規模は82×65cm、深さは60cmである。貯蔵穴Bは北西隅にあり、規模は径60cm、深さ47cm、底は平らである。また、カマド対面壁よりに深い土坑が検出された。

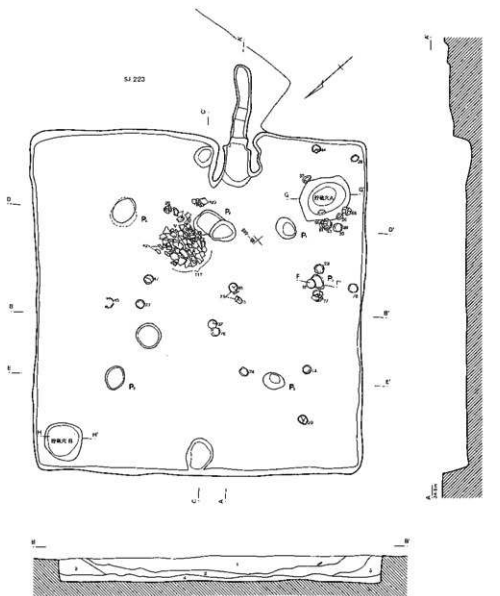


第232号住居跡カマド

- A. 茶褐色土 焼土粒子（径3～5mm）を全体的に多く含む。黄褐色土粒子（径3～5mm）を少量、炭化物粒子をわずかに含む。
- B. 橙褐色土 焼土ブロック（径5mm～2cm）を主体に、茶褐色土を少量含む。
- C. 暗茶褐色土 茶褐色土を主体に黄褐色土粒子（径3～5mm）を多く含む。焼土粒子をわずかに含む。
- D. 黄褐色土 黄褐色土を主体に暗茶褐色土を少量含む。また部分的に灰を含む。



第755図 第232号住居跡カマド

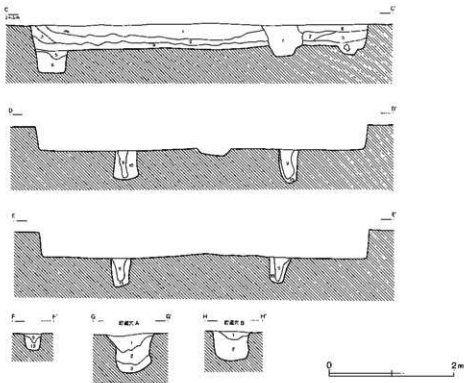


第232号住居跡

1. 黒褐色土 粘土ブロックを少量含む、炭化物を多く含む。
2. 暗黄褐色土 黄褐色土ブロックを多く含む、1層より大形の炭化物を多く含む。
3. 暗褐色土 基本は2層と同じだが黄褐色土ブロックはあまり含まない。
4. 褐色土 床面に炭化物が多く付着しており、人為的な堆積土である。黄褐色土ブロック・粘土ブロックを少量含む。
5. 黒褐色土 粘性の強い土で、炭化物を少量含む。
6. 黄褐色土 褐色土ブロックを含み、しまり・粘性ともに強い。
7. 黒色土 層上への盛り込みの所で、第234号住居跡の層土が切れる。炭化物・黄褐色土ブロックを多量に含む。
8. 暗褐色土 黄褐色土小ブロックを含み、炭化物・粘土粒子を少量含む。
9. 暗褐色土 大形の炭化材を含み、黄褐色土ブロックを多く含む。しまりは強いが粘性に欠ける。
10. 黄褐色土 さめ細かく、少量の炭化物を含む。しまり・粘性に富む。

0 2m

第756図 第232号住居跡



第232号住居跡貯蔵穴A

1. 暗褐色土 黄褐色土ブロックを多量に含み、大形の炭化材を多く含む。
2. 暗褐色土 1層と類似するがブロックの粒が小さくなり、炭化材をほとんど含まない。
3. 黄褐色土 黄褐色土ブロックを少量含む、粘性・しまりともに強い。

第232号住居跡貯蔵穴B

1. 暗褐色土 焼土ブロックと炭化材を多く含む。
2. 暗褐色土 褐色土ブロックを多量に、炭化物を少量含む。

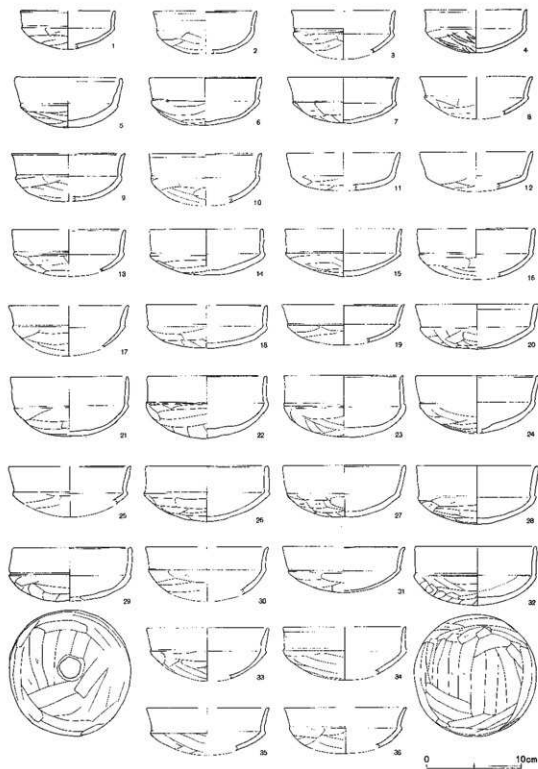
出土物はたいへん豊富である。床面直上・カマド・及び覆土から多数の完形品が出土しており、その状況も往時をしのぼせる状態を保っている。破片の接合率もたいへん良好であった。

カマドの燃烧部には支脚(95)の上に甕(107)が置かれ、右袖外側には甕(101) + 小型甕(87) + 甕(91)の順に重ねてある。左袖付近からは須恵器の甕(80)が落下したように逆位で出土した。貯蔵穴Aには完形の坏が数点出土しているが、貯蔵穴Bからは良好な土器の出土はない。床面直上からも完形品、特に坏の出土が多い。カマド手前の床面からは大甕(117)が押しつぶされたように破片となって出土していた。

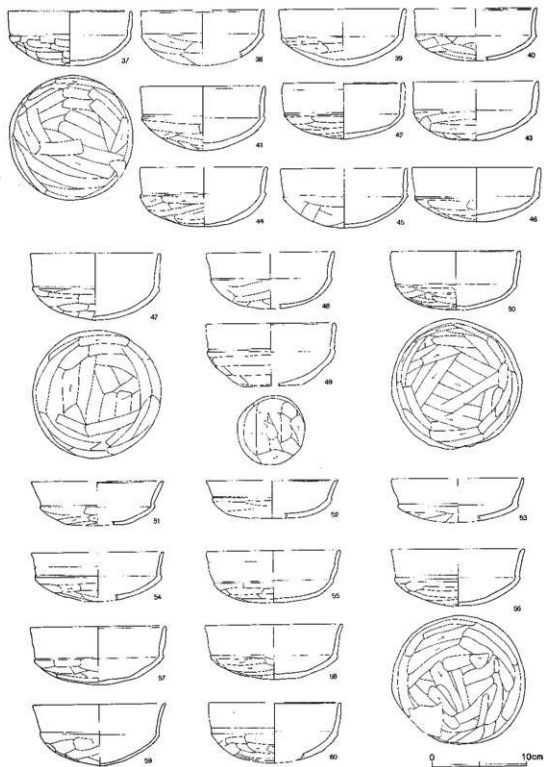
注目すべき遺物としては、焼成時の焼けむらの残る土師器(32・77)や、内斜口縁で内面上半部に一方方向の暗文を施す群馬産系の椀(75)などがある。本住居跡の土師器を対象にして胎土分析を行っているので巻末の附篇を参照されたい。また、カマド袖から出土した須恵器甕は6世紀初頭に属するものと推定される。土器以外には滑石製白玉2・砥石1・土玉3が出土している。

第233号住居跡(第764図)

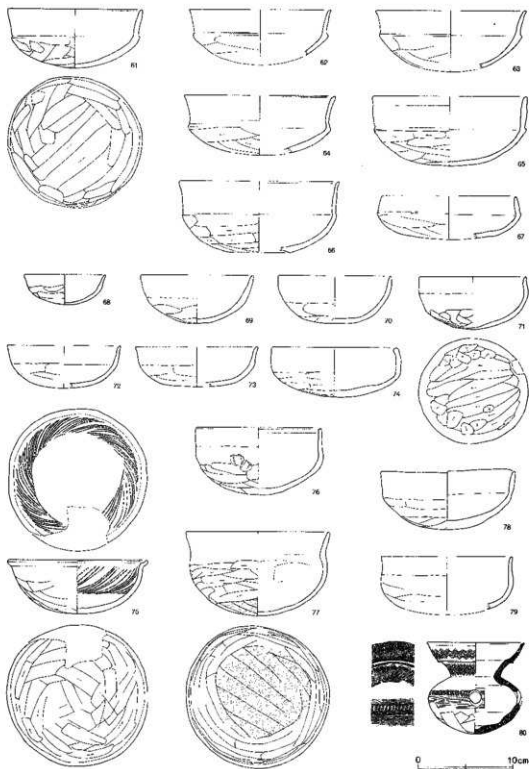
り・ぬ—447・448Gridに位置し、第232号住居跡を切る。プランは不明瞭であるが、規模は長軸5.1m、短軸3.0mの長方形を呈すると思われる。東壁に突出した部分があり、カマドの可能性があ



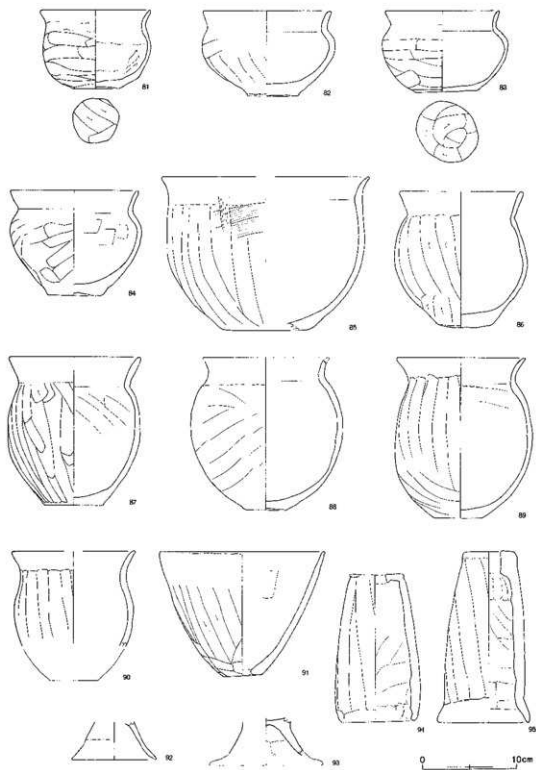
第757图 第232号住居跡出土遺物(1)



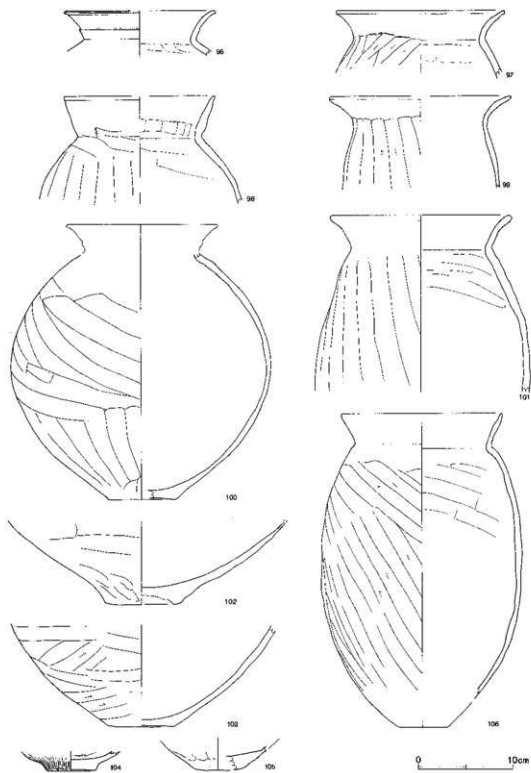
第758图 第232号住居跡出土遺物(2)



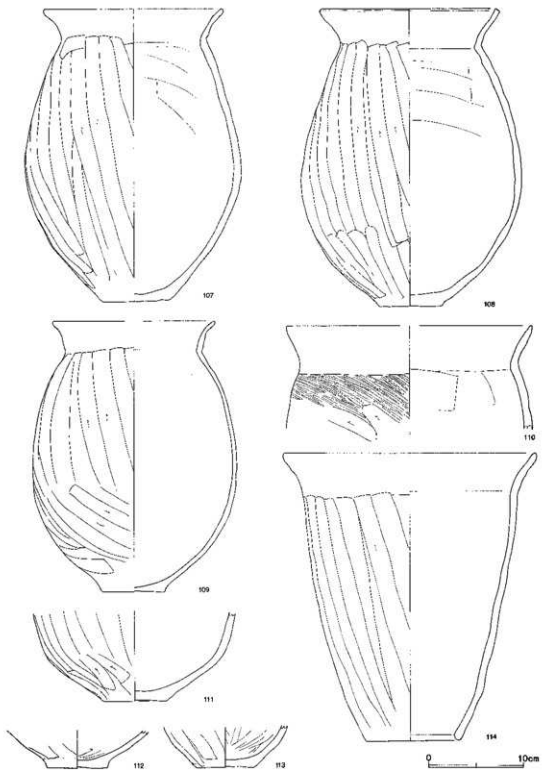
第759图 第232号住居跡出土遺物(3)



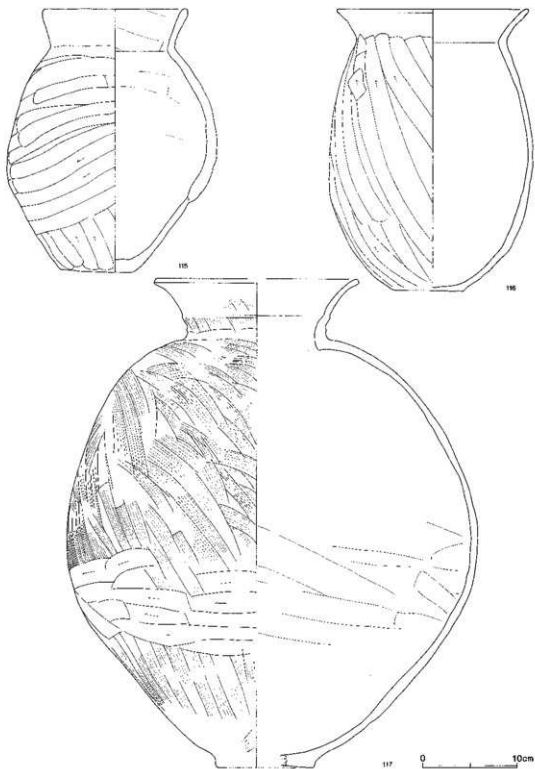
第760图 第232号伴居跡出土遺物(4)



第761图 第232号住居跡出土遺物(5)



第762図 第232号住居跡出土遺物(6)



第763图 第232号住居跡出土遺物(7)

第232号住居跡(第757~763号)

No.	番 種	大きさ(cm)	給 土	色 調	残存率(%)	備 考
1	坏	□(10.0) 高(4.1)	B+R+W少	橙	25	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
2	坏	□(11.0) 高(4.5)	B+R少+W+W'	橙～褐灰	30	口縁端部ヘラアテ面取り。風化。
3	坏	□(11.0)	B+W	橙	20	口縁端部ヘラアテ。口縁部と体部の境目ヘラアテ。
4	坏	□(10.8) 高4.5	B+R少+W	明赤褐	25	体部外面ヘラケズリ後、非常に細かいハケ状工具によって再度ケズル。
5	坏	□11.2 高5.2	B多+W+W'	橙	100	No.3。口縁部～体部内面ナデ。外面風化著しいが、内面残り良好。
6	坏	□12.0 高5.0	B+W+W'	橙	85	口縁端部ヘラアテ面取り。口縁部と体部の境目ヘラアテ。給土分析資料。
7	坏	□11.8 高4.8	B多+W+W'	にふい橙～黒	70	口縁端部面取り。口縁部と体部の境目ヘラアテ。
8	坏	□(12.0)	B+W少	橙	25	口縁端部面取り。風化著しく調整不明確。
9	坏	□(12.0) 高(5.0)	B+W少+W'	褐灰	20	口縁端部ヘラアテ。体部外面ヘラケズリ
10	坏	□(12.0)	B+W	橙	25	口縁端部ヘラアテ面取り。風化。
11	坏	□(12.0) 高(4.0)	W	褐～黒褐	25	風化により調整不明確。
12	坏	□(12.0)	B少+W+W'	橙～黒	30	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
13	坏	□(12.0)	B+W+W'	橙	25	口縁端部面取り。
14	坏	□12.0 高4.8	B+R+W+W'	にふい橙～黒褐	100	No.3。風化調整。給土分析資料。
15	坏	□(12.4) 高5.0	B+R+W	橙～黒褐	60	体部外面ヘラケズリ。風化調整。
16	坏	□(12.4) 高(5.3)	B少+R+W	明赤褐～暗赤褐	60	口縁端部弱い面取り。風化。
17	坏	□(12.7)	B+R+W	にふい橙～黒褐	60	体部外面風化によりケズリ不明確。
18	坏	□(12.8) 高4.5	W	橙	15	口縁端部面取り。風化。
19	坏	□(13.0)	B少+W	にふい赤褐	口縁 20	口縁端部ヘラアテ面取り。体部外面ヘラケズリ。
20	坏	□13.0 高4.7	B+W	橙	100	No.25。口縁端部厚い。口縁部～体部内面ナデ。外面風化。給土分析資料。
21	坏	□10.4 高0.2	B+R+W	明赤褐	80	口縁部～体部外面ナデ。体部外面風化によりケズリ不明確。
22	坏	□12.8 高0.6	B+R少+W+W'	赤褐～黒	95	口縁端部ヘラアテ面取り。口縁部と体部の境目ヘラアテ。
23	坏	□12.6 高0.5	B多+W+W'	明赤褐	95	No.13。口縁端部ヘラアテ面取り。口縁部と体部の境目、数面ヘラアテ。給土分析資料。
24	坏	□13.0 高(6.1)	B+R少+W+W'	橙～褐灰	85	No.48。口縁端部面取り。風化調整。
25	坏	□(13.0)	B+W	褐	口縁 20	口縁端部ヘラアテ。風化により調整不明確。
26	坏	□13.0 高5.9	B+R少+W多+W'	橙	100	No.18。口縁端部面取り。風化調整。
27	坏	□13.0 高6.4	B+W+W'	橙	100	No.2。口縁端部面取り。
28	坏	□12.9 高0.1	B多+W+W' 少	明赤褐	100	No.20。口縁部～体部内面ナデ。器面状態良好。
29	坏	□12.0 高5.6	B+R+W	橙～黒褐	100	No.10。口縁端部ヘラアテ面取り。体部中央に径2.8cm程の穿孔(意匠的なものか?)。給土分析資料。
30	坏	□(13.0)	B+W	明赤褐	20	口縁端部弱いヘラアテ。

31	环	□(13.0) 高4.8	B+W	にふい橙	60	口縁部ヘラアテ面取り。
32	环	□12.4 高8.2	B+W+W'	暗赤褐～にふい橙	100	No.22。内外面に円形の焼きせら痕。
33	环	□13.0 高(5.6)	B+R少+W+W'	橙	65	口縁部～体部内面ナデ。風化。
34	环	□(13.0)	B+W+W'	橙	30	風化著しく調査不明。
35	环	□(13.0)	B+W	橙	20	口縁部面取り。
36	环	□(13.0)	B少+R+W	橙	口縁 20	口縁部非常に割いヘラアテ。
37	环	□13.2 高5.8	B+R+W少	橙	100	No.4。口縁部面取り。体部外面丁寧なヘラケズリ。胎土分析資料。
38	环	□(13.0)	B+W多+W'	橙	口縁 20	口縁部面取り。
39	环	□13.4 高8.0	B+W+W'	明赤褐～赤黒	100	No.17。口縁部～体部内面ナデ。器面状態良好。
40	环	□(13.0) 高(5.5)	B+W+W'	にふい褐～黒	25	口縁部ヘラアテ。
41	环	□13.2 高8.8	B+R+W+W' 少	橙	95	貯蔵穴。口縁部面取り。口縁部と体部の境目ヘラアテ。風化。
42	环	□(12.8) 高5.9	B+W少	橙	70	No.24。口縁部ヘラアテ面取り。風化。
43	环	□13.2 高8.2	B+R+W	橙	85	No.15。口縁部～体部内面ナデ。口縁部と体部の境目ヘラアテ。
44	环	□(13.4) 高8.2	B+R少+W+W'	赤褐	70	No.21。器壁やや厚い。
45	环	□(13.4) 高8.2	B+W	橙～黒	60	No.1。体部外面風化によりケズリ不明瞭。
46	环	□13.6 高5.7	B+R少+W多+W' 多	明赤褐	100	貯蔵穴。口縁部～体部内面ナデ。
47	环	□13.6 高7.0	B少+R少+W+W'	にふい赤褐～黒褐	100	No.3。口縁部～体部内面ナデ。胎土分析資料。
48	环	□(13.6) 高(5.9)	B+R多+W	橙	35	口縁部面取り。口縁部～体部内面ヘラケズリ。風化。
49	环	□13.8 底5.4 高6.6	B少+R少+W	にふい橙～褐灰	100	No.43。口縁部面取り。底部外面ヘラケズリ。平底。
50	环	□13.6 高8.2	B多+W	明赤褐～赤黒	100	No.17。口縁部ヘラアテ面取り。体部外面丁寧なヘラケズリ。
51	环	□(14.0) 高(4.8)	B少+W+W'	にふい褐	25	口縁部ヘラアテ面取り。
52	环	□(14.0) 高(4.0)	B+W	橙	10	口縁部ヘラアテ面取り。風化により調整不詳。
53	环	□(14.0)	B+R+W	橙	25	風化により調整不明瞭。
54	环	□(14.0) 高(5.1)	B+W+W'	橙	25	口縁部と体部の境目にヘラアテ。
55	环	□14.2 高5.4	B+R少+W	橙	100	No.34。口縁部～体部内面ナデ。風化。
56	环	□14.1 高8.0	B+W少+W' 少	橙～黒褐	95	No.16。体部外面丁寧なヘラケズリ。胎土分析資料。
57	环	□14.4 高8.1	B少+R少+W+W'	橙	100	No.12。口縁部面取り。口縁部～体部内面ナデ。
58	环	□14.6 高5.8	B+R少+W+W' 多	明赤褐～黒褐	100	No.41。口縁部～体部内面ナデ。
59	环	□14.0 高8.5	B+W+W' 少	明赤褐	95	風化著者。胎土分析資料。
60	环	□(14.0) 高(6.3)	B+R少+W少	明赤褐～にふい黄橙	50	口縁部ヘラアテ面取り。口縁部～体部内面ナデ。
61	环	□14.2 高6.2	B少+R少+W	明赤褐～橙	85	No.15。口縁部面取り。口縁部～体部外面ナデ。
62	环	□(15.0)	B+W+W'	橙	口縁 30	体部外面風化による器面剥落が激しい。

63	环	□(16.0)	B+R+W	にふい橙	35	体部外面風化によりケズリ不明瞭。
64	环	□(16.0) 高(6.3)	B+W+W'	橙	15	口縁端部ヘラテ面取り。
65	环	□(16.4) 高7.4	B+R+W'少	橙	50	No.7. 口縁部～体部内面ナデ。風化。
66	环	□(17.0) 高7.5	B+R+W+W'	にふい赤褐～黒褐	45	No.19. 口縁端部面取り。底部外面ヘラケズリ。凹み底。 体部外面風化によりケズリ不明瞭。
67	环	□(14.0)	B+W+W'	橙	25	
68	环	□8.6 高3.2	B'少+R+W	明赤褐	55	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。やや小型。 風化著しく器底凸凹している。
69	环	□(12.0) 高5.1	B'多+W	橙	45	
70	环	□(12.0)	W+W'	にふい赤褐	30	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
71	环	□11.4 高6.5	B'少+R'少+W+W'	明赤褐	95	口縁部ナデ。体部外面細いヘラケズリ
72	环	□(12.0) 高(4.5)	B'少+R'少+W+W'	橙	30	風化著しく調整不明瞭。
73	环	□(13.0) 高(4.2)	B+W'多+W'	橙～灰褐	30	風化著しく調整不明瞭。
74	环	□17.2 高5.2	B+R'少+W+W'	橙	100	No.8. 口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
75	柄	□15.0 高5.7	B+R'少+W	明赤褐	85	No.1・7・23. 口縁端部ヘラテ。内面上半部削文。胎土分析資料。
76	柄	□13.2 高7.0	B+W+W' 少	明赤褐	95	No.5. 口縁端部ヘラテ面取り。体部外面削落した面にケズリ痕。風化。
77	柄	□15.2 高8.8	B+R+W'少	明赤褐～赤黒	100	No.11. 体部外面焼きむら。
78	柄	□14.0 高6.1	B+W+W' 少	橙	100	No.14. 口縁部～体部内面ナデ。歪んでいる。
79	柄	□(14.0)	B+R+W+W' 少	橙	口縁 20	体部外面風化によりケズリ不明瞭。
80	はそう	□10.2 高9.7	B+W	灰	100	No.35. 口縁部・胴部外面7～8本工具による波状文。胴部中心位7～8本工具押しあて後、その下部カキ目。底部ロク口磨鉢ヘラケズリ。胴部外面・口縁部内面自然剥付着。 No.37. 内外面に輪痕み痕。底部外面ヘラケズリ。凹み底。 No.29. 体部外面風化著しくケズリ不明瞭。
81	鉢	□11.8 高8.3	B+R'少+W	明赤褐	85	底部外面ヘラケズリ。平底。胎土分析資料。
82	鉢	□13.6 底5.3 高9.0	B'多+W+W'	にふい橙～灰赤	95	No.20. 体部外面風化著しくケズリ不明瞭。
83	鉢	□12.0 底7.4 高8.5	B+W+W' 少	明赤褐	95	底部外面ヘラケズリ。平底。胎土分析資料。
84	鉢	□13.6 底5.6 高11.1	B+R'少+W	橙	100	No.47. 胴部内面ヘラナデ。凹み底。
85	鉢	□(22.0) 高16.2	B+R+W	橙	30	体部外面ヘラケズリ。一部ハケメ痕。
86	小型壺	□(13.0) 底5.8 高14.3	B+W+砂	明赤褐	60	No.36. 底部外面一方のヘラケズリ風化。胎土分析資料。
87	小型壺	□24.0 底6.3 高15.8	B+R+W	橙	95	No.46. 胴部内面ヘラナデ。底部外面一方のヘラケズリ。胎土分析資料。
88	小型壺	底(4.4)	B+R+W	橙	40	胴部外面風化によりケズリ不明瞭。口縁端部欠損。
89	小型壺	□13.6 底(5.0) 高16.9	B+W'多+W'	明赤褐	45	胴部内面ヘラナデ。風化。胎土分析資料
90	小型壺	□(13.0)	B+R+W+W'	橙	口縁 30	口縁部ナデ。胴部外面ヘラケズリ。風化
91	甌	□17.6 底4.0 高13.0	B+W	明赤褐	100	No.44. 口縁部ナデ。端部つまみ上げ 胴部内面ヘラナデ。胎土分析資料。
92	台付环	脚9.0	B'多+W+W'	橙	脚部 30	脚部内外面ナデ。
93	台付环	脚基部5.0	B+W	橙	脚部 60	脚部外面ナデ。

94	支脚	上端(5.7) 下端7.8 高15.5 孔(2.0)	B+W	橙	70	外面指いヘラケズリ後ナデ。内面ナデつけ。
95	支脚	上端5.6 下端9.8 高18.0 孔2.5	B多+W+W'	橙	100	№48。外面ヘラケズリ。内面上部オサエ。窟内外面ナデ。
96	壺	口(16.0)	B少+R少+W+W'	橙	口縁 25	口縁部内面ヘラアテ。口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。
97	壺	口19.8	B+W+W'	橙～灰褐	口縁 100	№40。胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。
98	壺	口(16.0)	B+W多+W'	にふい橙～黒	口縁 70	口縁部内面ヘラナデ。胴部外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。風化。
99	壺	口(19.2)	B少+W少多	にふい橙～灰褐	口縁 50	口縁部ナデ。胴部外面ヘラケズリ。
100	壺	底(7.0) 胴(27.4)	B+R+W	橙	胴部 40	カマド。胴部外面ヘラケズリ。
101	壺	口21.2	B+R+W+砂多	赤褐	40	№46。胴部内面ヘラナデ。
102	壺	底7.8	B+R+W少	にふい橙～黒褐	胴部下半 80	№21・31・32。胴部外面風化によりケズリ不明瞭。
103	壺	底7.0	B+R少+W多+W'	にふい橙～黒褐	胴部下半 70	底部外面一方のヘラケズリ。
104	壺	底5.4	B少+W+W'	灰褐	底部 100	胴部外面ヘラミガキ。底部外面一方のヘラミガキ。
105	壺	底(5.0)	B少+R+W	黒褐	底部 80	№32。風化により調様不明瞭。
106	壺	口17.0 胴21.0	B多+W'	にふい橙～黒褐	75	胴部内面ヘラナデ。風化。
107	壺	口19.0 底7.0 高30.8 胴22.8	B+R+W+砂	赤褐	100	№39。体部内面ヘラナデ。底部外面一方のヘラケズリ。
108	壺	口18.6 底6.6 高31.3 胴部23.2	B+W+砂多	明赤褐	95	№38。口縁部ヘラアテ面取り。胴部内面ヘラナデ。底部外面ほぼ一方のヘラケズリ。粘土分析資料。
109	壺	口(17.0) 底5.4 高28.5	B多+W	橙	30	№27。底部外面ナデ。口縁部～胴部上半と底部接点なし。
110	壺	口(26.0)	B+W	明赤褐	口縁 20	胴部外面ヘラミガキ。胴部内面ヘラナデ
111	壺	底(6.6)	B+R+W+W' 少	明赤褐	底部 50	カマド。胴部外面ヘラケズリ。底部外面一方のヘラケズリ。
112	壺		B少+W+W'	にふい橙	底部 100	底部外面一方のヘラケズリ。風化。
113	壺	底6.0	B+W	橙	底部 100	胴部内面ヘラナデ。底部外面一方のヘラケズリ。
114	甌	口26.6 底9.9 高30.2	B+R+W少	にふい橙～黒褐	90	№33。口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。粘土分析資料。
115	壺	口15.0 底7.8 高27.7 胴22.1	B+W多+W'	にふい橙	100	№42。唇部深く歪んでいる。口縁部内面方向のナデ。粘土分析資料。
116	壺	口20.2 底7.3 高29.6 胴21.5	B+R少+W+W'	橙～褐	85	底部一方のヘラケズリ。粘土分析資料
117	壺	口(21.2) 底(10.5) 高51.5 胴43.5	B+R+W+W'	にふい橙～褐灰	75	№30。P-6。口縁部面取り。口縁部外面ハケム後ナデ。胴部外面ハケム後、中位ヘラケズリ。粘土分析資料。

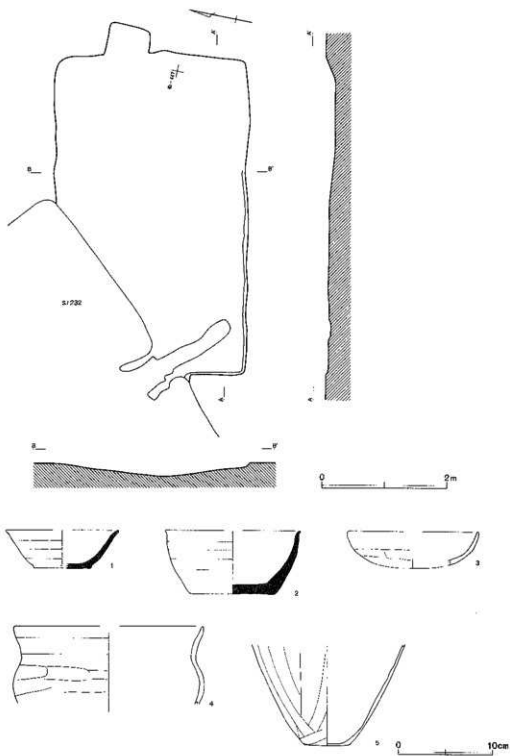
る。柱穴等の施設は検出されなかった。

出土遺物は少なく、すべて破片である。

第234号住居跡（第766図）

ち・り—446・447Gridに位置する。第235・236・237号の3軒の住居跡に切られており、一部を残すのみである。検出された北壁は長さ5.6m、主軸の傾きはN—13°—E、深さは24cmである。

カマドは北壁中央に構築されている。燃焼部は小さく掘り込まれており、袖は確認できなかった。壁溝は検出された範囲に限り認められる。その他の施設は確認されなかった。



第764図 第233号住居跡および出土遺物

第233号住居跡（第764図）

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口(12.0) 高4.0	W+W'+片	灰	40	体部回転ナデ。底部回転糸切り。
2	瓶	口(12.4) 底(9.0) 高8.7	W	灰	30	体部回転ナデ。底部回転糸切り。
3	坏	口(14.0)	B+W	橙	口縁 25	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。風化。
4	甕	口(20.0)	B+W+W'	橙	口縁 20	口縁部ナデ。胴部外面ヘラケズリ。
5	甕	底4.8	B+R+W'少	橙	胴部下半 25	胴部外面ヘラケズリ。

遺物はおもにカマド覆土から出土しているが、本住居跡に伴う遺物である確証はない。

第235号住居跡（第766図）

ち・り—447・448Gridに位置し、第236・237号住居跡に大半が切られている。第236号住居跡の床面を精査中に、そのわずか下から床面と壁溝が検出されたものである。確認された壁溝の一辺の長さは5.5mである。

出土遺物は少なく、すべて破片である。切り合いが激しく、混入している可能性がある。

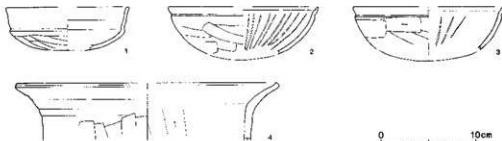
第236号住居跡（第766図）

ち・り—446・447・448Gridに位置し、第237号住居跡、第77号土坑に切られている。規模は一辺6.6×6.6mの正方形に近い形態をしている。主軸の傾きはN—9°—Eで、床面までの深さは24cmである。

SJ 234



SJ 235



第765図 第234・235号住居跡出土遺物

第234号住居跡 (第765図)

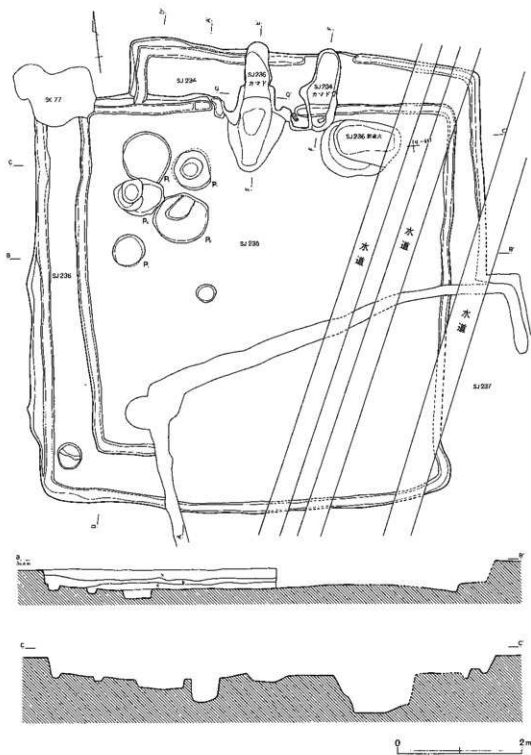
No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	埴	口(8.8) 底(3.2) 高5.5	B+R+W	浅黄橙	40	カマド。内面口縁部～肩部ハケメ。肩部外面ハケメ。外面体部～底部ヘラケズリ
2	小型壺	口(7.6) 底(4.5) 高6.0	B+R+W	(内)黒褐 (外)にふい橙	40	Ⅲ1。胴部外面ヘラケズリ後ナデ。凹み底。重んでいる。
3	甕	口(15.0)	B+R少+W	橙	口縁 20	カマド。胴部外面ハケメ。

第235号住居跡 (第765図)

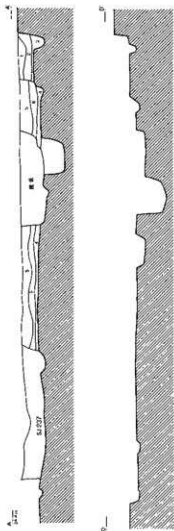
No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口(13.0) 高(4.5)	R+W	橙	15	口縁端部ヘラアテ面取り。
2	柄	口(16.0)	B+W	橙	20	口縁端部ヘラアテ。口縁部と体部の境目ヘラアテ。内面暗文。
3	柄	口(18.0)	B+R+W	橙	25	口縁端部ヘラアテ。口縁部と体部の境目強いヘラアテ。内面暗文取。
4	甕	口(28.0)	B+R+W	浅黄橙	口縁 15	口縁端部ヘラアテ面取り。胴部内面ヘラナデ。

第236号住居跡 (第767図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口11.0 高3.2	B+R+W	橙	95	口縁部～体部内面ナデ。
2	坏	口12.0 高4.2	B+R+W+W'	橙	70	口縁部～体部内面ナデ。
3	坏	口(14.0)	B+R+W	橙	25	口縁端部ヘラアテ。内面不規則な暗文。
4	坏	口(13.0) 高5.5	B+R+W	橙～黒	30	口縁部～体部内面ナデ。
5	坏	口14.2 高3.5	B+W+W'	橙～黒	55	内面暗文。
6	皿	口17.2 高3.4	B+R+W	橙	100	口縁端部ヘラアテ。口縁部～体部内面ナデ。
7	皿	口17.0 高3.2	B+W+W'	橙	35	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
8	皿	口16.0 高3.3	B+W	明赤褐	40	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
9	皿	口(16.6)	B多+W	橙～黒	30	口縁端部ヘラアテ。口縁部～体部内面ナデ。
10	皿	口17.8 高3.8	B+W	橙	70	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
11	甕	口(26.0)	B+R多+W	橙	上半部 15	胴部外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。
12	支脚	上端(4.4) 孔1.6	B+W	灰白～にふい黄橙		上端部にスラグ付着。穿孔部分丁寧に調整している。
13	甕	口(22.4)	B+R+W+砂	橙	口縁 30	口縁端部強いヘラアテ。胴部内面ヘラナデ。
14	甕	口22.0	B多+R+W+W'	橙	25	貯蔵穴。胴部内面ヘラナデ。
15	甕	底(5.6)	B+W+W'	にふい橙	底部 50	貯蔵穴。胴部外面ヘラケズリ。底部外面一方向のヘラケズリ。
16	甕		B+R+W+磁	明赤褐～黒褐	胴部下半 45	風化。胎土中の含有物量多い。
17	甕	底(4.4)	B多+W+W'	橙	胴部 30	胴部外面ヘラケズリ。内面輪積み痕。
18	甕		B+R+W+W'	橙	胴部下半 40	胴部外面ヘラケズリ。
19	甕		B多+W+W'	橙	胴部 30	貯蔵穴。胴部外面ヘラケズリ。



第766图 第234・235・236号住居跡



第234号住居跡

1. 褐色土 炭化物・焼土粒子を少量含む。
2. 暗褐色土 黄褐色土粒子および炭化物・焼土粒子を多く含む。
3. 黄褐色土 炭化物を多く含む、粘性・しまりともに強い。

第235号住居跡

4. 黄褐色土 黄褐色土ブロックを多量に含む。

第236号住居跡

5. 褐色土 黄褐色土ブロックをまばらに、炭化物・焼土粒子を少量含む。
6. 暗褐色土 炭化物と灰が層状に堆積している。粘性・しまり強い。

第236号住居跡カマド

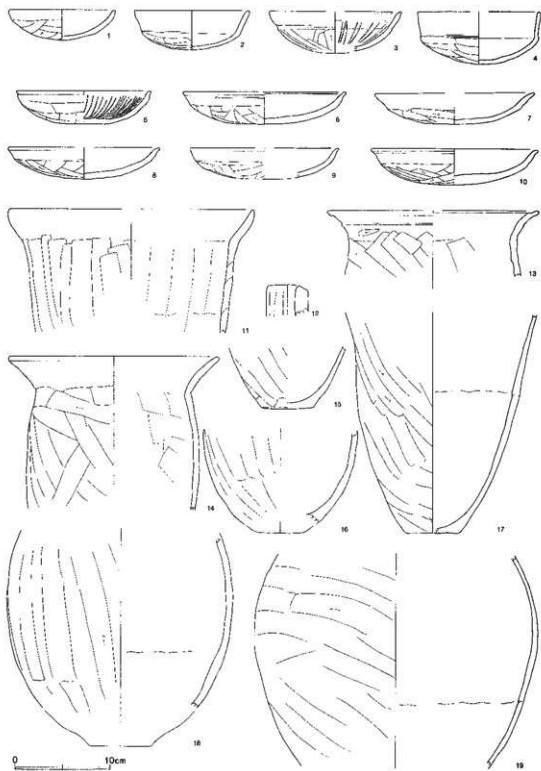
- A. 暗褐色土 焼土ブロックを少量含む。
- B. 赤褐色土 焼土粒子・ブロックを多く含む、炭化物を少量含む。
- C. 褐色土 カマド縁。
- D. 黄褐色土

カマドは北壁ほぼ中央に構築されている。軸はわずかに認められる程度で、燃焼部は浅く掘りくぼめられている。ピットは5基検出されているが、どれが本住居跡に伴うものかは不明である。壁溝は全周していたと思われる。幅は21cm、深さ9cmである。貯蔵穴はカマドの向かって右側、北東隅に設けられている。一部水道にかかっているが、全体の70%が確認された。規模は127×87cm、深さは60cmである。出土遺物はすべて覆土から出上した。やはり混入が認められるようである。

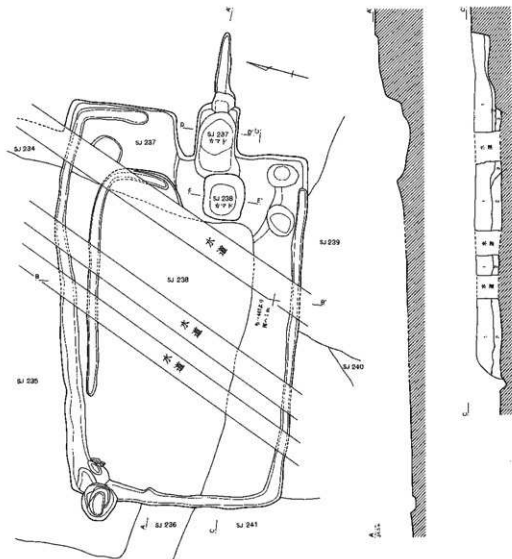
第237号住居跡（第768図）

と・ち—446・447Gridに位置し、第234～236・239・241号住居跡を切る。規模は長軸6.3m、短軸3.8mのやや歪んだ長方形を呈する。主軸の傾きはN—82°—Eである。

カマドは東壁やや南寄りに、第238号住居跡のカマドを埋めて再構築されている。また、床面は同一レベルであり、壁溝は掘り返されているため、第238号住居跡を拡張したものと考えられる。



第767图 第236号住居跡出土遺物



第237号住居跡

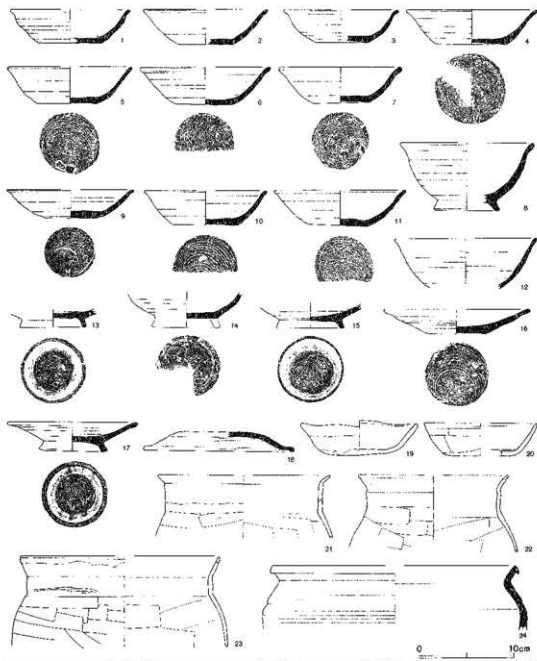
1. 黒褐色土 炭化物と灰と焼土が層状に堆積している。
2. 暗褐色土 茶褐色小ブロックを多く含み、炭化物・焼土粒子を少量含む。粘性・しまりに富む。
3. 褐色土 焼土ブロックを多量に含み、粘性・しまりが強い。

第237号住居跡カマド

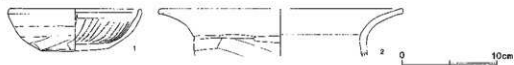
- A. 褐色土 焼土ブロックを少量含み、若干の炭化物を含む。
- B. 暗褐色土 焼土ブロック（型の高麗土）を多く含み、粘性は強いがしまりに欠ける。
- C. 茶褐色土 焼土・炭化物等を少量含み、粘性あり。
- D. 黒褐色土 炭化物・焼土・灰を多く含み、粘性は強いがしまりに欠ける。

0 2m

SJ 237



SJ 238



第769图 第237·238号住居跡出土遺物

ピットは4基確認されているが、柱穴にあたるものは見あたらない。貯蔵穴は検出されなかった。

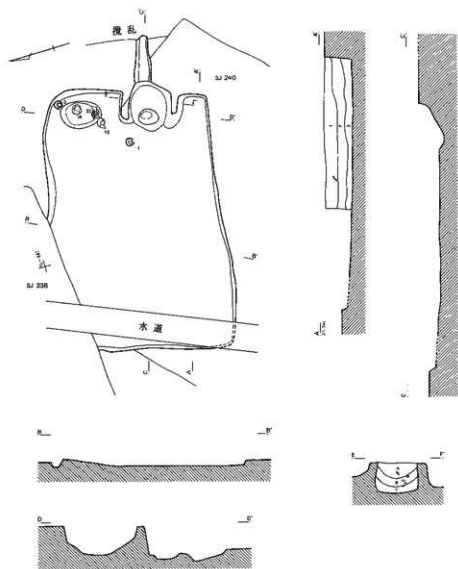
出土遺物は須臾器の割合が比較的多い。残りはあまり良好ではない。

第237号住居跡 (第769図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口(12.6) 底5.8 高3.5	V	灰	30	底部回転糸切り。
2	坏	口(13.2) 底(5.8) 高3.7	B+W多+砂	暗オリーブ灰	45	貯蔵穴。底部回転糸切り。
3	坏	口(12.2) 底(5.2) 高3.4	B少+R多+W	灰	35	底部回転糸切り。
4	坏	口14.0 底7.2 高3.6	B+W	灰	55	底部回転糸切り。
5	坏	口(13.2) 底6.3 高3.9	B多+W+W'	灰	65	底部回転糸切り。
6	坏	口(13.9) 底6.2 高3.9	B+W	灰	35	底部回転糸切り。
7	坏	口12.8 底5.9 高3.8	B+W+少量	灰	90	底部回転糸切り。
8	高台付碗	口(14.0) 高7.1 高台7.0	B+W+W'	灰	25	底部回転糸切り後、高台ナデつけ。
9	坏	口(13.5) 底5.3 高3.0	B+W+W'	灰	35	底部回転糸切り。
10	坏	口(12.8) 底(6.8) 高3.8	B+W+W'	オリーブ灰	45	底部回転糸切り。
11	坏	口(14.0) 底6.3 高3.7	B+W+W'+少量	灰白~灰	55	底部回転糸切り。
12	坏	口(15.0)	B+W	灰	40	口クロ成形。底部欠損。
13	高台付碗	高台7.0	B+W	灰~灰褐	高台部 100	底部回転糸切り後、高台ナデつけ。焼成やや不良。胎土中の含有物量多い。
14	高台付碗	底6.8	V+W'	純黒	30	底部回転糸切り後、高台ナデつけ。高台部欠損。
15	高台付碗	高台7.2	B+W	灰	高台部 100	底部回転糸切り後、高台ナデつけ。
16	皿	口(15.6) 底6.3 高2.5	B多+W+W'	灰	45	底部回転糸切り。内面に藍ね焼き痕(径7.5cm)が丸く残る。風化。
17	高台付皿	口13.8 高3.1 高台7.2		灰黄	85	底部回転糸切り後、高台ナデつけ。
18	蓋	口(16.0) 底(8.2) 高2.0	V	灰	30	天井部回転糸切り。
19	坏	口12.2 高3.3	B+W	にふい橙	85	口縁部波状にうねる。底部外面ヘラケズリ。風化。
20	坏	口(12.0) 底(7.2) 高3.4	B+W+W'	橙	25	口縁部ヘラアテ。外面底部~底部ヘラケズリ。
21	甕	口(18.2)	B+W+片	橙~にふい橙	口縁 25	カマド。口縁部外方へ屈曲する。
22	甕	口(16.0)	B+R+W	橙	口縁 25	口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。
23	甕	口(16.2)	B+W	橙~にふい橙	口縁 25	口縁部弱いヘラアテ面取り。底部外面ナデ後、一部破かいヘラナデ。
24	甕	口(26.0)	V	暗青灰	上半部 20	口縁部弱いヘラナデ。

第238号住居跡 (第769図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口14.0 底7.0 高4.4	B+W少	にふい褐	85	内面暗文。底部外面一方のヘラケズリ。
2	甕	口(26.0)	B+W	にふい黄橙~黒	口縁 15	口縁部ナデ。底部外面ヘラケズリ。



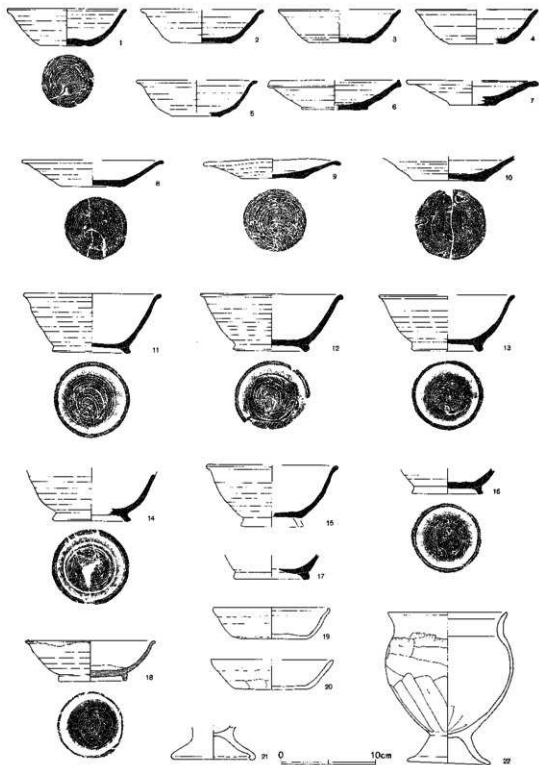
第239号住居跡

1. 褐色土 茶褐色土小ブロック・瓦子を多めに、炭化物・焼土粒子を少量含む。
2. 暗褐色土 茶褐色土はブロック状に少量含まれる。炭化物・焼土粒子は粒が大きくなる。
3. 暗褐色土 茶褐色土ブロックおよび焼土粒子・炭化物を多く含む。しまり・粘性ともに強い。

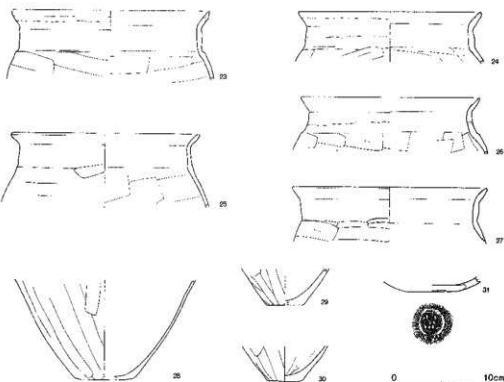
第239号住居跡カマド

- A. 褐色土 焼土粒子・炭化物を少量含む。しまりよし。
- B. 暗褐色土 焼土ブロックを多量に、炭化物・灰を少量含む。しまり弱い。
- C. 暗茶褐色土 焼土ブロック・炭化物を少量含む。しまりよし。

0 ————— 2m



第771回 第239号住居跡出土遺物(1)



第772図 第239号住居跡出土遺物(2)

第239号住居跡(第771・772図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口12.4 底5.6 高3.9	V多+W'	暗青灰	80	底部回転未切り。
2	坏	口(13.0) 底(6.4) 高3.5	V	灰	30	底部回転未切り。
3	坏	口(13.0) 底(6.4) 高3.5	V+隠	灰	15	底部回転未切り、未切りにより粘土がはみ出ている。 底部回転未切り。
4	坏	口(13.0) 底(5.8) 高(3.8)	V	灰	25	底部回転未切り。
5	坏	口(12.8) 底(5.2) 高(3.8)	V+隠	青灰	35	底部回転未切り。
6	皿	口(13.0) 底(7.0) 高2.1	V	灰	30	口縁端部強いナデ。底部回転未切り。
7	皿	口(14.0) 底(5.0) 高(2.6)	R	灰白	20	底部回転未切り。胎土中の含有物量多い
8	皿	口(15.0) 底6.4 高2.8	B+W+W'+隠少	灰	45	No.4。底部回転未切り。
9	皿	口14.4 底6.6 高1.7	V+W'	青灰	90	No.1 貯蔵穴。底部回転未切り。重ね焼きの痕跡(径7.5cm)。
10	皿	底7.6	V	灰	底部 100	底部回転未切り。
11	高台付柄	口14.4 高0.2 高台8.2	B+R+W+W'+砂多	灰	100	No.4。底部回転未切り後、高台ナデつけ風化顯著。
12	高台付柄	口14.8 高6.0 高台8.0	B+W	灰	95	No.3。底部回転未切り後、高台ナデつけ。
13	高台付柄	口(14.2) 高5.9 高台7.0	B+W+W'	灰	65	底部回転未切り後、高台ナデつけ。

14	高台付焼	高台8.2	B+W+W+壁少	橙～褐灰	45	底部回転糸切り後、高台ナデつけ。
15	高台付焼	口(13.6) 底(6.0)	B+W多	灰	40	底部回転糸切り後、高台ナデつけ。高台部欠損。
16	高台付焼	高台7.6	W	青灰	高台部 100	底部回転糸切り後高台ナデつけ。
17	高台付焼	高台5.0	B+R+W	にふい黄橙～黒	高台部 100	底部回転糸切り後、高台ナデつけ。高台 溝部ヘラアテ。底部中央器壁が厚縁。
18	高台付環	口13.8 高4.2 高台7.2	B少+W	灰白	100	№2。底部回転糸切り、周辺右回転ヘラ ケズリ後高台ナデつけ。灰粉脚毛がけ。
19	環	口12.2 高3.3	B+W	橙	95	口縁部強いヘラナデ。底部外面ヘラケ ズリ。風化顯著。
20	環	口(13.0) 底(7.6) 高3.1	B+R+W+W'	橙～褐灰	40	口縁部～体部内面ナデ。底部外面一方向 のヘラケズリ。
21	台付壁	脚(9.0)	B+R+W+W'	橙	脚部 45	脚部内側に粘土を折り返している。脚 部内外面ナデ。
22	台付壁	口12.6 高15.3 脚13.6 脚8.6	B多+R+W+W'	橙～暗赤褐	90	№2。脚部外面上半ヘラケズリによる ソッキング重しい。脚部内外面ナデ。
23	壁	口(21.0)	B+R+W+W'	にふい赤褐～にふ い褐	口縁 20	口縁部輪積み肌。
24	壁	口19.2	B+W+W' 少	橙	口縁 60	口縁部ナデ、屈曲している。
25	壁	口(20.0)	B+R+砂	橙	口縁 40	口縁部ナデ、屈曲している。
26	壁	口(19.0)	B+R+W+W'	橙	口縁 25	脚部外面ヘラケズリがオーバーハングし てガタガタになっている。
27	壁	口20.4	B少+W+W'	褐	口縁 55	口縁部ナデ、屈曲している。
28	壁	底(6.0)	B+W+砂	橙～にふい赤褐	底部 30	底部外面ヘラケズリ。風化顯著。
29	壁	底3.6	B+R+W+砂	(内)橙 (外)明赤褐	底部 50	カマド。脚部内面風化により調整不明脚 部外面一方向のヘラケズリ。
30	壁	底3.8	B+R+W+W'	橙	底部 100	底部外面一方向のヘラケズリ、風化によ りやや凸凹している。
31	壁		B+R+W多	淡黄		底部ヘラ掻き機壁。粘土中の含有物量多 い。

第238号住居跡 (第768図)

と・ち—446・447Gridに位置する。壁溝とカマドが確認されたのみであり、全容は不明である。主軸の傾きはN—78°—Eで、床面は第237号住居跡と同じ高さである。

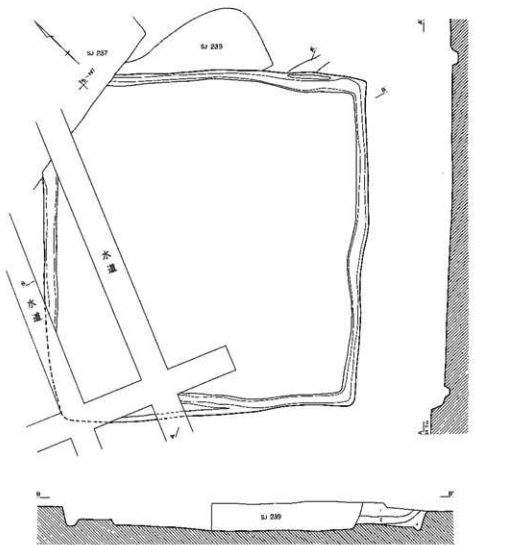
カマドは東壁に構築されている。第237号住居跡のカマドを造るときに、埋めて拡張したため、燃焼部と思われる部分のみ残存している。壁溝は北壁と東壁の一部で確認されている。

本住居跡に伴うと考えられる遺物はわずかで、図示できたものは2点のみである。

第239号住居跡 (第770図)

と—446・447Gridに位置する。第237号住居跡に切られ、西側が水道にかかっている。東西に長い長方形を呈し、規模は長軸4.0m、短軸2.8mである。主軸の傾きはN—102°—Eで、床面までの深さは26cmである。

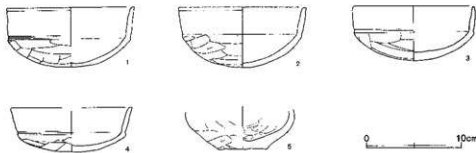
カマドは東壁やや南寄りに構築されており、煙出し部はわずかに攪乱を受けている。袖は地山の造り出して、燃焼部は掘り込まれ、煙道に向かって立ち上がっている。貯蔵穴はカマドの左側、北西隅に設けられている。規模は45×65cm、深さは45cmである。



第240号住居跡

1. 褐色土 茶褐色土粒子を少量含む。
2. 暗黄褐色土 茶褐色土粒子を多数に、炭化物を若干含む。
3. 暗褐色土 きめ細かな上で、茶褐色土粒子・炭化物を少量含む。

0 1 2m



第773図 第240号住居跡および出土遺物

第240号住居跡 (第773図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口13.5 高6.2	B+R+W	明赤褐～黒	85	口縁部～体部内面ナデ。口縁部と体部の境目ヘラアテ。
2	坏	口13.8 高6.3	B+R+W少	橙～黒	85	口縁端部ヘラアテ面取り。口縁部～体部内面ナデ。
3	坏	口12.8 高5.7	B+R+W	にふい橙	60	口縁部～体部内面ナデ。
4	坏	口(12.8) 高4.6	B+R+W	橙～黒	35	口縁端部ヘラアテ面取り。
5	小型壺	底5.2	B+W	にふい黄橙	胴部下半 100	胴部外面ヘラケズリ後ナデ。内面ヘラナデ。底部外置工具切り削しの後軽くケズリ。

遺物の出土状況は良好で、貯蔵穴の周囲から残存率のよい遺物が出土した。また、覆土から土製紡錘車が出土している。

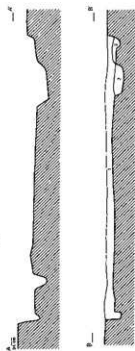
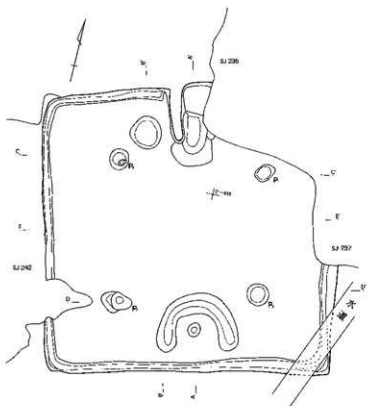
第240号住居跡 (第773図)

へ・と—446・447Gridに位置し、第239号住居跡に切られる。規模は長軸5.5m、短軸5.2mの正方形に近い形態になると推定される。長軸の傾きはN—47°—Eで、床面までの深さは20cmである。壁溝は一部水道にかかるため不明だが、全周すると考えられる。カマド及びビットなどは、精査したにもかかわらず確認できなかった。

覆土の大半が第239号住居跡に切られ、残りはわずかであったので、出土遺物の量は少ない。にもかかわらず、完形に近い土師器坏が3点出土している。

第241号住居跡 (第775図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口12.3 高4.7	B+W+W'	橙	100	床面。口縁端面取り。口縁部～体部内面ナデ。
2	坏	口11.8 高4.9	B+W+W'	橙～黒褐	100	床面。風化。
3	坏	口(13.2) 高4.8	B+R+W少	橙～灰褐	55	体部内面ヘラナデ。
4	皿	口(14.0) 高2.1	B+R+W	橙	40	カマド。体部外面風化著しくケズリ不明瞭。
5	坏	口(18.2) 高6.3	B+R+W	橙	30	カマド。口縁部～体部内面ナデ。
6	小型罎	口14.4 底(8.6) 高16.4 胴14.4	B+R+W	にふい赤褐	75	カマド。胴部内面ヘラナデ。
7	支脚	上端5.2 下端10.0 高14.2	B+R+W	橙	95	脚部外面ヘラケズリ後ナデ。脚部内外面ナデ。
8	罎		B+R+W	橙～褐灰	胴部下半 50	カマド。胴部内面輪模み痕。
9	罎		B+R+W	明赤褐～灰褐	胴部下半 30	カマド。胴部外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。
10	罎	底6.8	B少+R+W	灰褐	底部 100	底部外面多方向のヘラケズリ。
11	罎		B多+R+W	にふい赤褐	胴部 30	胴部外面ヘラケズリ。風化。



第241号住居跡

1. 暗茶褐色土 黄褐色土粒子(径3~5mm)を全体的に多く含み、焼土粒子をわずかに含む。
2. 暗黄褐色土 暗茶褐色土を基本に黄褐色土ブロック(径5mm~1cm)を多く含む。
3. 黄褐色土 黄褐色土ブロックを基本に焼土粒子を少量含む。

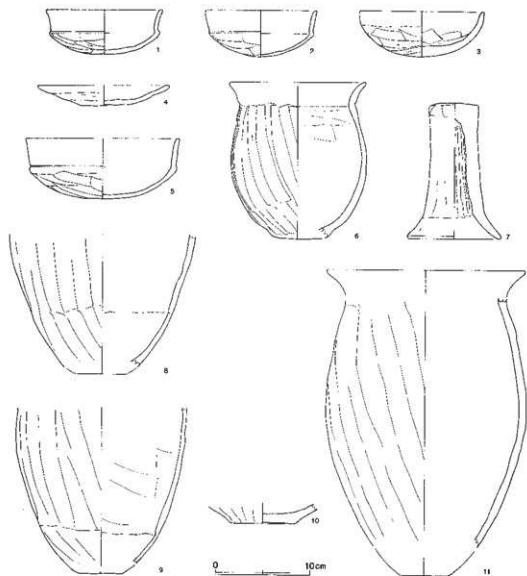


第774図 第241号住居跡

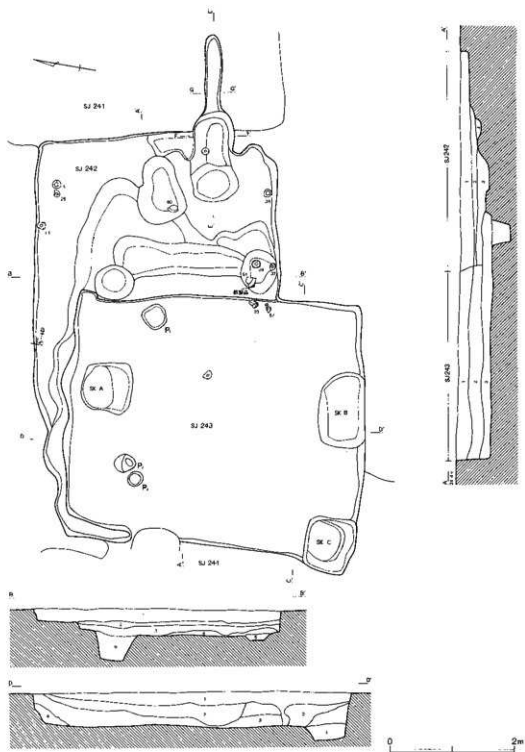
第241号住居跡（第774回）

と・ち-447・448Gridに位置し、第236・237・242号住居跡に切られている。正方形に近い形態で、長軸4.7m、短軸4.5m、主軸の傾きはN-13°-Wである。

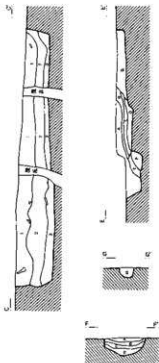
カマドは北壁に構築されているが、右側が第234号住居跡に切られているため、その余容は明らかではない。左袖は地山の造り出して、燃焼部は深く掘り込まれている。柱穴はほぼ定位置に4基確認されている。深さはピット1は22cmと浅いが、ピット2-4は50-80cmである。貯蔵穴らしき土坑がカマドの左側に設けられている。規模は径50cm、深さは15cmと浅い。壁溝は検出された範囲で全周している。また、カマドの対面にあたる南側中央の床面が、小さなピットを中心として半円



第775図 第241号住居跡出土遺物



第776图 第242·243号住居跡



第242号住居跡

1. 暗褐色土 粘土粒子・炭化物を多めに含む。床面上に炭化物層（約1cm位）が存在し、床は明確である。
2. 暗褐色土 黄褐色土ブロックを多く含む。粘床。
3. 灰褐色土 粘土粒子・炭化物を少量含む。しまりに欠ける。掘り方。
4. 黄褐色土 炭化物を少量含む。しまり強い。
5. 灰褐色土 灰を多量に含む。炭化物・粘土粒子が少量含まれる。第244号住居跡のカマドの可能性あり。
6. 褐色土 黄褐色土粒子を少量含む。粘性は強いがしまりに欠ける。

第242号住居跡カマド

- A. 褐色土 茶褐色土粒子を少量、炭化物・粘土粒子を多量に含む。
- B. 暗褐色土 炭化物を少量、焼土小ブロックを多量に含む。
- C. 灰褐色土 灰を多く含む。炭化物・焼土小ブロックを少量含む。
- D. 赤褐色土 灰を多く含む。赤色化した褐色土である。
- E. 暗褐色土 茶褐色土ブロック・粘土粒子を少量含む。
- F. 灰褐色土 焼土粒下・炭化物を少量含む。粘性・しまりに欠ける。
- G. 褐色土 焼土粒下・茶褐色土粒下を多めに含む。炭化物を少量含む。

第243号住居跡

1. 暗褐色土 粘土粒子・炭化物を多量に含む。上部を多く出土する層。
2. 暗褐色土 黄褐色土粒子（径1～3mm）を多量に含む。粘土粒子をまばらに含む。
3. 暗褐色土 黄褐色土粒子（径2～3mm）を多量に含む。同ブロック（径5mm～1cm）をまばらに含む。
4. 灰褐色土 黄褐色土ブロック（径1～2cm）を主体に暗褐色土を少量含む。

形にわずかに盛りあがって検出された。住居の入口と考えられる。

出土遺物はあまり多くはないが、カマド内や床面から残りのよい土器が出土している。

第242号住居跡（第776図）

と・ち—448・449Gridに位置し、第243号住居跡を切って構築されている。切り合いは平面で確認できなかったため、その規模は明確ではないが、覆土の観察では、一辺の長さが4mほどの正方形に近いものと考えられる。主軸の傾きはN—81°—E、深さは20cmである。掘り方が深く、床面は不明瞭であった。

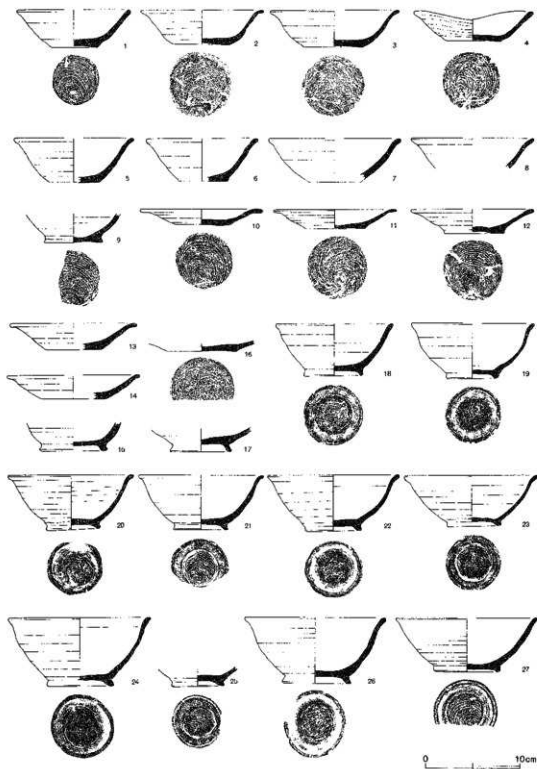
カマドは東壁南寄りに構築されており、燃焼部は深く掘り込まれている。住居内から土坑が3基確認されている。床面から掘り込まれたものであり、貯蔵穴もしくは床下土坑である可能性がある。柱穴・壁溝は検出されなかった。

出土遺物は多く、須恵器・土師器の他に、灰釉の高台付杯が出土している。また、鉄製品として刀子の破片が出土している。

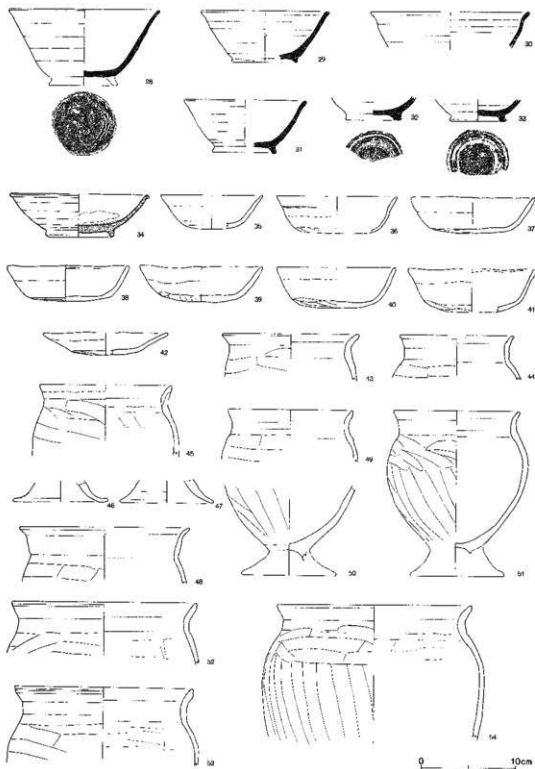
第243号住居跡（第776図）

と—448・449Gridに位置し、第242・244号住居跡と切り合う。長軸4.7m、短軸4.0mの長方形を呈し、主軸の傾きはN—10°—W、床面までの深さは52cmである。

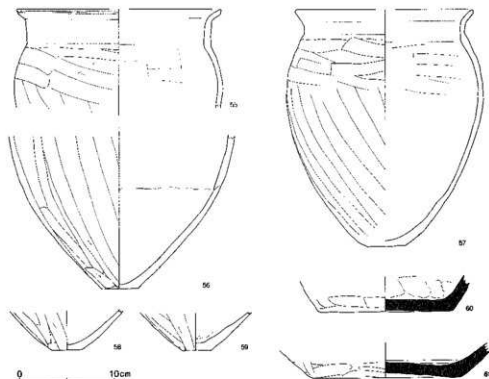
カマドは検出されていないが、東壁南寄りに焼土と灰が堆積しているのが確認されている。壊さ



第777图 第242号住居跡出土遺物(1)



第778圖 第242号住居跡出土遺物(2)



第779図 第242号住居跡出土遺物(3)

第242号住居跡(第777~779図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口(12.0) 底4.8 高4.0	W+W' 少	灰白	90	No.9. 底部回転糸切り。
2	坏	口13.0 底5.8 高3.6	B+W+少量	灰	100	底部回転糸切り。
3	坏	口(13.6) 底6.2 高3.9	B+W	灰	65	底部回転糸切り。
4	坏	口12.8 底5.8 高3.1	W+少量	灰オリーブ	100	No.10. 底部回転糸切り。歪みあり。
5	坏	口(12.6) 底(5.2) 高4.7	W+W'	灰	40	底部回転糸切り。
6	坏	口(11.8) 底(4.4) 高4.5	W多+W'	暗灰	30	底部回転糸切り。
7	坏	口(14.0)	B+W	灰白	30	底部欠損。
8	坏	口(13.0)	B+W多+W'	浅黄	口縁 30	皿化顯著。
9	坏	底6.0	W+W'	黄灰	底部 50	底部回転糸切り。
10	皿	口13.0 底5.8 高1.6	W+W'+少量	暗緑灰	75	カマド。底部回転糸切り。
11	皿	口13.0 底6.3 高2.0	B+W+W'+少量	灰	80	No.8. 底部回転糸切り。
12	皿	口(13.0) 底(6.2) 高2.6	B+W+W'	灰	60	底部回転糸切り。
13	皿	口(13.4) 底(3.0) 高2.8	B+W	灰	30	底部回転糸切り。

14	皿	口(14.0) 底(8.0) 高2.5	V+W'	灰	25	底部回転糸切り。
15	高台付腕	高台(7.4)	V+W'+襪少	灰黄	底部 50	底部回転糸切り後、高台ナデつけ。
16	皿		B+W	灰	底部 70	底部回転糸切り。
17	高台付腕	高台8.4	V+W'	暗青灰	底部 60	底部回転糸切り後、高台ナデつけ。
18	高台付腕	口(12.4) 高5.5 高台6.2	V+襪	暗緑灰	40	カマド。底部回転糸切り後、高台ナデつけ。
19	高台付腕	口(13.0) 高5.9 高台5.6	V+襪少	暗オリーブ灰	50	底部回転糸切り後、高台ナデつけ。
20	高台付腕	口13.4 高5.6 高台5.8	B+W+W'	灰	75	№4。底部回転糸切り後、高台ナデつけ。
21	高台付腕	口(13.2) 高5.7 高台5.8	B+W+襪少	灰	55	底部回転糸切り後、高台ナデつけ。
22	高台付腕	口14.0 高5.9 高台6.0	V+W'	灰	100	カマド。底部回転糸切り後、高台ナデつけ。
23	高台付腕	口12.2 高5.4 高台5.7	V+W'+片少	灰	60	カマド。底部回転糸切り後、高台ナデつけ。
24	高台付腕	口15.0 高7.2 高台7.0	V+W'+片少	暗褐	85	カマド。底部回転糸切り後、高台ナデつけ。
25	高台付腕	高台5.6	B+W+W'	灰	底部 100	底部回転糸切り後、高台ナデつけ。
26	高台付腕	口(14.8) 高8.9 高台7.3	B+W	灰	65	底部回転糸切り後、高台ナデつけ。
27	高台付腕	口(15.0) 高5.7 高台7.0	V+W'	灰	45	
28	高台付腕	口16.0 底7.0	V+W'+襪多	緑黒	80	№7。底部回転糸切り後、高台ナデつけ 高台部欠損。
29	高台付腕	口13.4 高5.4 高台8.9	B+R少+W+W'	灰	40	底部回転糸切り後、高台ナデつけ。
30	高台付腕	口(16.8)	B+W+W'	灰	口縁 25	口縁成形。
31	高台付腕	口(13.0) 高5.5 高台(6.8)	B多+W	灰	30	底部回転糸切り後、高台ナデつけ。
32	高台付腕	高台(6.0)	V	暗緑灰	底部 30	底部回転糸切り後、高台ナデつけ。
33	高台付腕	高台8.0	V+砂少	灰	底部 70	底部回転糸切り後、高台ナデつけ。
34	高台付環	口(14.8) 高4.6 高台7.2	B+W	灰	50	灰輪陶器。底部左回転ヘラケズリ後、高台ナデつけ。内面灰輪つけがけ？。外面は風化により灰輪は確認できない。口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
35	環	口(10.8)	B+W+W'	明赤褐	30	
36	環	口(12.8)	B+W+W'	におい赤褐	口縁 25	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
37	環	口13.1 底8.5 高3.8	B多+W	橙	95	№12。口縁部～体部内面ナデ。体部外面ヘラケズリ。
38	環	口12.4 底8.4 高3.7	B多+W	橙～黒褐	100	№2。口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
39	環	口13.0 底8.2 高3.7	B多+W	橙	100	№11。口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
40	環	口(12.6) 底(7.2) 高4.2	B+W	橙	60	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
41	環	口(13.4) 高(4.5)	V+W'	褐灰	30	カマド。口縁部やや厚い。体部外面ヘラケズリ。歪んでいる。
42	皿	口(13.2) 底(7.0) 高2.4	B+W	橙	40	口縁部～体部内面ナデ。体部外面ヘラケズリ。
43	台付壁	口(14.4)	B+W	橙	口縁 40	風化して調整不明瞭。

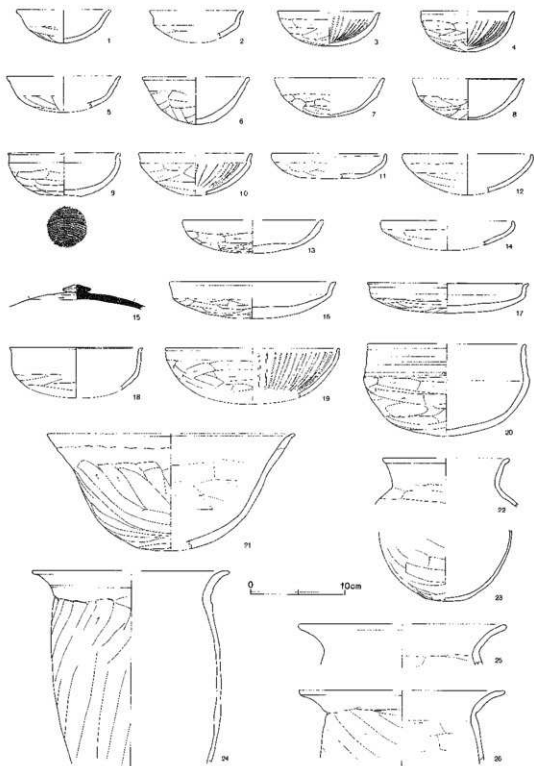
44	台付窯	口(12.0)	B+W	燈	口縁 25	口縁部ナデ。胴部外面ヘラケズリ。
45	台付窯	口(14.0)	B+W	燈	口縁 40	口縁部輪縁み積。胴部内面ヘラナデ。
46	台付窯	脚(10.0)	B+W	燈	脚部 30	脚部内外面ナデ。風化。
47	台付窯		B+W少	燈	脚部 25	脚部内外面ナデ。
48	窯	口(18.0)	B+W	にぶい燈	口縁 20	口縁部ナデ。胴部外面ヘラケズリ。
49	台付窯	口13.2	B+W	にぶい赤褐	口縁 70	口縁部ナデ。胴部外面ヘラケズリ。
50	台付窯		B+W	暗赤褐	胴部下半 30	胴部外面ヘラケズリ。外面胴部と脚部の境目ナデ。
51	台付窯	口13.2 脚(14.6)	B+R+W少	明赤褐～黒褐	85	口縁部ナデ。胴部外面ヘラケズリ。脚部欠損。
52	窯	口19.5	B多+R少+W	にぶい燈	口縁 55	カマド。胴部内面ヘラナデ。
53	窯	口19.0	B+R+W	燈～褐灰	口縁 55	口縁端部ヘラアテ。胴部内面ヘラアテ。
54	窯	口20.6	B+R+W	燈～黒褐	25	口縁部ナデ。胴部内面ヘラナデ。
55	窯	口(21.4)	B多+W	燈～褐灰	口縁 30	口縁端部ヘラアテ面取り。胴部内面ヘラナデ。
56	窯	底(4.0)	B+W+W'	燈	胴部下半 30	カマド。外面胴部～底部ヘラケズリ。
57	窯	口(18.6) 底4.0 高24.9 脚(20.8)	B+R+W	燈～灰褐	25	№5。口縁部ナデ。胴部外面ヘラケズリ。
58	窯	底(3.0)	B+W+W'	明赤褐	底部 50	胴部外面ヘラケズリ。
59	窯	底3.0	B+R少+W	灰褐	底部 100	胴部外面ヘラケズリ。
60	窯	底(14.0)	B少+W+W'	灰	底部 40	№1。外面底部付近ヘラケズリ。内面ヘラナデ。
61	窯	底(15.0)	B少+W+W'+R少	(内)灰褐 (外)暗緑灰	底部 70	№3。外面底部付近ヘラケズリ。

れてしまったものであろう。ピットは3基確認されたが、柱穴となるものは見あたらない。また、上坑が3基存在するが、すべてが本住居跡に伴うものかどうかは不明である。

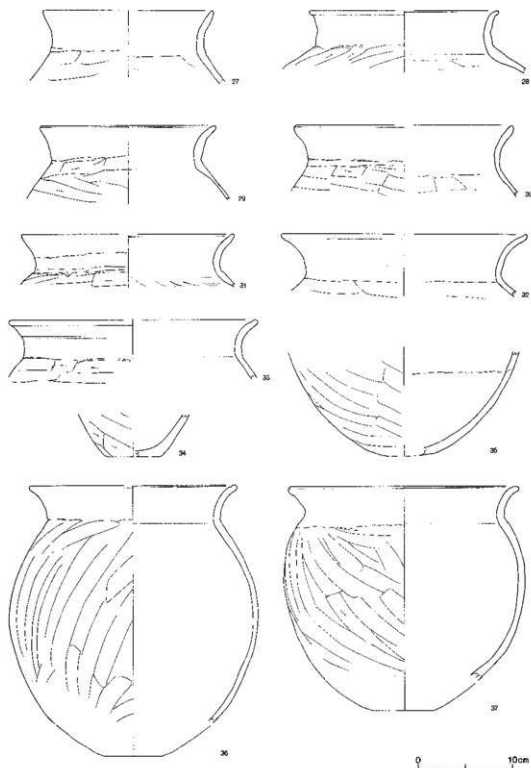
出土遺物は比較的多い。大半が覆土上面でややまとまって出土した。

第243号住居跡(第780・781図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口(10.0)	B+R+W少	淡黄橙	30	口縁部～体部内面ナデ。体部外面ヘラケズリ。
2	坏	口10.0	B+W少	燈	口縁 20	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
3	坏	口10.8 高3.7	B多+W+W'	褐～黒	50	口縁部ナデ。内面暗文。
4	坏	口(10.0) 高4.2	B+R少+W	燈	45	口縁部ナデ。内面暗文。
5	坏	口(12.0)	B+W	燈～黒褐	口縁 25	口縁部～体部内面ナデ。体部外面ヘラケズリ。
6	坏	口(11.4) 高5.0	B少+R少+W+W'	褐	40	口縁部～体部内面ナデ。体部外面ヘラケズリ。
7	坏	口11.6 高4.2	B多+R+W+W'	淡黄橙	100	口縁部～体部内面ナデ。体部外面ヘラケズリ。

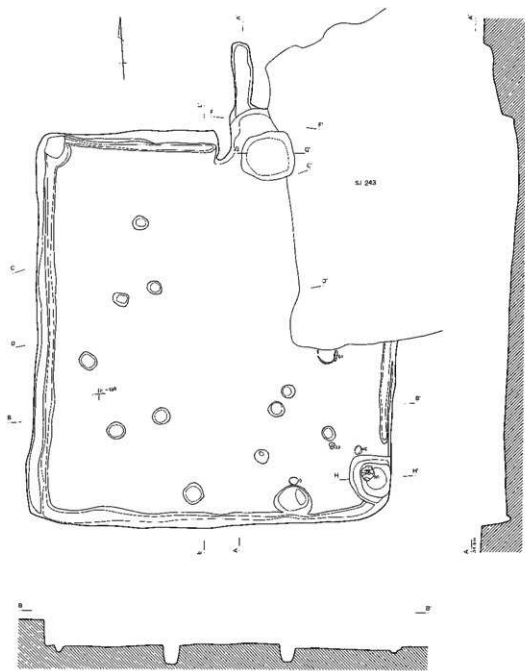


第780圖 第243号什居跡出土遺物(1)

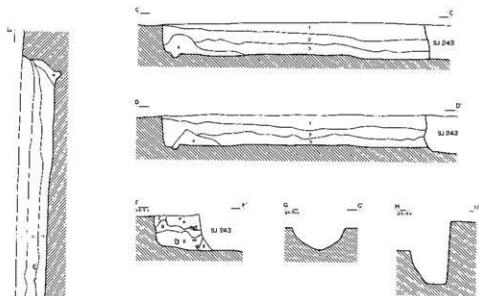


第781图 第213号住居跡出土遺物(2)

8	坏	□11.8 高4.3	B多+R+W	洗炭槽	85	□端部ヘラアテ、□端部～体部内面ナデ。
9	坏	□11.9 底4.3 高4.5	B多+R少+W少	洗炭槽～黒桶	70	□端部～体部内面ナデ。底部静止ホ切り
10	坏	□(12.0) 高(4.5)	B+W+W'	明赤桶	30	□端部ナデ。内面放射状増文。
11	坏	□(12.0)	B+W+W'	橙	20	□端部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
12	坏	□(13.6) 高(4.3)	B+R+W	にふい橙	30	□端部～体部内面ナデ。体部外面風化によりケズリ不明確。
13	坏	□(14.4) 高3.5	B多+R+W	橙	70	□端部～体部内面ナデ。体部外面ヘラケズリ。
14	坏	□(14.0)	B+W	橙	□端 20	□端部～体部内面ナデ。体部外面ヘラケズリ。風化。
15	蓋	つまみ(3.0)	B+R少+W+W'	灰	55	天井部外面右回転ヘラケズリ。風化顯著
16	皿	□17.6 高3.9	B多+R+W+W'	橙	95	□端部ヘラアテ、□端部～体部内面ナデ。
17	皿	□(17.2) 高3.2	B+R少+W	橙	45	□端部ヘラアテ、体部外面ヘラケズリ
18	坏	□(14.0)	B+W	橙	□端 20	□端部ヘラアテ面取り。体部外面風化によりケズリ不明確。
19	桶	□(18.4)	B+R少+W	黒桶	25	□端部ナデ。内面増文。
20	桶	□(16.8) 高0.7	B+W+W'	橙～黒	60	□端部外面数箇のヘラアテによる段をもつ。
21	鉢	□26.2 高12.4	B+R少+W+W'	橙	50	□端部ナデ。体部内面ヘラナデ。
22	蓋	□(13.4)	B+W	橙	□端 25	□端部ナデ。胴部外面風化によりケズリ不明確。
23	小型蓋	底4.4	B多+R少+W+W'	橙～黒	胴部下半 45	胴部外面ヘラケズリ。底部外面一方向のヘラケズリ。
24	蓋	□(23.0)	B+R+W	橙～灰桶	胴部上半 50	□端部ヘラアテ、胴部外面ヘラケズリ
25	蓋	□(22.0)	B+W少+W'	にふい橙	□端 25	□端部ナデ。胴部内面ヘラナデ。
26	蓋	□(21.8)	B+R少+W+W'	にふい橙	□端 30	□端部ヘラアテ、胴部内面ヘラナデ。
27	蓋	□(18.0)	B+R少+W多+W'	にふい黄橙	□端 25	風化により調整不明確。
28	蓋	□(20.0)	B+R少+W+W'	橙	□端 20	□端部ヘラアテ、□端部ナデ。胴部外面ヘラケズリ。
29	蓋	□16.6	B多+R+W+W'	橙	□端 100	□端部ヘラアテ、胴部外面ヘラケズリ。
30	蓋	□(22.8)	B+R少+W+W'	にふい橙	□端 30	□端部ナデ。胴部内面ヘラナデ。
31	蓋	□(22.4)	B+R少+W+W'	橙	□端 45	□端部ヘラアテ。胴部外面ヘラアテ内面凹凸いヘラナデ。
32	蓋	□(26.0)	B多+W+W'	橙	□端 25	□端部ナデ。胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。
33	蓋	□(26.4)	B+W多+W'	にふい黄橙	□端 20	□端部ナデ。胴部外面ヘラケズリ。
34	蓋	底(6.0)	B+W+W' 少	にふい橙	底部 30	胴部外面ヘラケズリ。
35	蓋	底(5.0)	B+R少+W+W' 少	(内)橙 (外)桶灰	胴部下半 40	胴部外面ヘラケズリ、内面凹凸み病。
36	蓋	□(22.0) 胴26.4	B+R+W少	橙～桶桶	30	□端部ヘラアテ。胴部外面風化著しくケズリ不明確。胎土中の含有物量多い。
37	蓋	□24.0 胴25.6	B多+R+W	橙～黒桶	70	□端部ヘラアテ、胴部外面ヘラケズリ



第782图 第244号住居跡



第244号住居跡

1. 暗褐色土 黄褐色土粒子・炭化物を少量含む。
2. 暗色土 茶褐色土小ブロックを多量に、焼上粒子を少量含む。
3. 暗茶褐色土 茶褐色土ブロック・炭化物・焼上粒子を多く含む。
4. 暗褐色土 しまりのない上で、焼上ブロック・茶褐色土小ブロックを含む。

第244号住居跡カマド

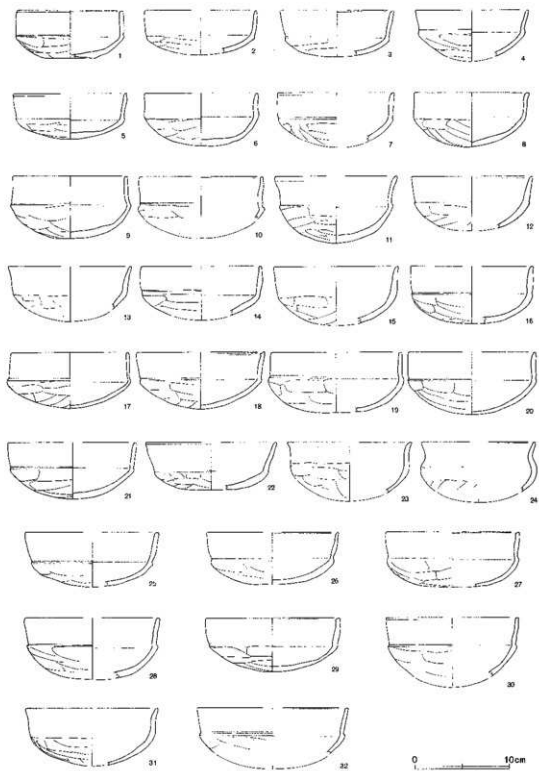
- A. 暗褐色土 黄褐色土粒子（径2～3mm）を多量に、阿ブロック（径5mm～1cm）を少量含む。土器片を少量に出土する。
- B. 暗茶褐色土 黄褐色土粒子（径1～3mm）を多量に、焼上粒子を若干含む。土器片を多く含む。
- C. 暗黄褐色土 暗茶褐色土を基本に黄褐色土粒子（径1mm以下）を多量に含む。土器片は含まれない。
- D. 黄褐色土 黄褐色土ブロック（径5mm～1cm）を主体に暗茶褐色土を若干含む。焼上ブロックを若干含む。土器片も多く含む。
- E. 暗黄褐色土 黄褐色土を基本にした層と考えられる層で、第244号住居跡に切られる。

第244号住居跡（第782図）

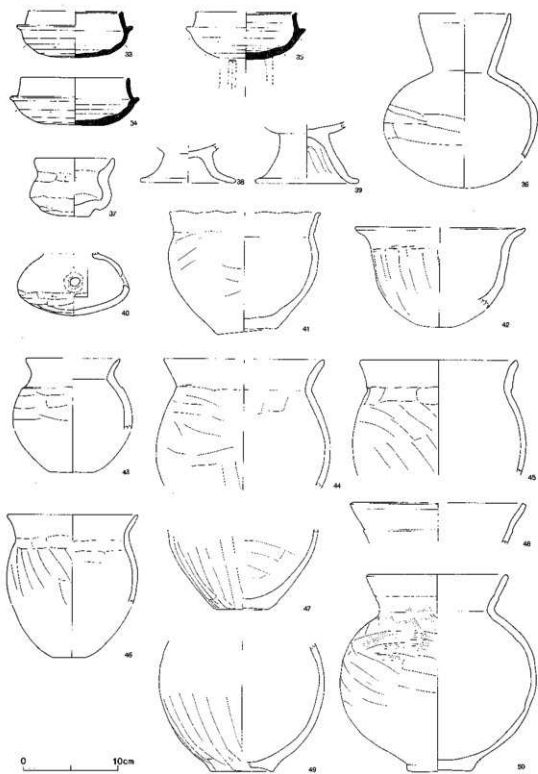
へ・と—449・450Gridに位置し、第243号住居跡に切られる。形態は南北にややながい長方形で、規模は長軸6.4m、短軸5.9m、主軸の傾きはN—4°—Eとほぼ真北を向く。床面までの深さは41cmである。

カマドは北壁東寄りに構築されている。右袖にあたる部分を切られているが、燃烧部は深く掘り込まれており、左側の袖は確認されている。ピットは小さいものが合計12基検出された。あまりきれいに並ばないが、後世の掘乱しと考えられるものはない。壁溝は確認された範囲ではすべてに検出されている。貯蔵穴は東南隅際際に設けられている。規模は65×77cm、深さは50cmで底は平らになる。

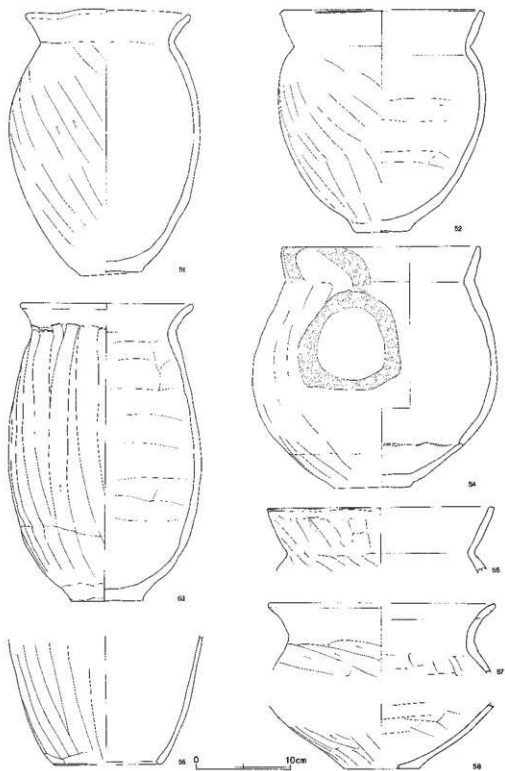
出土遺物は非常に多く、また接合率も比較的良好である。ただし若干の混入が認められるようである。注目すべき遺物としては、焼きむらの残る土師器甕（54）や土師器匙、阿比福年のMT15形式に相当する須恵器坏（33・34）などが出土している。また、滑石製の剣形模造品が覆土から出土しているが、造りもよく優品である。



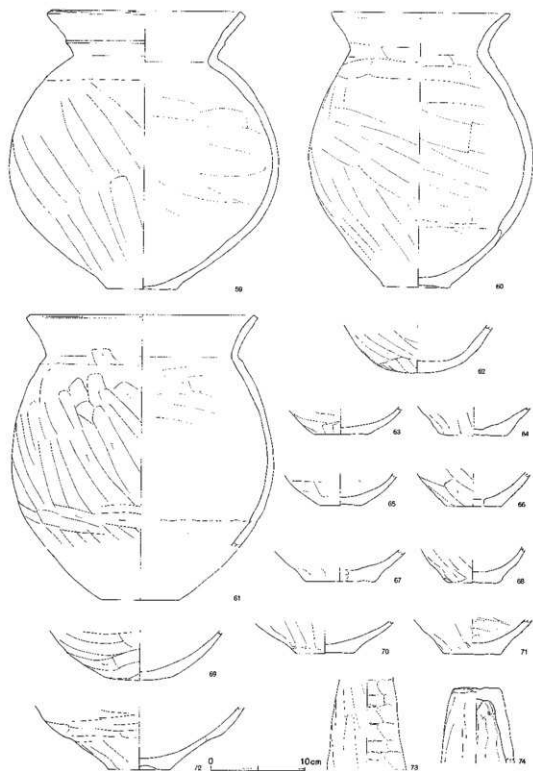
第783图 第214号住居跡出土遺物(1)



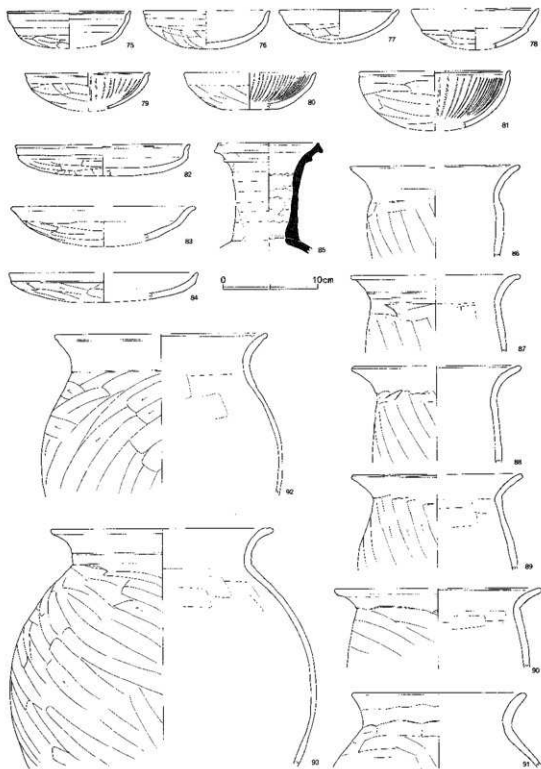
第784图 第244号住居跡出土遺物(2)



第785图 第244号住居跡出土遺物(3)



第786图 第244号住居跡出土遺物(4)



第787図 第241号住居跡出土遺物(5)

第244号住居跡(第783~787回)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口(11.2) 底5.0 高5.0	B多+W	明赤褐	50	平底。底部外面多方向のヘラケズリ。
2	坏	口(11.8)	B+R+W	明赤褐~黒褐	30	口縁部~体部内面ナデ。体部外面ヘラケズリ。胎土中の含有物量少ない。
3	坏	口(12.0)	B+W	明赤褐~黒褐	25	口縁部ヘラアテ面取り。体部外面ヘラケズリ。風化。
4	坏	口(12.0)	B+R少+W	橙	25	口縁部面取り。体部外面ヘラケズリ風化。
5	坏	口(12.0) 高4.8	B+W	にぶい橙	30	風化著しく調整不明瞭。
6	坏	口(12.0) 高5.5	B+R+W少	橙	45	体部外面風化によりケズリ不明瞭。
7	坏	口12.4	B+W	橙~黒褐	45	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。風化
8	坏	口12.2 高5.7	B+R+W	橙	50	口縁部面取り。体部外面ヘラケズリ風化。
9	坏	口12.2 高6.5	B+R+W	橙~褐灰	100	%4。口縁部ヘラアテ面取り。口縁部~体部内面ナデ。体部外面ヘラケズリ風化顯著。
10	坏	口(13.0)	B+R+W多	黒褐	口縁 25	口縁部面取り。体部外面ヘラケズリ。
11	坏	口(13.0) 高7.1	B+W+砂少	明赤褐	30	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
12	坏	口(12.8)	B+R少+W+W少	にぶい橙	25	口縁部と体部の境目ヘラアテ。体部外面ヘラケズリ。
13	坏	口(13.0)	B+W	にぶい橙	口縁 25	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。器面荒れている。
14	坏	口(12.4)	B+R少+W	(内)橙(外)黒褐	30	口縁部ナデ。体部外面風化によりケズリ不明瞭。
15	坏	口13.2 高(6.2)	B+R+W	明赤褐	70	口縁部~体部内面ナデ。体部外面ヘラケズリ。風化。
16	坏	口(13.0) 高(6.0)	B少+W	赤褐~黒	30	口縁部ヘラアテ面取り。口縁部~体部内面ナデ。
17	坏	口12.4 高5.9	B+W	明赤褐	80	口縁部~体部内面ナデ。体部外面ヘラケズリ。
18	坏	口(13.6) 高6.0	B+R少+W	橙	65	口縁部ヘラアテ面取り。口縁部~体部内面ナデ。
19	坏	口(13.8) 高(6.4)	B+R+W	明赤褐	20	口縁部ヘラアテ面取り。口縁部~体部外面ヘラケズリ。
20	坏	口(13.5) 高6.5	B+R少+W	橙~赤灰	50	口縁部~体部内面ナデ。体部外面ヘラケズリ。風化。
21	坏	口(13.5) 高5.9	B+R+W少	橙	45	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。風化
22	坏	口(14.0)	B+W	橙	30	口縁部~体部内面ナデ。胎土中の含有物量少ない。
23	坏	口(13.2)	B+R少+W	明赤褐~赤黒	40	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。風化顯著。
24	碗	口(12.0)	B+R+W	にぶい橙~褐灰	30	口縁部ナデ。体部外面下半ヘラケズリ。
25	坏	口(12.0) 高(5.7)	B+R+W	橙~黒	35	口縁部ヘラアテ面取り。口縁部~体部内面ナデ。体部外面ヘラケズリ。
26	坏	口(14.0) 高5.5	B+R少+W	橙	30	体部外面風化によりケズリ不明瞭。
27	坏	口(12.0) 高(5.8)	B+W	にぶい橙	40	口縁部ヘラアテ面取り。口縁部~体部内面ナデ。
28	坏	口(14.2)	B+R+W	橙	25	体部外面風化によりケズリ不明瞭。
29	坏	口14.2 高5.6	B+R+W	明赤褐	60	口縁部ヘラアテ面取り。口縁部~体部内面ナデ。

30	环	□(14.0)	B+W	橙	25	口縁端部へラアテ面取り。体部外面へラケズリ。風化。
31	环	□14.0 高(6.1)	B多+R少+W	橙	70	口縁部ナデ。体部外面へラケズリ。風化
32	环	□(18.0)	B+R少+W'	明赤褐	30	口縁端部面取り。体部外面へラケズリ風化顯著。
33	环	□(10.0) 高4.8	B+W	灰	50	口縁端部へラアテ面取り。左回転へラケズリによる成形。
34	环	□11.4 高4.9	B+W多	灰	65	体部外面下半左回転へラケズリ。
35	有蓋高环	□(10.6) 环部高5.0	B少+W	暗青灰	环部 60	环部外面下半右回転へラケズリ。脚部3ヶ所に透かし。
36	壺	□(9.4) 胴16.2	B+R+W	橙	45	口縁部ナデ。胴部外面上半へラケズリ後粗いミガキ。下半へラケズリ。
37	小型壺	□8.4 底5.2 高6.1	B+R+W+W'	橙	100	口縁部ナデ。胴部外面一部へラケズリ底部外面多方向のへラケズリ。器壁厚く歪んでいる。
38	高环	脚10.2	B+R+W	橙	脚部 90	胴部内外面ナデ。風化顯著。
39	高环	脚11.0	B+R+W+W'	明赤褐	脚部 75	No.2。脚部外面ナデ。
40	はそう	胴12.0	B+R+W	橙	脚部 100	No.3。脚部外面上半ナデ。下半へラケズリ。穿孔は焼成後。
41	小型壺	□(16.0) 底(6.2) 高12.5	B+R+W	にふい橙～褐灰	45	風化著しく器面の剥落顯著。口縁部風化により凸凹している。胴部外面へラケズリ。
42	鉢	□(18.0)	B+W	にふい橙	20	口縁端部へラアテ。体部外面へラケズリ風化顯著。
43	小型壺	□(10.0)	B+R少+W	橙	脚部 25	口縁部ナデ。脚部外面へラケズリ。
44	小型壺	□(17.0)	B+R+W少	にふい黄橙	脚部上半 25	口縁部ナデ。脚部外面へラケズリ。内面へラナデ。風化。
45	小型壺	□16.4	B+R少+W+W'	橙	脚部上半 40	脚部外面風化著しくケズリ不瞭。胎土中の含有物量多い。
46	小型壺	□13.8 脚13.8	B+R少+W	橙	上半部 40	脚部外面へラケズリ。内面へラナデ。風化。
47	壺	底5.4	B+R+W	橙	脚部下半 40	脚部外面へラケズリ。内面へラナデ。底部多方向のへラケズリ。
48	壺	□(18.0)	B+W	橙	口縁 30	口縁端部へラアテ。口縁部外面へラアテによる段をもつ。
49	小型壺	底(6.8) 脚(17.5)	B+R+W	にふい黄橙	脚部 30	脚部外面上半へラケズリ後ナデ。下半へラケズリ。底部多方向のへラケズリ。
50	小型壺	□14.8 底6.8 高20.8 脚20.8	B+R+W+W'	明赤褐	95	No.5。口縁端部面取り。脚部外面上半粗いミガキ。下半へラケズリ後ナデ。底部外面一方のへラケズリ。丁寧なつくり口縁部歪んでいる。底部一方のへラケズリ。凹み底。風化。
51	壺	□17.4 底8.5 高28.0	B+R+W+砂多	橙～黒	65	口縁端部へラアテ面取り。脚部内面ナデ
52	壺	□(21.0) 底5.4 高23.5 脚21.9	B+W	明赤褐	60	口縁端部へラアテ面取り。脚部内面ナデ
53	壺	□18.0 底7.5 高31.2 脚20.4	B+R少+W	にふい黄橙～黒	90	脚部内面へラナデ。底部外面はほぼ一方のへラケズリ。
54	壺	□21.0 底7.0 高25.4 脚25.4	B+R+W	橙	80	脚部外面風化によりケズリ不瞭。外面に焼きむらがある。
55	壺	□(23.0)	B+W	橙	口縁 25	口縁端部面取り。外面口縁部～脚部へラケズリ。
56	壺	底(11.2)	B+R+W少	橙	底部 30	脚部外面へラケズリ。風化顯著。
57	壺	□(24.0)	B+W多	橙	口縁 25	カマド。口縁部ナデ。脚部内面へラナデ
58	壺	底8.0	B+R+W	(内)赤褐 (外)明赤褐～橙	底部 95	脚部外面へラケズリ。内面へラナデ。底部外面一方のへラケズリ。

59	壘	口(20.0) 底6.4 高29.3	B+R+W	橙	45	口縁端部ヘラアテ面取り。胴部外面ヘラケズリ。内面ナデ。底部外面一方のヘラケズリ。
60	壘	口19.0 底(6.8) 高28.8 胴23.8	B+R+W+W'	にふい橙	70	口縁端部ヘラアテ面取り。胴部外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部外面一方のヘラケズリ。
61	壘	口23.5 胴27.8	B+R+W	橙	50	No.1。口縁端部ヘラアテ面取り。胴部外面ヘラケズリ。粘土接合部分横方向のヘラケズリ。
62	壘		B+R+W+W' 少	にふい黄橙	底部 100	胴部外面ヘラケズリ。
63	壘	底5.8	B+W	灰褐	底部 75	胴部外面ヘラケズリ。底部外面一方のヘラケズリ。
64	壘	底7.2	B+R+W	黒褐	底部 90	胴部外面ヘラケズリ。底部外面多方向のヘラケズリ。風化顕著。
65	壘	底4.6	B+R+W少	(内)にふい橙 (外)褐灰	底部 100	底部外面二方向のヘラケズリ。風化。
66	瓶	底(6.0)	B+R少+W	にふい橙～黒褐	底部 30	カマド。外面胴部～底部ヘラケズリ。
67	壘	底(7.6)	B+W+砂多	にふい赤褐	底部 50	外面胴部～底部ヘラケズリ。風化。
68	壘	底(5.6)	B+W多	明赤褐	底部 80	胴部外面ヘラケズリ。底部外面一方のヘラケズリ。
69	壘	底7.0	B多+W	橙～黒	底部 90	貯蔵穴。底部外面多方向のヘラケズリ。
70	壘	底(6.0)	B+W+W'	にふい橙～黒	底部 80	胴部外面ヘラケズリ。底部外面多方向のヘラケズリ。
71	壘	底(6.0)	B+W	(内)褐 (外)明赤褐	底部 70	胴部外面ヘラケズリ。下部部指ナデ。底部外面一方のヘラケズリ。
72	壘	底6.4	B+R少+W	赤褐～灰赤	底部 100	胴部外面ヘラケズリ。底部外面多方向のヘラケズリ。凹み底。
73	支脚		B+W+W'	にふい橙	50	外面ヘラケズリ後ナデ。内面輪痕のみ痕明瞭。風化顕著。胎土中の含有物量多い。
74	支脚	上端4.6	B+W+W'	にふい橙	25	外面ヘラケズリ。内面ナデ。
75	坏	口(13.0)	B+R少+W	褐灰	口縁 25	口縁端部強いヘラアテ。体部外面ヘラケズリ。
76	坏	口(13.5) 高4.1	B多+R+W	淡黄橙	40	底部外面静止未切りの痕跡僅かに残る。
77	坏	口12.6 高3.5	B+R+W	橙	100	口縁端部ヘラアテ。風化。
78	坏	口(13.5)	B+R少+W	橙	35	口縁端部ヘラアテ。口縁部～体部内面ナデ。口縁部と体部の境目ヘラアテ。
79	坏	口(13.2)	B+R+W	橙	25	口縁端部ヘラアテ。内面縁々暗文。
80	坏	口(14.0) 底6.0 高(3.9)	B+W	橙	30	内面暗文。底部外面二方向のヘラケズリ平底。
81	坏	口(16.0)	B+W	明赤褐	20	口縁端部ヘラアテ。内面暗文。
82	皿	口(18.5) 高(3.2)	B多+R+W	橙	40	口縁部ナデ。内面暗文(風化著しく確認できない)。
83	皿	口(19.2)	B+W少	にふい橙	30	口縁部～体部内面ナデ。
84	皿	口(20.0)	B+W	橙	口縁 25	カマド。口縁部～体部内面ナデ。
85	長頸壺	口10.6	B少+W	灰白	胴部 85	胴部内外面に自然輪付着。口ロ口成形。
86	壘	口(18.0)	B+R+W	橙	口縁 25	
87	壘	口(18.0)	B+R+W	橙	口縁 30	口縁端部ヘラアテ。

88	竪	□(17.4)	B+W	橙	口縁 25	口縁端部ヘラアテ。風化。
89	竪	□(18.0)	B+R+W+W' 少	橙	口縁 26	口縁端部ヘラアテ面取り。
90	竪	□(22.0)	B+W	橙	口縁 38	貯蔵穴。胴部内面ヘラナデ。
91	竪	□18.0	B+R+W+W'	橙	口縁 70	風化。滲入
92	竪	□(22.6)	B多+W	橙～灰褐	胴部上半 25	カマド。口縁端部ヘラアテ。
93	竪	□23.6 胴32.4	B+R+W	にみい橙	上半部 60	口縁端部ヘラアテ。胎土中の含有物量多い。

第234号住居跡から第244号住居跡までの11軒は、連続して切り合っていることが判明した。湧水その他の悪条件の下で発掘を行ったため、平面だけでとらえることができず、同時に掘り下げざるを得なかった部分もある。説明文中にも触れたが、これらの関係を整理すると次のようになる。

(旧→新) 234→(235→236)→237

238→237

240→239→237

241→236→237

241 → 242

244→243→242

この所見を念頭に入れて、遺物の整理を行ったが、異なる住居跡からの遺物が接合するものも若干認められた。また、時期の異なる遺物の混在も認められたが、あえて不必要にこれらの遺物を削除することは避けた。したがって、各住居跡の遺物としたそのすべてが、必ずしもその住居跡に伴う遺物ではないことをここで明記しておく。

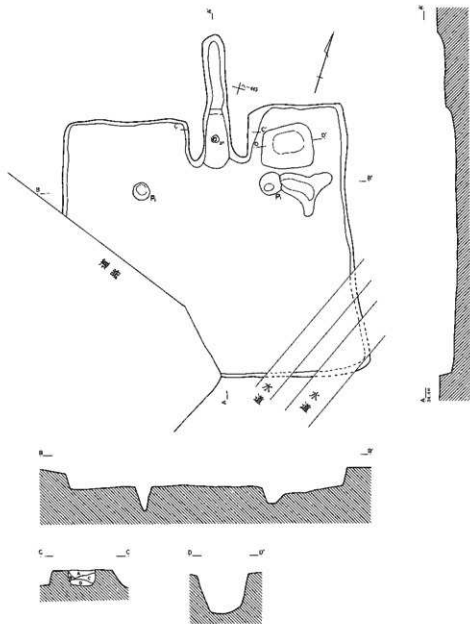
明らかに混入と判断できるか、その可能性が高い場合にのみ、遺物の所属変更および観察表記載を行った。なお、これは本報告書全てに共通する手続きである。

第245号住居跡 (第788図)

は—448・449Gridに位置し、南側が道路及び水道にかかっている。形態は正方形に近く、規模は長軸4.5m、短軸4.3m、主軸の傾きはN—17°—Wである。床面までの深さは25cmである。

カマドは北壁中央に構築されている。袖は地山の造り出しで、残りは良好である。燃焼部はわずかに掘り込まれているが、床面との差はほとんどない。土製の支脚(31)が完全に残っていた。柱穴と考えられるピットは北半に2基検出されている。南半の床面も精査したが、柱穴らしきピットは確認できなかった。なお、ピット1に接する落ち込みは攪乱と考えられる。貯蔵穴はカマドの右側に設けられている。隅丸の長方形を呈しており、規模は84×70cm、深さは64cmである。壁溝は確認されなかった。

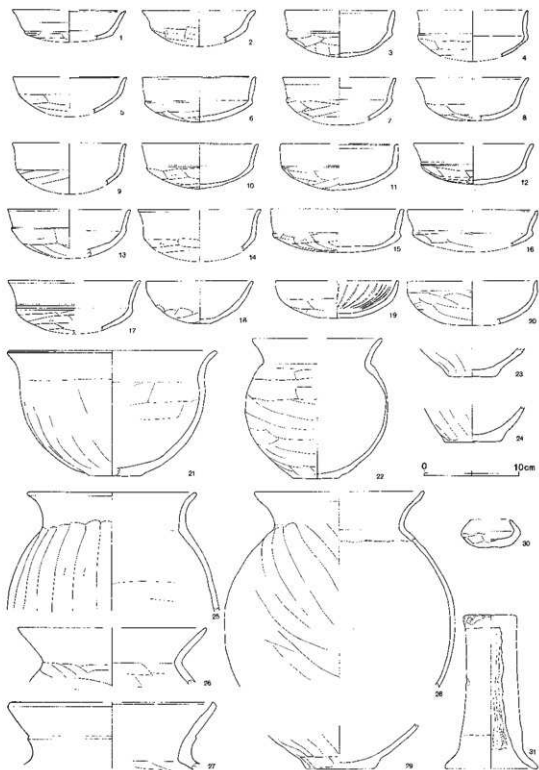
出土遺物はさほど多くはない。覆土からの破片が多く、完形になる土器はなかった。土器以外には石製の勾玉が出土している。



第245号住居跡カマド

- A. 茶褐色土 黄褐色土粒子（径1～3mm）を多量に含み、白色微粒子を全体的に多量に含む。焼土粒子をわずかに含む。
- B. 明黄褐色土 茶褐色土を基本に黄褐色土ブロック（径5mm～1cm）を部分的に含む。焼土粒子を少量含む。
- C. 暗橙褐色土 黄褐色土粒子（径3～5mm）を全体的に多量に含み、焼土粒子（径3～5mm）を多量に含む。
- D. 黒褐色土 茶褐色土を基本に焼土・炭化物粒子（径2～3mm）、および黄褐色土ブロック（径5mm～1cm）を多く含む。

0 2m



第789号 第245号住居跡出土遺物

第245号住居跡(第789号)

No.	番 種	大きさ(ca)	胎 土	色 調	残存率(%)	備 考
1	环	□(12.0)	B+W	黒褐	口縁 25	口縁部ヘラアテ。体部外面ヘラケズリ。
2	环	□(12.0)	B+W+N'	にふい橙	口縁 25	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
3	环	□11.6 高4.9	B+R+W	にふい橙～黒	70	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。風化顯著。
4	环	□(11.8)	B+R少+W	橙	口縁 40	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。風化顯著。
5	环	□(12.0)	B+W	黒褐	口縁 20	口縁部ナデ。体部外面風化によりケズリ不著。
6	环	□12.0 高4.7	B+R+W+N'	橙	80	口縁部ヘラアテ面取り。口縁部～体部内面ナデ。風化顯著。
7	环	□(12.0)	B多+R+W	にふい橙	口縁 30	口縁部ヘラアテ面取り。体部外面ヘラケズリ。
8	环	□(12.0) 高(4.5)	B+R少+W	にふい橙	25	カマド。口縁部ヘラアテ?面取り。口縁部～体部内面ナデ。風化。
9	环	□(12.0)	B+R+W	橙	口縁 20	口縁部ヘラアテ面取り。風化。
10	环	□12.2 高4.8	B+R少+W	橙	70	口縁部ヘラアテ面取り。風化顯著。
11	环	□12.4 高4.9	B+R多+W	橙	70	口縁部ヘラアテ面取り。口縁部～体部内面ナデ。風化。
12	环	□(12.6) 高4.3	B+R+W	橙～黒	50	口縁部面取り。口縁部ナデ。
13	环	□(13.0) 高5.2	B+R+W	橙	30	口縁部ヘラアテ面取り。口縁部～体部内面ナデ。
14	环	□(13.0)	B+W	にふい橙	口縁 30	口縁部ヘラアテ面取り。体部外面ヘラケズリ。
15	环	□14.2 高4.6	B+R+W	明赤褐	85	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
16	环	□(13.8)	B+R多+W	にふい橙	口縁 20	口縁部面取り。体部外面ヘラケズリ風化顯著。
17	环	□(14.0) 高(5.6)	B+W+N'	橙	25	口縁部面取り。口縁部と体部の境目ヘラアテ。
18	环	□11.4 高4.5	B+R+W	にふい黄橙～黒	60	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
19	环	□(13.0) 高3.9	B+W	橙	20	内面文頂。体部外面ヘラケズリ。
20	环	□(13.8)	B+W+N'	明赤褐	口縁 30	口縁部～体部内面ナデ。体部外面ヘラケズリ。
21	鉢	□22.0 底5.6 高13.2	B+R少+W	にふい橙	60	口縁部ヘラアテ面取り。体部外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部外面一方のヘラケズリ。
22	小型壺	□(13.7) 底4.9 高14.8 胴(15.0)	B+W+N'	にふい橙～黒褐	40	口縁部ナデ。底部外面一方のヘラケズリ。
23	壺	底5.0	B+W+N'	にふい赤褐	底部 100	外面胴部～底部ヘラケズリ。
24	壺	底5.8	B+R+W多+W'	橙～黒褐	底部 90	胴部外面ヘラケズリ。底部外面一方のヘラケズリ。
25	壺	□18.0	B+R+W	褐灰	胴部下半 30	口縁部ナデ。胴部内面ヘラナデ。
26	壺	□(20.0)	B少+R+W+W'	橙	口縁 25	口縁部ナデ。胴部内面ナデ。
27	壺	□(21.4)	B+R+W+橙	橙	口縁 25	口縁部面取り。口縁外面ヘラアテによる段をもつ。風化顯著。
28	壺	□(18.0) 胴(24.4)	B+W+砂少	にふい橙～黒褐	30	口縁部ナデ。胴部外面ヘラケズリ。
29	壺	底7.2	B+W+N'	灰褐	底部 80	胴部外面ヘラケズリ。底部外面一方のヘラケズリ。

30	ミニチュ ア	口(4.0) 高3.0	B+R+W少	におい黄橙	35	口縁部ナデ。底部外面ヘラケズリ。風化
31	支脚	上端5.4 下端9.8 高16.2	B+W	橙	100	No.1。裾部内外面ナデ。

第246号住居跡（第790図）

り—448・449Gridに位置し、南側は風倒木の撥乱によって失われている。長軸4.3m、短軸4.0mのほぼ正方形を呈し、主軸の傾きはN-102°-E、床面までの深さは38cmである。

カマドは東壁やや北寄りに構築され、左側の袖に竈を使用している。燃焼部は方形にしっかり掘り込まれている。煙道の残りは浅く、やや長い。柱穴は壁に接近して5基検出されている。いずれも浅く、最も深いもので22cmである。貯蔵穴はカマドの右側に設けられている。規模は56×44cm、深さは52cmで、底に近づくほど幅が狭くなっている。

出土遺物はいずれも破片であるが、底部全面ヘラ削り調整の須恵器帯が出土している。土器以外には福物石とすり石が1点出土している。

第247号住居跡（第792図）

り・ぬ—449・450Gridに位置する。形態は正方形に近く、規模は長軸5.7m、短軸5.2mである。主軸の傾きはN-12°-E、床面までの深さは30cmである。

カマドは北壁ほぼ中央に構築されている。袖は小さく造り出されており、燃焼部は明瞭に掘り込まれている。柱穴は4基（ピット1-4）検出され、その並びは比較的均等である。いずれも深く、40-70cmの掘り込みが確認された。なお、ピット5は本住居跡よりも新しい遺構と考えられる。壁溝は浅いが、全周する。貯蔵穴はカマドの右側に設けられている。規模は117×86cm、深さは72cmであり、段をもつ。

出土遺物は少なく、破片が多い。

第248号住居跡（第794図）

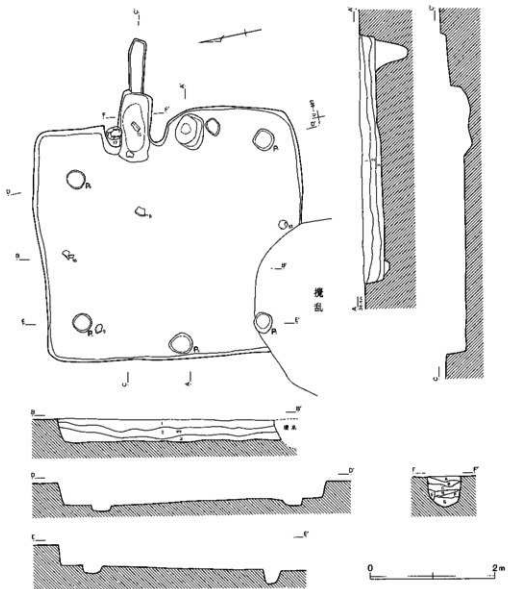
と・ち—449・450Gridに位置する。規模は長軸4.1m、短軸2.9mと東西に長い長方形を呈する。主軸の傾きはN-80°-E、床面までの深さは38cmである。

カマドは東壁中央に構築され、袖はわずかに認められる程度に造り出されている。燃焼部は四角く、深く掘り込まれている。ピットは2基検出されているが、いずれも浅い掘り込みで、住居に伴うものかどうかは不明である。壁溝はカマドのある東壁を除いて確認された。深さは10cmほどである。貯蔵穴は東南隅に設けられている。径50cm前後、深さ30cm、底は幅が狭まっている。

遺物は多くはないが、比較的残りがよい。貯蔵穴から完形の須恵器帯（3）が出土した。また、灰釉陶器の破片も出土している。

第249号住居跡（第796図）

る—451Gridに位置し、北半は排水溝にかかる。集落の中心からやや離れて検出された住居跡である。全体のおよそ1/2が確認された。南壁の長さが1.9mと小型の住居跡である。主軸の傾きは

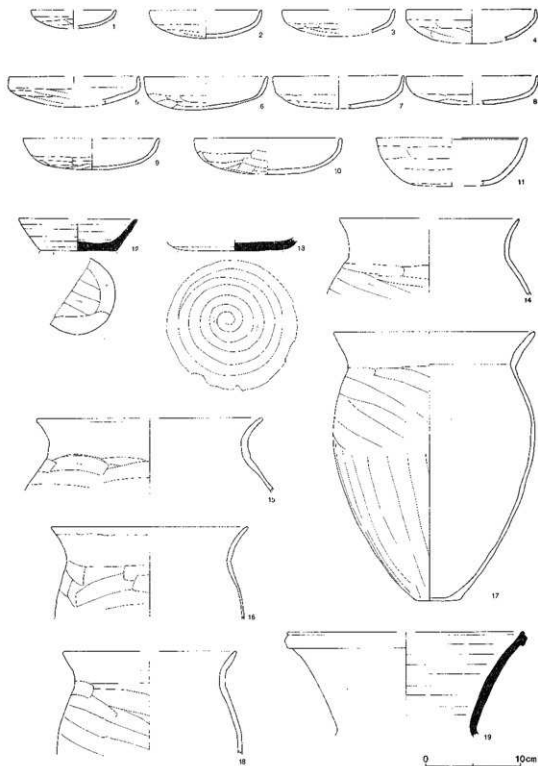


第246号住居跡

- 1. 赤褐色土 黄褐色土粒子(径2~3mm)を少量に、同ブロック(径5mm~1cm)を少量含む。炭化物粒子をごくわずかに含む。堅緻。
- 2. 黄赤褐色土 黄褐色土ブロック(径5mm~1cm)を少量に、同粒子(径2~3mm)を少量、炭化物粒子を若干含む。堅緻。基本的に2層と同じだが、黄褐色土ブロック(径5mm~1cm)を多く含む。赤褐色土をわずかに含む。堅緻。
- 第246号住居跡跡MDF
- A. 赤褐色土 黄褐色土粒子(径3~5mm)を少量、焼土粒子をわずかに含む。堅緻。
- D. 暗黄褐色土 赤褐色土を基本に黄褐色土粒子(径2~3mm)を少量、同ブロックを若干、焼土粒子をわずかに含む。堅緻。

- C. 暗赤褐色土 黄褐色土粒子(径2~3mm)を全体的にまばらに含む。焼土・炭化物粒子をわずかに含む。堅緻。
- D. 暗黄褐色土 2層によく似るが、黄褐色土粒子は少なく、同ブロック(径5mm~1cm)が多い。堅緻。
- K. 黄褐色土 暗赤褐色土を基本に焼土ブロック(径1~2cm)を多く含む。堅緻。
- F. 暗褐色土 暗赤褐色土を基本に焼土ブロック(径5mm~1cm)少量含む。堅緻。
- G. 黒灰色土 黄褐色土粒子(径1mm以下)を全体的に少量に含む。また灰・炭化物粒子を少量に、焼土粒子を少量含む。粘性なく軟弱。

第790図 第246号住居跡



第791图 第246号住居跡出土遺物

第246号住居跡 (第791図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口(9.0) 高(2.0)	B+W	にふい黄橙	20	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
2	坏	口(12.0) 高3.0	B+W	にふい黄橙	25	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
3	坏	口(12.0)	B+W	にふい橙	口縁 20	貯蔵穴。口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
4	坏	口(13.6)	B+W	にふい橙	20	カマド。口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
5	坏	口(13.6)	B+W	にふい橙	20	体部外面ヘラケズリ。風化。
6	坏	口13.2 高3.5	B+W+W' 少	にふい橙	85	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。風化顯著。
7	坏	口(14.0) 高(3.5)	B+W	にふい黄橙	25	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。風化顯著。
8	坏	口(14.0) 高(3.0)	B+W	橙	30	体部外面ヘラケズリ。風化顯著。
9	坏	口(14.4) 高3.3	B+W+W'	にふい橙	65	No.6。口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
10	坏	口15.4 高3.8	B+W	にふい橙	75	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
11	碗	口(16.0) 高(5.1)	B+W	橙	20	口縁端面取り。体部外面ヘラケズリ。風化顯著。
12	坏	口(12.6) 高3.4	W	灰	50	底部一方向のヘラケズリ後、周辺回転ヘラケズリ。
13	坏	底11.0	W+W'	灰	底部 100	No.7。底部右回転ヘラケズリ。
14	壺	口(19.0)	B+W+W'	橙	口縁 20	カマド。体部外面横方向のヘラケズリ。
15	壺	口(24.0)	B+R少+W+W'	明赤褐	口縁 20	No.3 カマド。体部外面ヘラケズリ。
16	壺	口20.8	B+R+W+W'	橙	口縁 30	No.5。口縁部外面輪轆み痕。
17	壺	口22.3 底4.8 高28.3 口径2.4	B+R少+W多+W'	橙	85	No.1 カマド。胴部外面上半斜方向のヘラケズリ。下半縦方向のヘラケズリ。
18	壺	口(18.2)	B+R少+W+W'	赤褐	口縁 30	胎土中の含有物量多い。
19	壺	口(25.0)	B+W多+W'+片少	黄灰	口縁 25	No.4。口縁部丁寧なナデ。

N-92°-Eで、床面までの深さは30cmである。覆土には多量の黄褐色の鉄分が含まれていた。

カマドは東壁に構築されている。袖は認められず、燃焼部はわずかにくぼんでいる程度である。

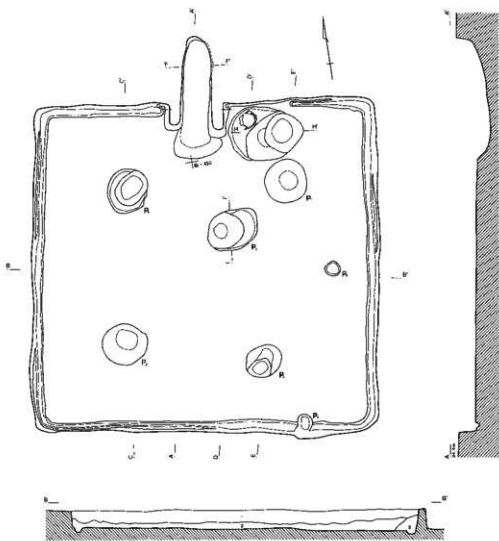
壁溝は南壁から西壁にかけてL字状に確認されている。柱穴は確認できなかった。

遺物の量は少ないが、完形に近い土器も出土している。

第250号住居跡 (第797図)

り-458・459Gridに位置する。長軸5.0m、短軸3.3mで、顕著な長方形を呈する。覆土は浅く、床面と確認面との差がほとんどないところもある。主軸の傾きはN-32°-Eである。

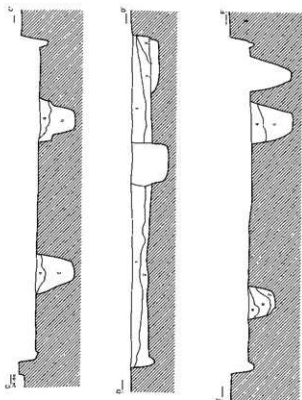
カマドは北壁中央やや東寄りに構築されているが、左袖はプランがはっきりしない。燃焼部は広い範囲で、浅く掘り込まれている。壁溝は北壁の一部を除いて確認された。カマドの両側にある土坑2基のうち、カマドの右側、北東隅に設けられたものは貯蔵穴と考えられるが、もう1基と住居跡との関連は不明である。その他の施設は確認されていない。



第247号住居跡

1. 暗褐色土 茶褐色土ブロックを多く含み、炭化物を若干含む。
2. 褐色土 茶褐色土ブロックを1層より少なく含み、少量の炭化物を含む。しまりよし。
3. 黒褐色土 少量の炭化物を含み、粘性・しまりが強い。茶褐色土ブロックをほとんど含まない。
4. 暗褐色土 茶褐色土小ブロックを多く、炭化物を若干含む。
5. 茶褐色土 茶褐色土ブロックを少量に含む。粘性・しまり弱い。
6. 暗褐色土 1層に比べて含まれるブロックが大きくなる。
7. 褐色土 粘性・しまり強く、ブロックをほとんど含まない。
8. 褐色土 茶褐色土ブロックを多く含む。
9. 褐色土 5層のブロックをほとんど含まなくなる。
10. 黄褐色土 茶褐色土ブロックを多く含む。粘性・しまり非常に強い。

0 2m

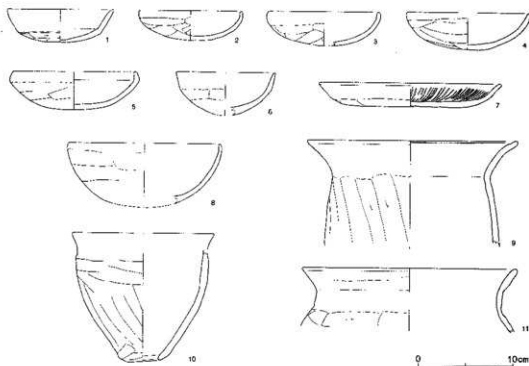


第247号住居跡カマド

- A. 暗褐色土 茶褐色土小ブロック多く含む。
 B. 暗褐色土 焼土粒子・ブロックを多めに含む、炭化物を少量含む。
 C. 赤褐色土 火を受け赤色化した暗褐色土で、炭化物を少量含む。
 D. 黒褐色土 灰を多量に含む、しまりのない土。炭化物を多く含む。
 E. 褐色土 茶褐色土粒子を多量に含む、粘性は強いがしまりなし。
 F. 暗赤褐色土 黄褐色土ブロックを基本に暗褐色土をわずかに含む。下部部分がよく焼けている。
 G. 暗茶褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子をわずかに含む。
 H. 暗黄褐色土 黄褐色土ブロックを主体に暗茶褐色土多量に含む。
 I. 黒灰色土 灰で構成され、焼土粒子をわずかに含む。しまりなし。

第247号住居跡貯蔵穴

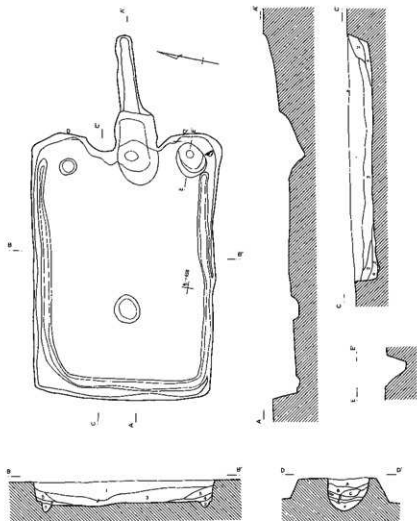
1. 暗褐色土 茶褐色土小ブロックを多く含む、炭化物を若干含む。
 2. 暗褐色土 1層のブロックをほとんど含まなくなる。
 3. 茶褐色土 茶褐色土ブロックを多く含む。粘性・しまり強い。
 4. 暗黄褐色土 炭化物を少量含む。粘性・しまり非常に強い。



第793図 第247号住居跡出土遺物

第247号住居跡 (第793図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	杯	□11.3 高3.5	B+R+W'	橙	65	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
2	杯	□11.0 高3.1	B多+W+W' 少	明赤褐	90	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。風化
3	杯	□11.8 高(3.8)	B+W少	橙	75	体部外面ヘラケズリ。風化顕著。
4	杯	□(13.0) 高3.9	B+W	にふい黄橙	50	体部外面ヘラケズリ。風化顕著。
5	杯	□(13.0) 高4.0	B+W+W'	にふい黄橙	25	体部外面風化著しくケズリ不明瞭。
6	杯	□(10.5) 高(4.5)	B+W+W'	橙	30	体部外面風化著しくケズリ不明瞭。
7	皿	□19.4	B+W	明赤褐	70	内面放射状点文。外面特に風化著しい。
8	碗	□(16.0)	B+W+W'	橙	25	体部外面風化著しくケズリ不明瞭。
9	鉢	□22.8	B+W+W'	赤褐～黒	口縁 70	口縁端部ヘラアテ。胴部外面ヘラケズリ
10	甌	底(3.5)	B+R少+W+W'	橙～黒	25	胴部外面ヘラケズリ。口縁部欠損。
11	鉢	□22.8	B多+R少+W	橙	口縁 100	貯蔵穴。口縁部外面輪痕み痕。



第248号住居跡

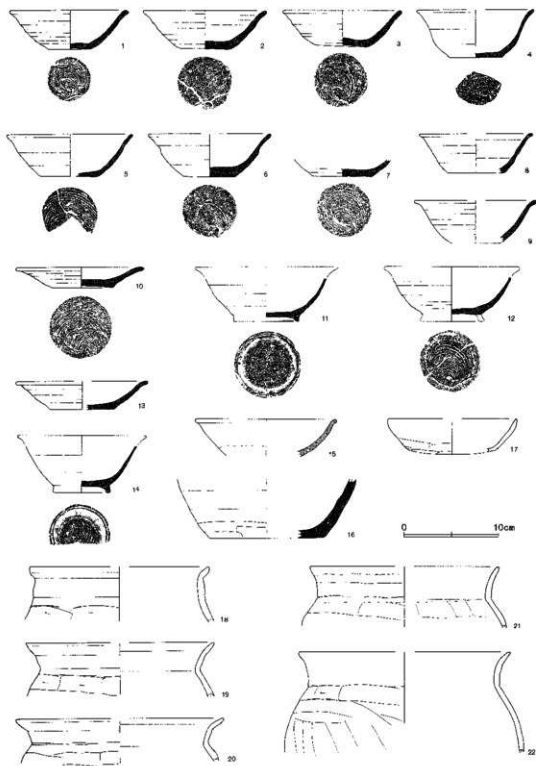
1. 茶褐色土 黄褐色土粒子(径3~5mm)を少量、焼土粒子を若干含む。炭化物粒子をわずかに含む。
2. 暗茶褐色土 黄褐色土ブロック(径5mm~1cm)を若干、焼土・炭化物粒子をわずかに含む。
3. 暗黄褐色土 茶褐色土を基本に黄褐色土ブロック(径5mm~1cm)を多く含む。焼土・炭化物粒子を少量含む。
4. 黄褐色土 黄褐色土ブロック(径1~2cm)を基本に茶褐色土を少量含む。

第248号住居跡カマド

- A. 暗褐色土 焼土小ブロック・炭化物を少量含む。
- B. 暗褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子を多めに含む。
- C. 暗黄褐色土 黄褐色土ブロックを多量に、焼土粒子を若干含む。
- D. 暗赤褐色土 2層に比べて焼土粒子が多くなる。
- E. 赤褐色土 赤色化した褐色土で灰を少量含む。
- F. 黒褐色土 灰・焼土小ブロックを多く含む。粘性・しまりに欠ける。



第794図 第248号住居跡



第795図 第248号住居跡出土遺物

第248号住居跡 (第795図)

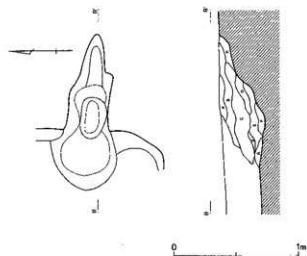
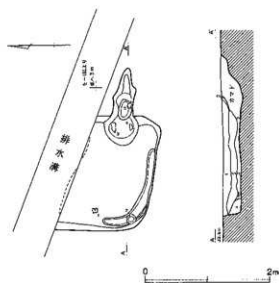
No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口12.4 底4.3 高4.1	B+W片	灰	90	底部回転未切り。
2	坏	口13.0 底5.2 高4.0	B多+W	にふい縄	85	カマド。底部回転未切り(風化して見えない)。酸化炭焼成。
3	坏	口12.4 底5.3 高3.8	B+W+W'	黒	100	№1。底部回転未切り。酸化炭焼成。
4	椀	口(12.4) 底(6.0) 高5.0	B+W+隈少	黄灰	30	カマド。底部回転未切り。風化顯著。
5	椀	口13.4 底(4.9) 高4.4	B+W	灰オリーブ	35	底部回転未切り。
6	椀	口(13.0) 底(5.4) 高4.5	B多+R多+W	にふい黄橙	70	床直。底部回転未切り。酸化炭焼成。
7	坏	底6.2	B多+W+隈少	灰	底部 100	底部回転未切り。
8	椀	口(12.0) 底(6.0) 高4.1	W	灰	15	底部回転未切り。
9	椀	口(13.0)	B少+W	灰	25	ロクロ成形。
10	皿	口13.6 底6.4 高2.1	B多+W	灰	50	底部回転未切り。
11	高台付椀	高台6.8	B+W	灰黄	45	底部回転未切り後、高台ナデつけ。風化
12	高台付椀	底6.3	B+W+隈	灰	65	カマド。底部回転未切り。高台部欠損。
13	坏	口(14.0) 高2.9	B+W	にふい縄	25	底部回転未切り。
14	高台付椀	高台6.0	B+R+W	にふい赤縄	45	床直。底部回転未切り後、高台ナデつけ胎土中の含有物量多い。
15	高台付坏	口15.0	B+W少	灰白	50	床直。灰輪陶器。灰輪付けかけ。
16	甕	底(12.0)	B+W+W'	灰	底部 25	カマド。底部多方向のヘラケズリ。
17	坏	口(13.7)	B+R+W少	橙	口縁 15	体部外面ヘラケズリ。風化。
18	甕	口(19.0)	B+R+W+W'少	縄灰	口縁 20	口縁部ナデ。胴部外面ヘラケズリ。
19	甕	口(20.0)	B多+R+W	橙	口縁 20	口縁部ナデ。胴部外面ヘラケズリ。
20	甕	口(22.0)	B多+R+W	にふい橙	口縁 20	カマド。胴部外面ヘラケズリ。
21	甕	口(20.0)	B多+R少+W	橙	口縁 30	カマド。口縁部外面輪積み痕。胴部内面ヘラナデ。
22	甕	口(22.9)	B多+R+W	橙	口縁 30	カマド。口縁部ナデ。

出土遺物は少なく、全て破片である。土器以外には、棒状の鉄製品が出土している。

第251号住居跡 (第799図)

と・ち—458・459Gridに位置する。西側のプランは確認されず、検出された東壁の長さは4.1mであった。確認面と床面との差がなく、覆土はほとんど存在しない。北壁寄り中央に焼土と炭化物を含んだ土層の堆積が認められた。柱穴は4基確認されたが、掘り込みは浅い。壁溝は東半でかろうじて残っている程度である。

出土遺物はほとんどなく、図示できる遺物は存在しなかった。

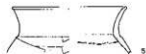
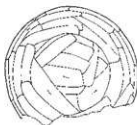
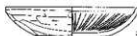
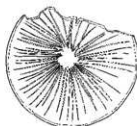


第249号住居跡

1. 茶褐色土 黄土・炭化物粒を少量含む。
2. 暗茶褐色土 黄土・炭化物粒を少量含む。焼土を含む。しまり良し。
3. 黄褐色土 比較的多数の黄土粒子と、少量の焼土・炭化物粒を含む。しまり良し。
4. 茶褐色土 炭化物・焼土・黄土粒子を少量含む。閉まり良し。

第249号住居跡カマド

- A. 黄褐色土 多数の黄土粒子及び少量の焼土粒を含む。
- B. 茶褐色土 多数の黄土粒子及び少量の焼土粒子・炭化物粒を含む。しまり良し。
- C. 暗褐色土 炭化物・焼土粒子を少量含む。
- D. 明褐色土 多数の黄土粒子及び少量の焼土・炭化物粒を含む。しまり良し。
- E. 赤褐色土 焼土・炭化物粒を多量に含む。
- F. 灰褐色土 多量の灰・炭化物粒と焼土を含む。しまりなし。
- G. 黄褐色土 多数の黄土粒子と少量の焼土を含む。しまり良し。

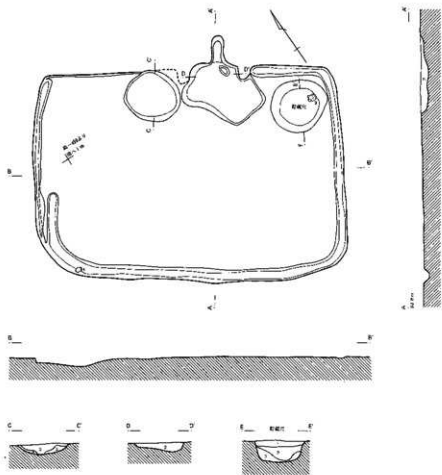


0 10cm

第796図 第249号住居跡および出土遺物

第249号住居跡 (第796図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口(12.0) 高(3.5)	W	灰白	10	口縁ナデ。体部外面ヘラケズリ。
2	坏	口13.2 高3.5	B多+W	(内)にふい黄橙 (外)にふい橙	95	No.2。
3	坏	口14.0 底8.8 高3.2	B多+W	橙	80	No.5。内面放射状暗文。平底。
4	坏	口16.6 高(6.1)	B+B+W	橙	30	No.3・4。内面暗文。
5	甕	口(12.0)	W	橙	口縁 20	口縁端部面取り。胎土中の含有物量多い。

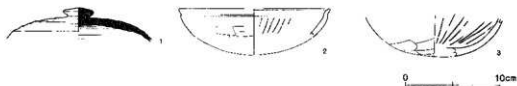


第250号住居跡

1. 暗褐色土: 粘性の大変強い層で、焼土粒子や炭化物を多く含む。
2. 淡褐色土: 淡褐色粘土と褐色土の混じった層。
3. 淡黄色土: 黄褐色粘土を主体とした層で、粘粒に富んだ褐色土を混入する。

0 2m

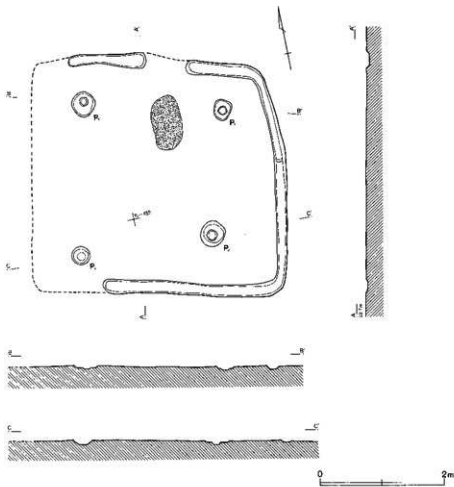
第797図 第250号住居跡



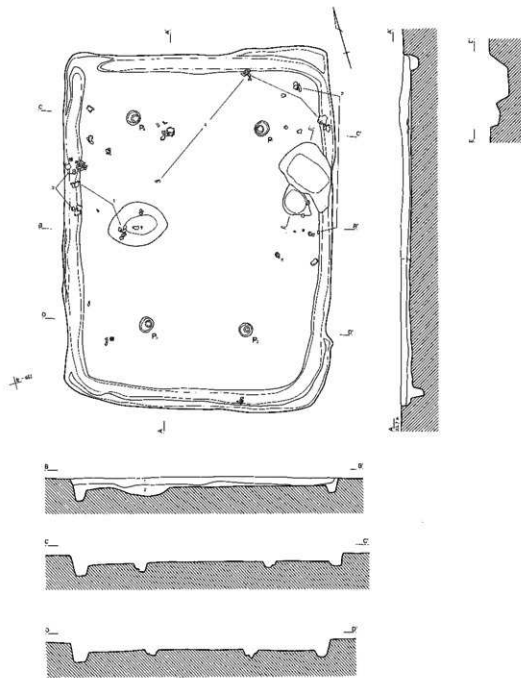
第798図 第250号住居跡出土遺物

第250号住居跡 (第798図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	蓋	つまみ3.2	砂	灰	70	No.2. 左回転ナズ。
2	坏	口(16.0) 高(4.9)	R	橙	10	内面暗文。
3	坏		B+R	橙～浅黄橙	40	No.1 貯蔵穴。内面暗文。



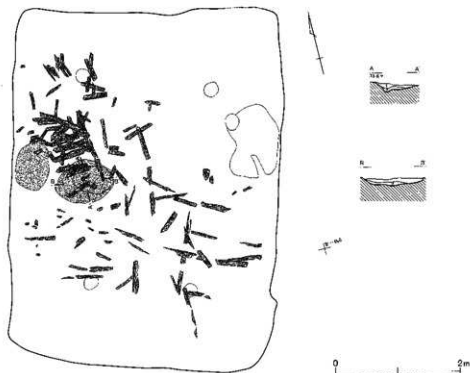
第799図 第251号住居跡



第252号住居跡

1. 暗褐色土 粘性の強い粒子の細かい層で、土器片・炭化物を含む。
2. 暗褐色土 炭化物・焼土粒を散じりの層。炭化材を含む。

0 2m



第801図 第252号住居跡炭化物出土状況

第252号住居跡 (第800・801図)

る・を—460Gridに位置する。長軸5.8m、短軸4.3mの長方形で、長軸の傾きはN-74°-W、床面までの深さは16cmである。覆土全面に焼土及び炭化物を含み、覆土除去後、床面直上から多量の炭化木材が検出された。焼失家屋と考えられる。

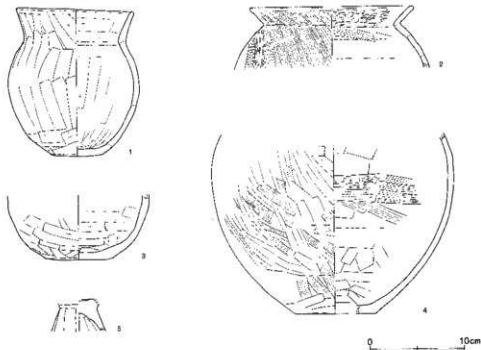
炉は西壁寄り中央に設けられている。楕円形を呈し、わずかにくぼんでいる。また炉の西側にも、焼土粒子が多量に堆積している範囲が認められた。柱穴は4基確認された。バランスよく配されているが、深さは10cm前後で廻り込みが浅い。壁溝は幅20cm、深さ15cmで、ほぼ全周する。東壁際に土坑が存在するが、住居との関連は不明である。

出土遺物は少なく、床面もしくは覆上から破片が広範囲で出土した。床面直上から鉄製鎌が出土しているのが注目される。

第253号住居跡 (第803図)

る—459・460Gridに位置し、東南隅は土坑に切られる。形態はやや歪んだ長方形で、規模は長辺5.0m、短辺3.3m、主軸の傾きはN-62°-Eである。床面と確認面の差はほとんどない。

カマドは東壁やや北寄りに構築されている。燃焼部はわずかに廻り込まれているが、軸は確認されなかった。柱穴はすべて深さ9-10cmと浅い。壁溝は検出された範囲すべてに認められたが、わ



第802図 第252号住居跡出土遺物

第252号住居跡 (第802区)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	小型甕	口12.4 底3.4 高15.6 胴13.9	B+R+W'	橙	60	No.22・27・35, 口縁端部外側ナデ, 風化顯著, 歪みあり。
2	甕	口17.4	B	橙~明赤褐	口縁 30	No.1・11, 口縁部ハケメ, 胴部ナデ, 胴部外面ハケメ, 胎土中の含有物多量。
3	甕	底7.4	W+砂	淡黄橙	30	No.30・31・34, 風化顯著。
4	甕	底(8.4)	B+W多+W'+砂多	橙	40	No.3・4・5・25, 胴部外面ヘラケズリ部分的にハケメの痕, 粗いミガキ。
5	高坏	脚基部(4.0)	B+W多+砂	橙	30	No.15。

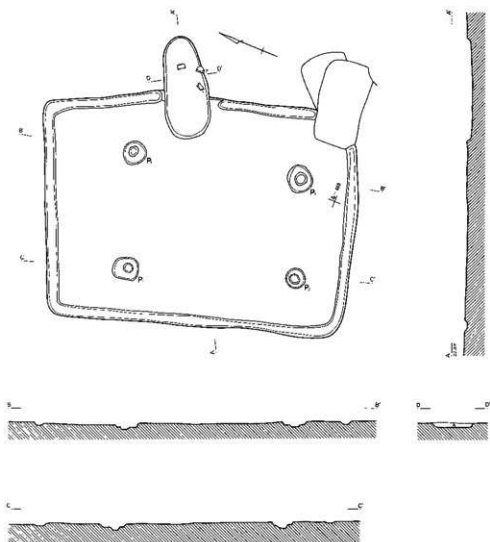
ずかな羅り込みしかなかった。

出土遺物はきわめて少なく、図示できるものは3点しかない。つまみをケズリだした土師器の甕(1)が出土している。

第254号住居跡 (第804区)

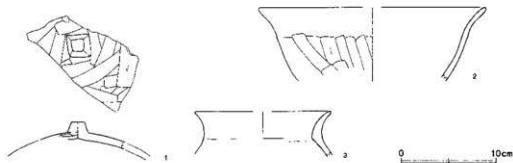
ぬ-459Gridに位置し、第255・256号住居跡と切り合うが、その新旧関係は不明である。規模は長軸5.0m、短軸3.8mのいびつな長方形を呈する。主軸の傾きはN-31°-W、床面までの深さは2cmと非常に浅く、ほとんど確認面との差がない。

カマドは北壁や西寄りに構築されている。袖はなく、燃烧部の掘り込みは浅い。ピットは2基検出されているが、住居跡との関係は不明である。照溝は確認された範囲で全周している。



第253号住居跡カマド

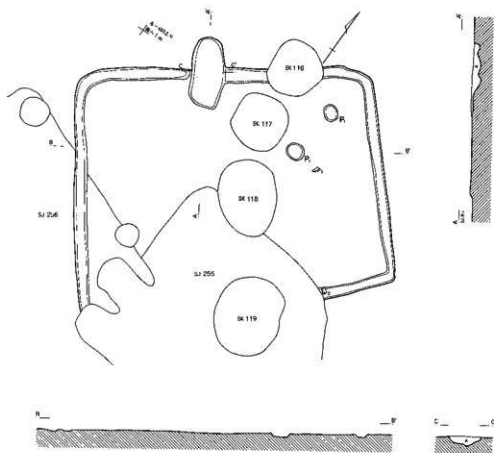
A. 暗赤褐色土 焼土粒子混じりで、粘性の強い砂子の粗い層。炭化物をわずかに含む。



第803図 第253号住居跡および出土遺物

第253号住居跡 (第803図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	蓋	つまみ1.3	B	橙	40	No.3 カマド。つまみ部四角く丁寧にケズリ出している。内面ヘラミガキ。
2	鉢	口(24.0) 高7.7	B+W	橙	口縁 20	No.2 カマド。体部内面ナデ。
3	壺	口(14.4)	B多+W	橙	口縁 30	カマド。外面風化。



第254号住居跡カマド

A. 暗赤褐色土 焼+灰子混じりで、粘性の強い灰子の粗い層。炭化物をわずかに含む。

0 2m

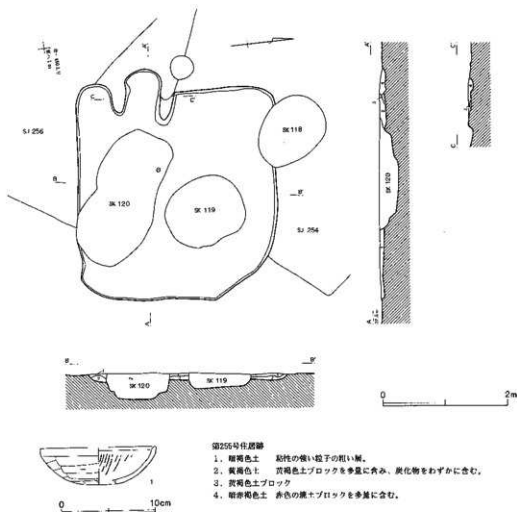


0 10cm

第804図 第254号住居跡および出土遺物

第254号住居跡 (第804図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	甕	口(22.0) 高4.6	B+R+W	橙	口縁 20	No.1.
2	甕	口(22.0)	B+R+W	(内)黒 (外)橙	口縁 10	No.2. 内面黒色を呈する。



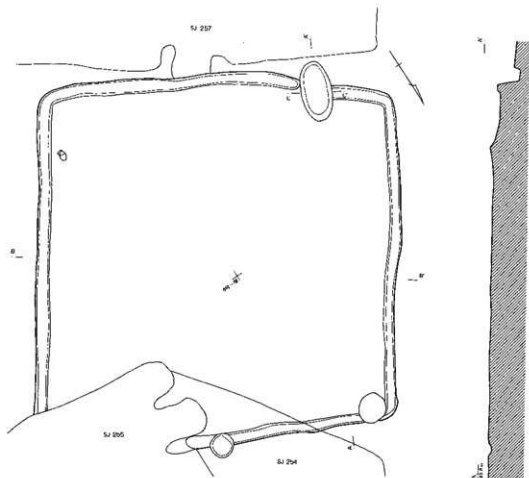
第805図 第255号住居跡および出土遺物

第255号住居跡 (第805図)

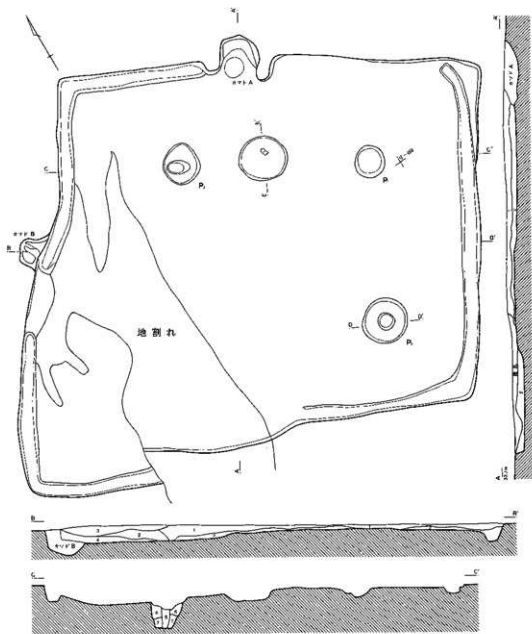
No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口(12.4) 高(4.0)	B+R+W	橙	20	内面略文。

第256号住居跡 (第806図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口(16.0) 高(2.9)	B+R多	橙	10	口縁端部ヘラアテ。風化顕著。



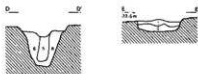
第806团 第256号住居跡および出土遺物



第257号住居跡

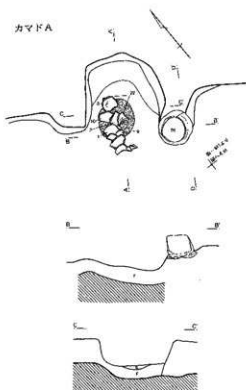
1. 暗褐色土 粘性に富む粒子の粗い層で、黄褐色土ブロックを多量に含む。
2. 暗赤色土 粘性の弱い粒子の粗い層で、炭化物をわずかに含む。
3. 褐色土 粘性に富む粒子の粗い層で、炭土を含まない。
4. 暗褐色土 粘性に富む粒子の粗い層で、炭土・炭化物をわずかに含む。
5. 黒色土 性灰。粘質の弱い粒子の粗い層。
6. 褐色土 粒子が粗く炭化物混じりの層。
7. 暗褐色土 炭化物をほとんど含まない。

0 2m



第257号住居跡炉跡

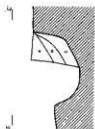
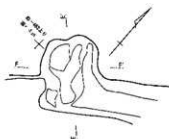
1. 暗褐色土 粘性の弱い粒子の粗い層で、炭土粒子をわずかに含む。
2. 赤褐色土 炭土ブロックを多量に混入する。粘性弱い。



第257号住居跡カマドA

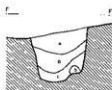
- A. 暗赤褐色土 焼土粒子をわずかに含み、炭化物をやや含む。
 B. 黒色土 炭化物層。粘性の強い粒子の細かい層。
 C. 赤褐色土 焼土層。固くしまりよく焼けている。
 D. 灰褐色土 炭化物灰層。粘性の弱いバラバラした層。
 E. 暗褐色土 粘性の強い炭化物・焼土粒子散じりの層。
 F. 黒色土 粘性の強い炭化物散じりの層。
 G. 赤褐色土 焼て、焚き口部。

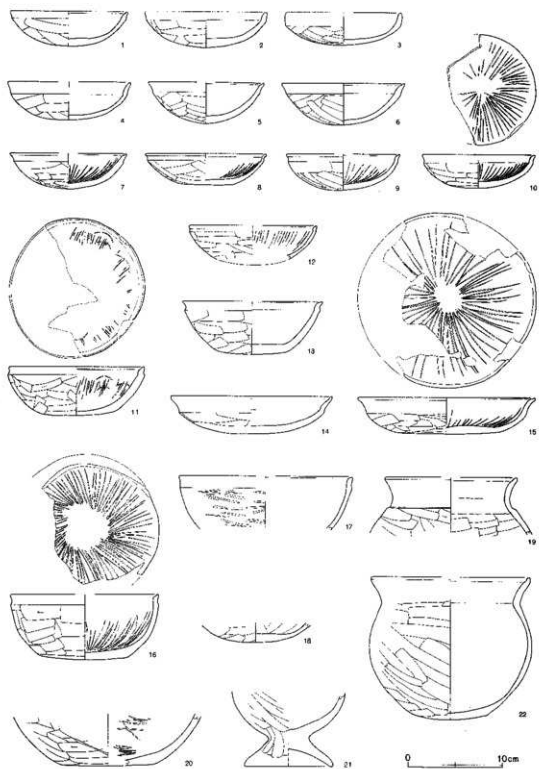
カマドB



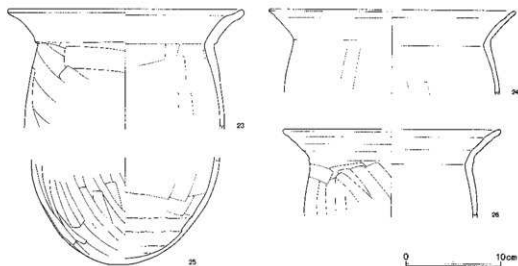
第257号住居跡カマドB

- A. 暗褐色土 粘性の強い粒子の粗い層で、炭化物を多量に含む。
 B. 赤褐色土 粘性の強い焼土層。固くしまる。
 C. 黒色土 粘性の強い暗褐色土を主体とし、炭化物を含む。
 D. 焼土ブロック





第808图 第257号住居跡出土遺物(1)



第809図 第257号住居跡出土遺物(2)

第257号住居跡(第808~809図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口12.4 高3.7	B+R	橙	70	№7 カマド。口縁端部ヘラアテ。
2	坏	口13.0 高3.7	B	橙	50	№5 カマド。体部外面ヘラケズリ。
3	坏	口(12.0) 高3.5	R	(内)浅黄橙 (外)橙	20	内面風化顯著。
4	坏	口(13.0) 高(4.0)	R	(内)におい赤褐 (外)橙	20	口縁部ナデ。
5	坏	口(12.2) 高4.3	B	橙	20	口縁端部ヘラアテ。
6	坏	口13.0 高4.4	B+W	橙	80	口縁端部ヘラアテ。体部内面ナデ。
7	坏	口(12.4) 高3.8	B	におい橙	20	口縁端部ヘラアテ。内面暗文。
8	坏	口13.0 底6.0 高3.3	B+R	橙	60	№1・2 カマド。底部外面ヘラケズリ内面暗文。
9	坏	口(12.0) 高3.8	B多+W	橙	40	№6 カマド。口縁端部ヘラアテ。内面暗文。
10	坏	口12.0 高3.5	R	橙	50	№3 カマド。内面放射状暗文。
11	碗	口14.0 底7.8 高5.1 胴14.4	B+R+W	橙	50	口縁端部ヘラアテ。体部外面ヘラケズリ内面放射状+螺旋状暗文。
12	坏	口(13.8) 高(4.2)	V+砂	橙	20	口縁端部強いヘラアテ面取り。内面暗文
13	碗	口(14.8) 底(7.4) 高5.5	B+W	橙	30	口縁部強いヘラナデ。底部外面ヘラケズリ。
14	坏	口17.0 高4.0	R+W	橙	50	体部外面風化。
15	坏	口18.8 高3.8	B	橙	60	口縁端部ヘラアテ。内面放射状暗文。
16	碗	口(15.8) 底9.0 高6.9	B多+W	橙	30	口縁端部強いヘラアテ面取り。体部外面ヘラケズリ。内面放射状暗文。
17	碗	口(18.4)	B+R多+W	明赤褐	20	口縁端部ヘラアテ面取り。体部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ。

18	椀		B+R+W	椀	底部 30	体部内面ナデ。底部外面ヘラケズリ。
19	壺	口(14.0)	B+R	椀	口縁 10	口縁端部ヘラアチ面取り。
20	壺	底10.0	W	(内)黒(外)椀	底部 40	胴部内面ヘラミガキ。
21	台付壺	底(8.4)	B+W	(胴内)浅黄褐色 (胴内)黒(外)橙 にふい椀	胴部 10	胴部内面ヘラナデ。胴部内面黒色。
22	壺	口(17.0) 底7.8 高15.0 胴(17.2)	B+W		20	№1・4 カマド。口縁端部ヘラアチ。胴部内面ナデ。
23	壺	口25.0	B+R	椀~にふい黄椀	上半部 40	カマド袖。
24	壺	口(26.0)	B+R多	椀	口縁 28	胴部外面風化によりケズリ不明瞭。
25	壺		B+R	椀	下半部 30	丸底。底部黒色。
26	壺	口(23.0)	B+砂多	椀	口縁 30	内面風化。

遺物は土器の破片が少量出土したにすぎない。同化できなかったが放射状の暗文のある坏小片が出土している。

第255号住居跡 (第805図)

ぬ—459Gridに位置し、第254・256住居跡、第118—120号土坑と切り合っている。規模は一辺3.5mほどの正方形に近い形態だが、若干歪んでいる。主軸の傾きはN—90°—W、床面までの深さは10—20cmである。

カマドは西壁南寄りに構築されている。両袖をもち、燃焼部はほとんど掘り込まれていない。その他の施設は確認されなかった。

出土遺物の量は少なく、すべて破片である。坏1点しか図示できなかった。

第256号住居跡 (第806図)

り・ぬ—459・460Gridに位置し、第254・255・257号住居跡と切り合っている。長軸6.0m、短軸5.8mの歪んだ長方形を呈する。長軸の傾きはN—27°—E、床面と確認面との差はほとんどない。

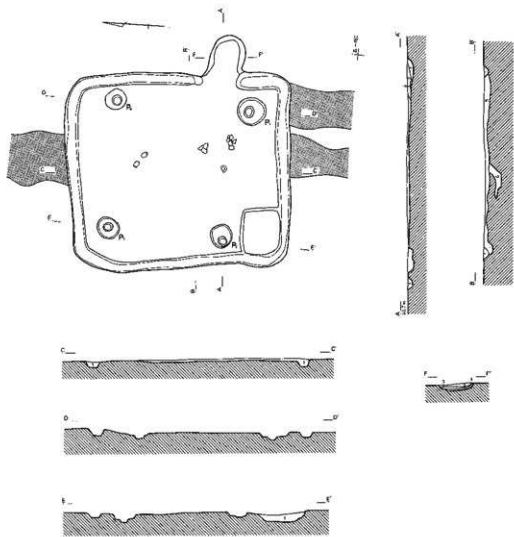
壁溝は全周するものと思われるが、掘り込みは大変浅い。南西隅近くにある楕円形の掘り込みと住居跡との関連は不明だが、カマドではないと思われる。その他の施設は検出されていない。

出土遺物はほとんどなく、土器片がわずかに出土しているにすぎない。

第257号住居跡 (第807図)

ち・り—459・460・461Gridに位置し、第256号住居跡とわずかに切り合っている。新旧関係は不明である。規模は長軸6.8m、短軸5.5mの大型の住居跡である。地震による液状化現象によって噴きだした下層の黒色土の帯(以下、黒色土帯と呼ぶ)により西南コーナーが大きく落ち込んでいる。主軸の傾きは、カマドAでN—31°—E、カマドBでN—50°—W、深さは15cmである。

カマドは北壁(A)と西壁(B)に構築されており、覆土の状況を見ると西壁がカマドBを切っているのが観察されるため、カマドBを使用した後、新たにカマドAを構築したものと思われる。カマ



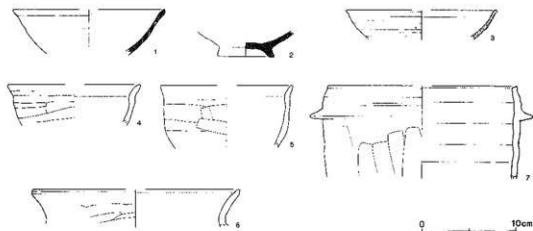
第258号住居跡

1. 褐色土 粘性の強い粒子の細かい層で、炭化物をわずかに含む。
2. 暗赤褐色土 焼土ブロック瓦じりで、粘性の弱いサラサラした層。
3. 黒色土 粘性の強い粒子の細かい層で、炭化物の純層である。
4. 淡褐色土 粘性の弱い粒子の粗い層で、炭化物を含まない。
5. 黄褐色土 粘床。
6. 黒色土 地盤の亀裂に堆積したもの。

※ 2~4はカマド土層



第810図 第258号住居跡



第811図 第258号住居跡出土遺物

第258号住居跡 (第811図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口(16.0)	B	(内)灰白(外)橙	30	風化。体部内外面下半黒色を呈する。
2	高台付碗	高台6.0	W	いふい橙	底部 100	底部回転糸切り後、高台ナデつけ。焼成不良。
3	高台付坏	口(16.0)		灰白	10	灰輪跡。
4	碗	口(14.0)	B+W	橙~いふい橙	30	口縁部内面帯状に黒色を呈する。
5	碗	口(14.0)	B+W	橙~いふい橙	20	口縁部内面黒色。
6	钵	口(22.0)	B多+W	橙	口縁 30	口縁部外面へラ工具痕、端部へアラアテ面取り。
7	羽釜	口(20.0) 胴(23.4)	B	灰白	口縁 10	口縁端部面取り。胎土中の含有物多量。

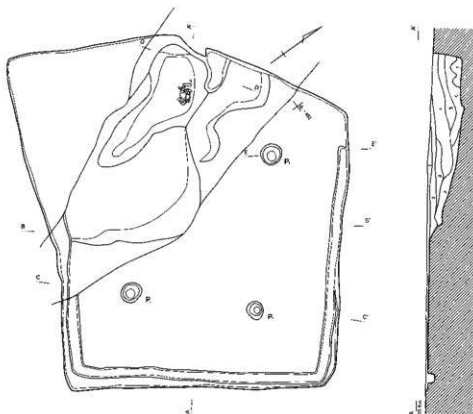
D Bの袖は地山の造りだしであり、右袖には堯が伏せた状態で置かれていた。焼土範囲が明瞭に確認された。また、ピット1と3との間にやや赤く焼けた面が検出された。焼土の堆積は非常に薄い、明らかに被熱した痕跡である。柱穴は3基検出されている。柱材は約40cm程度土中に入れられ、その底面は砂層に沈んでいる。壁溝は北壁の一部を除いて、すべての壁に巡っている。幅は30cm、深さは10cmである。貯蔵穴は確認されなかった。

出土遺物は比較的多いが、完形のものはない。出土土製品には土錘4点、紡錘車1点がある。

第258号住居跡 (第810図)

る-461Gridに位置する。黒色土帯を切って構築されている。規模は長軸3.6m、短軸3.1mと小さな長方形を呈する。主軸の傾きはN-98°Eで、床面と確認面との差はほとんどないが、貼床は明瞭で、非常に堅い。

カマドは東壁南寄りに構築されている。焼土部は浅く、いっきに掘り込まれている。柱穴は4基検出されたが、ピット3は黒色土帯にかかっており、プランは不明瞭である。壁溝は全周し、深さ

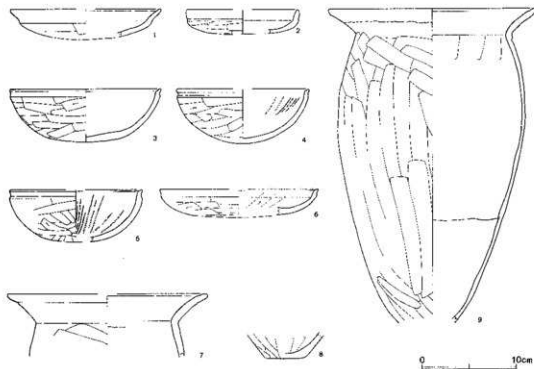


第259号住居跡

1. 暗褐色土 粘性の強い層で、炭化物を含む。粒子は粗い。
2. 暗黒褐色土 粘性に富んだ粒子の粗い層。
3. 暗褐色土 粘性はやや弱いが粒子の細かな層で、炭化物を含む。
4. 黒褐色土 粒子の粗い粘質の層で、黄土・炭化物をわずかに含む。
5. 薄 色 土 粘性の強い粒子の細かな層で、炭化物を含む。
6. 暗褐色土 粒子の粗い炭化物混じりの層で、黄土をわずかに含む。
7. 黄褐色土 粘性強い粒子の粗い層で、黄土ブロックを含む。
8. 暗褐色土 陥没。黄褐色土と黒色土の混合層。窪くしまる。
9. 黒 色 土 柱基。粘性の強い粒子の粗い層。
10. 薄 色 土 炭化物混じりの層で、粒子は粗い。

0 2m

第812図 第259号住居跡



第813図 第259号住居跡出土遺物

第259号住居跡（第813図）

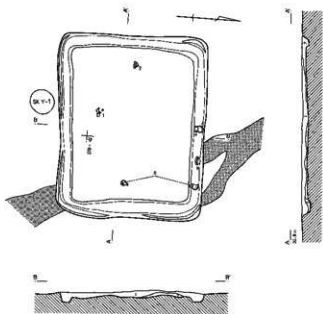
No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口(18.0) 高(3.2)	B+W	橙	10	カマド。口縁端部ヘラアテ。
2	坏	口(12.0) 高(2.6)	R	におい黄橙	10	カマド。
3	碗	口16.0 高5.6	R	橙～におい橙	50	口縁端部ヘラアテ面取り。
4	碗	口(14.0) 高5.7	B+W	橙	30	口縁端部ヘラアテ面取り。内面暗文。
5	碗	口(14.0) 高(5.5)	B+W	橙	20	口縁端部ヘラアテ面取り。内面暗文。
6	坏	口(16.6) 高(3.0)	B+R	橙	20	口縁端部ヘラアテ。体部内面ヘラナデ
7	釜	口(21.2)	W	橙	口縁 10	口縁端部ヘラアテ。
8	釜	底4.0	B+R	(内)におい黄橙 (外)におい橙	底部 50	底部外面ヘラケズリ。
9	釜	口21.8	R	橙	70	No.1 カマド。口縁端部ヘラアテ。

10cmと浅い。貯蔵穴は南西隅に設けられているが、浅く不明瞭である。

遺物は少なく、破片のみである。灰釉陶器の口縁片(3)が出土している。

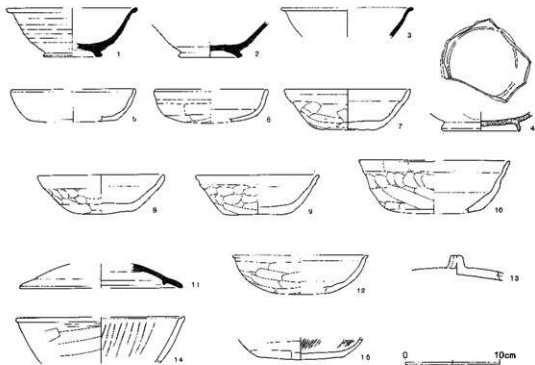
第259号住居跡（第812図）

ぬ・る—460・461Gridに位置し、西壁から南壁にかけて、黒色土帯による大きな攪乱をうけて



第260号住居跡

1. 暗褐色土 粘性の強い粘土の粗い層で、炭化物を含む。
 2. 暗黄褐色土 黄褐色土ブロック盛じりの層。



第814図 第260号住居跡および出土遺物

第260号住居跡 (第814図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	高台付椀	口(13.8) 底(6.0) 高5.2	N	灰	30	No.6. 風化顕著。作りが粗雑。
2	高台付椀	底8.4	R多+W	橙	底部 100	No.7. 底部回転糸切り。焼成不良。
3	环	口(14.0)	R多+W	橙	10	酸化炭焼成。風化顕著。
4	高台付椀	底8.0	B多+R	灰白	底部 80	No.2. 灰釉陶器。内面全体と外面一部に灰釉。环部内面に重ね履きの痕跡。
5	环	口(13.0) 高(3.4)	N	橙	30	貼床。風化顕著。
6	环	口(11.0) 高(3.8)	B	橙	20	貼床。外面風化。
7	环	口13.2 底5.8 高4.3	R	橙	100	No.1. 底部外面ヘラケズリ。
8	环	口13.4 底6.4 高4.1	R	橙	50	No.4-5. 体部外面ヘラケズリ後、上半指オサエ。
9	环	口13.9 底7.2 高4.1	R	橙	95	No.3. 体部外面ヘラケズリ後、上半指オサエ。
10	环	口(16.0) 高(5.6)	B+W	橙~にふい湯	20	体部外面ヘラケズリ後、上半指オサエ。
11	蓋	口(17.2)	N	灰白~にふい湯	20	貼床。風化顕著。焼成やや不良。
12	环	口(14.2) 高(4.1)	B+R	橙	20	内面ナデ。混入。
13	蓋	つまみ1.3	B+W	橙	30	貼床。つまみ前眼角ケズリ出している内面丁寧なナデ。混入か?
14	鉢	口(18.0)	B	橙	10	貼床。体部内面丁寧なナデの後、暗文混入。
15	鉢	底9.0	N	(内)橙 (外)黒	底部 100	貼床。内面暗文。混入。

いる。本来の住居の規模は、長軸4.6m、短軸4.5mの正方形に近い形態であったと思われる。主軸の傾きもN-54°-Wと推定される。貼床は広い範囲で検出され、非常に堅く、床面の検出は容易であった。

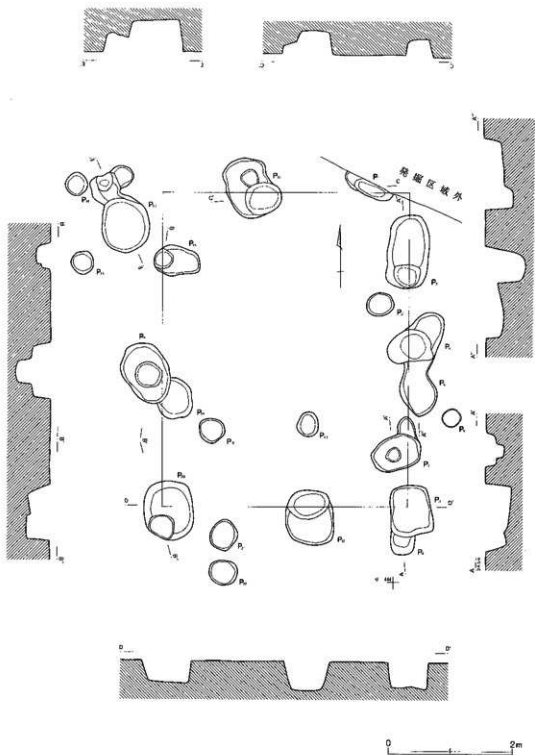
カマドは黒色土帯中から落ち込んだ状態で確認された。そのため原型をほとんどとどめていない。カマドがあったと思われる部分の黒色土中から、土師器甕が検出されており、カマドに伴うものと考えられる。柱穴3基は、検出状態もよく、柱痕跡が明瞭に確認された。壁溝は全周していたものと思われる。貯蔵穴は見あたらなかった。

遺物はほとんどが覆土中から浮いた状態で出土した。小さな破片が多く、量も少ない。

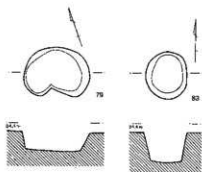
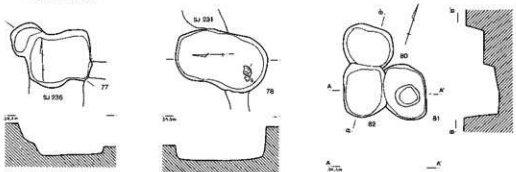
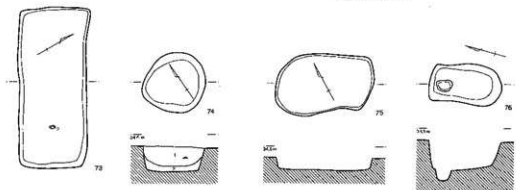
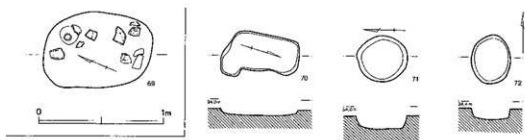
第260号住居跡 (第814図)

わ・か—461・462Gridに位置し、黒色土帯を切って造られている。規模は長軸3.0m、短軸2.5mと小型の住居跡である。覆土は10cm程で、貼床はよくしまっている。壁溝は27cm前後の幅で、全周している。カマドは見当たらない。

出土遺物は、おもに覆土や壁溝から出土しているが、貼床中からそれよりも古い時期の遺物が出土している。また、緑釉の底部が1点(4)出土している。



第815图 第6号掘立柱建物跡



第73号土坑

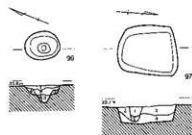
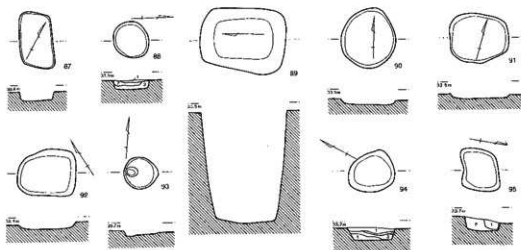
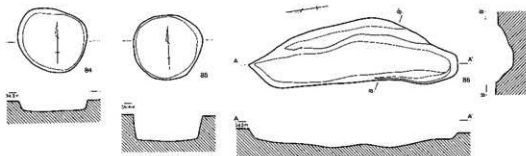
1. 暗茶褐色土 茶褐色土ブロックを多量に、炭化物を若干含む。しりじり、一度に埋まった土である。

第74号土坑

1. 暗褐色土 糖を多く含む、炭化物を少量含む。
2. 暗茶褐色土 茶褐色土粒子を多く含む、炭化物・黄土粒子を若干含む。

0 2m

第816図 第5発掘区土坑(1)



第87号土坑

1. 黒褐色土 焼土・炭化物粒子を含む。
2. 明褐色土 焼土・炭化物粒子を少量、黄色土粒子を比較的多く含む。しまりよし。
3. 暗赤褐色土 多量の焼土粒子・炭化物粒子を含む。しまりよし。
4. 黄褐色土 多量の黄色土粒子を含む。しまりよし。

第88号土坑

1. 赤褐色土 焼土・粘土ブロックを多量含む。
2. 黄褐色土 炭化物を少量含む。赤褐色土をブロック状に含む。しまりよし。
3. 黄褐色土 炭化物を少量含む。しまりよし。

第89号土坑

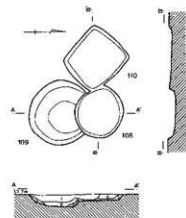
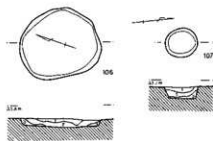
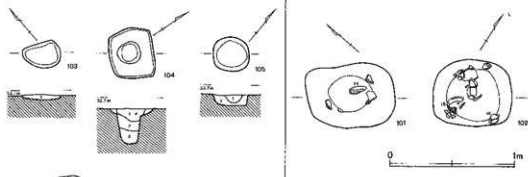
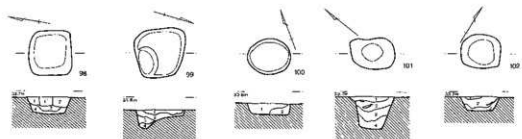
1. 明褐色土 黄色土粒子を少量含む。しまりよし。
- 1' 明褐色土 黄色土粒子および少量の火山灰を含む。しまりよし。
2. 暗褐色土 黄色土粒子および少量の炭化物・焼土を含む。しまりよし。
3. 灰褐色土 しまりよし。
4. 赤褐色土 炭化物粒子を少量含む。しまりよし。

第85・86号土坑

1. 暗赤褐色土 焼土粒子・炭化物粒子および黄色土粒を少量含む。粘性なく。しまりよし。
2. 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子および黄色土粒子をわずかに含む。やや粘性があり。しまりよし。
3. 赤褐色土 比較的多量の黄色土粒子と、少量の焼土を含む。粘性があり。しまりよし。
4. 暗黄褐色土 多量の砂と少量の褐色土・焼土を含む。しまりなく。砂質。



第817図 第5発掘区土坑(2)



第98-100号土坑

1. 明褐色土 黄色土粒子を少量含む、しまりよし。
- 1' 明褐色土 黄色土粒子および少量の火山灰を含む、しまりよし。
2. 暗褐色土 黄色土粒子および少量の炭化物・焼土を含む、しまりよし。
3. 黄褐色土 しまりよし。
4. 茶褐色土 炭化物粒子を少量含む、しまりよし。

第100-102-104号土坑

1. 暗茶褐色土 焼土粒子・炭化物粒子および黄色土粒子を少量含む、粘性なく、しまりよし。
2. 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子および黄色土粒子をわずかに含む、やや粘性があり、しまりよし。
3. 茶褐色土 比較的多量の黄色土粒子と、少量の焼土を含む、粘性があり、しまりよし。
4. 暗黄褐色土 多量の砂と少量の褐色土・焼土を含む、しまりなく、砂質である。

第103号土坑

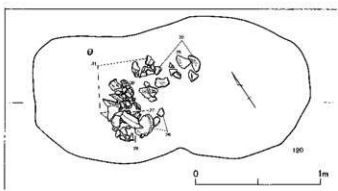
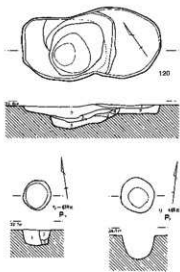
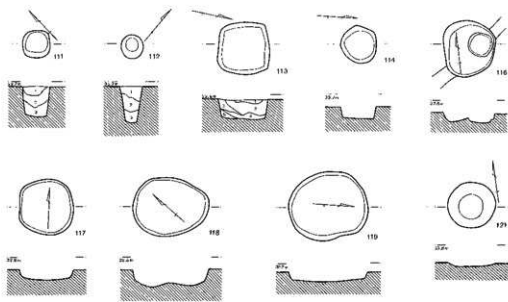
1. 黄茶褐色土 比較的多量の焼土・炭化物粒子を含む、しまりよし。

第106-107号土坑

1. 暗褐色土 黄色土・焼土・炭化物を少量含む、しまりよし、若干粘性あり。
2. 茶褐色土 黄色土粒子・炭化物粒子を少量含む、しまりよし、粘性あり。
3. 黄褐色土 多量の黄色土粒子を含む、粘性あり。

第108-109-110号土坑

1. 茶褐色土 多量の黄色土粒子と少量の焼土・炭化物粒子を含む、しまりよし。
2. 褐色土 多量の黄色土粒子を含む、しまりよし。
3. 黄褐色土 多量の黄色土粒子を含む、しまりよし、若干粘性あり。



第111-119号土版

1. 暗茶褐色土 焼上粒子・炭化物粒子および黄色土粒子を少量含む。粘性なく、しまりよし。
2. 黒褐色土 焼上粒子・炭化物粒子および黄色土粒子をわずかに含む。やや粘性があり、しまりよし。
3. 赤褐色土 比較的多量の黄色土粒子と、少量の焼土を含む。粘性があり、しまりよし。

ち 430g Pit11

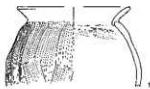
1. 暗褐色土 炭化物・焼上粒子・暗黄褐色土粒子をわずかに含む。
2. 暗褐色土 焼土粒子が1層よりやや多い。
3. 暗褐色土 暗黄褐色土粒子を多く含む。

第120号土坑

1. 暗黄褐色土 第26号仕取跡粘床、固くしまっている。
2. 暗褐色土 比較的粘性の強い層。粒子は粗い。
3. 赤褐色土 焼土ブロックを多量に含む。やや固い。
4. 焼土ブロック
5. 暗黄褐色土 粘性の強い粒子の粗い層で、炭化物を多量に含む。



SK 71



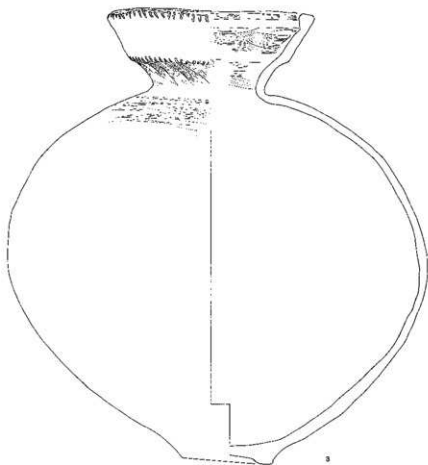
SK 73



0 10cm

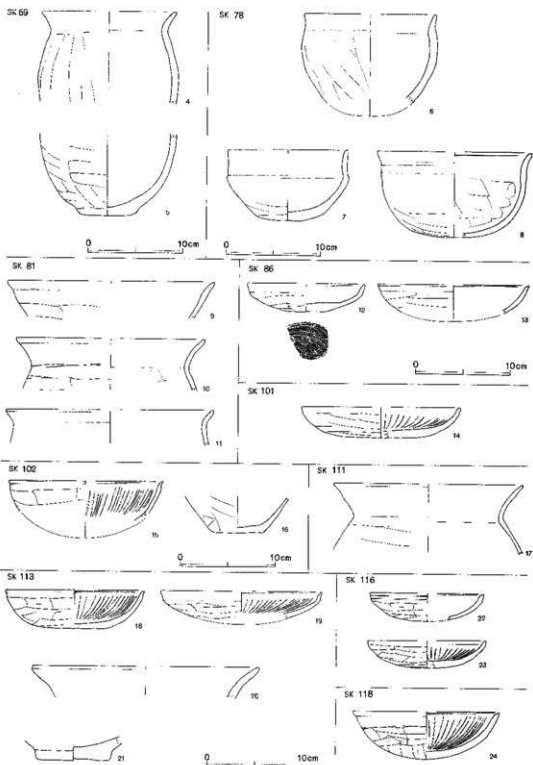
0 10cm

SK 72

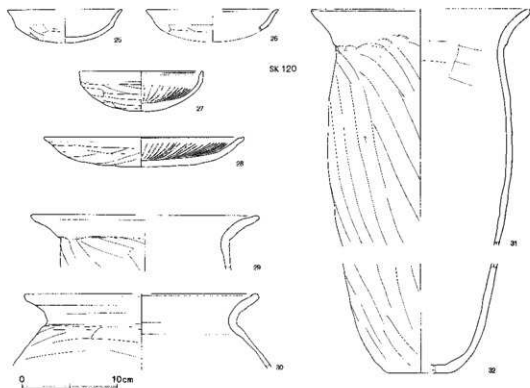


0 10cm

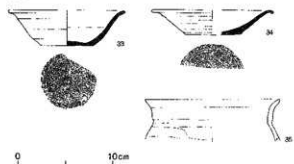
第820图 第5发掘区土坑出土器物(1)



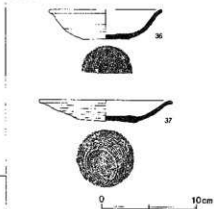
第821图 第5发掘区土坑出土文物(2)



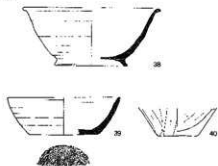
SK 75



SK 76



SK 77



SK 83



SK 85



第822图 第5号掘区土坑出土文物(3)

第5発掘区土坑 (第820~822区)

NO.	番 種	大きさ(cm)	胎 土	色 質	残存率(%)	備 考
1	小型甕	口(12.0)	B+W	橙~褐灰	胴部上半 30	SK71. 胴部内外面ハケメ。
2	罎	底2.2 胴7.7	B+W	褐	胴部100	SK73. 胴部内外面ヘラミガキ。
3	甕	口22.0 底9.5 高(47.5) 胴(44.5)	B+W+硬多	明赤褐~にぶい橙	30	SK72. 口縁端部横位ハケメ。口縁部外面上・下端にハケ杖工具による押圧。胴部外面ハケメ後、上半ミガキ、下半ヘラケズリ。凹み底。木炭痕。
4	小型甕	口(14.3)	B少+R+W	橙	胴部上半 20	SK69. 風化著しくケズリ不明瞭。
5	小型甕	底6.4	B+R+W+W'	にぶい橙	胴部上半 70	SK69. 胴部外面風化によりケズリ不明瞭。底部外面一方のヘラケズリ。
6	甕	口(14.0)	B+W+W' 少	橙~黒褐	20	SK78. 胴部外面風化著しくケズリ不明瞭。
7	甕	口(18.4) 高(9.0)	W+砂	にぶい橙	50	SK78. No.1. 体部外面下半ヘラケズリ。
8	甕	口12.8 高7.5	B+R+W少	にぶい橙	75	SK78. No.1-2. 底部外面ヘラケズリ。風化。
9	鉢	口(22.0)	B+R少+W	橙	口縁 15	SK81.
10	甕	口(20.0)	B+R少+W	橙	口縁 25	SK81.
11	甕	口(22.0)	B+R少+W+W'	橙	口縁 20	SK81.
12	坏	口(16.0)	B+W	明赤褐	口縁 20	SK86. 口縁端部ヘラアテ。
13	坏	口(12.4) 底(4.0) 高2.9	B+R+W	明赤褐~黒	40	SK86. 口縁端部ヘラアテ。底部静止糸切り。
14	皿	口(18.8) 高(3.2)	B+R少+W	橙	30	SK101. No.3-27. 内面暗文。
15	甕	口(16.2)	B+R少+W	橙	口縁 50	SK102. No.1. 口縁端部ヘラアテ。内面暗文。
16	甕	底5.4	B多+R少+W+W'	にぶい橙~灰褐	底部 100	SK102. No.5. 風化。胎土中の含有物量多い。
17	甕	口(20.0)	B+W+W'	にぶい橙	口縁 15	SK111. 胎土中の含有物量多い。
18	坏	口14.6 高4.0	B+W+W'	橙	60	SK113. No.3. 口縁端部ヘラアテ。内面暗文。
19	皿	口(17.0)	B+W	明赤褐	口縁 25	SK113. No.3. 口縁端部ヘラアテ。内面暗文。
20	甕	口(24.0)	B+R+W	橙	口縁 10	SK113. 口縁部ナデ。
21	甕	底(7.8)	B+R少+W+W'	橙	底部 25	SK113. 凹み底。
22	坏	口(12.0)	B+W	橙~黒	30	SK116. 口縁端部ヘラアテ。
23	坏	口(12.4) 高(2.9)	B+R少+W	明赤褐	50	SK116. 内面放射状暗文。
24	坏	口(15.4) 高5.0	B+R+W	橙	35	SK118. 口縁端部ヘラアテ。内面暗文。
25	坏	口12.0 高3.5	B+R+W+W'	橙	65	SK120. No.2.
26	坏	口(14.0)	B多+W	明黄褐	口縁 30	SK120. 口縁端部ヘラアテ。
27	坏	口13.2 高4.2	B+R+W	橙	100	SK120. No.36. 口縁端部ヘラアテ。内面暗文。
28	皿	口21.6 高3.2	B+W+W'	にぶい橙~黒	60	SK120. No.13-21. 口縁端部ヘラアテ内面暗文。

29	礎	口(24.2)	B+R+W+W'	礎	口縁 30	SK120, №24.
30	壺	口(25.0)	B+R+W+W'	にふい礎	口縁 30	SK120, №1-7.
31	礎	口(23.2) 胴(19.5)	B多+R+W+W'	にふい礎	30	SK120, №6-7-16.
32	礎	底(7.0)	B+W多+W'	にふい礎	胴部下半 40	SK120, №18-20.
33	坏	口(12.2) 底(5.6) 高3.7	B+W	灰黄	65	SK75. 底部回転糸切り。胎土中の含有物量少ない。
34	皿	口(13.0) 底(6.2) 高2.6	W+W'	暗灰黄	30	SK75. 底部回転糸切り。
35	壺	口(14.2)	B+W	灰褐	口縁 15	SK75.
36	坏	口(12.0) 底(5.0) 高3.1	W+W'+最少	灰	40	SK76. 底部回転糸切り。
37	皿	口14.2 底6.0 高2.3	W+W'	青灰	80	SK76. 底部回転糸切り。
38	高台付碗	口(14.6) 高8.1 高台(7.8)	B+W+片少	黄灰	25	SK77. 底部回転糸切り後、高台ナデつけ。風化。
39	坏	口(12.0) 底(7.2) 高3.9	W多+W'	暗青灰	30	SK77. 底部回転糸切り。
40	壺	底4.4	B+R+W+W'	礎	底部 100	SK77. 底部一方向のヘラケズリ。
41	高台付碗	高台(8.0)	B少+W+W'	灰	底部 20	SK83. 高台ナデつけ。高台端部ヘラアテ。
42	高台付碗	高台6.4	B多+W	灰	底部 100	SK85. 底部回転糸切り後、高台ナデつけ。風化。

(2) 掘立柱建物跡

第6号掘立柱建物跡 (第815図)

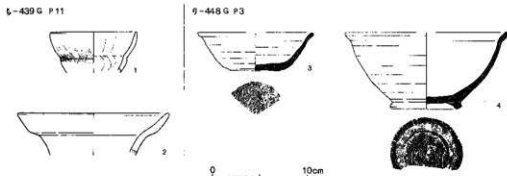
り・ぬ—443・444Gridに位置する。規模は2間(394cm)×3間(500cm)で、柱間は一定していない。特に、ピット13は定位置からおおきくはずれており、歪みが大きい。建て替えもしくは切り合っている可能性もあるが、明確にとらえることはできなかった。長軸はほぼ真北を向いていると考えられる。柱穴の形態は円形が基本だが、その形状はさまざまである。主柱穴に近接して数基のピットが検出されたが、掘立柱建物跡に伴う遺構かどうかは不明である。掘り方はまちまちで、深さは22～64cmである。遺物は出土しなかった。

(3) 土坑・ピット

第5発掘区からは53基の土坑と、十数基のピットが検出されている。土坑は形態・規模ともにさまざまで、出土遺物の時期も広範囲にわたっている。特徴的なものを数基あげておくことにする。なお、遺物は土坑番号順ではなく、おおまかに時期を追って掲載した。

第72号土坑 (第816図)

へ—445Gridに位置する。80×64cmの楕円形を呈し、深さは16cmである。小さく浅いが、五領期の大型壺が出土している。



第823図 第5発掘区ピット出土遺物

第5発掘区ピット(第823図)

NO.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	小型丸底	口(9.2)	B+R少+W+W'+砂少	黄橙~橙	口縁 15	ち-439 Pit11. 頸部外面ハケメ(7本/8mm). 胴部外面ヘラケズリ後ナデ内面滑ナデ.
2	壺	口(16.0)	B+R+W+W' 多+砂多	橙	口縁 20	ち-439 Pit11. 複合口縁. 風化により調整不明.
3	環	口(12.2) 底(5.2) 高4.0	B+W	灰	30	リ-448 Pit3. 底部回転糸切り.
4	高台付物	口(17.3) 高8.0 高台7.6	B+R多+W+W'	灰~明赤褐	50	リ-448 Pit3. 底部回転糸切り後. 高台ナデつけ.

第73号土坑 (第816図)

へ-445Gridに位置する。規模は257×108cm、深さ38cmである。東西方向に長い長方形を呈し、覆土は1層で、一度に埋まった状態を示している。遺物は土師器冴の体部が1点出土したのみである。その形態や覆土から、墓塚である可能性も考慮されよう。

第78号土坑 (第816図)

ぬ-449Gridに位置し、第231号住居跡に切られている。規模は147×84cm、深さは40cmである。比較的残りのよい土師器が覆土から出土している。

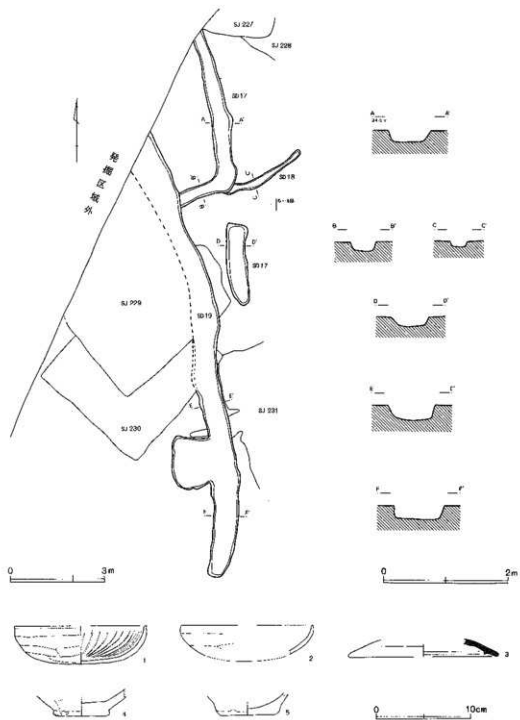
第120号土坑 (第819図)

ぬ-459Gridに位置する。222×98cmの不整楕円形を呈し、深さは35cmである。第256号住居跡の床下から検出されている。覆土には焼土や炭化物が多量に認められ、遺物の量も多い。住居のカマドである可能性があるが、調査時にそれを明確にはできなかった。

(4) 溝

第17・18号溝 (第824図)

第17号溝は、る-447・448Gridに位置し、第19号溝に接する。北側は調査区域外にかかる。南北方向に延びる部分では一部途切れている。コーナーから西方向にのびる部分の幅はやや狭いが、深さ

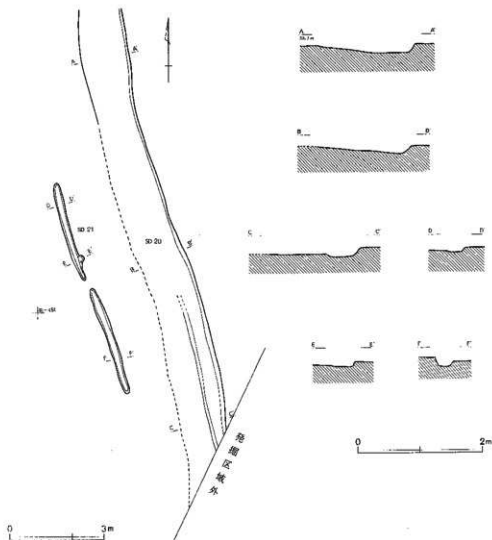


第824図 第17-19号溝および第19号溝出土遺物

はあまり変化がない。コーナーから逆に東へ延びる溝を第18号溝とした。深さ10cmと浅く、細い。

第19号溝 (第824図)

NO.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口(14.0)	B+W少	浅黄橙	25	口縁部へラアテ。内面滑文様。
2	坏	口(14.0)	B+W'	橙	口縁 25	風化若しく調整不明瞭。
3	蓋	口(16.0)	B少+W	灰	20	天井部欠損。
4	甕	底(5.4)	B+W'	浅黄橙	底部 70	胴部外面へラケズリ。底部外面ナデ。
5	甕	底(6.0)	B+W	淡黄	底部 50	底部外面ナデ。



第825図 第20・21号溝



0 10cm

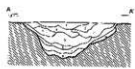
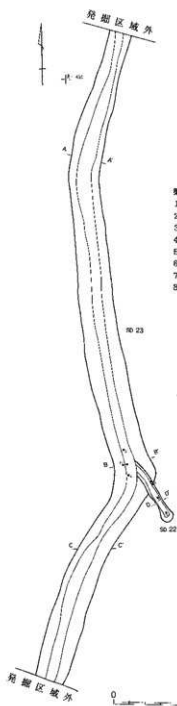
第826図 第20号溝出土遺物

第20号溝 (第826図)

NO.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	杯	口(12.0) 底(5.0) 高3.9	W+W'	青灰	35	底部回転未切り。
2	杯	底(5.8)	B少+W+W'	灰黄	底部 25	底部回転未切り後、周辺回転ヘラケズリ
3	杯	口(11.6)	B少+W+W'	橙	口縁 25	体部外面ヘラケズリ、風化顕著。

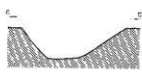
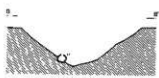
第23号溝 (第828図)

NO.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	杯	口11.2 底5.2 高3.3	W+W'+針	灰	45	No.4. 底部回転未切り。
2	杯	口(12.4) 底(5.0) 高3.9		灰白~灰	45	底部回転未切り。火葬。
3	杯	口12.0 底5.2 高3.8	B+W+W'	灰	65	No.1. 底部回転未切り。火葬。
4	杯	口(12.6) 底(6.0) 高3.9	B+W+W'+器	灰	20	底部回転未切り。
5	杯	口(13.6) 底(7.0) 高3.8	B少+W+W'	灰	25	底部回転未切り。
6	杯	口(13.4) 底(6.4) 高(3.6)	B+R+W少+W' 少	にぶい黄褐	45	底部回転未切り (風化により見えない)
7	皿	口14.4 底6.1 高2.4	B少+W	灰	50	底部回転未切り。
8	高台付碗	口14.1 高5.8	W+W'+器少	灰	75	底部回転未切り後、高台ナデつけ。
9	高台付碗	高台7.8	W+W'	灰オリーブ	30	底部回転未切り後高台ナデつけ、高台端部ヘラアテ。風化。
10	高台付碗	高台7.0	B+W+W'	灰	高台部 100	底部回転未切り後高台ナデつけ。
11	高台付長 頸壺	胴19.0 高台12.8	B+W多	灰	胴部 100	No.2. 胴部内面指オサエ。高台ナデつけ。
12	壺	底(14.4)	B多+R+W	灰白	底部 50	底部外面ヘラケズリ。
13	杯	口(13.4) 高3.2	B少+W	橙	30	口縁部~体部内面ナデ。体部外面ヘラケズリ。
14	杯	口(11.4) 高3.7	B+W+W'	灰黄褐~黒	25	口縁部ナデ。混入。
15	杯	口12.6 高4.2	B+W	明赤褐	90	口縁端部ヘラアテ。風化顕著。混入。
16	壺	口(14.0)	B+R少+W+W'	にぶい橙	口縁 30	胴部外面ヘラケズリ。混入。
17	壺	底5.0 孔1.3	B多+W	橙	底部 100	胴部外面ヘラケズリ。混入。
18	壺	口(22.0)	B+R少+W+W'	橙	口縁 20	口縁端部ヘラアテ。胴部外面ヘラケズリ混入。

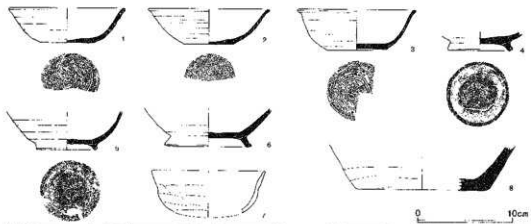


第23号溝

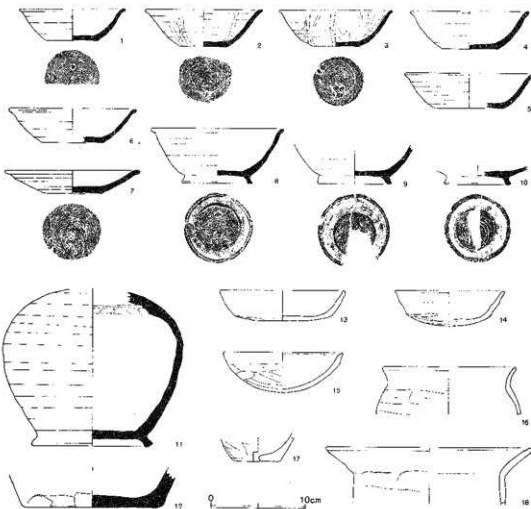
1. 黄褐色土 黄褐色土を多量に含む。しまりよし。
2. 茶褐色土 白色土取子(火山灰)・焼土・黄褐色土を少量含む。しまりよし。
3. 明褐色土 黄褐色土および茶褐色土取子からなる。少量の焼土を含む。
4. 暗褐色土 焼土・黄褐色土取子(1層に類似)を含む。しまりよし。
5. 褐色土 焼土・炭化物粒子を少量、黄褐色土をブロック状に含む。しまりよし。
6. 灰褐色土 粘土層。黄褐色土・焼土を少量含む。
7. 灰白色土 粘土層。黄褐色土・焼土を少量含むが層より少ない。
8. 灰白色土 7層の粘土と酸化鉄を含む。少量の火山灰を含む。粘性強い。



50 22



50 23



第828回 第22・23号清出土遺物

第22号溝 (第828図)

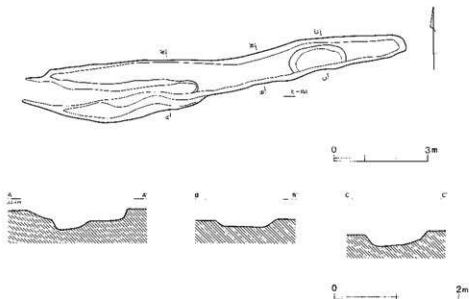
NO.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口(12.0) 底(5.8) 高3.6	B+R少+W	灰	40	No.2. 底部回転未切り。
2	坏	口(12.8) 底(6.1) 高3.7	B+R少+W	灰	30	底部回転未切り。
3	坏	口(12.5) 底6.2 高4.2	B少+W	暗青灰	35	底部回転未切り。
4	高台付甕	高台6.8	B+W	にぶい黄褐色	底部 100	底部回転未切り後、高台ナデつけ。
5	高台付甕	高台6.4	B+R多+W	灰白~橙	50	No.3. 底部回転未切り後高台ナデつけ 酸化皮焼成。黒化顕著。
6	高台付甕	高台9.2	B+R多+W多+磁	にぶい黄橙	高台部 100	No.4. 底部回転未切り後、高台ナデつけ 酸化皮焼成。
7	坏	口(12.0)	B+W+W'	橙	20	体部外面ヘラケズリ。
8	甕	底(13.6)	W+磁	灰	底部 20	脚部外面下位ヘラケズリ。

第19号溝 (第824図)

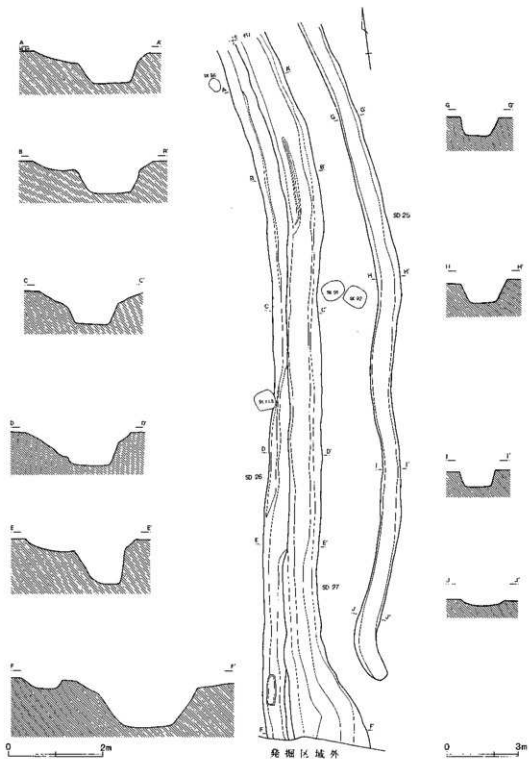
る-448・449Gridに位置する。第229・230号住居跡と切り合っており、一部プランがはっきりしないところがある。南北に延び、幅は60-70cm前後である。深さは25cm前後で、ほぼ一定である。南寄りの部分が方形に突出しているが、性格は不明である。

第20・21号溝 (第825図)

ともに、りーる-451Gridの間に位置し、南北に延びている。第20号溝は西側の壁の痕跡がほとんどないが、南側の一部では幅25cmと幅狭く掘り込まれているのが確認された。

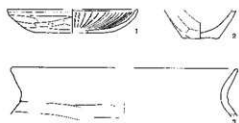


第829図 第24号溝

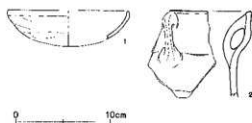


第830号 第25~27号沟

SD 25



SD 26 27



第831図 第25～27号溝出土遺物

第25号溝 (第831図)

NO.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口(13.8)	B+W+W'	橙	25	口縁端部ヘラアテ。内面繪文。
2	甕	底(4.0)	B+W+W'	にぶい橙	底部 30	胴部外面ヘラケズリ。
3	甕	口(24.0)	B+W+W'	橙	口縁 15	胴部外面ヘラケズリ。

第26・27号溝 (第831図)

NO.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口(12.8)	B+R少+W+W'	にぶい橙	口縁 30	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
2	内耳土器		B+W+W'	灰		

第21号溝は、第20号溝と並行に延びているが、概して浅く(深さ5～15cm前後)細い溝で、一部途切れて検出されている。

第22・23号溝 (第827図)

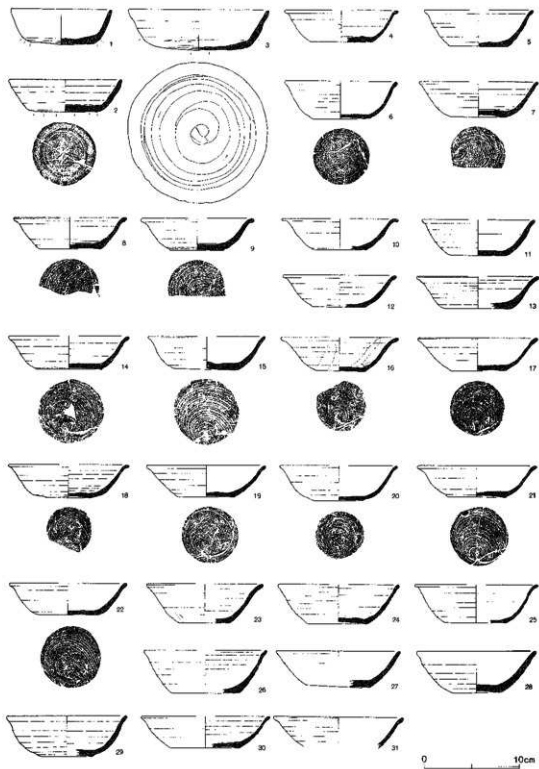
ほ～を—453・454Gridに位置し、第23号溝は南北に屈曲しながら調査区を横切っている。幅は2.0～2.5m、深さは60cm前後で、南へ向かってわずかに浅くなる。第22号溝は第23号溝の屈曲した部分に接し、底面のレベルはあまり変化はない。両者はほぼ同時に機能していたものと推定される。

第24号溝 (第829図)

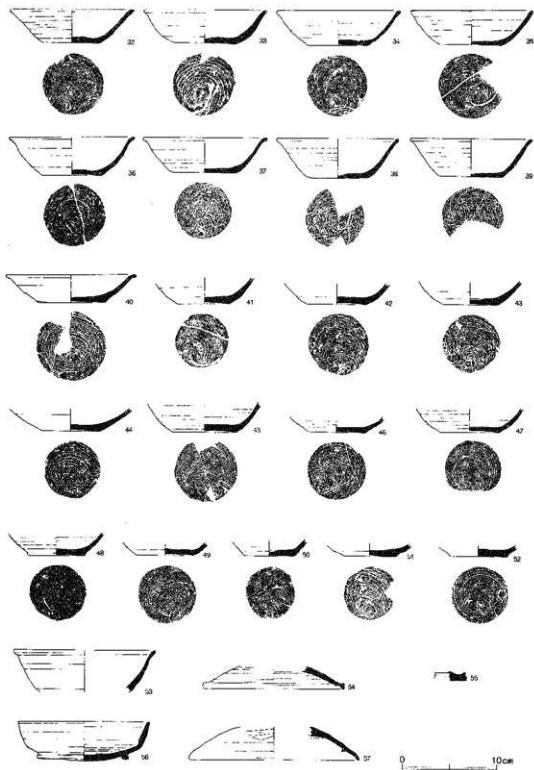
へ・と—454～456Gridに位置し、東西に延びる。幅は西側で広くなり、中央はやや深く掘り込まれている。

第25号溝 (第830図)

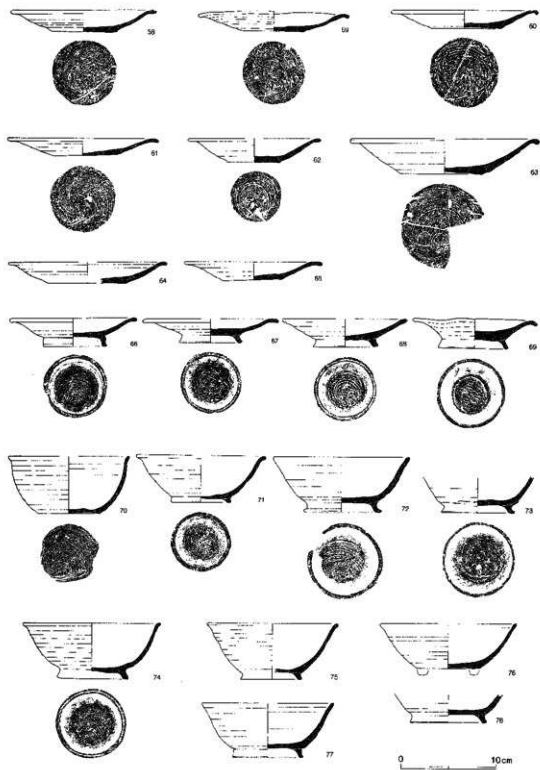
へ～を—456Gridに位置し、南北方向に延びる。幅は0.7～1.0m、深さは10～45cmと南へ向かって浅く傾斜している。



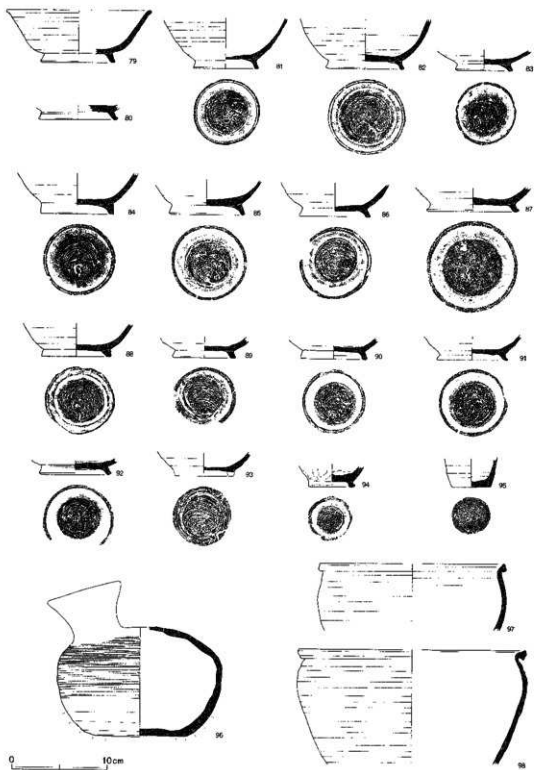
第832回 谷出土遺物(1)



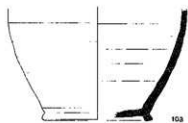
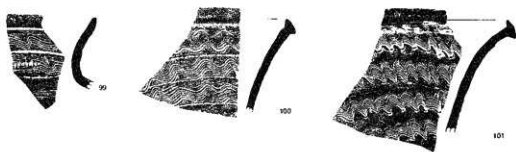
第833图 谷出上遺物(2)



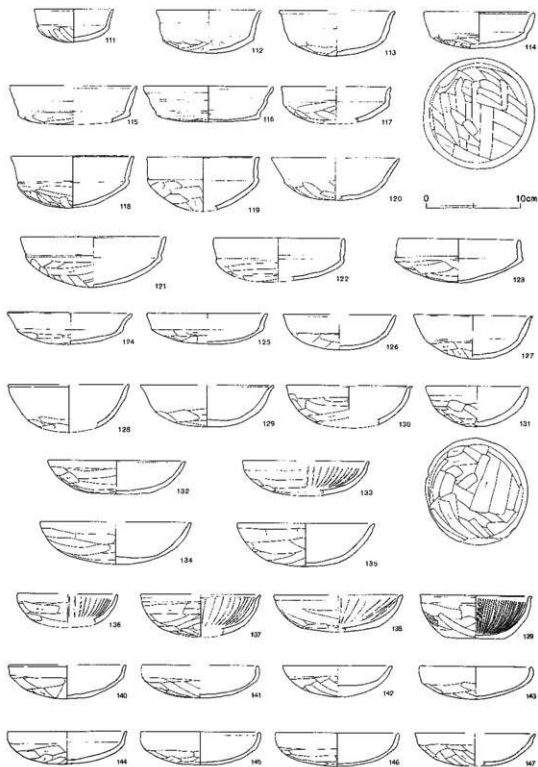
第834圖 谷出土遺物(3)



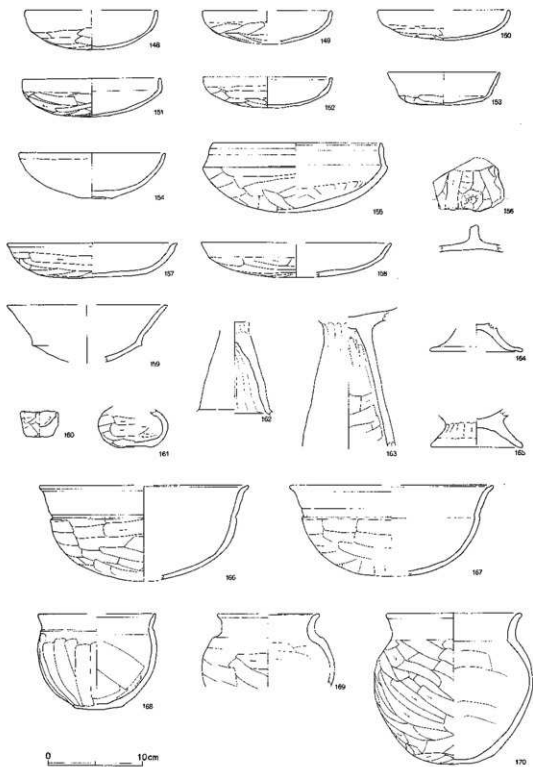
第835岡 谷土遺物(4)



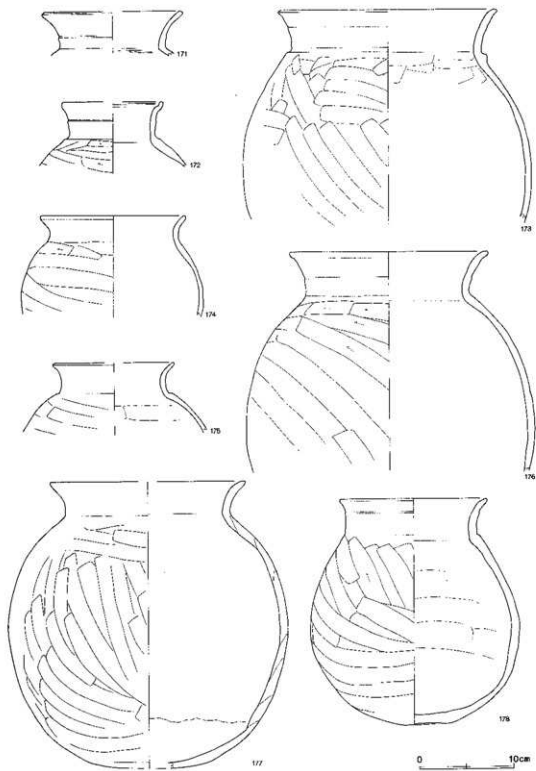
第836図 谷出土遺物(5)



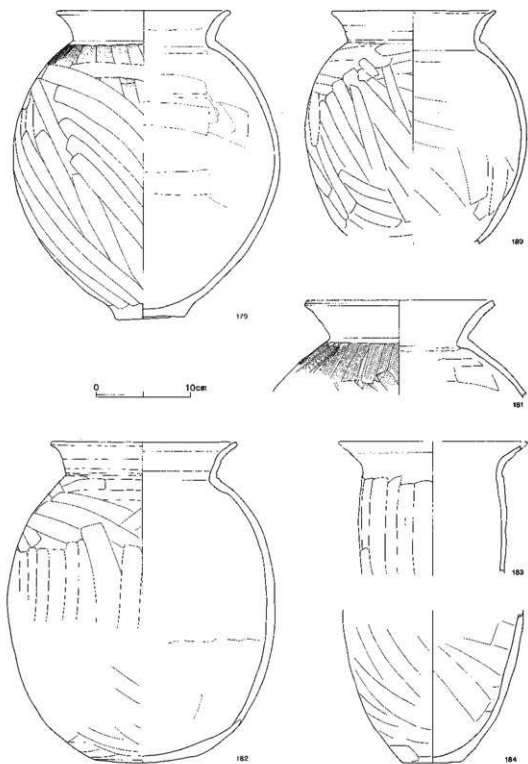
第837图 谷出土遺物(6)



第838図 谷州土遺物(7)



第839圖 谷出土遺物(8)



第840图 谷出土遺物(9)

谷 (第832~840号)

NO.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口10.6 底9.5 高3.7	B+W	灰	90	底部全面回転ヘラケズリ。
2	坏	口12.0 底8.4 高3.4	W+針多	明オリーブ灰	100	底部回転未切り。底部外面ヘラ記号。
3	坏	口14.8 高4.3	B+W多	灰~オリーブ黒	100	№15。体部下半~底部右回転ヘラケズリ。
4	坏	口(12.0) 底(6.4) 高3.3	W	灰	40	底部回転未切り。
5	坏	口(11.6) 底(6.0) 高3.8	W	灰	30	底部回転未切り。口縁外部に重ね焼きの痕跡。
6	坏	口(12.0) 底5.8 高4.0	B+W	灰	60	底部回転未切り。
7	坏	口(12.6) 底5.6 高3.6	W	灰	30	底部回転未切り。
8	坏	口(12.0) 底(6.4) 高3.3	B+W	灰	40	底部回転未切り。
9	坏	口(12.0) 底(5.8) 高3.4	B+W+W'	灰	50	底部回転未切り。
10	坏	口(12.4) 底5.8 高3.2	W	灰	30	底部回転未切り。
12	坏	口12.0 底5.8 高3.4	B+W+W'	灰	90	底部回転未切り。
13	坏	口(13.0) 底(7.0) 高3.4	B少+W+W'	黄灰	25	底部回転未切り。
14	坏	口12.8 底7.0 高3.5	B+W+量少	灰白	70	底部回転未切り。
15	坏	口(12.4) 底8.9 高3.5	B+W+量少	灰	70	底部回転未切り。
16	坏	口(12.5) 底5.0 高3.5	B+W	灰	45	底部回転未切り。火傷。
17	坏	口12.6 底5.8 高3.5	B多+W	灰オリーブ	70	底部回転未切り。黒化調整。
18	坏	口(12.8) 底4.6 高3.5	B+W多	灰	45	底部回転未切り。
19	坏	口12.6 底5.8 高3.3	B+W	灰	85	底部回転未切り。
20	坏	口(12.4) 底5.0 高3.7	B+W+W' 少	灰	50	底部回転未切り。
21	坏	口12.6 底8.2 高3.3	B+W多+W'	灰	95	底部回転未切り。
22	坏	口(12.5) 底8.2 高3.3	B+W	暗青灰	60	底部回転未切り。
23	坏	口(12.4) 底(5.0) 高4.1	B+W	灰	25	底部回転未切り。火傷。
24	坏	口(12.8) 底6.0 高4.2	針	灰	30	底部回転未切り。
25	坏	口(13.0) 底(6.8) 高4.0		灰白	30	底部回転未切り。
26	坏	口(13.0) 底(7.2) 高4.5	R	灰	30	№17。底部回転未切り。
27	坏	口13.0 底6.6 高3.7	R+W多	灰~黒	60	底部回転未切り。
28	坏	口12.8 底5.0 高4.4	B+R多+W+砂	にぶい黄橙~黒	50	底部回転未切り。酸化炎焼成。
29	坏	口12.7 底5.4 高4.2	B少+W+針	灰~橙	65	底部回転未切り。
30	坏	口(13.8) 底(7.4) 高3.3	W	灰白	20	底部回転未切り。

31	坏	口13.6	B+W	灰白	50	ロクロ成形。
32	坏	口13.0 底6.0 高3.5	B+W+磁少	灰	85	底部回転糸切り。
33	坏	口(13.0) 底6.5 高3.5	B+R+W	灰～にふい赤濁	50	底部回転糸切り、酸化炭焼成。
34	坏	口13.0 底6.2 高3.7	B+W+磁少	灰	75	底部回転糸切り。
35	坏	口13.0 底6.6 高3.6	B多+W	灰白	55	底部回転糸切り、風化。
36	坏	口13.2 底6.4 高4.0	B少+R+W+砂	灰黄～にふい黄橙	60	底部回転糸切り、酸化炭焼成。
37	坏	口13.2 底6.4 高3.7	B+W	青灰	100	底部回転糸切り。
38	坏	口12.9 底5.5 高4.3	B多+W	灰	65	底部回転糸切り。
39	坏	口13.0 底6.4 高4.0	B多+W	灰	60	ロクロ成形。
40	坏	口13.8 底7.2 高2.9	B+W	灰	55	底部回転糸切り。
41	坏	底5.8	B+R+W	にふい橙～浅黄橙	底部 100	底部回転糸切り、酸化炭焼成。
42	坏	底6.2	R+W+片	灰	底部 100	底部回転糸切り。
43	坏	底6.0 高2.5	W	灰	底部 100	底部回転糸切り。
44	坏	底6.0 高2.4	R多+W	灰	30	底部回転糸切り。
45	坏	底6.6 高3.2	針	灰	60	底部回転糸切り。
47	坏	底(6.0) 高2.5	W	灰	40	底部回転糸切り。
48	坏	底6.0 高2.3	W	灰白	底部 100	風化顯著。
49	坏	底6.2 高1.3	W	灰白	底部 100	底部回転糸切り。
50	坏	底5.6 高2.2	W	灰白	底部 100	底部回転糸切り。
51	坏	底5.6 高2.4	R	灰白	底部 90	底部回転糸切り。
52	坏	底6.0 高1.2	W	灰	底部 100	底部回転糸切り。
53	坏	口(15.0) 高4.4	R多+W	灰	20	ロクロ成形。
54	蓋	口(15.0) 高2.4	針	灰	10	ロクロ成形。
55	蓋		B	灰	つまみ部 100	ロクロ成形。
56	高台付坏	口14.0 高4.1 高台9.6	B少+W	灰	85	底部全面回転ヘラケズリ後、高台ナデつけ。
57	蓋	口(18.0) 高3.5	W	灰	10	回転ナデ後、上半部のみ回転ヘラケズリ
58	皿	口15.4 底6.7 高2.3	B多+W	灰	80	底部回転糸切り。
59	皿	口16.0 底6.4 高1.6	B多+W	灰	70	底部回転糸切り、歪みあり。
60	皿	口15.5 底7.2 高1.9	B+R+W	灰～灰オリーブ	80	底部回転糸切り、風化顯著。
61	皿	口16.0 高6.5 高1.6	B多+W	灰	60	底部回転糸切り。

62	皿	口(14.0) 高2.5	底(5.6)	B+W	灰白	50	底部回転承切り。
63	坏	口(20.0) 高3.7	底8.6	B+W	暗緑灰	55	底部回転承切り。
64	坏	口(16.8) 高2.2	底(8.0)	W	灰	20	底部回転承切り。
65	皿	口14.5 高1.9	底0.0	B多+W	灰	60	底部回転承切り。
66	高台付皿	口13.4 高台6.6	高3.0	B+W	灰	65	底部回転承切り後、高台ナデつけ。
67	高台付皿	口(14.4) 高台5.6	高2.5	B+W	暗灰	50	底部回転承切り後、高台ナデつけ。
68	高台付皿	口(13.2) 高台6.9	底3.0	B+W多+微少	灰	50	底部回転承切り後、高台ナデつけ。高台端部ヘラアテ。
69	高台付皿	口13.1	高台7.4	B+W多	灰	80	底部回転承切り後、高台ナデつけ。
70	楕	口12.8 高8.0	底6.6	W	暗青灰	40	No.17。底部回転承切り。
71	高台付楕	口(13.7)		B少+W+W'	灰褐	50	No.11-12。底部回転承切り後、高台ナデつけ。酸化炭焼成。
72	高台付坏	口14.4	高5.8	B+W	灰	50	底部回転承切り後、高台ナデつけ。
73	高台付楕	高台7.4		B+R+W	灰黄~にふい黄煙	底部 100	底部回転承切り後、高台型いナデつけ酸化炭焼成。
74	高台付楕	口14.6 高台7.6	高5.9	W多+微	暗青灰	70	底部回転承切り後、高台ナデ。
75	高台付楕	口13.9 高台6.4	高5.9	B少+W	暗青灰	55	底部回転承切り後、高台ナデつけ。
76	高台付楕	口(14.4) 高4.8	底6.6	W	灰	40	底部回転承切り。高台部欠損。
77	高台付楕	口(14.0) 高台(7.4)	高5.7	W+W'+微少	暗青灰	25	底部回転承切り後高台ナデつけ。
78	高台付楕	高台8.0		B+W+微少	楕	底部 80	No.14。底部回転承切り後、高台ナデつけ。酸化炭焼成。
79	高台付坏	口15.4 高台7.8	高4.5	B+W多	灰	30	底部回転承切り後、高台ナデつけ。風化顯著。
80	高台付楕	底(8.0)	高1.6	W	灰白	高台部 30	風化顯著。
81	高台付楕	高台6.9		B+W	灰	55	底部回転承切り後、高台ナデつけ。高台端部ヘラアテ。
82	高台付楕	高台8.2		B+W	灰	60	底部回転承切り後高台ナデつけ。
83	高台付楕	高台6.0		B+R+W+砂	灰黄	底部 100	底部回転承切り後、高台ナデつけ。風化顯著。
84	高台付楕	高台7.6		B+R多	灰	底部 100	底部回転承切り後、高台ナデつけ。高台端部ヘラアテ。風化。
85	高台付楕	口8.0		B少+W	灰黄	底部 100	底部回転承切り後、高台ナデつけ。
86	高台付楕	高台7.6		B+W	灰白	底部 100	底部回転承切り後、高台ナデつけ。
87	高台付楕	高台9.8		R+W	褐	底部 100	底部回転承切り後、高台ナデつけ。酸化炭焼成。風化顯著。
88	高台付楕	高台7.4		B多+R+W	灰白	底部 100	底部回転承切り後、高台ナデつけ。
90	高台付楕	底7.0	高2.3	B多+W	灰	高台部 100	底部回転承切り。
91	高台付楕	底7.4	高2.6	R多+W+微	灰白	高台部 100	底部回転承切り。
92	高台付楕	底7.6	高1.7	W	灰	高台部 90	底部回転承切り。

93	高台付機	底8.4 高2.1	R	灰白	底部 100	底部回転赤切り。高台部割がれている。
94	高台付機	高台4.8	B少+W	灰白	底部 100	№11。底部回転赤切り後、高台ナデつけ。内外廻轉付着。
95	壺	底4.0	B少+W	灰	底部 100	底部回転赤切り。
96	平瓶	胴部17.3	B+W多	灰	70	胴部外面上半カキメ。外面胴部下位～底部回転赤切り。
97	鉢	口19.8	B+W多	灰	口縁 20	口縁端部強いヘラナデ。
98	鉢	口(24.0)	B+W+授少	灰	口縁 20	№17。口縁端部強いヘラアテ。
99	壺		W+W'	灰		口縁部外面ヘラアテ。
100	壺		B+W多+W'	灰		口縁端部強いヘラナデ。
101	壺		B+W	暗緑灰		№18。口縁端部強いヘラナデ。
102	壺	底(15.0)	B少+W+W'	灰	胴部下半 30	輪轆み後、回転ナデ成形。底部外面付近回転ヘラナデ。
103	壺	高台11.8	W	暗灰	胴部下半 25	高台ナデつけ。
104	壺		B少+W	灰	底部 25	底部回転切り越し面を上にした後、粘土を積み上げて胴部を成形している。
105	壺	底(16.0)	B+W	灰	底部 30	輪轆み後、回転ナデ成形。
106	坏	口12.3 底8.4 高3.5	B+W	灰白	75	灰釉陶器。灰釉刷毛がけ(割継により不明瞭)。底部回転赤切り。
107	高台付坏	口(16.0) 底(12.0) 高4.0		灰白	10	灰釉陶器。全周割が割がれている。
108	高台付機	高台7.4	W	灰白	高台部 90	灰釉陶器。坏部外面及び底部内面に緑がかった灰釉付着。底部回転ヘラ切り産し高台部粗雑な調整。外面ハケメ。突帯部分ナデ。
109	地輪		B+R+W	橙		
110	地輪		B少+R少+W+W'	橙		外面ナデ。
111	坏	口8.4 高3.4	B+R+W	橙	95	№18。口縁端部面取り。口縁部～体部内面ナデ。
112	坏	口11.2 高4.5	B+W	黒褐～黒	85	口縁部～体部内面ナデ。
113	坏	口(12.2) 高4.8	B+W+W'	橙～暗赤褐	35	口縁部ナデ。体部外面ヘラナデ。
114	坏	口11.8 高3.8	B+R少+W+W'	橙～黒	100	№20。口縁端部ヘラアテ面取り。
115	坏	口13.4 高4.1	B+R少+W	にぶい橙	25	口縁端部ヘラアテ。風化。
116	坏	口13.6 高3.8	B+R少+W	淡黄橙～褐灰	60	口縁部ナデ。体部外面ヘラナデ。
117	坏	口(11.5)	B多+W	淡黄橙	20	№23。口縁部～体部内面ナデ。
118	坏	口13.0 高5.4	B+R少+W+W'	橙	95	№19。口縁端部ヘラアテ面取り。
119	坏	口11.0 高(5.7)	B+W	明赤褐	45	口縁端部ヘラアテ面取り。口縁部～体部内面ナデ。
120	坏	口(13.4) 高(4.5)	B+W+W'	橙	25	口縁部～体部内面ナデ。
121	坏	口15.4 高5.3	B+W	にぶい褐	70	口縁端部面取り。口縁部～体部内面ナデ
122	坏	口13.8 高(7.1)	B+R多+W	橙	80	口縁部ナデ。体部外面ヘラナデ。

123	环	□12.8 高4.6	B+R少+W+W' 少	灰黄褐～黒	100	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
124	环	□12.8 高3.3	B多+W	橙	100	No.3, 口縁部ナデ。
125	环	□12.6 高3.2	B+R少+W	におい橙	100	No.8, 口縁部～体部内面ナデ。
126	环	□(12.0) 高3.7	B+R少+W	橙	60	口縁部ナデ。内面に高部小瘤付着。
127	环	□12.6 高4.6	B多+W+W'	におい橙～褐灰	100	体部内面ナデ明確。
128	环	□(12.8)	B+R少+W	橙	25	口縁部～体部内面ナデ。
129	环	□14.2 高5.4	B+W	(内)黒 (外)橙	30	口縁端部ヘラアテ。
130	环	□13.4 高4.5	B+W	橙	30	口縁端部ヘラアテ面取り。
131	环	□10.8 高4.2	B+R+W	におい橙～黒	95	No.2, 口縁部ナデ。
132	环	□14.6 高3.5	B+R+W	におい橙～黒	75	口縁端部ヘラアテ, 口縁部～体部内面ナデ。
133	环	□(13.4)	B+R+W+W'	橙	20	内面暗文。風化。
134	环	□(16.0) 高4.4	B+W	橙	50	口縁部ナデ。高部小瘤付着。
135	环	□14.6 高4.5	B多+R+W+W'	におい橙～黒褐	100	口縁部ナデ。風化。
136	环	□(10.8)	B+R+W	浅黄橙	30	内面暗文。
137	环	□(12.8)	B多+R+W	橙	20	口縁端部ヘラアテ。内面暗文。
138	环	□(13.8) 底0.2 高(3.9)	B+W	橙	40	口縁端部ヘラアテ。底部外面ほぼ一方 のヘラケズリ。内面暗文。
139	柄	□11.8 底0.0 高4.5	B+R+W	橙	95	口縁端部ヘラアテ面取り。体部外面ヘラ ケズリ。一部ミガキ。底部外面一方の ヘラケズリ。内面暗文。
140	环	□(12.4) 高3.5	B多+R+W	橙	45	口縁部～体部内面ナデ。
141	环	□(12.4) 高3.4	B+W少	におい橙	25	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
142	环	□11.6 高3.2	B+R少+W+W'	におい橙～褐灰	100	器面の鉄分付着が著しい。
143	环	□12.0 高3.4	B多+W	橙	100	口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
144	环	□12.6 高3.4	B+W+W'	におい褐	100	No.4, 口縁部～体部内面ナデ。
145	环	□12.5 高3.4	B+R少+W	橙	100	No.33, 口縁部ナデ。
146	环	□13.0 高3.5	B+W	におい赤褐	95	No.5, 口縁部ナデ。風化。
147	环	□(12.8) 高(3.4)	B+W	橙	35	口縁部～体部内面ナデ。高部小瘤付着。
148	环	□(14.0) 高4.1	B+R+W少	橙	50	口縁部ナデ。風化。
149	环	□(13.8) 高(3.5)	B+W	におい橙	30	口縁部～体部内面ナデ。
150	环	□(14.0) 高3.2	B+R+W+W'	におい赤褐	40	No.6, 口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ。
151	环	□14.4 高4.0	B+R少+W	におい橙	100	No.1, 口縁部ナデ。
152	环	□13.6 高3.2	B多+R+W	におい橙	100	No.7, 口縁部～体部内面ナデ。

163	坏	□11.8 高3.6	B+R+W'	にふい橙	90	体部外面ヘラケズリ。
164	坏	□15.4 底3.7 高4.8	B+R+W	にふい橙	90	口縁部～体部内面ナデ。体部外面ヘラケズリ後ナデ。
165	坏	□17.8 高7.3	B少+W	橙	80	No. 6。口縁部強いヘラアテ。体部内面ヘラナデ。工具残る。
166	蓋		B+W	橙	つまみ 100	天井部外面ヘラケズリ。
167	皿	□20.0 高3.6	B+W+W'	赤褐	60	口縁部ヘラアテ。
168	皿	□(20.2)	B+W	赤褐	20	口縁部～体部内面ナデ。
169	高坏	□(17.0)	B+W	橙	25	No. 19。口縁部ヘラアテ面取り。
180	手づくぬ	□4.0 高2.6	B+W	にふい橙	100	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。
161	増	底3.8 胴部7.4	B+W+W' 少	明褐灰	胴部 95	底部外面ヘラケズリ。
162	高坏	胴基部(3.0)	B+R+W+W' 少	にふい赤褐	胴部 38	坏部と胴部の接合部分、口縁部。胴部外面ケズリ後ナデ。内面ナデ。
163	高坏		B+R少+W	にふい橙	胴部 40	胴部外面ヘラケズリ後ナデ。胴部内面上位ナデ。中位～下位ヘラケズリ。
164	台付罐	胴部(9.8)	B+W	にふい橙	胴部 35	胴部内面ナデ。
165	台付罐	胴9.8	B+W	赤褐～黒	胴部 100	No. 10。胴部外面上半ヘラケズリ。外面下位～内面ナデ。
166	鉢	□(22.2) 高(10.1)	B多+R+W	にふい橙	50	口縁部ヘラアテ。口縁部と体部に境目強いヘラアテ。
167	鉢	□(21.6) 高(9.6)	B+R+W	灰白～黒	45	口縁部ヘラアテ。
168	小型壺	□(10.4) 底5.0 高10.0	R+W	橙～黒	50	No. 8。底部外面ヘラケズリ。
169	小型壺	□(10.8)	B+R少+W+W'	橙～黒	上半部 25	口縁部ヘラアテ。胴部内面ヘラナデ。
170	小型壺	□14.0 高15.8 胴部18.8	B+R少+W+W' 少	にふい黄橙	100	No. 9。胴部内面ナデ。
171	壺	□(14.4)	B+R+W	にふい橙	口縁 30	口縁部ヘラアテ面取り。口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。
172	壺	□(10.8)	B+W	にふい赤褐	口縁 45	口縁部強いヘラアテ。口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。
173	壺	□23.0	B+R+W多	橙	口縁 80	口縁部と胴部の境目強いヘラアテによる段をもつ。胴部内面ヘラナデ。
174	壺	□15.3	B+R+W	橙	胴部上半 80	No. 34。口縁部ナデ。
175	壺	□(13.0)	B+R+W	橙	口縁 30	胴部外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。
176	壺	□21.0 胴(30.6)	B+R+W+W' +砂	橙～黒	30	口縁部ヘラアテ。口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。
177	壺	□(20.6) 底(12.8) 高(30.2)	B少+R+W	橙	70	輪痕み痕明瞭。底部外面ヘラケズリ。胴部外面風化著しく器面ツルツル。
178	壺	□15.4 底5.0 高23.8 胴部22.1	B+R+W	にふい橙	90	口縁部外面ヘラアテによる段をもつ。胴部内面ヘラナデ。
179	壺	□18.4 高32.5 胴部28.3	B+R少+W+W'	褐灰～黒褐	80	胴部外面上位ハケム後、全体をヘラケズリ。
180	壺	□17.4 胴部 23.5	B+R+W	橙	70	No. 25-31。口縁部ヘラアテ。胴部内面ヘラナデ。
181	壺	□19.6	B+R+W+W'	にふい赤褐	口縁 90	口縁部ヘラアテ面取り。胴部外面ハケム。内面ヘラナデ。
182	壺	□19.8 底10.8 高33.9	B+R少+W	にふい橙	70	No. 32。口縁部外面段をもち、ナデ調整胴部内面ヘラナデ。底部やや丸い。

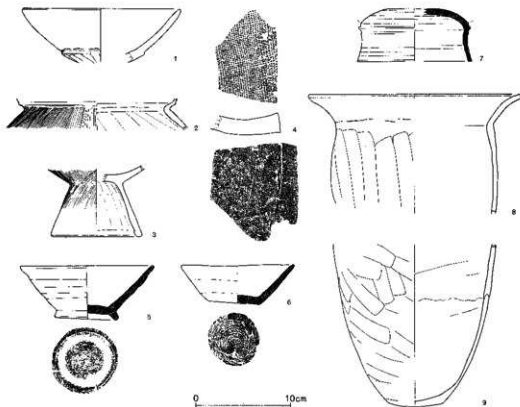
183	竪		B+R+V少	浅黄橙	断面上半 25	口縁端部欠損。
184	竪	幅0.2	竪	灰白~にぶい黄橙	下半部 25	No.2・8。風化著しく器面凹凸している 粘土中の含有物量多い。

第26・27号溝 (第830図)

へを-456・457Gridに位置する。切り合うように南北へ延びているが、その新旧関係を明らかにすることができなかった。第26号溝は南端部で幅0.8m、深さ20cmほどが確認されている。第27号溝は幅1.4~2.5m、深さは60~90cm、南に向かうにつれて広くかつ深くなっている。これらの溝は谷を切っており、出土遺物は少ないが、近世の遺物も含まれている。

(5) 谷

谷の東斜面に堆積した包含層からは、古墳時代後期から平安時代にかけての遺物が大量に出土している。破片も多いが、完形もしくはそれに近い遺物もみうけられる。図示するにあたっては、特異な遺物を除いて残存率が高いものを選択して掲載した。



第841図 第5発掘区グリッド出土遺物

第5発掘区グリッド (第841図)

NO.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	高坪	口16.8	B+W+砂	橙～にふい黄橙	坪部 80	ち-439, 口縁端部面取り。口縁部外面段の上方ハケメ。
2	台付甕		B+R+W+W'	灰白～浅黄橙	口縁 20	ぬ-455, 胴部外面↓方向のハケメ(7本/1.2cm)、内面↑方向のヘラケズリ口縁端部欠損。
3	台付甕	脚(9.6)	B+R+W+W'	浅黄橙	脚部 50	ぬ-455, 胴部外面↑方向のハケメ(7本/1.2cm)。脚部外面↓方向のハケメ(7本/1.2cm)後、指ナデ。脚部内部面折り返しナデ。
4	平瓦		B+R多+W	にふい黄褐		№7, S.E.Y-1覆土。一板造。表、布目アテ。裏、網目?後ナデ。
5	高台付横	口14.0 高5.5 高台6.8	B+R+W	灰白	60	ぬ-455, 底部回転未切り後、高台ナデつけ。蓋みあり。
6	環	口12.0 底5.4 高4.0	B+R+W	淡黄～黒	70	ぬ-455, 底部回転未切り、酸化炭焼成。
7	蓋	口(12.0) 高5.5	W	暗青灰～褐灰	25	へ-447, 天井部外面回転ヘラケズリ。
8	甕	口22.4	B+R少+W	橙	上半部 80	り-463, 口縁端部弱いヘラアテ面取り頸部外面ヘラ工具痕。
9	甕	底5.8	B+R+W	橙	下半部 30	り-463, 底部外面酸化著しく調態不明。

これらの遺物の時期は東側に形成された集落から出土する遺物とほとんど重複しており、近世の溝(第26・27号溝)がこの包含層を切って構築されているため、集落の営まれていた時代に土器捨て場的な場所として機能しており、近世にはほぼ埋まっていたものと推定される。

この包含層からは、土器の量に比べれば少ないが、それ以外の遺物も若干出土している。石製品には滑石製の未製品が1点、白玉が4点、片岩製の紡錘車が1点および砥石が3点ある。土製品は土鍾と紡錘車の破片がおのおの1点出土している。また、円筒埴輪片2点が出土しているが、これは本遺跡で唯一の出土例であり、ともに6世紀代の遺物と考えられる。

(6) グリッド出土遺物

第5発掘区は検出された遺構が多く、遺構の確認作業や排水溝の掘削などのおりに、遺構の所属が明らかでない遺物も多数出土している。それらのうち残存率のよい遺物や注目される遺物をここに掲載した。

平瓦の破片(4)は弥生時代の土坑(Y-1号土坑)の覆土上層から出土したもので、明らかに混入と考えられる。本遺跡では出土例がほとんどないので、あえてこの項で紹介した。また、2・3・5の土器が出土した、ぬ-455Gridには遺構が確認されていない。その他の遺物は、出土グリッドに位置している遺構(1-ビット群、7-第223・224号住居跡、8・9-第121号土坑)に所属する可能性がある。

6 第6発掘区

第6発掘区は、X軸の464から唐沢川に至るまでの発掘区で、本遺跡の最西端にあたる。遺構確認面における標高は33.5mである。南側にはちょうど発掘区と平行するように擾乱が走っており、遺構に大きな影響を与えている。住居跡の分布は疎になるが、かわって古墳跡や方形周溝墓が立地しており、他の発掘区とは様相を異にしている。また、弥生時代中期の住居跡が3軒近接して検出されている。

第5発掘区で検出された遺構は、古墳跡1基、方形周溝墓9基、住居跡14軒（第261～274号）・掘立柱建物跡4棟（第7～10号）・土坑51基（第122～172号）・井戸11基（第5～15号）・溝3条（第28～30号）である。

古墳跡は円墳と推定され、周堀の1/4が検出された。方形周溝墓はまばらに分布しており、墓群としての統一的な構成を示していない。主体部はいずれの墓からも検出されなかった。時期はおおむね古墳時代前期と考えられる。

住居跡は、他の発掘区に比べて、その総数は少なくなるが、分布域は集中している。これらの時期別の内訳は、古墳時代前期1軒、古墳時代後期1軒、奈良時代1軒、平安時代前期4軒、不明7軒である。発掘区の中程から西側には、古墳時代以降の住居跡は分布していない。本遺跡においてはこれ以上西側に集落が形成されることはなかった。当時の唐沢川の流路は現在の位置にはなかったことから、そこには何か別の地理的あるいは人為的要因が存在したものと推定される。

掘立柱建物跡は4棟近接して確認された。建物の方向は方位に忠実で、二間二間および二間三間の建物が存在する。出土遺物は少ないが、平安時代前期の建物跡と考えられる。

土坑は、その規模・形態等さまざまで、住居跡の周辺に密集している。出土している遺物のほとんどが平安時代のものであるが、その性格は明らかではない。

11基確認された井戸のうち、湧水の関係で完掘できたのは3基であり、図示できる遺物が出土したのは1基にとどまった。これには近世の遺構も含まれるようである。

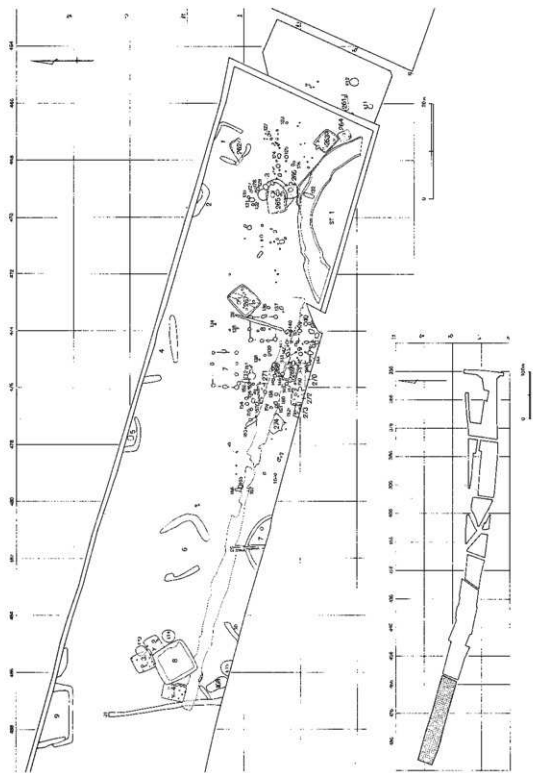
溝もまた遺物がほとんど出土しておらず、その時期・性格とも不明である。

(1) 古墳跡

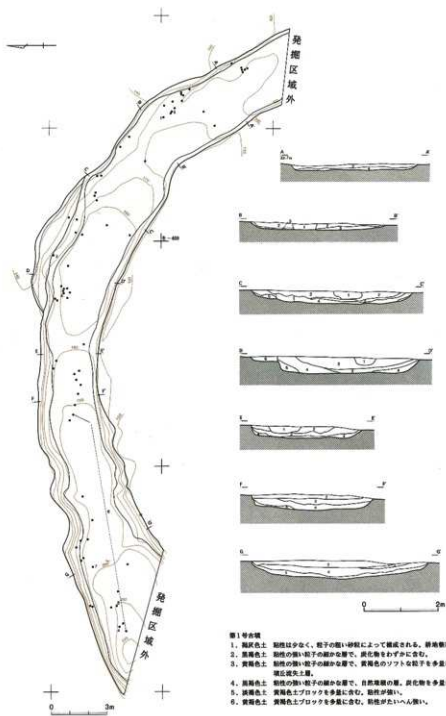
第1号古墳跡（第843図）

ぬーわー467～472Gridに位置する。周堀の一部が確認されたが、主体部はなく、大半は調査区域域外にかかる。本古墳は径およそ44mの円墳と推定される。

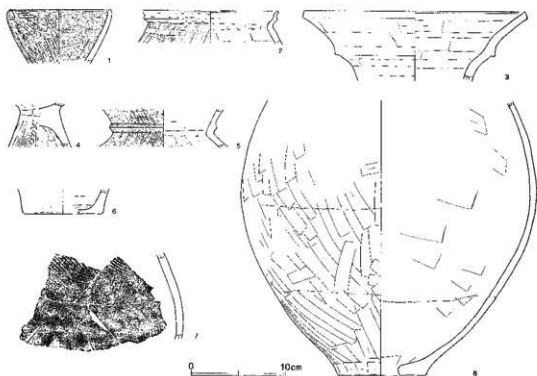
周堀の幅は3.0～4.7mで、深さは東端で15cm、西端で48cmを測り、西側にいくほど深くなっている。周堀中より多量の土器片が検出されたが、本遺構に伴うと考えられるものは少なく、大部分が混入物であった。赤彩された埴（1）やS字状口縁をもつ台付甕（2）、焼成前底部穿孔の壺（8）などが出土している。また、数点の緑泥片岩の破片が出土しているが、本古墳の主体部と関連があるかどうかは不明である。



第842图 第6发掘区全副图



第843図 第1号古墳跡 (1/200)



第844図 第1号古墳跡出土遺物

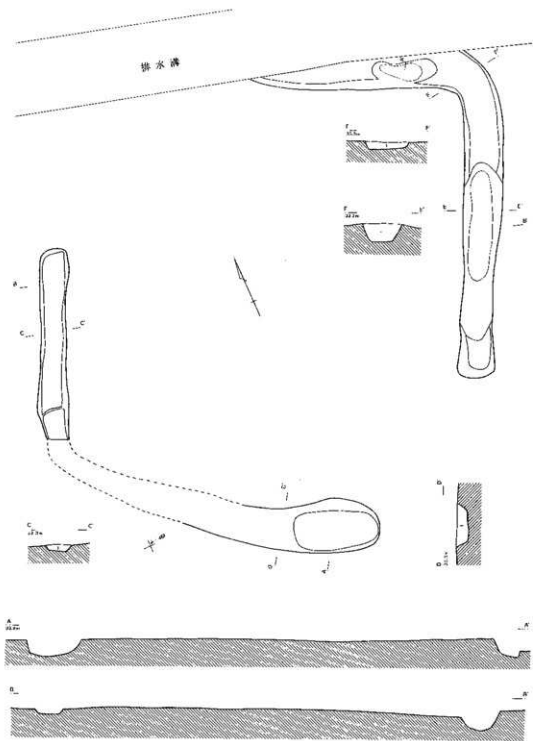
第1号古墳跡 (第844図)

NO.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	壺	□(11.2)	B+R	浅黄橙	口縁 20	№16. 全面赤彩。口縁部外面ハケメ内面ヘラナデ。
2	壺	□14.4	R+W	(内)橙 (外)灰褐	口縁 25	№73. 胴部外面↓方向のハケメの後←方向のナデ。
3	壺	□23.8	B+W	橙～浅黄橙	口縁 70	№60. 口縁部段をもつ。
4	高坏		W+磁	橙	胴部 60	№57. 胴部外面ハケメ、内面ヘラナデ。
5	壺		R+磁	浅黄橙	胴部 15	№20. 外面口縁～胴部ハケメ。胴部外面赤彩。肩部内面用甲痕。風化。
6	壺			(内)黒 (外)橙	底部 25	№5. 胴部内面ナデ。風化顯著。
7	壺		B+R少+W	にがい橙		№35. 肩部破片。肩部外面R.L.単節横方向の縄文。
8	壺	底φ.4 胴φ3.3	B+W	橙～浅黄橙	胴部 70	№41-42-59. 底部焼成前に穿孔。風化著しく眞形不明瞭。

(2) 方形周溝墓

第1号方形周溝墓 (第845図)

か・よ—466—468Gridに位置し、第262号住居跡に切られている。規模は周溝の外側に東西7.3m、南北8.2m、方台部径が東西6.3m、南北6.7mで、やや南北に長い長方形を呈する。北西隅と南東隅にブリッジをもち、南西隅はおそらくつながっているものと思われる。周溝幅は40—

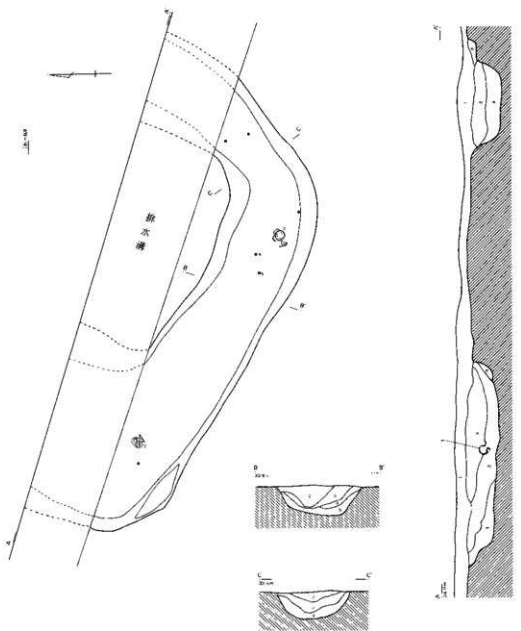


第1号方形周溝底

1. 埴輪色土 粘性の強い粘土の塊い層で、炭化物を含む。

0 2m

第845図 第1号方形周溝底

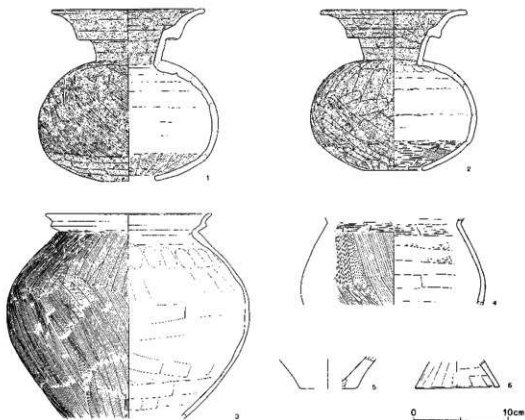


第2号方形周溝墓

1. 灰褐色土 粘性の強い粘土の粗い層で、水田の土層（灰土層）。
2. 黒色土 粘性のたいへん強い粘土の粗い層で、若下の炭化物層を含む。
3. 黒褐色土 粘性の強い粘土の粗い層で、黄褐色土粒子をやや含む。
4. 黒褐色土 3層と同じだが、黄褐色土粒子の含まれる量が多い。
5. 淡黄褐色土 粘性の強い粘土の粗い層。

0 2m

第846図 第2号方形周溝墓



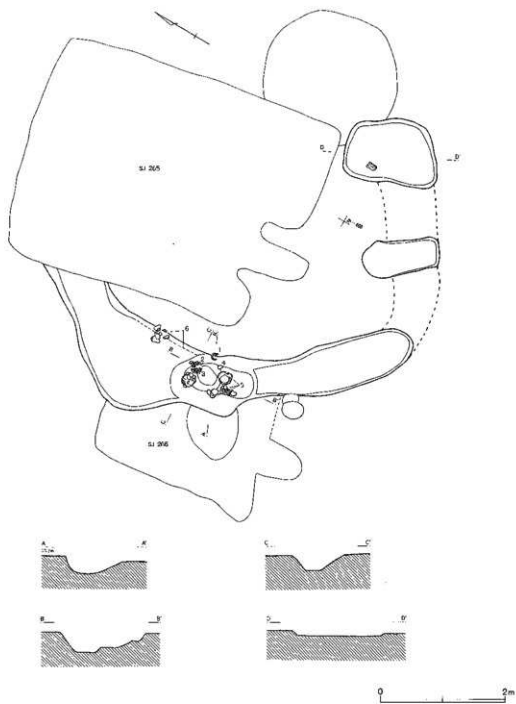
第847図 第2号方形肩溝墓出土遺物

第2号方形肩溝墓 (第847図)

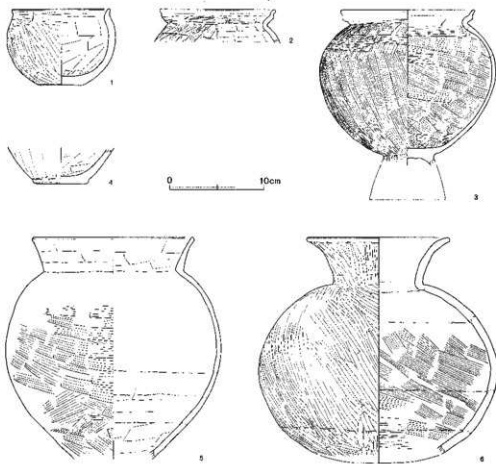
NO.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	壺	口16.2 高18.1 胴19.0	B多+R+W'	橙	90	内外面赤彩痕。胴部外面ヘラケズリ後ナデ。胴部外面上～中位ハケメ、下位ヘラケズリ。底部焼成前に穿孔。外面口縁部～胴部に黒斑。風化。
2	壺	口15.6 高16.9 胴17.5	B多+R+W+磁	橙	100	No.2。赤彩痕。胴部外面黒斑。底部焼成前に穿孔。風化。
3	罎	口17.6 胴25.6	R+W+W'	におい黄橙	70	No.5。胴部外面上位↓方向、中位～下位↑方向のハケメ。胴部内面指痕痕。
4	罎		W+磁	におい黄橙	胴部 20	No.4。胴部外面→方向のハケメ。胴部外面上半↓方向、下半↑方向のハケメ。胴部内面→方向のハケメ若干残る。
5	壺	底(6.2)	B+R	黄橙	底部 30	No.3。風化顕著。
6	罎	底(9.0)	B+磁	橙	罎部 30	罎部外面粗いミガキ、内面ヘラナデ。罎部ナデ。

60cm、深さ10～30cmを測る。

出土遺物は土師器片が数点検出されたにすぎない。図示できないが、混入の可能性が大きい。



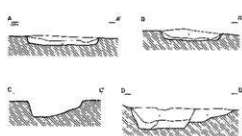
第848图 第3号方形坑墓



第849図 第3号方形周溝墓出土遺物

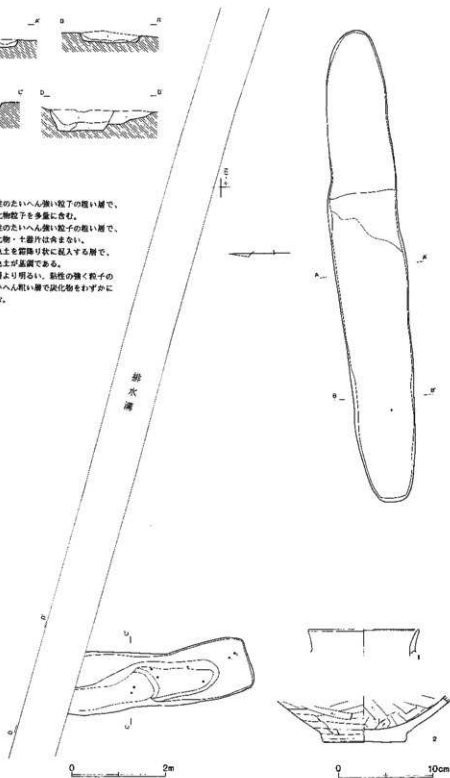
第3号方形周溝墓(第849図)

NO.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	鉢	口10.4 底8.8 高9.0 胴11.4	B	橙	70	No.7. 体部外面ヘラミガキ。底部外面ヘラケズリ。風化。
2	甕	口12.2	B	橙~黒	口縁 20	No.5. 口縁部内面横方向のハケメ。胴部外面↓方向のハケメ。
3	甕	口14.2 胴18.6	B多+B多+W	橙~明赤褐	70	No.5. 胴部外面上位↓方向後ヨコ方向中~下位↑方向のハケメ。胴部外面に赤彩痕?
4	壺	底5.8	R+W+W+橙	橙	底部 50	No.8. 胴部外面丁寧なヘラケズリ。底部外面ヘラケズリ。風化。
5	甕	口17.2 胴22.8	B+W多+橙	橙~明赤褐	60	No.9・10・11. 胴部外面ハケメ(1単位4~5本)。風化著しく調整不明瞭。
6	壺	口15.2 胴25.2	B多+R+W	橙	60	No.1・6. 外面ヘラミガキ。胴部内面中~下位ハケメ。風化。



第4号方形周溝墓

1. 暗黒褐色土 粘性のたいへん強い粘土の層で、炭化物粒子を多量に含む。
2. 淡黒褐色土 粘性のたいへん強い粘土の層で、炭化物・土器片は少ない。
3. 淡褐色土 黒色土を距離り状に侵入する層で、褐色土が基質である。
4. 淡褐色土 3層より明るい、粘性の強い粘土のたいへん強い層で炭化物をわずかに含む。



第850図 第4号方形周溝墓および出土遺物

第4号方形周溝墓 (第850図)

NO.	器 種	大きさ(cm)	胎 土	色 調	残存率(%)	備 考
1	壺	口(11.8)	R#F+硬	にぶい橙	口縁 10	No.3. 口縁部内外面ナデ、風化。
2	壺	底3.6	R#多+硬	黄橙	底部 50	No.2. 胴部外面丁寧なヘラケズリ、内面ヘラナデ。

第2号方形周溝墓 (第846図)

たー468・469Gridに位置する。北側の大半は調査区域外であり、南溝のみ調査の対象となった。その規模は全掘していないので定かではないが、周溝の外側で東西7.3m、方台部は径3.4mになるものと思われる。南東隅は丸味をもち、剛張りの傾向がある。周溝幅は1.1～1.4m、深さは40～45cmで、西溝は幅広になる可能性がある。

遺物量はさほど多くはないが、残りはよい。完形に近い底部穿孔の有段口縁線が2点(1・2)とS字状口縁の台付甕(3)が1点出土している。いずれも溝底から浮いた状態で検出されている。壺1・2にはともに赤彩されていたが、取り上げの際にまわりの覆土に貼りついてしまったために表面にはほとんど残らなかった。

第3号方形周溝墓 (第848図)

わ・かー468・469Gridに位置する。第265・266号住居跡に切られており、残存状態は良好ではない。北・東溝は失われ、南溝もほとんど残っていない。南西・南東隅とも丸味をもち、やや剛張りを呈する。規模は周溝の外側で東西6.3m、南北4.6m、方台部径は東西4.6m、南北2.9mである。溝幅は55～80cm、もっとも深い部分で深さ35cmほどである。

遺物は南溝中央にある土坑状の掘り込みから、S字状口縁の台付甕(3)・壺(6)などが集中していた。残りは比較的良好である。

第4号方形周溝墓 (第850図)

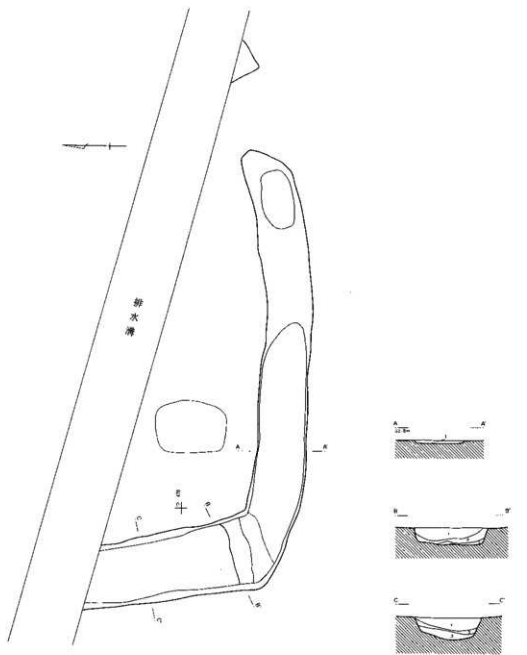
れ・そー473～475Gridに位置する。南溝と西溝の一部が検出された。他は調査区域外および排水溝にかかる。形態は四隅をブリッジ状に残すタイプと考えられ、規模は周溝の外側で東西13.7m、方台部径12.5mである。周溝幅は1.15～1.50mで、南溝のほうが若干広くなっている。

出土した遺物は少なく、図示できるものは2点にすぎなかった。それぞれ壺の口縁部と底部の一部である。

第5号方形周溝墓 (第851図)

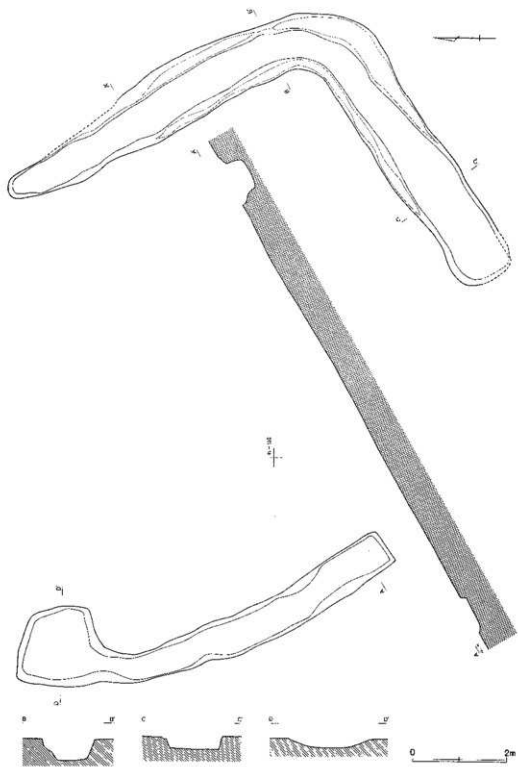
そ・つー477・478Gridに位置し、北側の大半は調査区域外にかかる。そのため形態は不明であるが、東溝の一部が検出されており、南東隅にブリッジをもつものと思われる。南西隅はやや丸味をもち、周溝外縁が張るプランを呈している。規模は定かではないが、方台部で東西径6.9m前後と推定される。周溝幅は0.8～1.2mで、溝底はほぼ平坦である。

遺物はまったく出土しなかった。

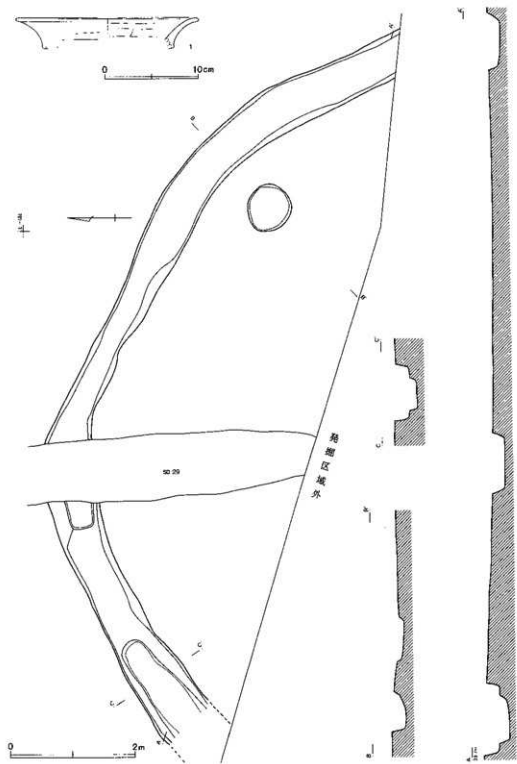


第5号方形周溝墓

1. 暗褐色土 黄褐色土ブロックを含む、粘土強く砂子の粗い層。
2. 暗紫褐色土 1層よりも細く、粘性強く粗くしめる。
3. 暗黄褐色土 黒色土ブロックを含み、砂子の粗い層。



第852图 第6号方形四清墓



第853图 第7号方形石冢墓および出土遺物

第7号方形周溝墓 (第853図)

NO.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	壺	口19.6	R+W'	浅黄橙	口縁 20	口縁部内外面ナデ。風化顕著。

第6号方形周溝墓 (第852図)

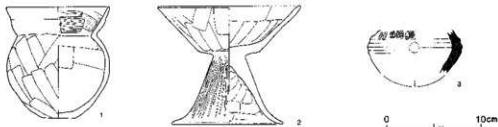
た・れ—480—482Gridに位置する。形態はコーナーに丸味をもち、北側の溝を欠いている。南—東溝は「L」字形を呈し、西溝は北端でわずかに屈曲して立ち上がっている。規模は周溝の外側は東西11.4m、南北13.6m、方台部径は東西9.4m、南北10.3mである。周溝の深さは、東溝45cm前後、南溝28cmで、西溝はさらに浅く10cm程である。

出土遺物は少なく、本周溝墓に伴う遺物は見当たらなかった。

第7号方形周溝墓 (第853図)

か—480—482Gridに位置する。北西隅が第29号溝に切られ、南側は発掘区域外にかかる。胴が強く張り、円形に近い形態である。規模は検出範囲がわずかなためはっきりしないが、発掘区域外にかかる部分の方台部の長さは9.8mである。周溝の幅は65cm前後であるが、その幅は一定していない。北溝の一部は中央で一段深く掘り込まれている。東溝の内側にあるピットは、本周溝墓に伴うものかどうかは不明である。

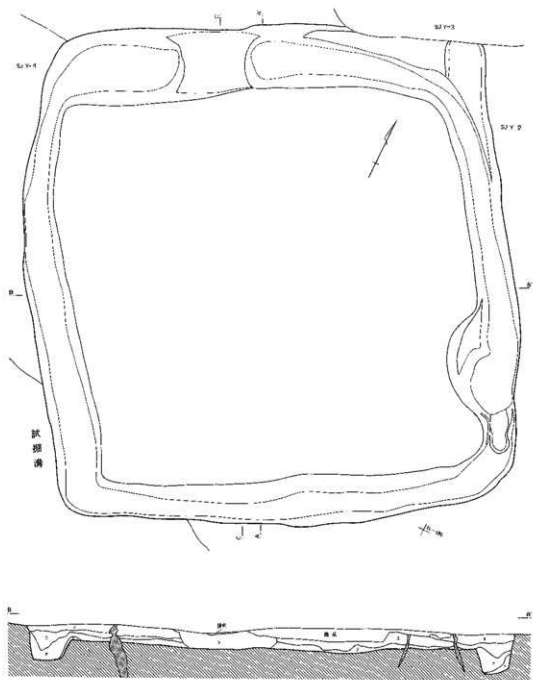
遺物は有段口縁壺の口縁片1点が出土した。なお、本周溝墓に伴う遺物ではないが、刀子片などの鉄製品が数点出土している。



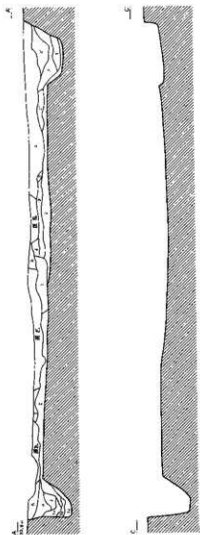
第854図 第8号方形周溝墓出土遺物

第8号方形周溝墓 (第854図)

NO.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	小型壺	口10.8 底3.2 高(11.7)	B+R	橙	80	口縁部内面ハケス。
2	高杯	口15.0 底11.6 高12.4	R多+W	橙	70	No.80・121。胴部外面ミガキ、内面上半指環ナデ。
3	はそう	胴(10.0)	V多+砂	灰	胴部 20	No.113。胴部外面上位刻文、中央に穿孔。推定。混入。



第855圖 第8号方形周溝墓



第8号方形周溝墓

1. 黄褐色土 粘性強い。
 - a. ブロック (径1~2cm) 少量。
 - b. ブロック (径2~3cm) 少量。
 - c. ブロック (径2~3cm) 少量。黒色土わずかに含む。
2. 黒褐色土 黄褐色土粒子 (径0.5~1.0cm) 少量に含む。粘性あり。
3. 黒褐色土 黄褐色土粒子 (径0.1~0.5cm) 少量に含む。炭化物粒子を少量含む。
- 3' 褐色土 黄褐色土粒子 (径0.1~0.5cm) 少量に含む。炭化物粒子も少量含む。
4. 黒褐色土 黄褐色土粒子 (径0.5~1.0cm) 少量含む。現状。やや褐色味強い。
- 4' 褐色土 黄褐色土粒子 (径0.5~1.0cm) 少量含む。現状。
5. 黒色土 黄褐色土の微粒子をわずかに含む。
6. 褐色土

第8号方形周溝墓 (第855図)

たーそー484~486Gridに位置する。弥生時代の住居跡3軒に囲まれるように位置している。当初は住居跡と推定して調査を行ったが、生活に伴う施設が検出されず、幅広い溝が四周する形態を呈したため、方形周溝墓と判断した。

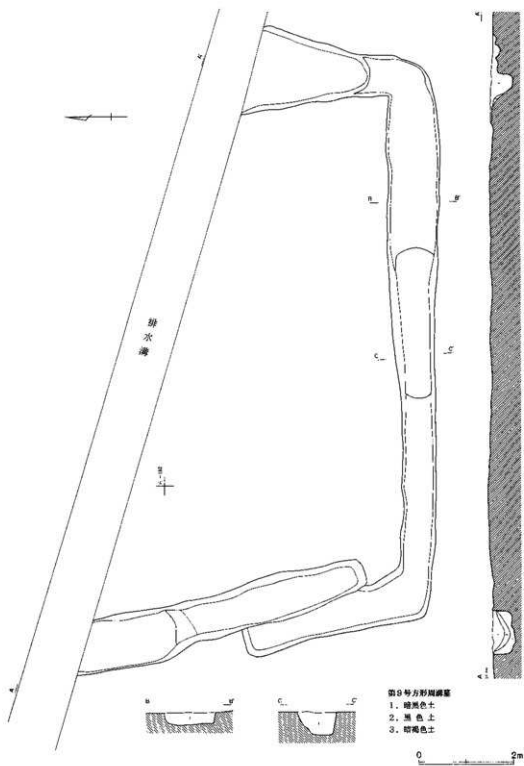
形態は隅丸方形を呈し、周溝の外側は東西6.2m、南北6.5m、方台部径は東西7.7m、南北8.0mである。周溝は全周しているが、北溝はほぼ中央部がやや浅くブリッジ状を呈している。

覆土から弥生土器が多量に混入しており、これらのなかには周囲の住居跡と接合する資料も含まれている。本周溝墓に伴うと思われる遺物は、周溝中より出土した小型壺(1)と高坏(2)があげられるが、これらは本遺跡の方形周溝墓に伴う遺物のなかでもっとも時代の下るものと考えられる。

第9号方形周溝墓 (第856図)

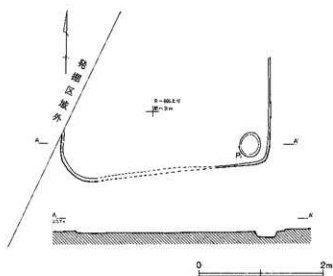
なー485~488Gridに位置し、北半分が発掘区域外にかかる。形態はコーナーが角張った方形であり、西溝は重なりあった形態をなしている。東溝は幅を広げているが、攪乱を受けている可能性がある。規模は周溝の外側は東西12m、方台部径は東西9.5mである。周溝の深さは、西溝50cm前後、南溝24cmで、南溝の中央部分は深さ50cmの土坑状に掘り込まれている。

出土遺物には近世のものが含まれており、本周溝墓に伴う遺物は見当たらなかった。

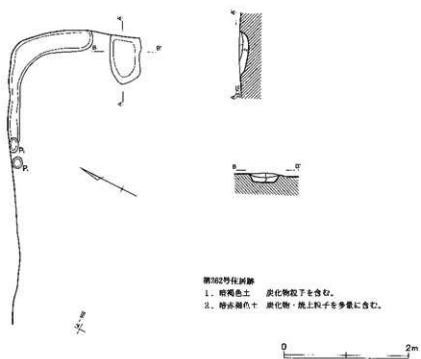


第856图 第9号方形周溝墓

(3) 住居跡



第857图 第261号住居跡

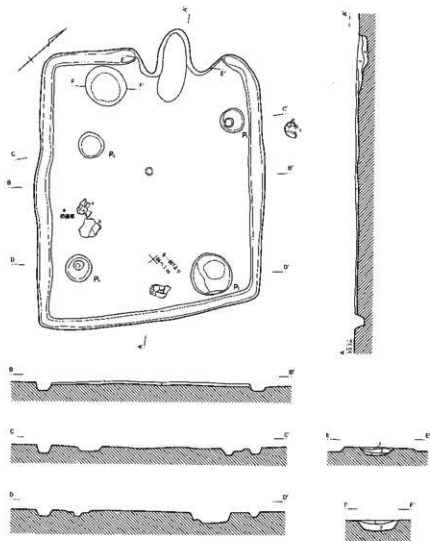


第858图 第262号住居跡

第261号住居跡 (第857図)

—465・466Grid に位置する。確認面と床面との差がほとんどなく、西側は発掘区域外にかかり、北半のプランは確認されなかった。南西と南東のコーナー部分のみ残存している。径35cmほどの小さなピットが1基、南東隅に検出された。深さ10cmと掘り込みは浅い。

覆土はほとんどなく、遺物はまったく出土しなかった。

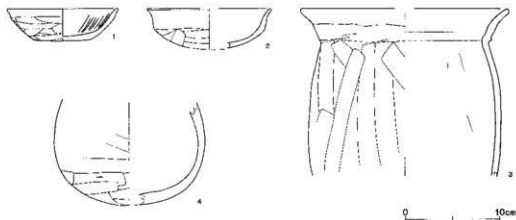


第263号住居跡

1. 淡褐色土 粘性の強い炭化物混じりの層で、遺物を含む。
2. 暗茶褐色土 粘性の強い粘土の層で、炭化物を少量に含む。粘土の粗いブロック状の塊土を若干含む。
3. 淡褐色土 粘性の強い黄褐色土ブロックを含み、塊土ブロックを少量に含む。
4. 淡茶褐色土 砂質の強い層で、炭土・炭化物粒子をやや含む。

0 2m

第859図 第263号住居跡



第860図 第263号住居跡出土遺物

第263号住居跡 (第860図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口11.6 底8.0 高3.3	B+R	橙	80	No.5・6. 平底。底部外面ヘラケズリ。内面直文。
2	坏	口(13.0) 高(4.3)	B+R多	橙〜にぶい橙	20	口縁部〜体部内面ナデ。
3	甕	口(22.0)	B+W+V	橙	上半部 20	No.3. 胴部外面ヘラ工具痕。
4	壺	胴(16.0)	B+R多	(内)黒 (外)橙	胴部 40	No.4. カマドと接合。胴部内面ナデ。

第262号住居跡 (第858図)

よ—467Gridに位置する。北東壁隅の壁溝とカマド燃焼部のみ検出された。規模・形態は不明。東壁に確認された浅い掘り込みの覆土には、炭化物や焼土が多く含まれており、カマドの燃焼部と考えるとよい。したがって、主軸の傾きはN-65°-Eである。北壁に沿って2基の小ピットが検出されている。深さは15cm前後である。壁溝は深さ5cmと浅い掘り込みである。

遺物は出土しなかった。

第263号住居跡 (第859図)

る・を—467・468Gridに位置する。長軸4.7m、短軸3.7m、北壁より南壁がやや短いびつな長方形を呈する。主軸の傾きはN-41°-W、確認面と床面との差は5cmと非常に浅い。湧水が激しく、貼床の検出状態は良好ではない。

カマドは北壁やや東寄りに構築されている。袖は小さく造り出され、燃焼部の掘り込みは浅い。柱穴は4基確認されているが、位置や大きさにばらつきがあり、深さは5〜16cmと浅い。柱痕は確認されなかった。壁溝は同じ幅ではほぼ全周する。貯蔵穴はカマドの向かって左に設けられている。規模は66×64cm、深さは18cmである。

覆土が浅いため、遺物の量も少ないが、床面直上に土師器がかるうじて残っている。また、上製紡錘車が1点出土している。

第264号住居跡 (第861図)

る—466・467Gridに位置する。やはりほとんど削平されており、確認面と床面との差はないに等しい。北東および南西コーナーがかりうじて確認された。規模は推定で長軸2.5m、短軸2.0m、木遺跡で検出された住居跡の中では極めて小さい。形態は南北に長い長方形を呈すると考えられる。カマドなどの施設は検出されなかった。中央部に土坑が、南西隅にピットが1基確認されているが、本住居跡との関連は不明である。

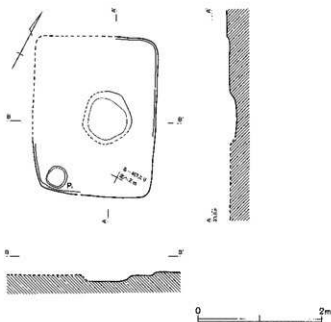
遺物は破片すらまったく出上しなかった。

第265号住居跡 (第862図)

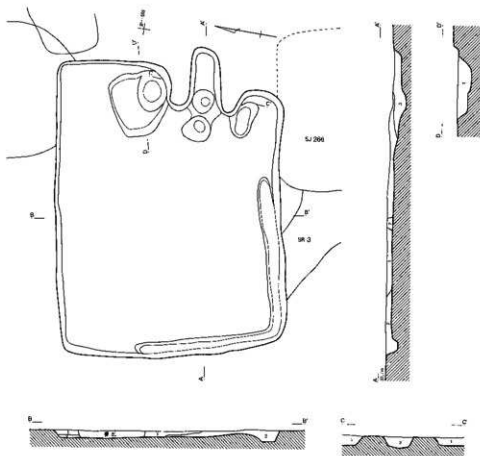
わ・か—469Gridに位置し、第3号方形周溝墓を切って構築されている。第266号住居跡とも切り合うが、その新旧関係は明らかにすることができなかった。北側は一部擾乱を受けている。規模は長軸4.7m、短軸3.6mで、北東隅の張り出しが弱い不整長方形を呈する。主軸の傾きはN—81°—E、床面までの深さは10cm前後である。

カマドは東壁やや南寄りに構築されている。袖は地山の造り出しで、燃焼部は浅く掘り込められているが、凹凸が認められる。壁溝は南西コーナーを中心に検出されている。深さは6cmである。貯蔵穴はカマドの左側に設けられている。規模は103×92cmと大きいのが、深さは20cmとあまり深くはない。反対側のカマド袖にも落ち込みが存在している。

出土遺物は少なく、すべて破片である。



第861図 第264号住居跡



第265号住居跡

1. 暗褐色土 粘性の強い砂子の粗い層で、炭化物混じり、多数の土器片を含む。
2. 淡褐色土 粘性・砂質の強い砂子の粗い層で、炭化物をあまり含まない。
3. 赤褐色土 焼土ブロック・炭化物を含む。

0 2m

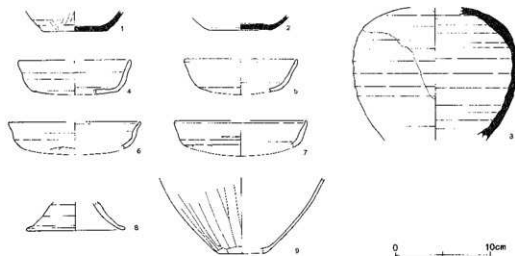
第862図 第265号住居跡

第266号住居跡 (第864図)

わー468・469Gridに位置し、第3号方形周溝墓および第265号住居跡と切り合っている。北壁及び東壁の一部はプランがはっきりしない。形態はほぼ長方形で、長軸2.8m、短軸2.6m、主軸の傾きはN-84°-E、床面までの深さは6cmである。

カマドは東壁に構築されているが、残存状態はあまり良好ではない。床中央に掘り込みが存在するが、本住居跡との関連は不明である。その他の施設は確認されなかった。

覆土が浅く、出土遺物は破片が多い。わずかに床面直上から土師器甕(4)がつぶれた状態で出土している。



第863図 第265号住居跡出土遺物

第265号住居跡 (第863図)

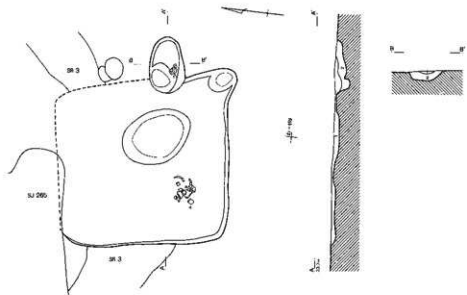
No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	環	底6.8	W+砂	灰白	底部 100	底部回転糸切り。火燬。
2	環	底6.4	W+砂	にふい登~灰白	底部 80	底部回転糸切り。焼成不良。
3	蓋	胴(17.4)	B	灰	胴部 20	胴部外面に自然釉付着。
4	環	口(12.0) 高(3.7)	B+W	(内)橙 (外)橙~灰黄褐	20	体部外面風化。
5	環	口(12.0) 高(3.8)	W	にふい赤褐	20	カマド。外面風化。
6	環	口(14.0) 高(3.5)	B多+W	橙	20	風化。
7	環	口(14.0)	B	橙	20	口縁部外面に絵柄み痕。
8	台付蓋	胴(10.4)	W	橙~にふい橙	胴部 20	貯蔵穴。胴部内外面ナデ。
9	鉢	底(4.8)	B多+R+W	にふい黄橙	胴部下半 10	胴部内面ナデ。

第267号住居跡 (第865図)

か・よ-472・473Gridに位置し、第29号溝に切られる。また南北方向に攪乱が走っている。規模は長軸6.0m、短軸4.7m、若干台形に近い不整形長方形を呈する。長軸の傾きはN-47°-E、床面までの深さは12cm、ほぼ全域に貼床が確認されている。

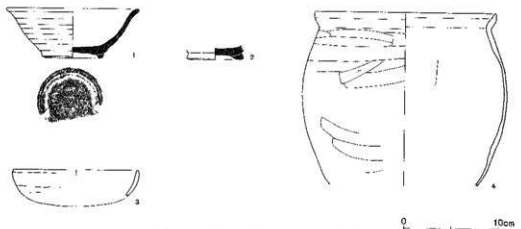
床直から炭化材が検出されており、焼失住居と考えられるが、上層が推定しえるような出土状況や部材ではなかった。

柱穴は全部で7基確認された。主となるのはピット1-4で、ほぼ均等な定位にある。深さは70cm前後で、柱痕も確認されている。炉はピット1と4のほぼ中間に設けられている。掘り込みはほとんどない。か以外にも焼土の堆積している箇所が散見された。壁溝は幅20cm、深さ13cmで、きれいに全周している。また、ピット3と4の間に、小砂利の集中している範囲が認められた。その



第266号住居跡

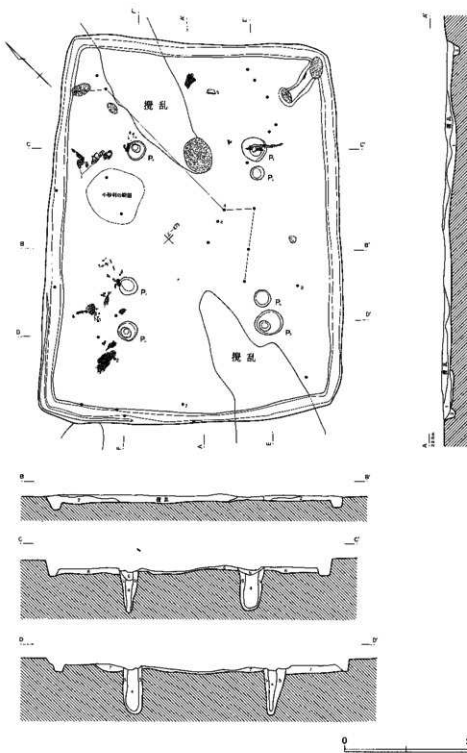
1. 暗褐色土 炭化物粒子を含み、土器片を多量に含む。
2. 暗赤褐色土 炭化物・粘土粒を多量に含む。

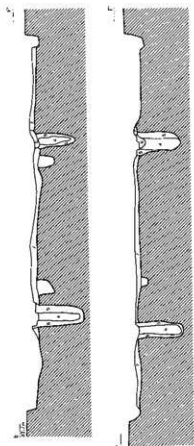


第864図 第266号住居跡および出土遺物

第266号住居跡 (第864図)

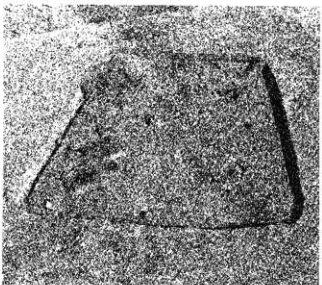
No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	高台付碗	口(14.0) 高台(8.4) 高5.2	B+W	灰	40	No.1. 高台ナデつけ。
2	高台付碗	高台(6.0)	B少+R+W	黄灰	底部 55	底部回転糸切り後、高台ナデつけ。
3	坏	口(6.7)	B+R少+W少	橙	口縁 20	風化。
4	甕	口19.0 胴(21.6)	R	橙～灰白	上半部 60	No.2-3. 胴部内面ヘラナデ。胎土中の含有物多量。



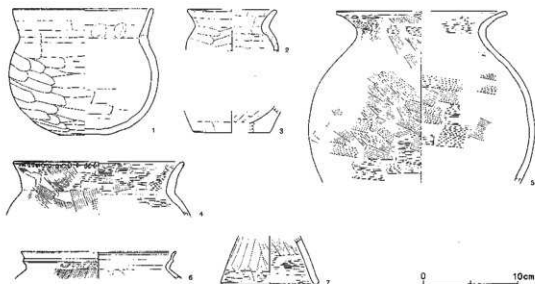


第267号住居跡

1. 暗茶色土 粘性の強い固くしまった層で、炭化物・焼土をわずかに含む。
2. 淡赤黄色土 炭化物・焼土を多量に含む、粘性強い。
3. 暗褐色土 固くしまった層で、炭化物をわずかに含む。
4. 柱穴跡層土
5. 柱穴充填土
6. 住居跡壁土
7. 住居跡貼皮



第267号住居跡



第866図 第267号住居跡出土遺物

第267号住居跡 (第866図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	小型甕	口15.4 底5.1 高13.3 胴15.9	B+R+砂	淡黄橙～橙	70	№14・15。口縁部内部指オサエ。胴部内面風化。
2	小型壺	口(9.6)	B+W	淡黄橙	20	№18。内外面赤影痕。
3	壺	底8.0	R+W多	橙	胴部 25	№34。底部外面ヘラケズリ。内面黒色。
4	広口壺	口(18.2) 胴24.0	B多+R	灰白～淡黄橙	30	№1・3・29・31・32・33。口縁部部面取り内外面ハケメ。
5	甕	口(18.2)	R+W+砂	淡黄橙	口縁 20	№4。口縁部部面取り。内外面ハケメ胎土中の含有物量多い。
6	甕	口(16.4) 高(2.9)	W+W'	淡黄橙	口縁 15	№28。口縁部部面取り。胴部外面↓方向のハケメ。内面指オサエ。
7	台付甕	脚(10.4)	R+砂	橙	胴部 20	№22。胴部外面ヘラケズリ後部部ナチ内面ヘラ工具痕。

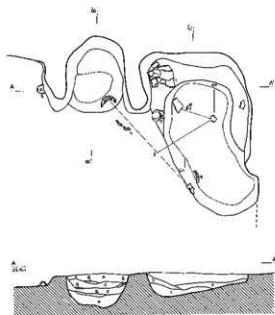
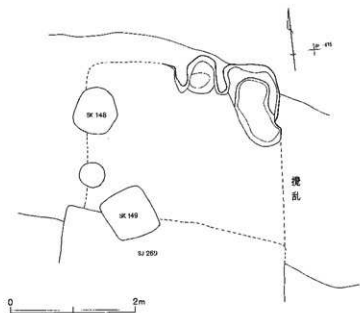
性格は不明である。

出土遺物の量は少なく、おもに覆土中から出土している。

第268号住居跡 (第867図)

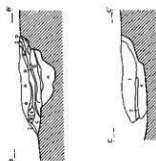
わー475Gridに位置し、攪乱によって遺構の大部分が失われている。第269号住居跡と切り合うが、両者の新旧関係は明らかではない。カマドと北東コーナー部分のみ確認された。北壁の長さは推定3mである。検出された範囲ではあるが、床面には固く貼床がされている。

カマドは北壁に構築されている。袖は粘土を造り付けたもので、燃焼部の床面は被熱し、円形に赤く焼けている。右袖部分は甕を伏せて柱としている。貯蔵穴はカマドの向かって右側、北東隅に設けられている。規模は60×190cmの歪んだ楕円形で、深さは20cmである。柱穴は攪乱下からも確



第268号住居跡

1. 黒色土 粘性の強い粒子の層かい層で、炭化物をおおかに含む。
2. 暗黒褐色土 粘性の強い粒子の層かい層で、炭化物・焼土を含む。
3. 暗褐色土 黄褐色土ブロックを主体とした層。
4. 暗褐色土 粘性の強い粒子の層かい層。

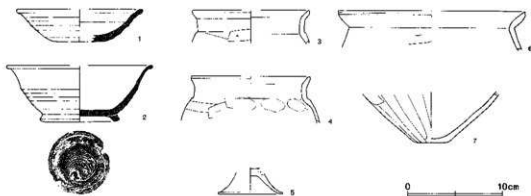


第268号住居跡カマド

- A. 暗褐色土 粘性の強い粒子の層かい層で、炭化物と微量の焼土粒子を含む。
- B. 暗黒色土 粘性の強い炭化物層。
- C. 暗赤褐色土 焼土粒下・炭化物・土断片を多量に含む。
- D. 赤色土 カマド下面にみられる焼土層。
- E. 焼土ブロック
- F. 黒褐色土 第1次使用後のカマド跡範囲。固くしまる。
- G. 暗褐色土 第1次使用後のカマド範囲。炭化物層。
- H. 暗褐色土 カマド掘り方。非常に固くしまった粘質土。



第867図 第268号住居跡



第868図 第268号住居跡出土遺物

第268号住居跡 (第868図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色質	残存率(%)	備考
w1	罎	口(13.2) 底(6.4) 高(3.5)	V	灰	20	No.4. カマド・貯蔵穴と接合。底部回転 糸切り。
2	高台付罎	口(15.4) 底9.4 高5.9	V	灰	60	No.5. カマド・貯蔵穴と接合。底部回転 糸切り。
3	罎	口(12.4)	B+W	橙	口縁 20	No.1~10・2. 口縁端部ヘラアテ。風化。
4	罎	口(12.4)	B+W	橙	口縁 20	No.3. 胴部内面推オサエ。
5	台付罎	底6.8	V	橙	脚部 70	No.1. 脚部内外面ナデ。
6	罎	口(19.8)	B+W+W'	橙	口縁 20	No.9. 口縁端部ヘラアテ。
7	罎	底5.2	V	(内)灰白 (外)黒褐	底部 100	貯蔵穴。底部ヘラケズリ。

認することはできなかった。

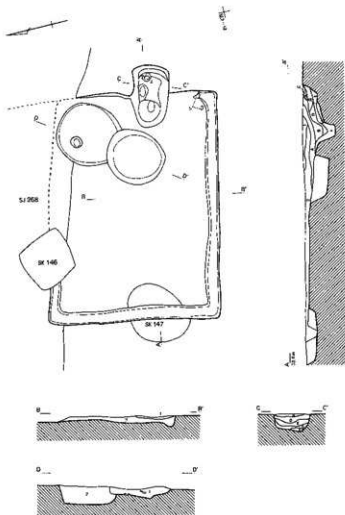
検出された範囲がカマドを中心としているためか、住居跡の残りの割には、遺物の量はそれほど
少なくはない。破片ではあるが、凶化に耐えうる土師器や須恵器が出土している。

第269号住居跡 (第869図)

わ-475Gridに位置し、第146・147号土坑に切られる。北側で第268号住居跡と切り合っている
はずであったが、擾乱によって明らかにできなかった。形態は長方形で、長軸3.7m、短軸2.8m、
主軸の傾きはN-111°-Eである。覆土は10-15cmと浅く、床面は固く貼床が認められる。

カマドは東壁中央に構築されている。平面プランは方形で、袖は短く、粘土で造り付けられてい
る。燃焼部は深く掘り込んであるが、床面は焼けていない。壁溝は部分的に検出されている。幅は
16cmとほぼ一定で、深さは5cmと浅い。カマドの前に存在する土坑は、床下土坑と推定される。

出土遺物は少なく、破片が多い。床面直上からの遺物の出土はなく、すべて覆土中に浮いた状態
で出土している。



第269号住居跡

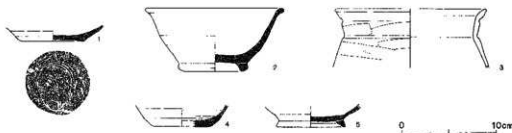
1. 暗黄褐色土 粘性の強い粘土の層で、固くしまっている。炭化物・赤褐色土ブロックを多量に含む。
2. 暗褐色土 淡い灰色の部分を含み含む層で、粘質に富む。

第269号住居跡カマド

- A. 暗褐色土 2層よりも厚く、炭化物を多量に含む。
- B. 淡黄褐色土 粘性の強い粘土の層で、炭化物を含む。
- C. 赤土 焼土層、固くしまっている。
- D. 赤褐色土 焼土を多量に含む層で、固くする。炭化物ブロックを多量に混入。
- E. 淡灰色土 粘性の大きい層で、炭化物は含まれない。
- F. 灰褐色土 暗褐色土を混入する粘質の強い層。
- G. 暗褐色土 粘性の人間強い炭化物層。



第869図 第269号住居跡



第870図 第269号住居跡出土遺物

第269号住居跡 (第870図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	底8.6	B+R+片	曜灰質	底部 100	底部回転糸切り。
2	高台付椀	口14.6 底7.4 高6.7	R	橙~にふい黄橙	80	No.1. 底部回転糸切り後、高台ナデつけ焼成不良。 内面風化。
3	罎	口(16.0)	R多+W	橙	口縁 20	
4	坏	底(6.0)	W	灰	底部 30	カマド。底部回転糸切り。
5	高台付椀	底7.0	R多+W	にふい橙	脚部 100	No.2・3. 底部風化。焼成不良。

第270号住居跡 (第871図)

を—475Gridに位置し、大半が調査区域外にかかる。検出された一辺の長さは3.2mである。確認面がすでに床面下まで掘り込まれており、掘り方のみわずかに確認できたにすぎない。柱穴や壁溝はともに検出できなかった。

遺物はまったく出土しなかった。

第271号住居跡 (第872図)

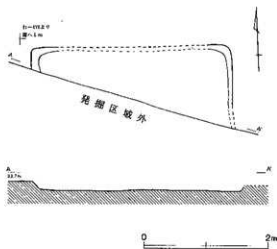
か—475・476Gridに位置し、大半が掘乱によって削られている。検出された北壁は長さ4.1mで、覆土はほとんどみられず、床面がわずかに確認されたにすぎない。柱穴は2基存在するが、いずれも掘り込みは浅く、置き柱的なものと考えられる。中央の土坑と本住居跡との関連は不明である。壁溝は検出された範囲すべてに認められ、幅15cm、深さは6cmと浅いがしっかりと残っている。掘乱の下面も調査を行ったが、柱穴やカマドの存在を裏づける資料には恵まれなかった。

遺物の出土はない。

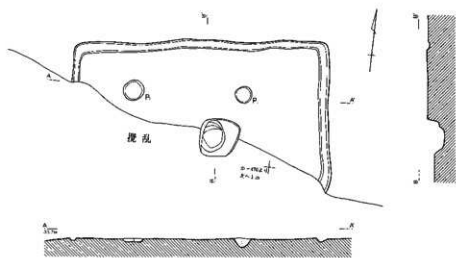
第272号住居跡 (第873図)

わ—476Gridに位置する。第273号住居跡に切られ、南側は調査区域外にかかる。検出された北壁は長さ3.4mで、おそらく正方形に近い形態と考えられる。主軸の傾きはN—100°—Eである。床面までの深さは5cmと浅い。床面には固い貼床が認められる。

カマドは東壁に構築されている。形態は方形で、袖は短く造り付けられている。ピットは数基確認されたが、柱穴に相当するものはなかった。壁溝はカマド右側を除いて確認されており、第273



第871回 第270号住居跡



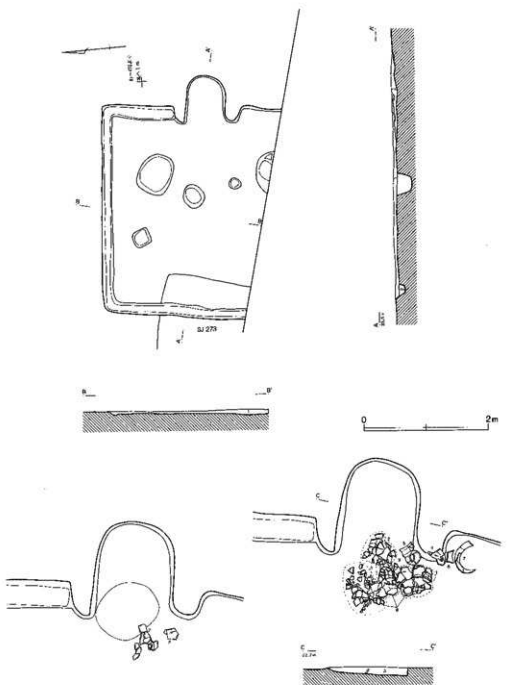
第271号住居跡

1. 暗黒色土 粘性の少ない粒下の粗いバサバサした層で、炭化物を多量に含む。

第872回 第271号住居跡

号住居跡の貼床下からも検出された。ほぼ全周するものと思われる。

覆土は浅いが、出土遺物の状態は比較的良好である。カマドの焚口に甕が数個体分、細かい破片となって出土している。

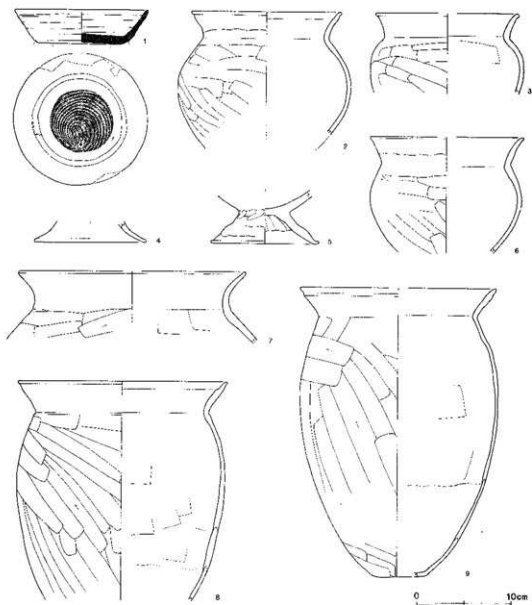


第272号住居跡

1. 暗褐色土 粘性の強い粘土の粗い層で、炭化物混じり。
2. 暗栗褐色土 粘性の強い粘土の粗い層で、黄褐色土ブロックを多数に含む。
3. 赤褐色土 焼土ブロック層。

0 1m

第873図 第272号住居跡



第874図 第272号住居跡出土遺物

第273号住居跡 (第875図)

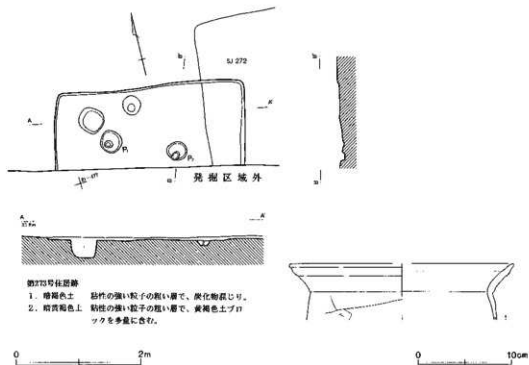
わ—476Gridに位置し、南半は調査区域外である。検出された北壁の長さは3.1mである。覆土はほとんどなく、住居跡のプランのみ確認された。床面はやや不明瞭ながら、貼床が認められる。

カマドは検出されなかったが、おそらく北壁以外に構築されたものと思われる。ピットは3基確認されており、ピット1と2が柱穴にあたると思われる。貯蔵穴は北西隅に設けられている。径45cmほどの円形で、深さ30cm 底は平らである。

遺物は数えるほどしか出土しなかったが、1点のみ図化することができた。

第272号住居跡 (第874図)

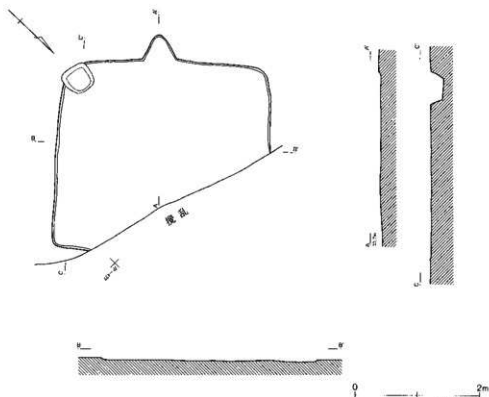
No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口14.0 底9.0 高3.6	V+針	灰	90	No.4, 底部回転糸切り、回転周辺ヘラケズリ。口縁部外面凹凸焼き痕。
2	甕	口16.0 胴(18.4)	B+R	橙	上半部 60	No.3-6-7-9-10-11-12-13。
3	甕	口(15.0) 胴(16.2)	B	橙	上半部 30	No.1-9-11。
4	台付甕	底(11.6)	V	橙	脚部 20	No.2, 風化著しく調整不明瞭。
5	台付甕	底11.4 高5.7	砂	橙	脚部 100	No.3, 脚基部外面ヘラケズリ。
6	甕	口(16.2)	B	にぶい橙	上半部 30	No.2, 口縁部外面粘土の接合痕可瞭。胴部内面ナデ。
7	甕	口(24.0)	V	橙	口縁 30	No.1-11, 口縁端部即取り。
8	甕	口22.0	B+V+砂多	橙~黒褐	70	No.5-6-7-8-9-10-11-12-13。胴部外面黒色。
9	甕	口(20.8) 底(6.0) 高30.3 胴(21.0)	B+V	橙~黒褐	40	No.5-6-7-8-9-11-13。胴部外面下位~底部黒色。底部ヘラケズリ。



第875図 第273号住居跡および出土遺物

第273号住居跡 (第875図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	甕	口(24.0)	V	橙	口縁 20	胴部外面ヘラケズリ。



第876図 第274号住居跡

第274号住居跡（第876図）

わ・か—477Gridに位置する。北東隅の壁は土坑によって切られており、北壁の大半は擾乱によって破壊されている。規模は長軸3.4m、短軸3.0mの長方形を呈する。覆土はまったく存在せず、床面も削られており、掘り方がかろうじて確認されたにすぎない。南壁中央の突出している部分はカマドではなく、本住居よりも古い土坑と推定される。柱穴などの施設は確認できなかった。

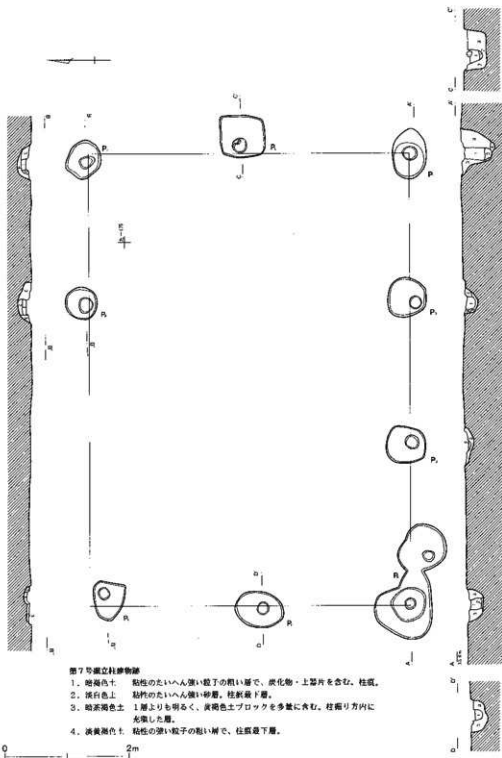
本住居跡からは遺物はまったく出土しなかった。

(4) 掘立柱建物跡

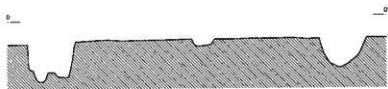
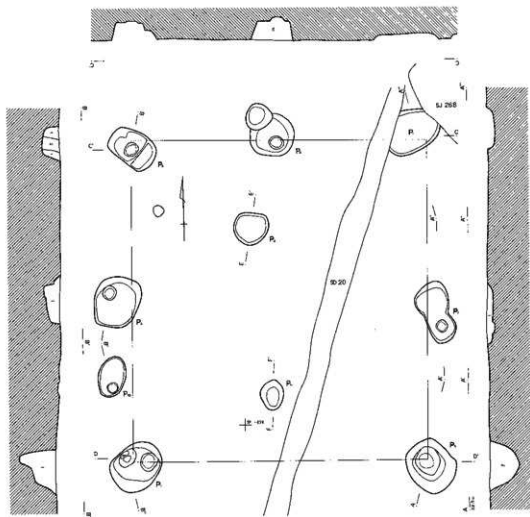
第7号掘立柱建物跡（第877図）

よ・た—474・475Gridに位置する。規模は2間(514cm)×3間(720cm)で、3間のほうが柱間の幅が狭い。柱の間隔はほぼ一定である。北側3間の柱穴のうち1ヵ所は検出されなかった。長軸の傾きはN-90°-Eで、東西方向に向く。柱穴の形態は円形が基本だが、ビット5は方形を呈する。深さは10~54cmで、掘り込みは総じて浅いが、ほとんどのビットで柱痕が検出された。

出土遺物はごくわずかで、ビット5から須恵器高台付椀の底部が出土しているにすぎない。



第877図 第7号掘立柱建物跡

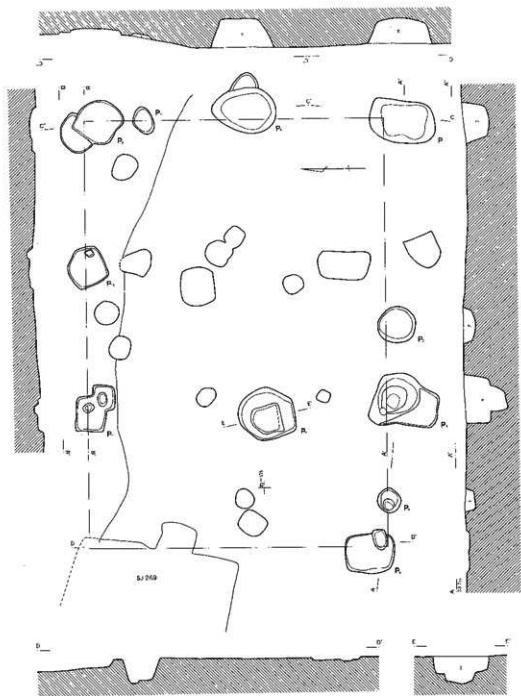


第8号独立柱建物跡

1. 暗黒色土 粘性少なく粒子の粗いバサバサした層で、炭化物を多量に含む。
2. 暗赤褐色土 粘性の強い粒子の粗い層で、焼土ブロックを多量に含む。
3. 黒色土 粘性の強い粒子の細かな層で、炭化物を多量に含む。

0 ————— 2m

第878図 第8号掘立柱建物跡



第9号竪立柱建物跡

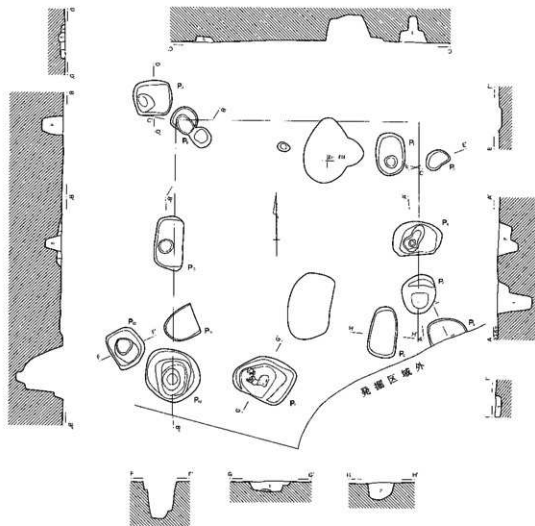
1. 暗褐色土 粘性少なく板下の粗いバサバサした層で、炭化物を多量に含む。
2. 暗赤褐色土 粘性の強い砂子の粗い層で、焼土ブロックを多量に含む。
3. 黒色土 粘性の強い砂子の細かな層で、炭化物を多量に含む。
4. 暗褐色土 粘性の強い砂子の粗い層で、炭化物を含む。

0 2m

第879図 第9号竪立柱建物跡

第8号掘立柱建物跡 (第878図)

わ・か—473・474Gridに位置し、第267号住居跡および第20号溝と切り合っている。規模は2間(472cm)×2間(508cm)で、東西にわずかに長い。長軸は真北を向いている。柱穴の形態は円形で、



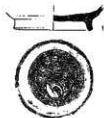
第10号掘立柱建物跡

1. 暗褐色土 粘性少なく粒子の粗いバラバラした層で、炭化物を多量に含む。
2. 暗赤褐色土 粘性の強い粒子の粗い層で、焼土ブロックを多量に含む。
3. 黒色土 粘性の強い粒子の細かな層で、炭化物を多量に含む。
4. 暗褐色土 粘性の強い粒子の粗い層で、炭化物を含む。
5. 黄褐色土 粘性の弱い粒子の細かな層で、炭化物をあまり含まない。



第880図 第10号掘立柱建物跡

SB 7



SB 9



SB 10



第881図 第7・9・10号掘立柱建物跡出土遺物

第6発掘区掘立柱建物跡(第881図)

NO.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	高台付碗	高台8.2	B多+W	灰	底部 100	SB7 Pit5, 底部回転糸切り後高台ナデつけ。風化。
2	壺	口(18.0)	B+W少+W	橙	口縁 15	SB9 Pit3, 胴部外面ヘラケズリ。
3	高台付碗	口11.8 高4.7 高台5.3	B+W	にふい煙~黒	85	SB10 Pit7, No.2, 底部回転糸切り後高台ナデつけ。内面に黒色付着物あり。

に掘り込まれている。南側中央の柱穴は確認できなかった。深さは浅いもので12cm、深いもので58cmである。柱痕はあまりはっきりとはしないが、ピット5には焼土ブロックの多く含まれた粘性土が堆積している。ピット1は住居跡、溝と切り合っており、正確なプラン、堆積土等は不明である。ピット8-10はいずれも遺構に伴う補助的な柱と考えられる。

遺物は少なく、土師器や須恵器の破片が出土したが、図示に耐える遺物はなかった。

第9号掘立柱建物跡(第879図)

を・わ-474・475Gridに位置する。調査終了後に掘立柱建物跡と認定したものである。第269号住居跡、第10号掘立柱建物跡と切り合っている。規模は2間(480cm)×3間(340cm)で、柱間は240cm、170cmを基準とするが、南面の間隔は一定していない。長軸の傾きはN-90°Eである。柱穴の形態は不定形で、直に掘り込まれている。掘り込みの深さは4-68cmとまちまちである。覆土が観察できたもののほとんどに粘質土の堆積が認められた。

出土土器はすべて破片であったが、ピット7から刀子が出土している。

第10号掘立柱建物跡(第880図)

を・わ-473・474Gridに位置する。第9号掘立柱建物跡と切り合い、南側は調査区域外にかかる。当初土坑として調査したが、調査終了後、掘立柱建物跡と認定した。検出された北面は長さ388cm、柱間は一定せず、かなり歪んでいる。長軸はほぼ真北を向いており、柱穴の形態はさまざまである。ピット7の底には自然石が敷かれていた。覆土の観察ができたピットのうちいくつかには、炭化物や焼土ブロックを含む粘性の強い土が堆積している。

遺物は、ピット7から残りのよい須恵器高台付碗が出土している。他のピットからは破片しか出土しなかった。

(5) 土坑・井戸

第6発掘区で検出された土坑は、総じて掘り込みが浅く、出土遺物も少ないため、その時期や性格は不明なものがほとんどである。井戸も数基確認されているが、湧水など条件が悪く、満足に調査できたものは少ない。

第128号土坑（第883図）

か-469Gridに位置する。規模は54×34cmで菱形に近い形態を呈し、深さ13cmと小さい土坑である。にもかかわらず、残りのよい須恵器坏がまとまって出土した。すべて底部回転糸切り離し無調整のものである。

第133号土坑（第883図）

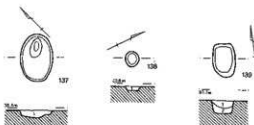
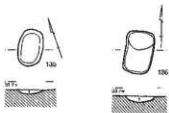
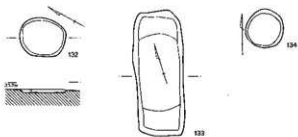
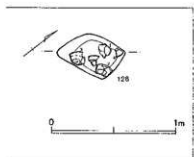
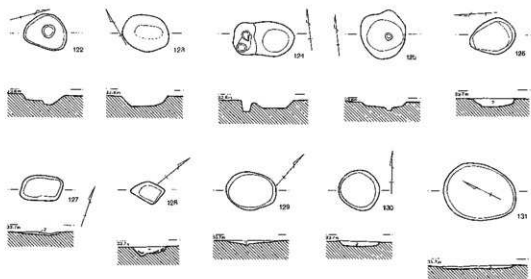
を-469Gridに位置する。規模は200×76cmの長方形を呈する。深さは12cmで、中央がわずかに掘りくぼめられている。遺物は土師器坏が1点出土している。

第168号土坑（第885図）

よ・た-486Gridに位置し、一部発掘区域外にかかる。規模は480×197cm、深さはもともと掘り



第882図 第128号土坑遺物出土状況



第126～133・136～139号上坑

1. 暗褐色土 粘性少なく粒の粗いバサバサした層で、炭化物を多量に含む。
2. 暗赤褐色土 粘性の強い粒子の粗い層で、黄土ブロックを多量に含む。
3. 黒色土 粘性の強い粒子の細かな層で、炭化物を多量に含む。



第883図 第6発掘区土坑(1)

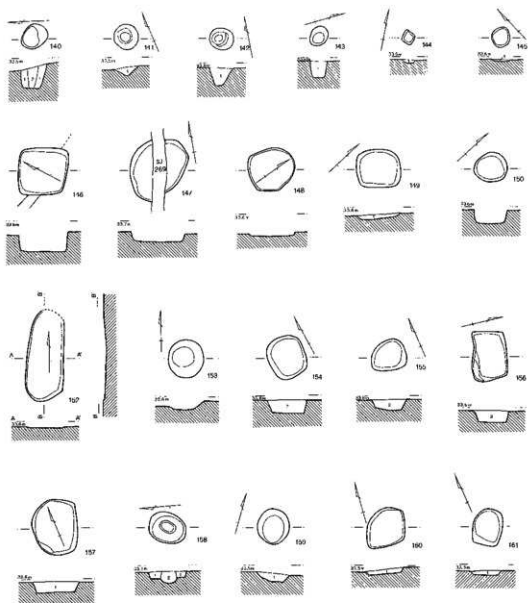
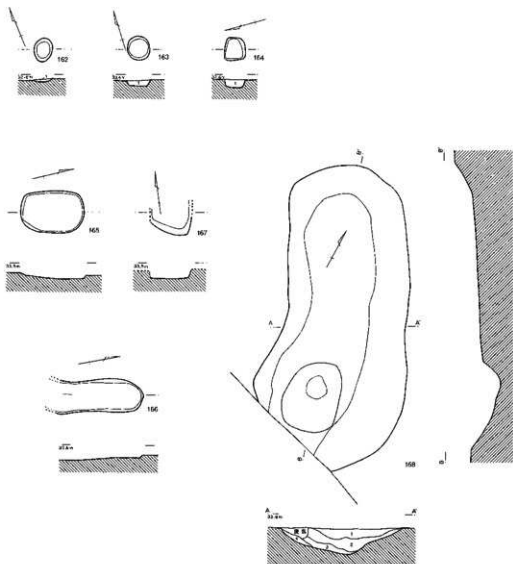


図140～145・154～181号土坑

1. 暗黒色土 粘性少なく粒子の粗いバラバラした層で、炭化物を多量に含む。
2. 暗赤褐色土 粘性の強い粒子の粗い層で、焼土ブロックを多量に含む。
3. 紫色土 粘性の粗い粒子の細かい層で、炭化物を多量に含む。

0 2m



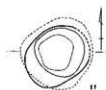
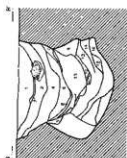
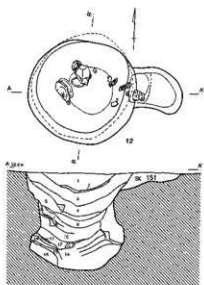
第162～164号土坑

1. 暗黒色土 粘性少なく粒子の粗いバサバサした層で、炭化物を多量に含む。
2. 暗赤褐色土 粘性の強い粒子の粗い層で、炭土ブロックを多量に含む。
3. 黒色土 粘性の強い粒子の粗かな層で、炭化物を多量に含む。

第168号土坑

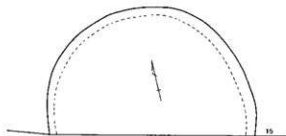
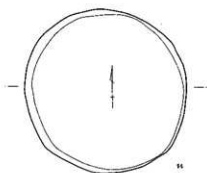
1. 黒褐色土 灰色土粒子を少量含む。粘性あり。しまりよし。
2. 暗褐色土 黄色土粒子を多量に含む。少量の炭化物を含む。粘性あり。しまりよし。
3. 茶褐色土 灰色土粒子を少量含む。少量の炭化物を含む。粘性あり。しまりよし。
4. 黄褐色土 灰色土粒子を多量に含む。粘性あり。しまりよし。

0 2m

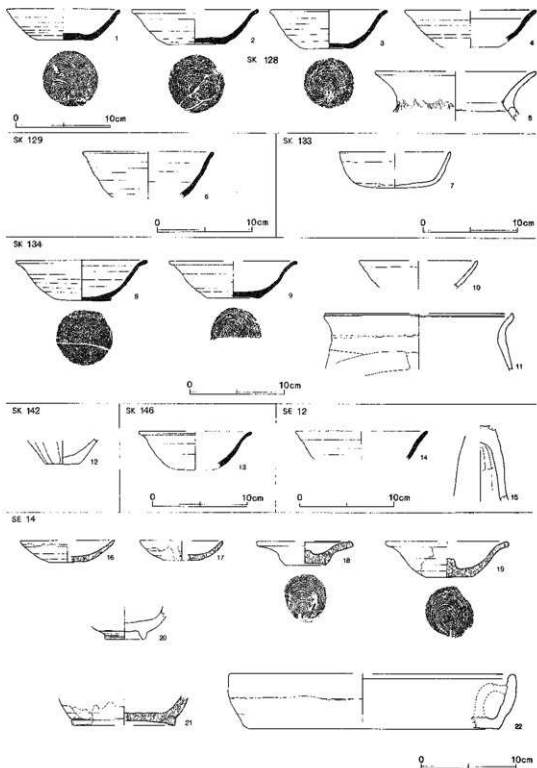


第12号井ノ

1. 灰褐色土 粘性が強く、炭化物・火山灰を含む。
2. 灰色土 粘性の弱い粘土の粗い層で、火山灰の純層。
3. 暗茶褐色土 粘性の強い粘土の粗い層で、炭化物を含む。
4. 暗茶黄色土 固くしまった黄褐色粘土を含む。
5. 暗褐色土
6. 褐色土
7. 黄褐色土
8. 黄褐色土 固くしまった黄色土ブロックを多量に含む。
9. 淡黄褐色土
10. 褐色土
11. 白色土 砂質層。
12. 暗灰褐色土 黄褐色砂質層。
13. 黒褐色土 粘質の黒色砂質層。
14. 淡黒色土 粘質の黒色土層。
15. 黄褐色土 粘性の強い細かい砂層に黒色土を混入する。
16. 黄褐色土 さめの細かい砂層。



0 2m



第887図 第6発掘区土坑・井戸出土遺物

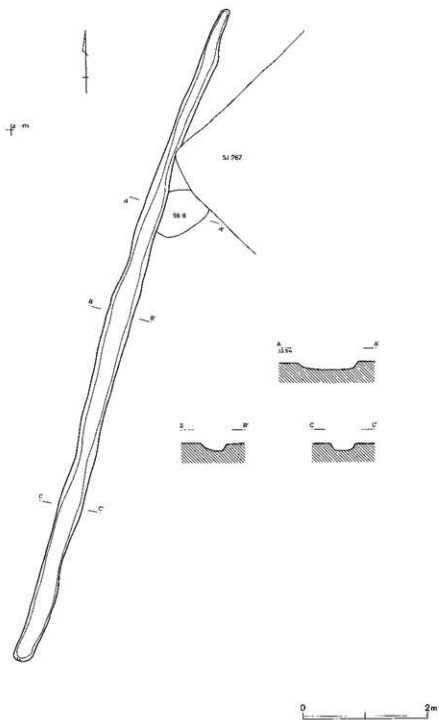
第6発掘区土坑・井戸 (第887図)

NO.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	坏	口(12.0) 底5.7 高3.3	M+W	暗黄灰	40	SK128, No.4, 底部回転未切り。
2	坏	口(13.6) 底5.7 高3.8	B+R+W+砂多	黒褐	60	SK128, No.1, 底部回転未切り。
3	坏	口12.4 底4.8 高4.4	M+W	灰	75	SK128, No.3, 底部回転未切り。
4	坏	口(14.0)	B少+W	灰	口縁 25	SK128, No.5, ロクロ成形。
5	甕	口(17.0)	B+R少+W	明赤褐	口縁 20	SK128, No.4, 胴部外面ハケメ, 風化顯著。混入。
6	坏	口(14.0)	B+W+W+針多	にょい黄	15	SK129, ロクロ成形。
7	坏	口(11.9) 高3.8	B+W	橙	25	SK133, No.2, 胴部外面ヘラケズリ。
8	坏	口13.8 底6.0 高4.3	B多+R少+W	浅黄	75	SK134, 底部回転未切り, 風化顯著。
9	坏	口(13.5) 底(5.5) 高3.9	B+W+砂少	灰	25	SK134, 底部回転未切り。
10	坏	口(12.6)	B+R少+W	橙	口縁 15	SK134。
11	甕	口(20.0)	B+R多+W	橙	口縁 20	SK134, 胴部外面ナデ無し。
12	甕	底(3.6)	B+W	明赤褐～赤黒	底部 40	SK142, 底部外面一方向のヘラケズリ。
13	坏	口(12.0)	B少+W+W	灰～橙	25	SK146, 口縁部内面に黒色付着物あり。
14	坏	口(14.0)	B+W少	浅黄橙	口縁 20	SE12, ロクロ成形。
15	高坏	下底5.6	B+R+W少	橙	胴部 50	SE12, No.2, 胴部外面ナデ, 内面ヘラケズリ。
16	灯明皿	口(10.0) 底(3.6)	M	(内)灰オリーブ (外)灰	35	SE14, 鉄輪。瀬戸美濃産, 口縁部外面黒色付着物あり。
17	灯明皿	口(6.8) 底(3.8)	B+W	(内)にょい褐 (外)灰白	30	SE14, 鉄輪。瀬戸美濃産。
18	灯明皿	口(10.2) 高2.5	B+W	明褐	50	SE14, 鉄輪。瀬戸美濃産, 底部回転未切り, 江戸後期。
19	灯明皿	口(13.1) 底4.9 高3.8	B+W	暗赤褐(地-浅黄 橙)	60	SE14, 鉄輪。瀬戸美濃産, 底部回転未切り, 江戸後期。
20	丸瓶	高台(4.2)	M	灰	30	SE14, 唐津焼。陶器。
21	徳利	高台(11.0)		暗オリーブ(地- 灰)	底部 50	SE14, 鉄輪。底部か?
22	短瓶	口(28.0)	B+R少+W	(内)灰(外)灰～黒	口縁 10	SE14, 内裏欠損。

込まれているところで40cmである。土坑の中ではもっとも大きく、掘り込みも深いのが、出土遺物はない。

第11号井戸 (第886図)

ぬ一466Gridに位置する。確認面での規模は90×105cmとやや楕円形を呈する。深さは135cmである。検出された井戸の中ではもっとも小さい。ほとんど垂直に掘り込まれているが、下部は側壁が崩落しているかオーバーハングしている。遺物はまったく出土しなかった。



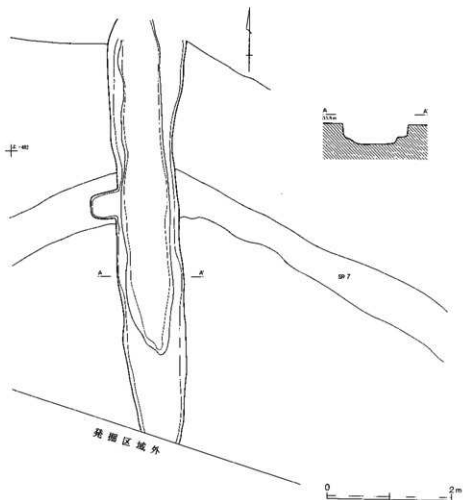
第888号沟 第28号沟

第12号井戸 (第886図)

か-475Gridに位置し、第151号上坑を切る。規模は径160cm、深さは150cmである。下部はオーバーハングしており底はまるくくぼんでいる。河原石や角礫が多量に検出された。土器の出土は少なく、図示できたのは2点のみであるが、他の破片などからみると、主に須恵器(14)と同じ時期、平安時代の遺物をもっとも多いようである。

第14号井戸 (第886図)

れ-475Gridに位置する。規模は径260cm、深さは120cmである。直に掘り込まれており、底は平らである。覆土からは灯明皿やキセルなど近世の遺物が多く出土している。



(6) 溝

第28号溝 (第888図)

わーよー473Gridに位置し、南北方向に延びる。第267号住居跡および第8号掘立柱建物跡と切り合っている。0.4m程の一定の幅で、浅く掘り込まれている。深さは11~12cmとほぼ変化がない。遺物はまったく出土しなかった。

第29号溝 (第889図)

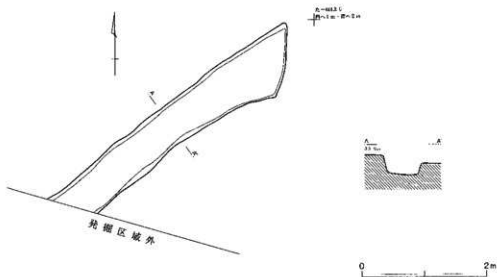
か・よー481Gridに位置し、第7号方形周溝墓を切っている。ほぼ南北方向に走る。溝の幅は1.1m、深さは32cmで、2段に掘り込んでいる。

出土遺物は比較的多いが、近世末以降のものが主であり、ここでは図示しなかった。陶磁器・瓦・掘り針・焙烙などがある。

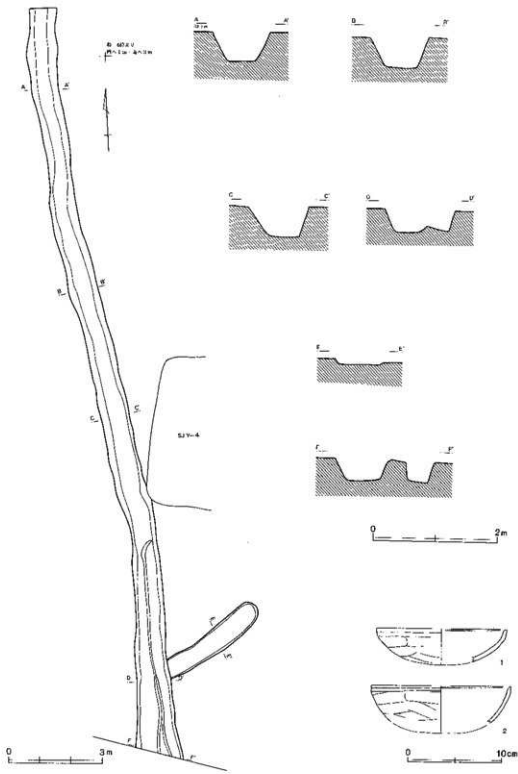
第30号溝 (第890図)

よー484Gridに位置し、南側は調査区域外にかかるため全容は不明である。幅0.6m、深さ27cm、ほぼ一定の深さで延びている。方形周溝墓の一部かとも思われるが、遺物などからもその確証は得られなかった。

遺物量は少なく、近世以降のものが主に出土している。



第890図 第30号溝



第891図 第31号溝および出土遺物

第31号溝 (第891図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	罎	口(14.0)	B+R+W多	橙	口縁 15	口縁端部ヘラアテ。
2	罎	口(15.0)	B+R少+W	橙~黒	口縁 15	口縁端部ヘラアテ。口縁部~体部内面ナデ。

第31号溝 (第891図)

よ一つ—486・487Gridに位置し、南北に発掘区を切っている。溝は南側で2条に分かれている。南端は幅85cmと45cm、深さは35cm前後、北端は幅80cm、深さは46cm前後で、北に向かうほど深くなる傾向にある。掘り込みは断面逆台形を呈する。南側2条に分かれるあたりで、極端に浅い溝が接しているが、切り合いは不明。

遺物は少なく、破片のみであるが、他の溝のように近世以降の新しい遺物はほとんどみられなかった。

(6) グリッド出土遺物

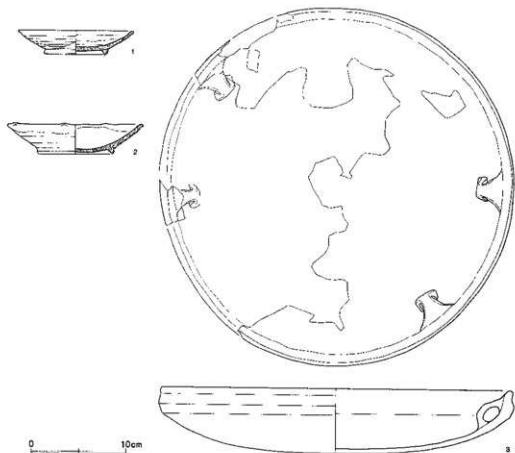
第6発掘区における遺構との帰属関係が不明な遺物のうち、残りがよく比較的重要と思われる遺物をあげた。灰軸陶器のうち、2は第1号古墳跡の周堀覆土から出土したものであり、明らかに混



第892図 第6発掘区全景

入と考えられるため、ここに掲載した。

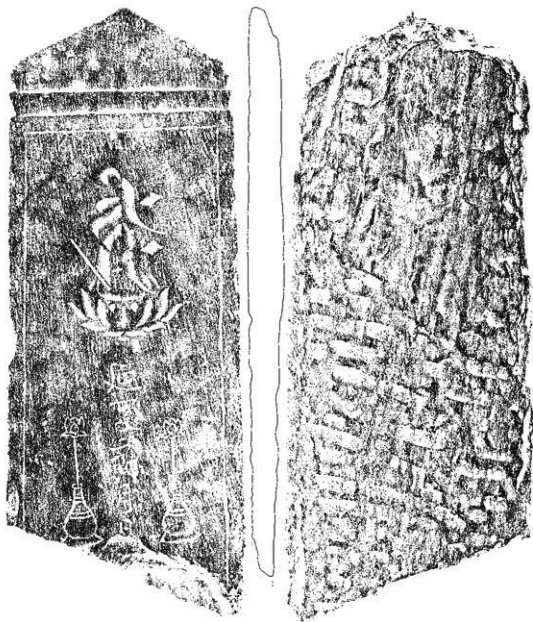
板碑(第894図)は、トレンチの出土遺物である。範囲確認のためのトレンチのうち、もっとも唐沢川よりにいれた1本から出土した。本調査以前のものであるため、残念ながら正確な位置をおさえることができなかった。緑泥片岩製で、基部を欠く。現存長59.8cm、厚さは38cmである。銘文は一部剥落しているためはっきりとはしないが、「延慶元□月日」と読める。延慶元年は鎌倉時代後期の西暦1308年である。



第893図 第6発掘区グリッド出土遺物

第6発掘区グリッド(第893図)

NO.	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存率(%)	備考
1	高台付皿	□12.2 高2.5 高台6.6	W 量少い	灰白	90	か-469, No.1, 灰輪陶器。上半部灰輪付けがけ。
2	高台付皿	□14.4 高3.1 高台6.2	W	灰白	65	ST1層土上層。灰輪陶器。輪花5弁。底部剥離不明。高台ナデつけ。灰輪剥離がけ?
3	焙烙	□37.2 高6.8	B+W	にょい黄橙～黒褐	70	そ-492～486-492～489付近。4ヶ所に内耳。内外面とも丁寧にナデ。



第894图 板碑

7 石製品

これまで紹介してきたように、上敷免遺跡から出土する遺物は、大半が土器で占められている。しかし、石製品や土製品、あるいは鉄製品も若干ではあるが出土しており、これらの中には注目すべき遺物も含まれている。また、石製品や土製品には祭祀的性格の強い遺物も含まれるが、本遺跡では特に祭祀関連の遺物は検出されておらず、これらの大半は住居跡から出土している。

子持勾玉 (第895図1)

第84号住居跡のカマドから出土した滑石製の子持勾玉である。形状は不均等、扁平で通例のものとは様相を異にする。「子」は、側面・平面ともに四角く削りだして表現しており、特に平は本体の面をさらに削り込んで強調している。孔は片側穿孔である。

勾玉 (第895図3・4)

滑石製で扁平板状のものをここにあげた。3は第169号住居跡、4は第16号住居跡から出土した。ともに荒い成形である。

有孔円板 (第895図5～8)

5と8は穿孔が並んで2ヵ所に、7は中央1ヵ所にあけられている。6は欠損品であるが、その位置から欠損部に1孔存在した可能性がある。5・6は第31号、7は第74号、8は第78号住居跡の出土である。

剣形品 (第895図2・9～15)

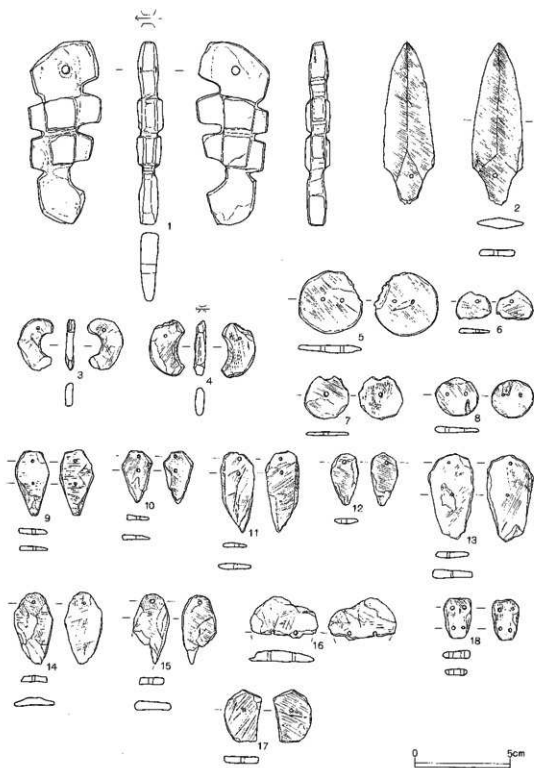
2は第214号住居跡の覆土から出土した。剣形品のなかでもたいへん優れた作品である。両面ともに丁寧に仕上げられており、鏡も明瞭である。滑石製ではあるが、他のものよりもきめが細かく、硬い。9～15は小形の剣形品である。孔は1ないしは縦に2穿孔される。14と15は若干厚めで片面に鏡を意識した削り込みがみられる。

不明品 (第895図16～18)

16は不明品としたが、穿孔の位置から有孔円板である可能性が高い。肉厚。第181号住居跡出土。17は薄錐形を呈し、1ヵ所に穿孔をもつ。第224号住居跡の壁溝から、大量の白玉 (第898図17～110) とともに出土した。18は不整形形で4ヵ所に穿孔をするものである。あるいは下駄の模造品の末裔であるかもしれない。8の有孔円板とともに第78号住居跡から出土した。

未製品 (第896図)

滑石製で、模造品の未製品もしくは欠損品と思われるものを一括した。1は両面ともに擦っており、穿孔部分に茎部の鏡らしきものが窺えるので、剣形品と推定される。2は両面からの穿孔を試



第895图 石製品(1) 模造品

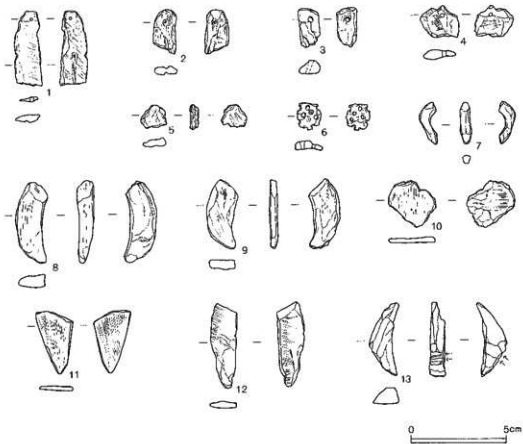
みた痕跡がみられる。6は規則性のない穿孔が何回も行われているものである。8・9は勾玉状に側面を丁寧に磨いているが、平の面は熱心に成形されていない。13は穿孔部分（欠印）で割れているのが観察される。

勾玉（第897図1～4）

4点とも造りは非常に丁寧である。1は第31号住居跡の床面から出土した。色調はオリーブ色である。2は青灰色を呈する。第164号住居跡の柱穴内から出土した。3は暗青灰色を呈し、曲がり具合がゆるやかだが稜は明瞭である。第243号住居跡覆土出土。4は緑灰色である。

切子玉（第897図5）

色調は深みのあるエメラルドグリーンで、巧みにカットされている。通常のものとはその割り付けが異なるが、切子玉の一種であろう。第31号住居跡出土。碧玉製か。本住居跡からは玉類や滑石製品、土製品の出土が多い。



第896図 石製品(2) 未製品

管玉 (第897図6)

色調は暗緑灰色を呈する。穿孔は太く、平の部分が漏斗状になっている。第41号住居跡のカマド付近の床面から出土している。

丸玉 (第897図7・8)

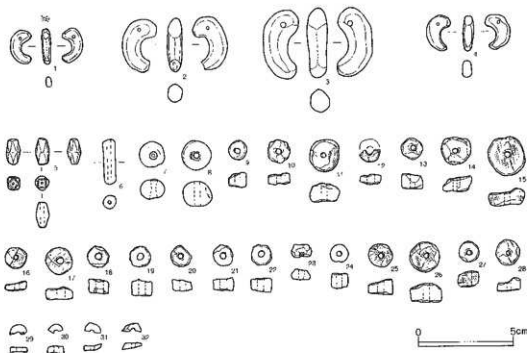
7は緑灰色を呈する。不純物が多く含まれており、風化も著しく光沢がない。第229号住居跡出土。8は黒に近い濃緑である。穿孔の周囲にわずかに擦痕が認められるが、他の面は滑らかで光沢を放っている。第132号住居跡出土。

白玉 (第897図9-28・第898図)

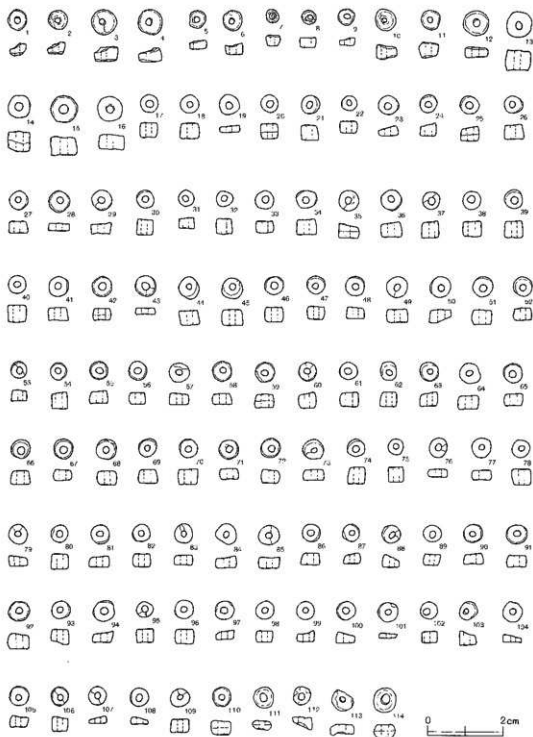
すべて滑石裂である。第897図9-28は大・中形のもので、粗雑な造りのものも含まれる。18-22は第161号住居跡のカマドから出土した。29-32は欠損品で、すべて谷部から出土した。第898図には小形の白玉を一括した。18-110は第224号住居跡の壁溝から出土したものである。

紡錘車 (第899図1-9)

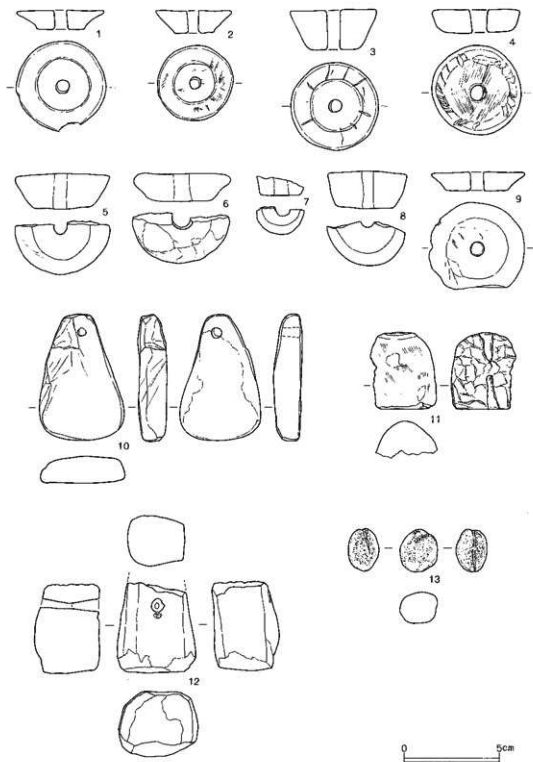
紡錘車には稜が明瞭なもの(1・2・9)と、そうでないもの(4-8)とがある。総じて丁寧な造りであり、表面は滑らかである。9は谷部の包含層から出土した。片岩裂である。



第897図 石製品(3) 玉類



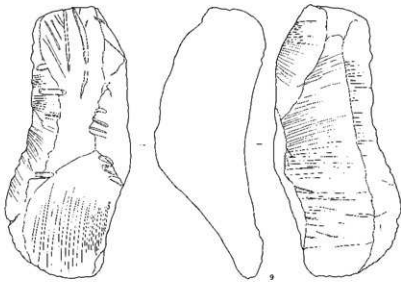
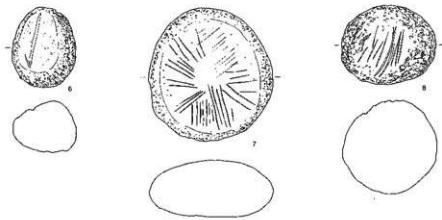
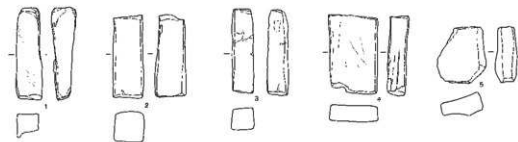
第898回 石製品(4) 白土



第899図 石製品(5) 紡錘車・石錘



第900圖 石製品(6) 紙石



第901図 石製品(7) 砥石・すり石

石製品(1) 模造品 (第895図)

No.	種類	大きさ(mm)	重さ(g)	出土地点	備考
1	子持勾玉	96.0×35.5×9.0	65.96	第84号住居跡	No.7. カマド出土。滑石製。
2	剣形	85.0×26.5×5.5	14.93	第244号住居跡	滑石製。
3	勾玉	26.0×16.5×3.5	3.25	第169号住居跡	カマド出土。滑石製。
4	勾玉	26.5×16.0×5.0	5.17	第16号住居跡	No.12. 滑石製。
5	有孔円板	33.0×33.0×4.0	7.89	第31号住居跡	No.6. 滑石製。
6	有孔円板	(14.5)×18.0×2.0	0.99	第31号住居跡	No.4. 滑石製。欠損。
7	有孔円板	22.0×23.0×1.5	2.32	第74号住居跡	No.20. 滑石製。
8	有孔円板	20.0×22.0×3.0	2.25	第78号住居跡	No.54. 滑石製。
9	剣形	34.0×17.5×2.5	3.22	第29号住居跡	No.74. 滑石製。
10	剣形	27.0×16.0×2.5	2.52	第31号住居跡	No.5. 滑石製。
11	剣形	42.0×17.0×3.0	3.73	第36号住居跡	No.15. 滑石製。
12	剣形	27.5×14.0×3.0	1.99	第46号住居跡	No.8. 滑石製。
13	剣形	46.0×23.5×4.0	9.65	第54号住居跡	滑石製。
14	剣形	37.5×20.0×4.0	3.73	第169号住居跡	滑石製。
15	剣形	36.5×18.0×4.5	4.53	第178号住居跡	滑石製。欠損。
16	不明	(20.0)×35.0×5.0	6.06	第181号住居跡	滑石製。欠損。
17	不明	27.0×18.5×3.5	3.34	第224号住居跡	壁溝出土。滑石製。
18	不明	21.0×14.0×4.0	2.90	第78号住居跡	No.39. 滑石製。

石製品(2) 未製品 (第896図)

No.	種類	大きさ(mm)	重さ(g)	出土地点	備考
1	不明	39.0×14.0×4.0	3.96	第117号住居跡	滑石製。欠損。
2	不明	23.0×11.5×4.0	2.44	第178号住居跡	滑石製。未製品。
3	不明	21.0×10.5×7.0	2.61	第42号土坑	滑石製。未製品。
4	不明	16.0×19.5×5.0	2.64	第181号住居跡	滑石製。
5	不明	12.0×4.0	1.05	第141号住居跡	滑石製。未製品。
6	不明	14.0×12.5×4.0	1.25	第183号住居跡	滑石製。未製品。
7	不明	22.0×4.0	1.17	第98号住居跡	No.2. 滑石製。欠損。
8	不明	43.0×7.0	9.00	第141号住居跡	No.3. 滑石製。未製品。
9	不明	36.0×5.0	5.19	第141号住居跡	No.48. 滑石製。未製品。
10	不明		2.76	第105号住居跡	滑石製。未製品。
11	剣形?	(30.0)×18.0×2.0	2.50	第121号住居跡	滑石製。欠損。
12	不明	44.5×13.0×3.5	4.08	谷(は-425g)	滑石製。未製品。
13	不明	33.0×14.0×8.0	4.90	表裏	滑石製。未製品。側面に2条の溝がある。

石鐘 (第899図10～13)

10と12は形態は異なるが、表面の擦痕は顕著ではなく、成形に伴うものと考えられる。鐘と考えるとよいであろう。11は穿孔部(貫通する)で半裁してしまったものようで、紡錘車である可能性もある。13はわずかではあるが線条の刻みが観察できる。

石製品(3) 玉類 (第897図)

No.	種類	大きさ(mm)	重量(g)	出土地点	備考
1	勾玉	18.0×9.0×2.5	1.46	第31号住居跡	No.2.
2	勾玉	28.0×16.0	4.98	第164号住居跡	P-1出土。欠損。
3	勾玉	36.5×16.0	9.55	第245号住居跡	
4	勾玉	18.0×12.0	1.62	ち-439g P-11	
5	切子玉	13.0×6.5	1.42	第31号住居跡	No.3.
6	管玉	23.0×6.5	2.03	第41号住居跡	No.4.
7	丸玉	9.5×13.0	2.87	第229号住居跡	滑石製。2方向から穿孔。
8	丸玉	13.0×15.0	4.87	第132号住居跡	No.13.
9	白玉	8.0×9.5	1.20	第21号住居跡	No.7. 滑石製。
10	白玉	5.0×11.0	1.46	第70号住居跡	No.9. 滑石製。
11	白玉	9.0×15.0	4.34	第72号住居跡	滑石製。
12	白玉	5.0×10.0	0.56	第84号住居跡	No.16. 滑石製。欠損。
13	白玉	8.0×11.0	1.42	第84号住居跡	No.15. 滑石製。
14	白玉	8.0×15.0	3.08	第84号住居跡	No.20. 滑石製。
15	白玉	8.0×19.5	5.23	第84号住居跡	No.17. 滑石製。
16	白玉	4.0×11.0	0.79	第85号住居跡	滑石製。
17	白玉	6.0×14.0	2.20	第131号住居跡	No.16. 滑石製。
18	白玉	7.5×11.0	1.59	第161号住居跡	カマド火床面出土。滑石製。
19	白玉	8.5×10.5	1.79	第161号住居跡	カマド火床面出土。滑石製。
20	白玉	6.0×10.0	1.16	第161号住居跡	カマド火床面出土。滑石製。
21	白玉	7.0×10.5	1.40	第161号住居跡	カマド火床面出土。滑石製。
22	白玉	7.0×11.0	1.36	第161号住居跡	カマド火床面出土。滑石製。
23	白玉	5.5×10.5	0.59	第161号住居跡	滑石製。未製品。
24	白玉	8.0×9.0	1.18	第161号住居跡	滑石製。
25	白玉	8.0×13.0	1.82	第3号獨立柱建物跡	No.6. 滑石製。
26	白玉	19.0×11.5	4.28	第4号獨立柱建物跡	No.3. 滑石製。
27	白玉	7.5×10.0	1.57	第5号獨立柱建物跡	P-1出土。滑石製。
28	白玉	6.0×12.0	1.62	第77号住居跡	滑石製。
29	白玉	(3.0)×9.0	0.18	谷(は-423g)	滑石製。欠損。
30	白玉	(3.5)×9.0	0.21	谷(は-423g)	滑石製。欠損。
31	白玉	(3.0)×8.0	0.13	谷(は-423g)	滑石製。欠損。
32	白玉	(3.0)×9.0	0.13	谷(は-423g)	滑石製。欠損。

砥石 (第900図・第901図1～5)

第900図1は方形に長い完形品である。先端に吊り下げのための穿孔がみられる。3も先端に穿孔のあるものであるが、残りはわずかである。他の砥石も使い込まれているものが多く、工具の筋状の擦痕が顕著にみられるものもある。材質もだいたい同じだが、第901図2だけは目が荒く、現在のもとはほとんど区別がつかない。谷の位置するグリッドからの出土ではあるが、包含層からのものかどうかは不明である。

石製品(4) 白玉(第898図)

No.	種類	大きさ(mm)	重さ(g)	出土地点	備考
1	白玉	3.0×4.5	0.13	第18号住居跡	No106. 滑石製。
2	白玉	3.0×5.0	0.15	第17号住居跡	No5. 滑石製。
3	白玉	4.0×6.5	0.33	第22号住居跡	No134. 滑石製。
4	白玉	4.0×6.0	0.25	第22号住居跡	No133. 滑石製。
5	白玉	2.0×4.0	0.07	第29号住居跡	No78. 滑石製。
6	白玉	3.0×5.0	0.19	第40号住居跡	No52. 滑石製。
7	白玉	3.0×3.0	0.07	第62号住居跡	No21. 滑石製。
8	白玉	3.0×3.5	0.06	第62号住居跡	No23. 滑石製。
9	白玉	2.0×4.0	0.07	第80号住居跡	No5-5. 滑石製。
10	白玉	4.0×5.0	0.19	第84号住居跡	No21. 滑石製。
11	白玉	4.0×5.0	0.22	第84号住居跡	No14. 滑石製。
12	白玉	3.0×6.5	0.24	第148号住居跡	滑石製。
13	白玉	5.0×6.5	0.46	第193号住居跡	No78. 滑石製。
14	白玉	5.5×5.5	0.31	第193号住居跡	No78 床面出土。滑石製。
15	白玉	5.0×7.0	0.37	第193号住居跡	No79. 滑石製。
16	白玉	4.0×6.5	0.31	第193号住居跡	No78. 滑石製。
17	白玉	4.0×5.0	0.16	第224号住居跡	壁面出土(以下同じ)。滑石製。
18	白玉	4.0×5.0	0.17	第224号住居跡	滑石製。
19	白玉	2.5×5.0	0.11	第224号住居跡	滑石製。
20	白玉	4.0×5.0	0.13	第224号住居跡	滑石製。
21	白玉	4.5×5.5	0.17	第224号住居跡	滑石製。
22	白玉	3.0×4.5	0.10	第224号住居跡	滑石製。
23	白玉	3.0×5.0	0.11	第224号住居跡	滑石製。
24	白玉	3.5×5.0	0.13	第224号住居跡	滑石製。
25	白玉	4.0×5.0	0.13	第224号住居跡	滑石製。
26	白玉	4.0×5.0	0.13	第224号住居跡	滑石製。
27	白玉	3.0×5.0	0.12	第224号住居跡	滑石製。
28	白玉	2.0×6.0	0.10	第224号住居跡	滑石製。
29	白玉	3.0×5.0	0.12	第224号住居跡	滑石製。
30	白玉	4.0×5.0	0.12	第224号住居跡	滑石製。
31	白玉	4.0×6.0	0.11	第224号住居跡	滑石製。
32	白玉	4.0×6.0	0.09	第224号住居跡	滑石製。
33	白玉	3.0×5.0	0.11	第224号住居跡	滑石製。
34	白玉	5.0×6.0	0.20	第224号住居跡	滑石製。
35	白玉	3.0×6.0	0.16	第224号住居跡	滑石製。
36	白玉	4.5×6.0	0.20	第224号住居跡	滑石製。
37	白玉	4.5×6.0	0.17	第224号住居跡	滑石製。
38	白玉	4.0×6.5	0.15	第224号住居跡	滑石製。
39	白玉	4.5×5.0	0.14	第224号住居跡	滑石製。

40	白玉	4.5×5.5	0.13	第224号住居跡	滑石製。
41	白玉	3.5×6.0	0.18	第224号住居跡	滑石製。
42	白玉	3.5×8.0	0.14	第224号住居跡	滑石製。
43	白玉	2.5×5.5	0.12	第224号住居跡	滑石製。
44	白玉	4.0×5.5	0.22	第224号住居跡	滑石製。
45	白玉	4.5×8.0	0.18	第224号住居跡	滑石製。
46	白玉	5.0×5.5	0.18	第224号住居跡	滑石製。
47	白玉	4.0×5.0	0.11	第224号住居跡	滑石製。
48	白玉	3.0×6.0	0.13	第224号住居跡	滑石製。
49	白玉	4.0×6.0	0.20	第224号住居跡	滑石製。
50	白玉	3.0×6.0	0.14	第224号住居跡	滑石製。
51	白玉	4.0×6.0	0.16	第224号住居跡	滑石製。
52	白玉	3.5×5.5	0.11	第224号住居跡	滑石製。
53	白玉	3.5×5.0	0.10	第224号住居跡	滑石製。
54	白玉	4.5×5.0	0.12	第224号住居跡	滑石製。
55	白玉	4.5×5.0	0.12	第224号住居跡	滑石製。
56	白玉	3.0×5.0	0.10	第224号住居跡	滑石製。
57	白玉	3.0×6.0	0.15	第224号住居跡	滑石製。
58	白玉	3.5×5.5	0.15	第224号住居跡	滑石製。
59	白玉	4.0×6.0	0.15	第224号住居跡	滑石製。
60	白玉	4.5×5.5	0.14	第224号住居跡	滑石製。
61	白玉	4.0×6.0	0.14	第224号住居跡	滑石製。
62	白玉	4.0×5.0	0.14	第224号住居跡	滑石製。
63	白玉	4.0×5.5	0.13	第224号住居跡	滑石製。
64	白玉	4.0×6.0	0.18	第224号住居跡	滑石製。
65	白玉	4.0×6.0	0.14	第224号住居跡	滑石製。
66	白玉	4.0×5.5	0.12	第224号住居跡	滑石製。
67	白玉	3.0×6.5	0.13	第224号住居跡	滑石製。
68	白玉	4.0×6.5	0.18	第224号住居跡	滑石製。
69	白玉	3.5×6.0	0.15	第224号住居跡	滑石製。
70	白玉	4.0×5.5	0.15	第224号住居跡	滑石製。
71	白玉	3.5×6.0	0.14	第224号住居跡	滑石製。
72	白玉	4.0×6.0	0.16	第224号住居跡	滑石製。
73	白玉	3.5×6.0	0.13	第224号住居跡	滑石製。
74	白玉	4.0×5.5	0.14	第224号住居跡	滑石製。
75	白玉	4.0×5.0	0.11	第224号住居跡	滑石製。
76	白玉	3.0×6.0	0.09	第224号住居跡	滑石製。
77	白玉	3.0×6.0	0.11	第224号住居跡	滑石製。
78	白玉	4.5×5.0	0.16	第224号住居跡	滑石製。
79	白玉	2.5×5.5	0.10	第224号住居跡	滑石製。
80	白玉	5.0×5.5	0.18	第224号住居跡	滑石製。

81	白玉	3.0×5.5	0.11	第224号住居跡	滑石製。
82	白玉	3.5×5.0	0.12	第224号住居跡	滑石製。
83	白玉	2.5×5.5	0.11	第224号住居跡	滑石製。
84	白玉	3.0×6.0	0.13	第224号住居跡	滑石製。
85	白玉	3.0×5.5	0.14	第224号住居跡	滑石製。
86	白玉	3.0×5.5	0.10	第224号住居跡	滑石製。
87	白玉	3.0×5.5	0.10	第224号住居跡	滑石製。
88	白玉	3.0×5.5	0.11	第224号住居跡	滑石製。
89	白玉	4.0×5.0	0.09	第224号住居跡	滑石製。
90	白玉	4.0×5.5	0.15	第224号住居跡	滑石製。
91	白玉	4.0×5.5	0.14	第224号住居跡	滑石製。
92	白玉	4.0×6.0	0.18	第224号住居跡	滑石製。
93	白玉	4.5×5.0	0.14	第224号住居跡	滑石製。
94	白玉	3.0×6.0	0.12	第224号住居跡	滑石製。
95	白玉	3.5×5.0	0.10	第224号住居跡	滑石製。
96	白玉	4.0×5.5	0.13	第224号住居跡	滑石製。
97	白玉	3.0×5.5	0.09	第224号住居跡	滑石製。
98	白玉	3.5×5.5	0.09	第224号住居跡	滑石製。
99	白玉	2.5×5.5	0.08	第224号住居跡	滑石製。
100	白玉	2.5×6.0	0.08	第224号住居跡	滑石製。
101	白玉	2.0×6.0	0.06	第224号住居跡	滑石製。
102	白玉	3.0×5.0	0.07	第224号住居跡	滑石製。
103	白玉	4.0×5.0	0.09	第224号住居跡	滑石製。
104	白玉	2.5×6.0	0.05	第224号住居跡	滑石製。
105	白玉	3.0×5.0	0.08	第224号住居跡	滑石製。
106	白玉	3.5×5.0	0.09	第224号住居跡	滑石製。
107	白玉	2.0×5.0	0.05	第224号住居跡	滑石製。
108	白玉	2.5×5.5	0.06	第224号住居跡	滑石製。
109	白玉	3.0×5.5	0.21	第224号住居跡	滑石製。
110	白玉	4.0×5.0	0.16	第224号住居跡	滑石製。
111	白玉	2.0×5.0	0.10	第229号住居跡	滑石製。
112	白玉	3.0×5.0	0.09	第229号住居跡	滑石製。欠損。
113	白玉	2.5×6.0	0.13	第232号住居跡	滑石製。
114	白玉	3.5×6.5	0.17	第232号住居跡	滑石製。中央に横をもつ。

すり石 (第901図6～9)

住居跡から出土したもので、工具の擦痕が認められるものを掲載した。7以外はすべて軽石である。7は放射状に擦痕がみられる。第193号住居跡の床面出土。9は第230号住居跡の床面に置かれていたものである。形状は不整形であり、面取りをした部分(6面)すべてに工具擦痕や溝状の抉りが観察される。

石製品(5) 紡錘車・石錘 (第899図)

No.	種類	大きさ(mm)	重さ(g)	出土地点	備考
1	紡錘車	10.0×45.0-25.0	28.73	第31号住居跡	No.1. 滑石製。
2	紡錘車	12.0×40.0-21.0	23.01	第36号住居跡	No.14. 滑石製。
3	紡錘車	20.5×45.0-27.0	68.50	第70号住居跡	No.1. 滑石製。
4	紡錘車	12.0×44.0-34.0	51.55	第120号住居跡	No.28. 滑石製。
5	紡錘車	18.5×50.0-30.5	35.95	第202号住居跡	No.5. 滑石製。欠損。
6	紡錘車	14.0×51.0-34.0	25.18	第221号住居跡	滑石製。欠損。上面に擦った痕跡あり。
7	紡錘車	(1.0)×(2.5)-(2.1)	3.72	第229号住居跡	滑石製。欠損。
8	紡錘車	19.0×(42.0)-(30.0)	23.34	第243号住居跡	滑石製。欠損。
9	紡錘車	9.5×49.5-33.0	33.35	谷	片岩製。欠損。
10	石錘	66.0×44.0	61.13	第99号住居跡	No.1. 滑石製。
11	石錘?	(40.0)×32.0	31.18	第125号住居跡	滑石製。欠損。
12	石錘	(47.5)×42.0	102.06	第178号住居跡	滑石製。裏面に未調整部分あり。2方向から穿孔欠損。
13	石錘	22.0×19.0×16.0	11.25	第26号住居跡	砂岩製。

石製品(6) 砥石 (第900図)

No.	種類	大きさ(mm)	重さ(g)	出土地点	備考
1	砥石	151.0×20.0	90.82	第59号住居跡	No.31. 先端に穿孔あり。
2	砥石	(41.0)×48.0	52.83	第77号住居跡	欠損。
3	砥石	43.0×32.0	48.15	第77号住居跡	No.1. 先端に穿孔あり。
4	砥石	(75.0)×(59.0)	204.68	第97号住居跡	No.3. 欠損。
5	砥石	50.0×21.0	42.98	第114号住居跡	3方の側面に砥いだ痕跡。
6	砥石	(32.0)×39.5	40.51	第189号住居跡	欠損。
7	砥石	(68.0)×34.0	119.28	第164号住居跡	欠損。
8	砥石	(60.0)×43.0	1052.5	第164号住居跡	欠損。
9	砥石	(74.0)×34.0	102.13	第225号住居跡	欠損。
10	砥石	(125.5)×44.0	280.97	第231号住居跡	欠損。
11	砥石	10.5×57.5	181.92	第232号住居跡	

石製品(7) 砥石・すり石 (第901図)

No.	種類	大きさ(mm)	重さ(g)	出土地点	備考
1	砥石	73.0×21.0	41.92	第8号方形周溝墓	No.20.
2	砥石	(6.5)×24.5	62.84	谷(と-451g)	欠損。
3	砥石	67.0×18.0	39.98	谷(ち-451g)	
4	砥石	(62.0)×39.5	70.89	谷(は-452g)	欠損。
5	砥石	44.5×39.0	33.57	り-444g P-19	
6	すり石	64.0×51.0	77.88	第183号住居跡	砥石。工具擦痕あり。
7	すり石	106.0×99.0	581.34	第183号住居跡	No.84. 工具擦痕が放射状にめぐる。
8	すり石	83.0×76.0	205.14	第169号住居跡	砥石。工具擦痕あり。
9	すり石	215.0×83.0	1269.73	第230号住居跡	No.24. 砥石。工具痕・擦面あり。

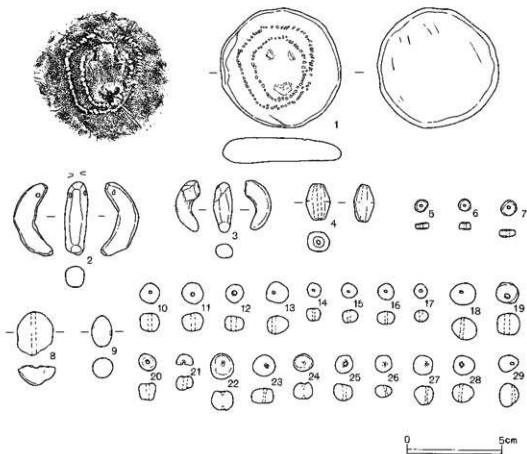
8 土製品

鏡 (第902図1)

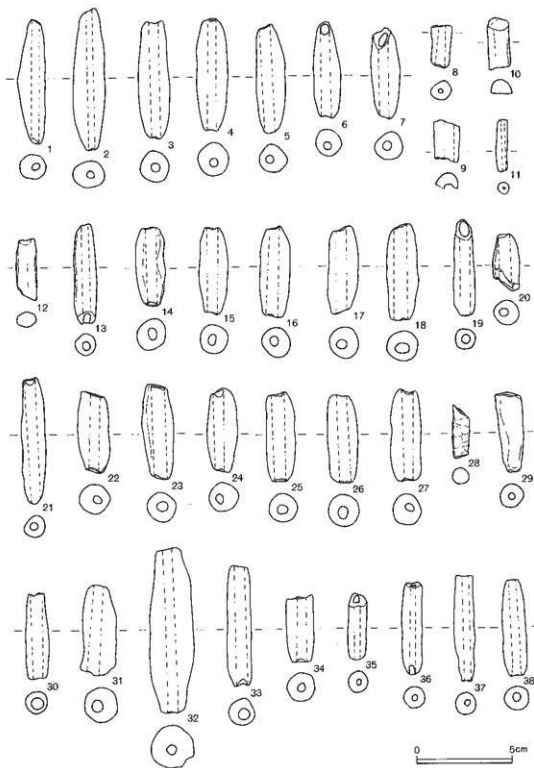
第88号住居跡出土。鈕は剥離している。鈕の周囲に2重の列点を施すが、間隔もまばらで整然とはしていない。鈕の剥離面に列点がみられることから、鈕を接着する前に施されたものと考えられる。表面は丁寧にナデられている。胎土はB+R+W+W'多。

玉類 (第902図2-29)

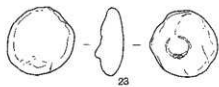
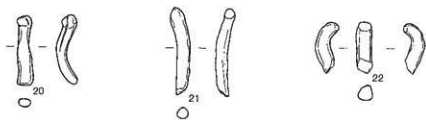
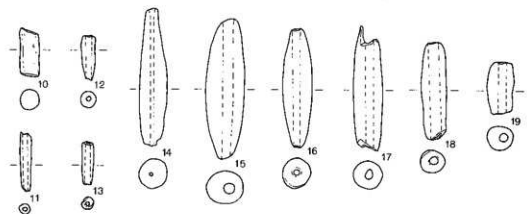
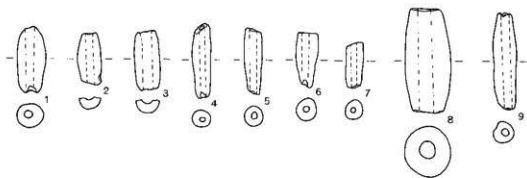
2・3は勾玉である。2の穿孔は貫通していない。第62号住居跡のカマド袖から出土。4は面取りが明瞭ではないが、切子玉を模したものであろう。第126号住居跡のカマド前の床面から出土した。5-6は第98号住居跡からの一括品で、色調、造りともに共通する。7以降は土製の丸玉である。9は浅い穿孔が2ヵ所にみられるが、その位置は通常と異なり胴部の中央にあり、左右対照ではない。未製品であろうか。第99号住居跡出土。



第902図 土製品(1) 模造品



第903図 土製品(2) 土錘



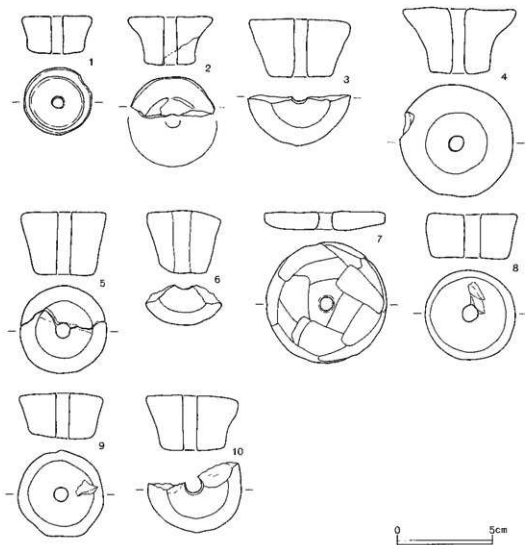
第904図 土製品(3) 土簾・その他

土鍾 (第903図・第904図1-19)

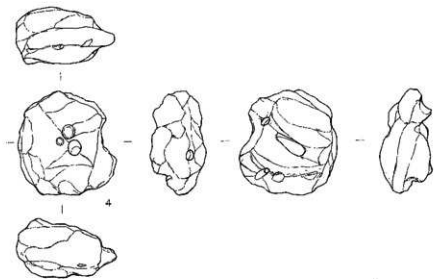
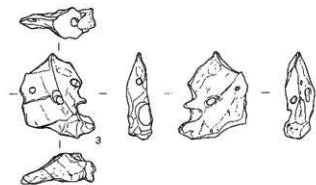
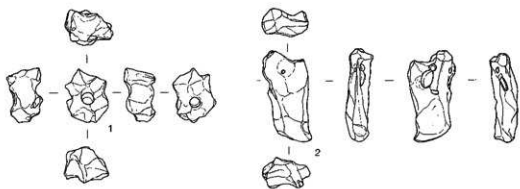
土鍾は1軒の住居跡から大量に出上した例は少なく、第32号住居跡から8点(第903図2-9)出土した例が最高である。形態はおおまかにいうと、胴が張る大形品と、管状になる小形のものに分かれるが、なかには貫通のない未製品も含まれている。

不明土製品 (第904図20-22)

20-22は紐状の土製品である。21はゆるやかにねじれている。第79号住居跡のカマドから出土した。22は勾玉の欠損品もしくは未製品かもしれない。23は円盤状で片面に丸い刺痕がある。第22号住居跡出土。



第905図 土製品(4) 紡錘車



第906图 土製品(5) 貝塚穴痕泥岩

土製品(1) 埴造品(第902図)

No.	種類	大きさ(mm)	重さ(g)	出土地点	備考
1	鏡	82.5×82.0×13.0	69.23	第88号住居跡	におい橙。
2	勾玉	38.0×11.0×10.5	6.69	第92号住居跡	橙。穿孔は貫通していない。
3	勾玉	28.0	2.65	第92号住居跡	No.1。橙。欠損。
4	切子玉	19.0×12.0	3.39	第126号住居跡	No.3。橙。
5	小玉	3.0×6.5	0.19	第98号住居跡	No.4。黒。
6	小玉	3.0×6.0	0.20	第98号住居跡	No.4。黒。
7	小玉	4.0×8.0	0.33	第98号住居跡	No.4。黒。
8	土玉	(23.0)×19.0	4.16	第141号住居跡	におい橙。欠損。
9	土玉	16.0×11.0	2.17	第99号住居跡	橙。未製品。
10	土玉	9.5×10.0	1.18	第21号住居跡	No.3。橙。
11	土玉	9.5×11.0	1.25	第21号住居跡	橙。
12	土玉	6.0×10.0	16.71	第21号住居跡	におい橙。
13	土玉	9.5×11.5	1.41	第41号住居跡	No.57。橙。
14	土玉	6.5×7.0	0.62	第53号住居跡	No.1。黒褐。
15	土玉	7.0×8.0	0.67	第53号住居跡	No.3。黒褐。
16	土玉	7.0×8.5	0.71	第53号住居跡	No.57。貯蔵穴出土。黒褐。
17	土玉	6.0×7.0	0.37	第70号住居跡	No.59。橙。
18	土玉	11.5×13.5	1.82	第89号住居跡	橙。
19	土玉	11.0×11.0	4.93	第101号住居跡	におい橙～黒。上下を揃って平らにしている。
20	土玉	9.0×9.0	0.88	第147号住居跡	におい黄橙。
21	土玉	7.5×9.0	0.40	第189号住居跡	灰黄褐～黒。欠損。
22	土玉	9.5×11.5	1.64	第194号住居跡	におい黄橙。穿孔は貫通しない。
23	土玉	7.5×11.5	1.10	第229号住居跡	灰褐。
24	土玉	6.5×10.0	0.78	第229号住居跡	橙。穿孔は貫通しない。
25	土玉	9.0×9.5	0.93	第231号住居跡	におい黄橙。
26	土玉	6.0×6.5	0.56	第232号住居跡	橙。
27	土玉	9.5×10.5	1.07	第232号住居跡	橙。
28	土玉	9.5×11.0	1.07	第232号住居跡	橙。
29	土玉	12.0×10.0	1.30	第22号土坑	橙。

紡錘車(第905図)

7を除いて厚みがあり、形態は反りが強いもの(2・4)と反りが弱く直線的なものに分類できる。7は須恵質で、両面ともにヘラケズリで成形している。耳もきれいに面取りしており、底部転用のものではないと思われる。第239号住居跡出土。

貝巢穴痕泥岩(第906図)

貝巢穴痕泥岩は波打ち際に生息する細い二枚貝の巢穴を持ち込んで熟を与えたもので、祭祀的性格の強い遺物とされている(高橋一夫1983「草加の遺跡(2)」『草加市史研究第3号』)。

本遺跡では3住居跡から、4点の出土をみる。1は大きな穴が1ヵ所に認められる。第45号住居

土製品(2) 土鍾 (第903図)

No.	種類	大きさ(mm)	重さ(g)	出土地点	備考
1	土鍾	66.5×13.5	11.39	第4号住居跡	No.29. におい橙～灰褐色。
2	土鍾	74.0×17.0	23.72	第32号住居跡	No.3(3). 橙。
3	土鍾	82.0×15.5	17.45	第32号住居跡	No.26. 橙。
4	土鍾	59.0×16.5	16.92	第32号住居跡	No.18. 浅黄橙～黒。
5	土鍾	57.0×15.0	13.62	第32号住居跡	橙。
6	土鍾	51.0×14.0	10.01	第32号住居跡	No.12. 浅黄橙～黒。
7	土鍾	(47.0)×14.0	10.00	第32号住居跡	No.17. 浅黄橙～黒。
8	土鍾	(22.0)×10.5	3.56	第32号住居跡	No.2(1). におい橙。欠損。
9	土鍾	(20.0)×(12.5)	3.56	第32号住居跡	No.3(2). 橙。欠損。
10	土鍾	27.0×11.0	2.78	第64号住居跡	におい橙。未製品。
11	土鍾	27.0×6.0	1.77	第66号住居跡	橙。
12	土鍾	(32.0)×10.0	2.79	第71号住居跡	カマドB出土。におい黄橙。
13	土鍾	(52.0)×11.0	7.28	第72号住居跡	におい黄橙～黒。
14	土鍾	(41.0)×15.0	10.51	第72号住居跡	におい黄橙～黒。
15	土鍾	45.5×15.0	10.42	第72号住居跡	におい橙。
16	土鍾	48.0×15.0	12.66	第72号住居跡	におい黄橙。
17	土鍾	(43.0)×15.0	11.66	第72号住居跡	におい橙。
18	土鍾	50.0×16.0	12.41	第72号住居跡	浅黄橙。
19	土鍾	(50.0)×10.0	7.39	第74号住居跡	橙。欠損。
20	土鍾	(30.0)×13.0	5.22	第82号住居跡	におい黄橙。欠損。
21	土鍾	67.0×11.0	10.27	第84号住居跡	橙～黒。
22	土鍾	(40.0)×16.0	12.68	第98号住居跡	におい橙。
23	土鍾	46.0×15.0	12.36	第98号住居跡	におい橙。
24	土鍾	(43.0)×15.0	10.55	第98号住居跡	におい橙。
25	土鍾	47.0×15.0	12.35	第98号住居跡	におい橙。
26	土鍾	46.0×16.0	12.66	第98号住居跡	におい橙。
27	土鍾	(48.0)×15.0	13.90	第98号住居跡	におい橙。
28	土鍾	26.0×8.5	2.31	第99号住居跡	No.3. 未製品。
29	土鍾	42.0×15.0	6.61	第148号住居跡	No.3. 浅黄橙。
30	土鍾	45.0×10.5	5.23	第167号住居跡	橙。
31	土鍾	47.5×17.0	16.32	第167号住居跡	No.5. 灰黄褐～黒褐。
32	土鍾	67.0×22.0	37.90	第178号住居跡	におい橙～黒褐。
33	土鍾	63.0×14.0	12.27	第178号住居跡	灰褐。
34	土鍾	(35.0)×14.5	7.64	第178号住居跡	黒。欠損。
35	土鍾	(35.0)×10.0	4.01	第183号住居跡	におい橙～灰褐。欠損。
36	土鍾	(49.0)×11.0	6.01	第188号住居跡	におい橙～黒褐。欠損。
37	土鍾	55.0×11.0	6.00	第200号住居跡	浅黄橙。
38	土鍾	50.5×12.5	6.52	第213号住居跡	橙。

土製品(3) 土錘・その他(第904図)

No.	種類	大きさ(mm)	重さ(g)	出土地点	備考
1	土錘	35.0×14.0	6.46	第218号住居跡	橙。
2	土錘	(27.5)×(11.5)	2.40	第218号住居跡	赤褐。欠損。
3	土錘	(31.0)×13.0	3.96	第221号住居跡	橙。欠損。
4	土錘	(39.5)×9.5	3.69	第257号住居跡	橙。欠損。
5	土錘	(35.0)×9.5	2.73	第257号住居跡	橙。欠損。
6	土錘	(29.0)×11.0	2.80	第257号住居跡	灰白。欠損。
7	土錘	(24.0)×9.0	2.47	第257号住居跡	橙。欠損。
8	土錘	54.0×24.0	39.35	第2号井戸	浅黄橙。
9	土錘	51.0×11.0	8.54	第2号井戸	にぶい橙。
10	土錘	24.0×10.0	2.71	第2号井戸	浅黄橙。未製品。
11	土錘	31.0×8.0	1.48	第2号井戸	にぶい黄橙。
12	土錘	23.0×8.0	1.81	第3号土坑	明赤褐。
13	土錘	22.0×6.0	1.18	第227号住居内の噴砂	No.20。黒褐。
14	土錘	72.5×14.5	14.95	第26～27号溝	橙
15	土錘	74.0×20.0	22.13	は-423g	にぶい黄橙。
16	土錘	62.0×15.0	15.87	へ-365g	黄橙～灰褐。
17	土錘	63.0×15.0	13.90	表探	橙～黒。欠損。
18	土錘	51.0×13.0	8.12	第102号住居跡付近	浅黄橙。
19	土錘	(27.5)×14.0	5.36	谷	橙。欠損。
20	不明	38.0×6.0	2.18	第71号住居跡	黄橙。
21	不明	(46.0)×6.0	2.69	第79号住居跡	カマド出土。橙～にぶい橙。
22	不明	27.0×9.0	2.05	第121号住居跡	浅黄橙。
23	不明	35.0×35.0×14.0	0.94	第22号住居跡	橙。中央に円形の刺痕あり。

跡出土。2・3は第66号住居跡出土のもので、もとは同じ塊であったかもしれない。4は第242号住居跡出土で、砂粒が多量に含まれている。

土製品(4) 紡錘車(第905図)

No.	種類	大きさ(mm)	重さ(g)	出土地点	備考
1	紡錘車	20.0×38.0-30.0	33.77	第41号住居跡	No.56。橙
2	紡錘車	25.0×40.0-26.5	17.96	第45号住居跡	にぶい橙。欠損。
3	紡錘車	31.0×(53.0)・(32.5)	36.25	第216号住居跡	明赤褐～にぶい赤褐。欠損。
4	紡錘車	34.5×60.0-31.5	66.45	第226号住居跡	橙～黒褐。
5	紡錘車	33.5×45.0-30.0	65.56	第229号住居跡	にぶい黄橙。側面と下面にヘラケズリ。
6	紡錘車	32.0×(39.0)・(24.0)	24.44	第231号住居跡	P-1出土。橙。全面ヘラケズリ。欠損。
7	紡錘車	9.0×63.5	42.19	第239号住居跡	灰。須恵質。両面ヘラケズリ。
8	紡錘車	23.0×48.5-39.0	68.97	第257号住居跡	橙～黒。
9	紡錘車	23.5×44.0-33.5	47.31	第263号住居跡	No.1。橙。
10	紡錘車	29.5×48.0-32.5	34.94	谷(る-455g)	にぶい赤褐。欠損。

9 鉄製品

鉄製品には刀子・鎌・鉄鏃などがあるが、全体的に錆化が著しく、また欠損品も多いため、遺存状態はかならずしも良好とはいえない。そのため不明鉄製品とせざるをえないものが多かった。鉄製品を出土したのは、おもに奈良・平安時代の遺構であるが、古墳時代の住居跡からもわずかではあるが検出されている。調査された遺構の数と比べてその割合は非常に少ないといつてよいであろう。しかし、これは乾湿差の激しい水田下という条件のもとに、遺跡が埋藏されていたことを考慮にいれるべきであろう。

刀 (第907図1)

1は全長が30cm弱で、刀子と呼べるぎりぎりの線の遺物である。2の刀子と共存していることもあり、ここでは「刀」と呼ぶことにしたい。背側が若干深い両関で、背幅が厚く、茎も太く丸みを帯びている。刃こぼれのような欠損部があるが、これは錆や断面の状態から、古いものと考えられる。第43号住居跡(平安前期)のカマド袖付近から出土した。

刀子 (第907図2～13)

2は茎に木質が残り、切先は研ぎ減りのため丸くなっている。1と同様に造りが厚い。3は片関の刀子で、茎に鹿角らしき付着物がある。4も同じく鹿角の痕跡があるが、こちらは両関である。ともに目釘孔は存在しない。ともに鹿角製の柄をもっていた刀子と推定されるが、関の形状からすると3のほうが年代の遡る遺物であると考えられる。共存土器からもそれは裏づけることができよう。5と8はゆるやかな両関をもつ華奢な刀子である。7は錆がとくに進行しており、その形状は推定であるが、浅い両関をもつものと考えられる。肉厚。9・10・13は刃部の破片、11は茎部の破片である。12はこれも肉厚で、茎は太く先端が尖る。均等な深い両関を呈する。刃はほとんどないといつてよく、錆化しているのを差し引いても、なまぐらな刃物であったのは確実である。平安時代の遺物と考えられる。

14は茎の部分で、目釘孔が1ヵ所に認められる。木質の付着が著しく、断面は角張っている。平安時代の住居跡から出土しているが、近世以降の混入品としたほうが無難であろう。

鎌 (第908図1～3)

1は切先を欠き、4片に分かれて出土した。柄装着部は背の角を折り曲げており、柄と刃との角度は90度よりも大きくなると推定される。刃はあまり深い弧を描かない。第23号住居跡出土。2は一方(切先側?)は明らかに欠損しているが、もう一方は錆が激しくはっきりとしない。屈曲はしていないので、柄装着部ではなさそうである。X線透視検査でもその点は不明であった。古い欠損部と判断しておく。第237号住居跡出土。3は切先が直になり、外反りを有する特異な形態の鎌である。柄装着部も背刃側均等に折れ曲がっており、刃の範囲は2/3ほどである。直刃鎌の系統であろうか。古墳時代前期(五領期)の第252号住居跡の床面から出土した。

鉄鏃 (第908図6・7)

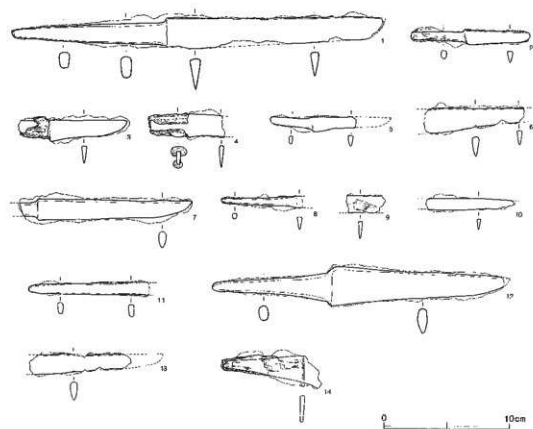
6は錆化が激しく、X線透視検査でも形状ははっきりしなかったが長頭鏃と思われる。鏃身部および筈被部にわずかに関がある。莖部先端を欠く。第149号住居跡から刀子2点と共伴して出土している。7は関をもつ筈被部の破片と推定したが、よくわからない。第260号住居跡出土。

釘 (第908図8-12)

断面が方形を呈する釘である。頭部がないものでも、先端が尖っているものは釘と判断した。10は唯一の完形品であるが、錆のため形状は推定である。第135号住居跡出土。

不明鉄製品 (第908図4・13-24)

4はX線透視検査によって、一方が囊手状になり孔を有することが判明した。左右対照に復元してあるが、その確証はない。火打鏃の一種か。13は二股に分かれる棒状の鉄製品である。雁股式の鉄鏃の破片である可能性もあるが、左右の太さが異なるのが気になる。14は重厚な鉄製品で、X線透視をしてもその形状ははっきりしなかったが、欠損部分はないと考えられる。全体の1/3に

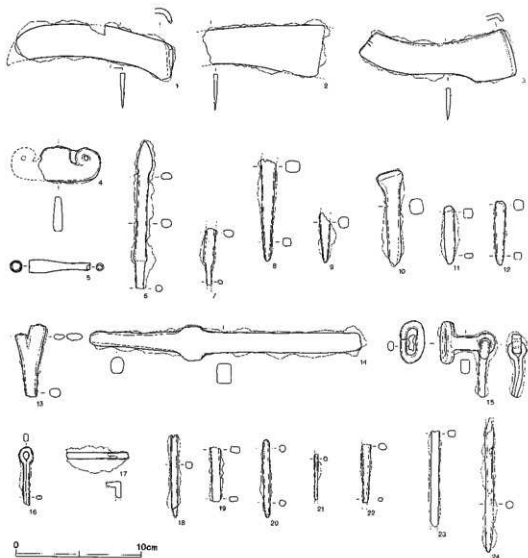


第907図 鉄製品(1) 刀子

あたる部分がわずかに幅広となるようである。15は両端が環状となった金具の一方が連結したものである。強いて類例をさがせば、平安時代以降の馬具のなかに、このような形状の引手壺をもつ壺があるが、この遺物をそれにあてるには連結方法に問題があろう。16は細い鉄棒をあわせて一端を輪状にしたものである。先端は欠失する。17は鉄板が折れた部分の破片である。18-24は棒状鉄製品である。なかには鉄製紡錘車の軸の部分も含まれているかもしれない。

煙管 (第908図5)

第14号井戸から出土した煙管の吸口である。銅製。内面には竹が残っている。



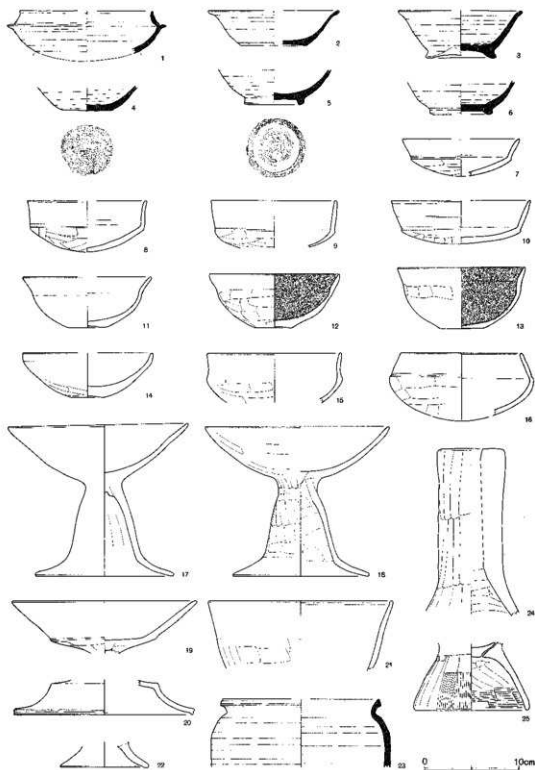
第908図 鉄製品(2) 鎌・その他

鉄製品(1) 刀子 (第907図)

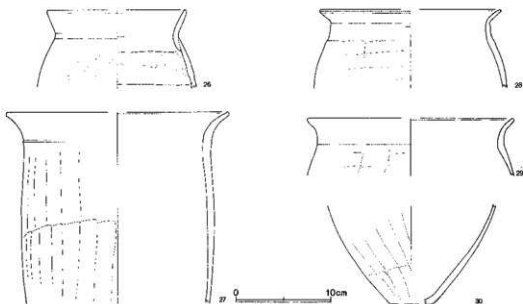
No.	種類	大きさ(mm)	重量(g)	出土地点	備考
1	刀	296.0×24.0	145.60	第43号住居跡	No.4 カマド袖付近出土。間は背鋸がやや深い両側。
2	刀子	95.0×12.0	12.03	第43号住居跡	No.7。柄木残存。両側。
3	刀子	88.5×17.0	21.14	第31号住居跡	No.154。柄に直角らしき付着物が残る。両側。
4	刀子	(58.5)×19.0	16.85	第80号住居跡	柄に直角? 残存。両側。刀身の半分を欠く。
5	刀子	(88.0)×11.5	9.21	第84号住居跡	ゆるやかな両側。刀身の半分を欠く。
6	刀子	(79.5)×15.5	20.70	第89号住居跡	刀身片。
7	刀子	(136.5)×17.0	52.68	第149号住居跡	茎の大半を欠く。両側か?
8	刀子	(65.0)×9.5	7.81	第149号住居跡	ゆるやかな両側。刀身の大半を欠く。
9	刀子	(31.0)×13.0	3.14	第181号住居跡	刀身破片。
10	刀子	(70.0)×8.5	8.76	第217号住居跡	刀身片。
11	刀子	(96.0)×10.0	16.07	第242号住居跡	茎片。
12	刀子	232.0×31.5	112.70	第9号竪立柱建物跡	P-7出土。両側で重厚。
13	刀子	(81.0)×14.5	16.96	モ-396g	刀身片。
14	刀物	(77.5)×20.5	25.85	第221号住居跡	茎。柄木残存。

鉄製品(2) 鎌・その他 (第908図)

No.	種類	大きさ(mm)	重量(g)	出土地点	備考
1	鎌	(125.5)×27.0	74.11	第23号住居跡	No.5。刃の先端を欠く。
2	鎌	(95.5)×28.0	62.71	第237号住居跡	刃部片。
3	鎌	121.5×24.5	73.79	第252号住居跡	No.26。刃は外反する。
4	不明	(49.0)×27.5	26.90	第3号竪立柱建物跡	No.7。左右対照にならない可能性あり。
5	キセル	48.0×5.5	3.97	第14号井戸	銅製。吸い口。
6	鉄鍬	(11.7)×10.5	27.41	第149号住居跡	No.4。錆著しく形状推定。
7	鉄鍬?	(46.0)×8.5	6.15	第260号住居跡	鍬跡付近の破片か?
8	釘	(80.5)×11.5	17.29	第82号住居跡	頭部欠損。
9	釘	(39.5)×7.5	5.36	第82号住居跡	先端片。
10	釘	75.5×11.0	42.47	第135号住居跡	形状は推定。
11	釘?	(46.5)×8.0	12.12	第197号住居跡	欠損。
12	釘?	(50.0)×7.5	7.28	第229号住居跡	欠損品か?
13	不明	(57.0)×23.0	15.73	第23号住居跡	二股に分かれる。
14	不明	21.6×16.0	162.49	第223号住居跡	重厚。用途不明。
15	不明	43.5×33.5×19.5(環径)	37.23	第19号土坑	環状連結金具。用途不明。
16	不明	(46.5)×4.5	4.20	は-429g	ピン様。
17	不明	(49.0×5.0)	17.20	第30号土坑	板状の縁を曲げたもの。
18	不明	(64.5)×5.5	6.27	第84号住居跡	棒状鉄製品。紡錘車の軸か?
19	不明	(43.0)×6.5	6.31	第86号住居跡	No.3。棒状鉄製品。断面方形。
20	不明	(61.0)×5.0	6.12	第242号住居跡	棒状鉄製品。紡錘車の軸か?
21	不明	(36.5)×3.0	1.26	第250号住居跡	棒状鉄製品。針様。
22	不明	(46.0)×6.5	4.31	谷(ち-452g)	棒状鉄製品。
23	不明	(76.0)×6.0	9.79	は-429g	棒状鉄製品。断面方形。
24	不明	(106.0)×6.0	12.35	は-429g	棒状鉄製品。紡錘車の軸か?



第909圖 表採遺物(1)



第910図 表採遺物(2)

表採(第909-910図)

No.	器種	大きさ(cm)	胎土	色質	残存率(%)	備考
1	環	口(14.0)	W	青灰	20	口縁部ヘラアテ
2	環	口(13.8) 底(8.8) 高3.2	B+R+W+少量	灰~におい橙	30	回転糸切り跡
3	高台付椀	口(13.0) 台7.2 高5.0	B+R少量+W	淡黄橙~褐灰	45	回転糸切り跡後、高台ナデツケ 内面ヘラ状工具による回転ナデ 融化石焼成
4	環	底5.4	B+W+少量	灰	35	回転糸切り跡
5	高台付椀	台5.8	B+R+W	淡黄~灰	40	回転糸切り跡後、高台ナデツケ
6	環	底8.6	B+R+W	灰	25	回転糸切り跡後、高台ナデツケ
7	環	口12.2 高3.9	B+R多+W	淡黄橙	25	
8	環	口(12.5) 高5.3	B+R多	橙	35	外面黒色部分
9	環	口13.2	B+R多+W	橙	45	
10	環	口(14.5) 高4.5	B+W	淡黄~灰白	50	
11	椀	口(13.4) 底3.7 高5.3	B+R多	橙	40	F A直下。風化著しい
12	椀	口13.6 底3.4 高5.7	B+R多	橙~黒	100	F A直下。内面黒色 風化
13	椀	口13.4 底4.8 高6.4	B+R多	橙~黒	95	F A直下。内面黒色 風化
14	椀	口(13.5) 底3.4 高4.7	B+R多	橙	25	風化
15	環	口14.0	B+R多+W	橙	口縁 50	
16	環	口12.6	B+R多+W	橙~におい赤褐	70	外面黒色

17	高坏	口18.9 高15.9	脚14.4	B+R多	橙～洗黄橙	80	FA直下、風化
18	高坏	口19.3 高15.6	脚14.2	B+R多+W	洗黄橙～橙	90	FA直下、風化著しい
19	高坏	口19.4		B+R	洗黄橙～橙	坏部 90	FA直下、風化著しい
20	高坏	脚18.7		B+R多	橙～褐灰	脚部 40	FA直下、脚端部凹凸
21	甕	口19.4		B+R多+W	洗黄橙	口縁 60	
22	高坏	脚9.0		B+R多+W	橙～黄橙	脚部 90	
23	甕	口(16.4)		W+橙少	灰	口縁 20	
24	支脚	上端7.2		B多+R+W+砂少	橙～黄橙	70	
25	台付甕	台11.8		B+R少+W	洗黄橙	脚部 90	FA直下、
26	甕	口(14.6)		B+R多+W	橙	口縁 45	
27	甕	口23.4		B+R+W+砂少	橙	口縁 25	風化
28	甕	口19.8		B+R多+W	橙～黄橙	口縁 50	
29	甕	口(21.4)		B+R多+W	橙～黄橙	口縁 40	
30	甕	底(4.4)		B+R多+W	橙～黄橙	底部 30	

10 表採遺物

遺構確認時において採集された遺物のうち、代表的なものを図示した。それぞれの遺物の所属する遺構は、残念ながら不明である。11～13・17～20・25は6世紀初頭に噴火したとされている標名山二ヶ岳の火山灰（FA）堆積層直下より検出されているが、所属する遺構やグリッドも明確ではない。

Ⅶ まとめ

1 集落の変遷

上敷免遺跡は今回の一般国道17号深谷バイパス関係の発掘調査に加えて、深谷市教育委員会によっても調査が行なわれている。市教委による第1・7次調査を除いて、いずれも道路建設を原因としている。今回の調査は遺跡を東西に横断し、市教委の調査では南北に貫いている。これらの数度にわたる調査の結果、遺跡のなかに十字字にトレンチを入れた状態となっている。今回の調査では遺跡中央部に埋没谷が存在していることが判明し、この谷部を境にして、遺跡が分割される可能性もでてきた。また遺跡西端に走る唐沢川は人工的な流路であり、唐沢川を挟んで対峙する森下遺跡との関連も注目される。

上敷免遺跡から出土した遺物の時代は、縄文時代から中・近世にまでわたっている。

縄文時代の遺構は土坑1基、集石1基のみで、住居跡は検出されていない。遺物の大半は発掘区中央の埋没谷埋土（包含層）から出土している。ほかに時期の異なる各遺構からも出土している。後期から晩期のもので、その量は膨大である。そのため発掘区周辺に同時期の集落が想定され、台地上から低地の自然堤防上に集落が遷出している歴史的社会現象と合致している。

弥生時代の遺構は住居跡4軒で、いずれも中期のものである。第3発掘区にある1軒を除いて、第6発掘区に集中している。これと発掘区中央の谷を挟んで対峙する市教委第1次調査地点では、中期の再葬墓が2基検出されている（庄野・蛭岡1977）。これに続く弥生時代後期段階の人々が生活した痕跡は、現在のところ確認されていない。

上敷免遺跡において、人々が活発に生活を営み始めるのは、古墳時代に入ってからのものである。今回の調査によってこの時期の住居跡が274軒検出されている。また市教委の調査によって検出された住居跡も、概ねこの時期に該当している。

古墳時代前期（第911図）

古墳時代前期の住居跡は2軒検出され、いずれも点的に位置している。発掘区西側に位置している住居跡の周辺には、同時期の古墳跡1基と方形周溝墓9基が群在し、墓域を形成している。この時期の遺跡では、墓域と集落域が分離されている傾向がある。そのためこの墓域の周辺には、住居跡が構築されていないのであろう。この墓域を形成した集落は、発掘区域周辺の隣接した地域に存在している可能性が高い。

上敷免遺跡周辺において、この時期の集落の大規模な展開は認められていない。しかし、小規模でありながらも、東海系土器に代表されるこの時期を象徴する外来系土器は確認されている。上敷免遺跡でも、検出された住居跡は2軒のみであるが、東海系とされるS字状口縁白付甕形土器が出土している。集落の形成状況や出土遺物は、社会的現象と合致している。

古墳時代中期前半（第912図）

古墳時代中期前半の住居跡は4軒検出されている。いずれも削平の影響を受け、比較的浅いものである。4軒のうち2軒は隣接しているが、ほかは1軒ずつ単独に存在している。またそれぞれの分布は、点的に位置している。単独に住居跡が営まれていることは生活上、不合理な面がある。また2軒の住居跡が隣接していることから、数軒の住居跡が1単位にまとまっている可能性が想起される。しかし今回の調査の結果においては、あくまでも想像の域を出ない。いずれの住居跡も遺物は少なく、S字状口縁台付甕形土器の系譜を引くものが出土している。

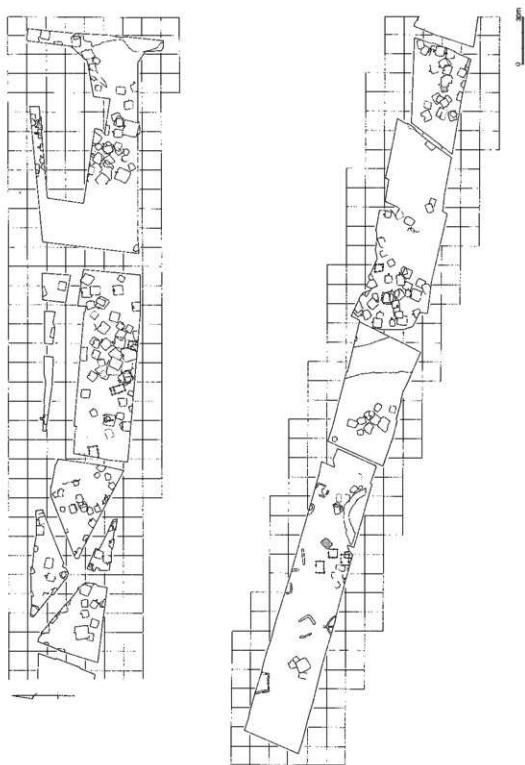
古墳時代中期後半（第913図）

古墳時代中期後半になると、住居跡の軒数が飛躍的に増加している。これらの住居跡は、発掘区東側に偏って存在し、また分布から3グループに分割できる。これらのグループは大型住居跡を中心としているようであり、広範囲にわたっている。この点から、組織的な展開が考えられる。

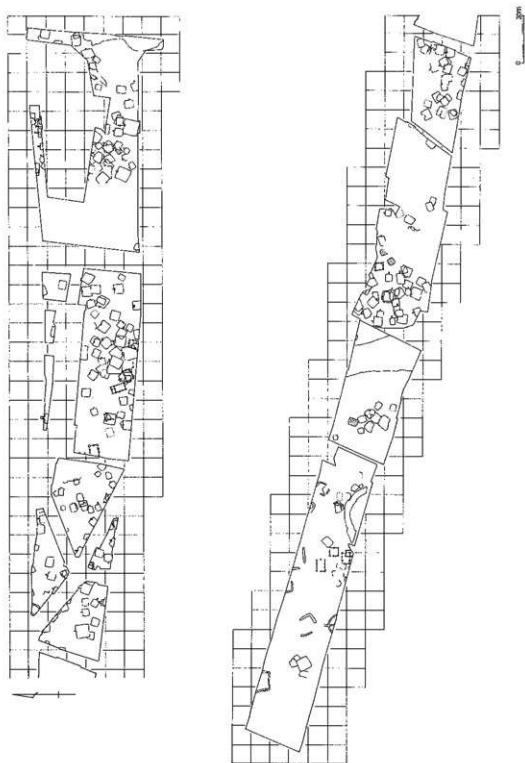
住居跡の軒数の増加とともに、カマドが設置されている。このカマドは初源的なものと思われるような、形態や機能が明確に判断しにくいようなものではない。袖部は地山が掘り残されたしかりとしたもので、煙道部も長く外方に延びている。あたかも規格化されたようなものが、一斉に導入されている。その一方で、まだカマドが設置されていない住居跡も併存し、これは規模の小さなものに多い。しかし大型の住居跡には、必ずカマドが設けられている。因みに、この時期以降の上敷免遺跡のカマド袖部は、地山が掘り残されたものが伝統的に続いている。

飛躍的な住居跡の軒数の増加、大型住居跡を中心に形成された広範囲におよぶグループ、規格化されたカマドの導入が古墳時代中期後半の特徴である。古墳時代中期前半までにはほとんど住居跡が構築されていないこの地域に、突如として組織的な集落が展開している。この点に着目すれば、その背景には政治的な影響を感じずにはいられない。

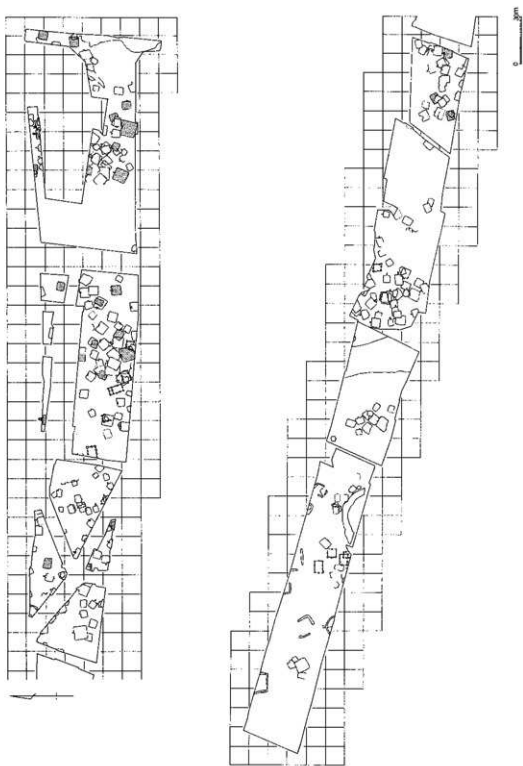
毛野および北武蔵地域では、5世紀中葉に大きな時代の転換期を迎えている。毛野地域は古墳時代前期から大型の古墳が造営され続け、5世紀中葉には東国最大の前方後円墳の太田市天神山古墳（全長210m）が築造されている。墳丘の規模に加えて、畿内大玉墓と同様の長持形石棺が採用されていることから、太田天神山古墳の被葬者は毛野地域を統率する大首長といえる。これに続く首長墓は、5世紀中葉の伊勢崎市御富士山古墳（前方後円墳・全長125m）、5世紀後葉の高崎市不動山古墳（前方後円墳・全長94m）と考えられている。墳丘の規模が大幅に縮小しているという事実から、毛野地域の勢力の縮小が想定される。さらに5世紀末には、墳丘規模が100m前後の前方後円墳が利根川水系各地に出現している。まさに群雄割拠の様相を呈している。この段階に至っては、太田天神山古墳を頂点とした毛野の勢力が解体したものと考えられる。利根川南岸地域では、北岸と期を同じくして行田市さきたま稲荷山古墳が築造されている。さきたま稲荷山古墳は金錯銘（辛亥銘）鉄剣の出土で著名であるが、この築造には畿内勢力が深く関与していたものと推定されている。さらにさきたま稲荷山古墳以後、さきたまの地には大首長墓が継続して造営されている。これと時期を同じくする利根川南岸の古墳の規模はさきたま首長墓を凌駕するものではなく、また前方部を西面させている。まさに古墳の築造に対して、さきたま大首長による規制が与えられている。しかもその影響下にあった地域は、相当の広範囲におよんでいる（山本1991）。



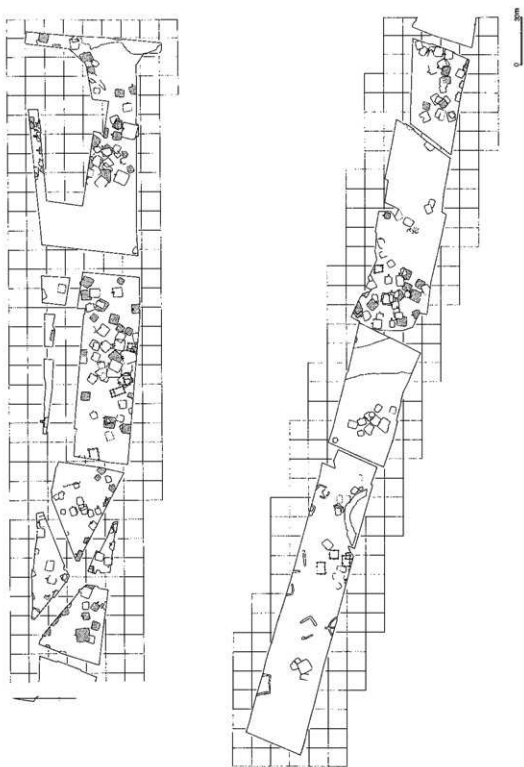
第911図 古墳時代前期の上敷免遺跡 (1/2,500)



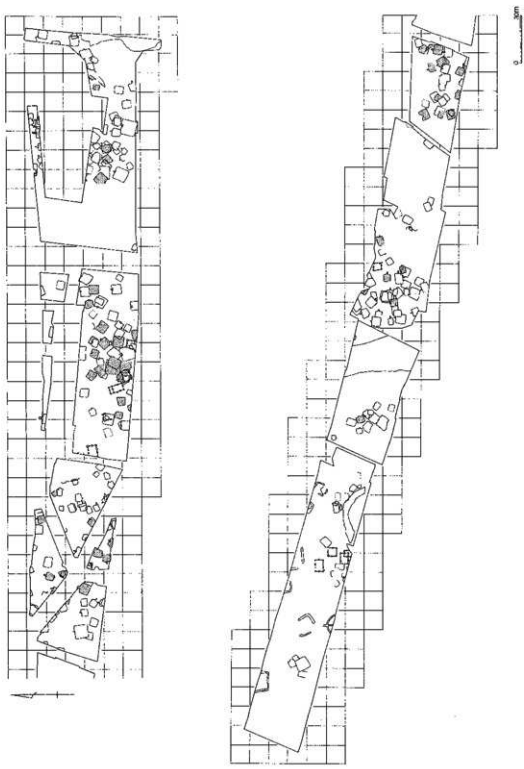
第912図 古墳時代中期前半の上敷免遺跡 (1/2,500)



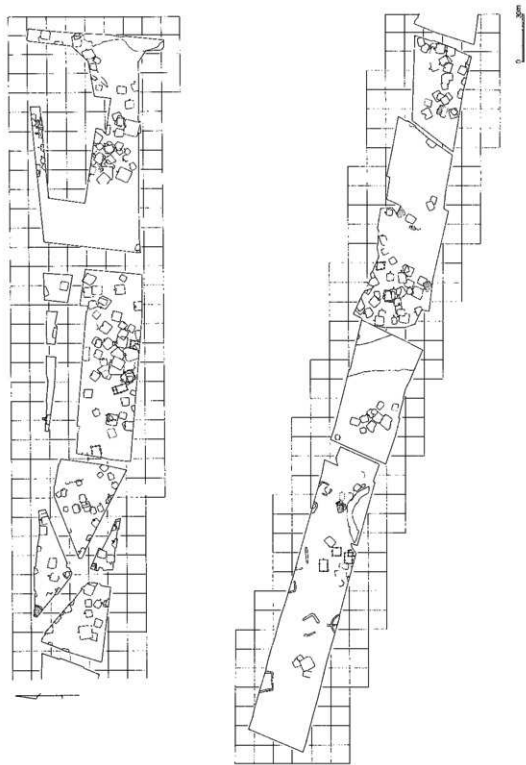
第913図 古墳時代中期後半の上敷免遺跡 (1/2,500)



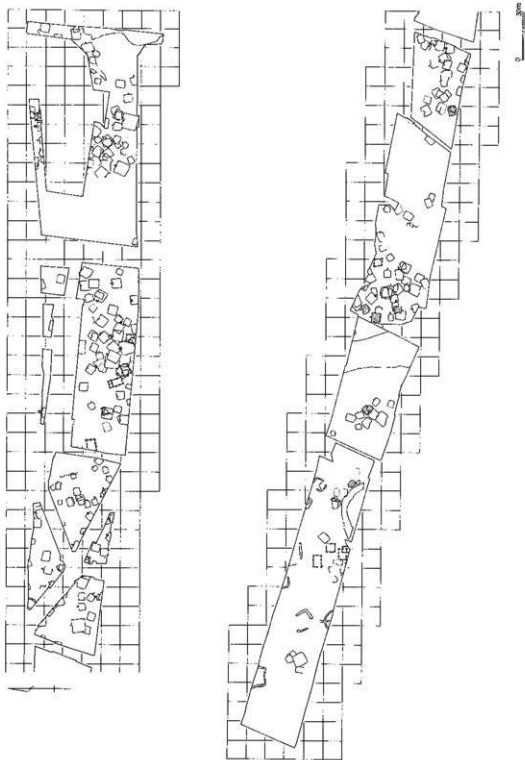
第914図 古墳時代後期前半の上敷免遺跡 (1/2,500)



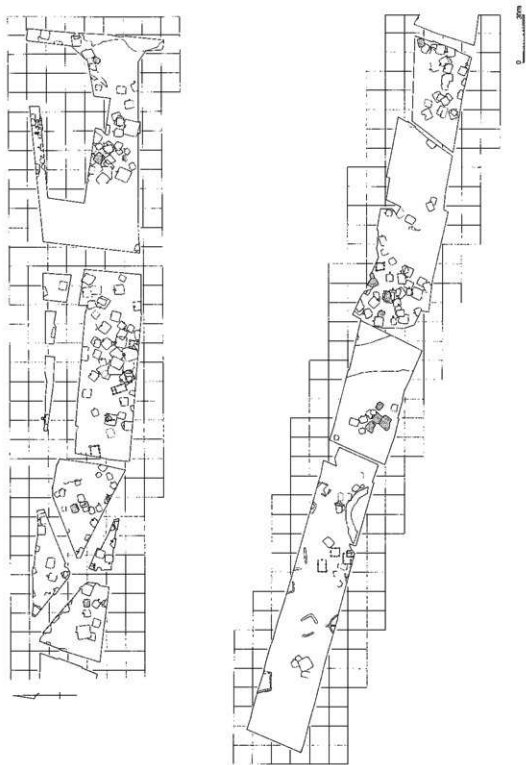
第915図 古墳時代後期後半の上敷免遺跡 (1/2,500)



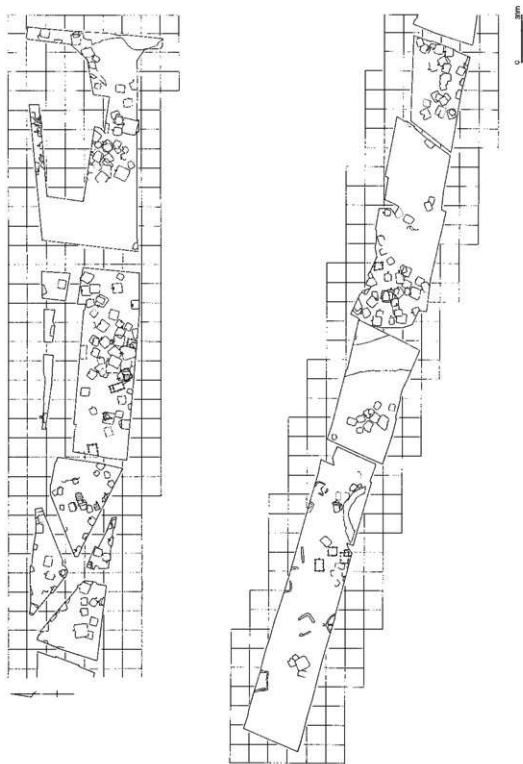
第916図 7世紀前半の上敷免遺跡 (1/2,500)



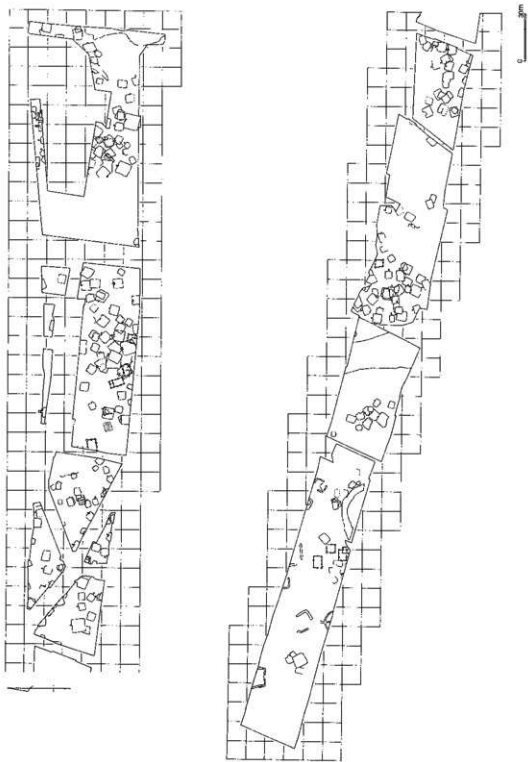
第917図 7世紀後半の上敷免遺跡 (1/2,500)



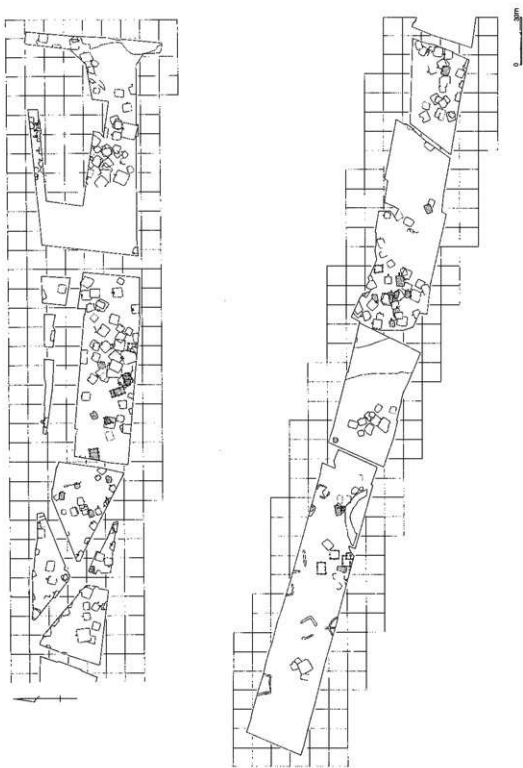
第918図 8世紀前半の上敷免遺跡 (1/2,500)



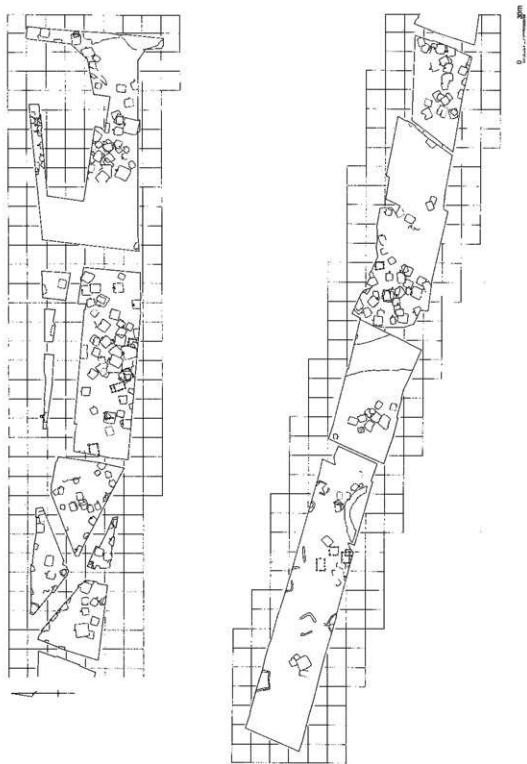
第919回 8世紀後半の上教免遺跡 (1/2,500)



第920図 9世紀前半の上敷免遺跡 (1/2,500)



第921図 9世紀後半の上教免遺跡 (1/2,500)



第922図 10世紀代の上敷免遺跡 (1/2,500)

上敷免遺跡も利根川南岸地域に位置しており、これらの政治的な影響を受けていないとは考えられない。住居跡の軒数が急激に増加した古墳時代中期後半段階は、さきたま稲荷山古墳築造前夜にあっている。勢力を拡大するには、まず生産力を増強させる必要がある。そのために、住民がほとんど居住していなかったこの地域の開発に取り組んだとしてもおかしくはない。しかし上敷免遺跡とさきたま稲荷山古墳が直接関連していたという証拠は、どこにもない。けれども、上敷免遺跡周辺には、この時期および前後の有力な古墳は確認されていない。また、さきたま勢力が広範囲にわたる影響力を保持していることから推測すれば、間接的にはあったにせよ、その影響下にあったことは十分に考えられることである。この点を前提にすれば、この時代の政治動向に伴って、集落が展開したものと理解できよう。その集落は組織的なグループによって構成され、周辺の耕地の開発に努めていた人々が生活していたものと想定したい。大型の住居跡に居住していた人達は、これらの開発のリーダー的立場が加味されていたのかもしれない。

古墳時代後期前半（第914回）

古墳時代後期前半の集落は、発掘区東端と中央部の谷に挟まれた自然堤防上に展開している。古墳時代中期後半に続いて住居跡の軒数がより大幅に増加している。住居跡の分布から、集落は4グループに分割できる。またカマドは、ほぼ完全に普及している。

この時期の住居跡の規模は千差万別である。各グループには、古墳時代中期後半のように中心となる大型の住居跡は存在していない。また住居跡の配置には、各グループとしての規則性は認められず、連綿と構築されている感がある。しかし住居跡の方向性を細かくみていくと、比較的大型の住居跡と中・小規模の住居跡による数軒からなる小グループに細分することが可能なようである。小グループの各住居跡の相互関連を推測すると、小グループが集まって大きなグループを構成し、さらにこれらのグループが狭い自然堤防上に展開している集落像を復元することができる。

この段階にみられる住居跡の軒数の増加は、古墳時代中期後半に行なわれたと思われる周辺耕地の開発によって、生産力が拡大したことが背景になっていると思われる。これに伴って、人口が増加していったのであろう。また耕地が開発されているこの地域に、新たに周辺地域から移り住んで来た人々もいたに違いない。この結果、さらに大規模に集落が展開していったものと考えたい。

この時期はさきたま稲荷山古墳に始まるさきたま古墳群勢力の最盛期でもある。6世紀初頭には大型円墳の丸墓山古墳（径105m）が、続いて県内最大の前方後円墳の二子山古墳（全長135m）が築造されている。墳丘規模の拡大は、勢力の拡大を背景にしているものと理解できる。これと併行して造営されている利根川南岸地域の前方後円墳は、規模や方向性が強く規制されている。さらに墳形にまで規制がおよび、軌立貝形前方後円墳の築造に甘んじている首長墓が多い時期である。このような大規模な勢力は、やはり周辺集落における生産力の増大に支えられていたのであろう。これを反映するかのようになり、上敷免遺跡でも集落が、さらなる発展をしている。このような社会状況が、住居跡の軒数および人口の増加を促したのであろう。

古墳時代後期後半（第915回）

古墳時代後期後半の住居跡は、古墳時代後期前半と同様の地域に構築されている。但し、住居跡の軒数は前代と比べると少なくなってきている。住居跡の分布から、集落は5グループに分割することができる。さらに各グループ内においても、相互に関連しているものと思われる数軒の小グループに分けることができそうである。

グループには大型住居跡を中心に展開しているものと、中・小規模の住居跡が集まって構成しているものに分類できる。前者は古墳時代後期前半に急激に増えた住居跡が、組織的に再編成されたグループと思われる。このようなグループの再編成は、古墳時代中期後半の状況と同列には考えがたい。古墳時代後期前半期においては、住居跡の規模から想定して、人々はほぼ同等の生産力をもっていただものと推測される。しかし生産力の拡大に伴って、住民層の間には格差が生じ始めていたのではないだろうか。その結果、富裕層（大型住居）を中心としたグループに、再編成されたものと考えたい。この時期には、周辺地域に上増田古墳群や木の本古墳群等の群集墳の造営が始められている。群集墳の被葬者は前方後円墳に埋葬されているような首長層ではなく、規模や数および質の面から被葬者層の増加と階層的により一般化した傾向を示しているものと考えられている。土敷免遺跡の富裕層が群集墳に葬られた人々であるとは言いえないが、群集墳の出現や展開には彼らのような人達の成長が背景となっているのであろう。周辺の群集墳の成立と期を同じくして、富裕層が成長し、また彼らを中心として集落内のグループが再編成されていることは興味深い。また一方では、中・小規模の住居跡のみで構成されているグループも存在している。この場合、富裕層の成長が認められず、同時期における複雑な社会状況を示している。但し、削平の影響や発掘区域が小開切れ状態であることを加味すれば、大型住居跡を中心に展開したグループであった可能性が秘められている。

この時期の特記事項としては、大型土器の隆盛と須恵器の普及がある。大型土器は壘形土器と模倣坏形を呈している鉢形土器に顕著である。これらの大型土器出現の契機は、生産力の拡大に伴って生産量が増大し、これらの生産物の貯蔵・加工および消費量が増大していった結果なのではないだろうか。大型土器の類例や系譜などについては、いまのところ資料の調査はほとんど行っていないため、あくまでも想像である。今後の課題としたい。一方、須恵器は前代から認められているが、ある程度普及しだすのはこの段階からである。特に第70号住居跡から出土している徳利型平底壺の存在は注目される。これは東松山市桜山窯跡群第8号窯（水村他1982）、美早町広木大町9号墳（駒宮1987）、岡部町砂田前遺跡第19号住居跡（岩瀬1991）に続いて、県内では4例めである。これは群馬県から埼玉県にかけて分布しているものであるが、出土例は少ない。本例は酒井清治編年の4期に相当するものと思われ、陶器Ⅱ-4に併行する（酒井1991）。

7世紀前半（第916図）

7世紀前半の住居跡の軒数は、古墳時代後期後半とは比較にならないほど少ない。1～2軒の住居跡が点在しているのみである。前方後円墳の築造の終了、ひいては古墳体制の衰退とともに、集落の大規模な展開は終焉に向かっている。

土敷免遺跡の集落の大規模な展開に大きな影響をおよぼしたものと想定されるさきたま古墳群で

も、6世紀末のさきたま将軍山古墳を最後に大規模な首長墓が造られなくなっている。7世紀になるとこれにかわって、周辺に位置している大型前方後円墳の行田市小見真観寺古墳（全長112m）、円墳の行田市八幡山古墳（径74m）、方墳の行田市地藏塚古墳（28m）が、主導的な勢力を保持したようである。上敷免遺跡における大規模な集落の展開の終焉とさきたま古墳群の勢力の衰退が、ほぼ時期を同じくしていることは、早なる偶然とは思えない。とするならば、上敷免遺跡はさきたま勢力の消長と大きく関連していた集落であったと位置づけられよう。

7世紀後半（第917図）

この時期になっても、7世紀前半の集落の状況とほとんどかわっていない。数軒の住居跡が集まって、点的に存在しているのみである。傾向としては、発掘区中央部の谷を挟んだ地域に住居跡が構築されている。

8世紀前半（第918図）

日本史上、この時期は律令体制に移行する時期である。上敷免遺跡の集落は、数軒からなる8組の小グループが全体に点在している。想像を逞しくするならば、上敷免遺跡も律令体制に組み込まれていき、居住地が定められていた可能性があるやも知れない。

8世紀後半（第919図）

8世紀前半にやや増加し始めた住居跡の軒数が、再び減少している。1～2軒の小グループが、点在しているのみである。また住居跡の規模もごく小さいものである。

9世紀前半（第920図）

9世紀前半にはさらに住居跡の軒数が減少している。1～2軒の小グループが細々と営まれている程度である。

では、なぜこの時期に住居跡の軒数が少ないのであろうか。その解明の鍵を握っているのは、妻沼低地各所で確認されている噴砂の痕跡である。噴砂とは、大地震の地震動に伴って地下の砂層が液状化し、地盤の割れ目に沿って地表に噴出した砂（層）をさしている。これは気象庁震度Ⅴ以上の強い地震動を受けた場合に形成されるものといわれている。古記録には、武蔵国の被害地震は弘仁9年（818）と元慶2年（878）が記録されている。そのうち妻沼低地各所でみられる噴砂の痕跡は、弘仁9年の地震に対応する可能性が考えられている（堀口他1985・堀口1986）。この説を運用するならば、大地震の被害の影響によって集落が展開されなかった可能性を秘めている。しかし弘仁9年の地震でないとするならば、ほかの案を考えざるをえない。だが、この時期に住居跡の軒数が極めて少ない点を重視するならば、弘仁9年に大地震の被害にみまわれた説を支持したい。

9世紀後半（第921図）

9世紀後半になると、再び住居跡の軒数が増加している。住居跡の軒数の増加は、大地震の被害

から復興した姿を示しているように思われる。構築されている住居跡は、発掘区西側に偏って分布している。数軒の住居跡による小グループが構成され、各グループごとに住居跡の形態や規模がほぼ統一されている傾向がある。検出されている掘立柱建物跡の多くはこの時期の遺構と考えられ、各グループに数棟が含まれている。掘立柱建物跡の各グループにおける機能は明確ではないが、掘立柱建物跡を中心にしてグループが展開していった可能性もある。

10世紀代 (第922図)

10世紀代の住居跡は2軒のみであり、それぞれが遺跡東端と中央部の谷に面して点的に存在しているのみである。一方、上敷免遺跡と谷を挟んで対峙する上敷免北遺跡では、この時期の集落が確認されている(澤出1985)。両遺跡の関連が注目される。

第258号住居跡は大地震の痕跡である噴砂を切って構築されており、大地震が9世紀代に起こった証拠となる。今後、周辺の遺跡においてこのような傾向が増加することによって、地震の年代を特定していくことができるであろう。

今回の調査における上敷免遺跡の集落の展開は、以上のとおりである。綿密的な調査であり、今後の調査によっては、状況が異なる場合もある。

集落展開の最大のピークは古墳時代中期後半から古墳時代後期後半にかかる時期である。市教委で行なった調査でも、この時期の集落が発掘されている。この時期の利根川南岸地域では、さきたま古墳群の首長を頂点とする古墳体制が展開している。上敷免遺跡の集落の展開はさきたま古墳群の動向と期を一にしており、直接的ではないにしろ、その勢力の影響下にあったものと思われる。さきたま古墳群造営の終焉後は大規模な集落の展開は認められない。さらに弘仁9年には大地震の被害にみまわれている。しかし9世紀後半代において、住居跡の軒数は再び増加している。この段階には掘立柱建物跡も構築されている。けれども、10世紀代にはいと2軒の住居跡以外は確認されていない。これを最後に、上敷免遺跡では人々の生活の痕跡を認めることはできない。

隣接している深谷市新屋敷東遺跡の報告において、北武蔵の集落の動態が考察されている。隣接する集落間は住居跡の構築数のピークが異なっていると指摘されている。この現象は、各集落の維持する耕地の潜在的生産能力と農業水準に関わり、集落内の人口増加や耕地の拡大によって変移したためと考えている(田中1992)。上敷免遺跡において大規模な集落の展開のピークを終えた7世紀代に、新屋敷東遺跡では第2のピークを迎えている。この状況は田中の考察を傍証している。

本稿では新屋敷東遺跡の報告で行なったような細かい土器の編年作業は行っていないため、集落が大規模に展開している期間が長い。上敷免遺跡においても、出土遺物の細かな編年作業を行なえば、さらに集落の消長が克明になっていくものと思われる。今後の課題としたい。

2 子持勾玉

上敷免遺跡第84号住居跡カマド内から、子持勾玉が出土している。管見では県内初の出土である

と同時に、形態は全国にも例をみないものである。見た目には、子持勾玉状の形態を呈している程度の石製品で、一般に知られている子持勾玉の形状とは大きく掛け離れている。如何にも、無理やりに子持勾玉を製作している感がある。

親勾玉（本体）は扁平で、頭部（孔のあいている方）と尾部の形状や大きさが極端に異なっているものである。このような歪な形態は子勾玉（突起）の製作方法に大きく起因している。

本例の子勾玉（突起）は、佐々木幹雄分類のc型式もしくはd1型式に相当するものである（佐々木1985）。c型式は子勾玉になる部分をまとめて削り残し、のちに子勾玉を作るものである。特に子勾玉と子勾玉の間は親勾玉の身を挟んでいる。一方d1型式は、「とくに背部の子勾玉と考えられるものが親勾玉の身より外側に突起しないもの。これは素材から子持勾玉をつくる際、とくに背部の子勾玉になる部分を意識して残さず、親勾玉の背をそのまま丸くつくり出し、のちにその親勾玉の背を削って子表現したもので、「親勾玉の背部を大きく幅広くゆるやかに挟った」ものである。「ここではあきらかに勾玉という形は勿論のこと、それを背に突出してつけるということさえ全く無視されている」。厳密に言えば、本例はどちらの型式にも属していない。しかし子勾玉の製作に伴って親勾玉が変形している点を重視するならば、d1型式に属するものといえよう。因に、大平茂の分類ではB型1類に相当するものであろう（大平1989）。

本例において最も重視すべき点は、子勾玉の形態にある。本来は勾玉状を呈しているものであるが、本例は方形を呈している。このように子勾玉が勾玉形を呈していない例として、群馬県子持村館野遺跡例がある（群馬大学1966・山本1986）。

子勾玉の形態から、調査当初は未製品の可能性を考えていた。しかし出土した第84号住居跡は玉作工房跡ではないため、未製品である可能性はきわめて薄い。本例の場合、製品として考えるのが妥当であろう。ほかに子持勾玉を模倣した模造品とも考えた。しかし元来が模造品的な存在である子持勾玉を、さらに模造するというには疑問がある（註1）。さらに子勾玉の数も特徴として認められる。通常は腹部・側部・背部の子勾玉の数が異なっているものが多い。これに対して本例は2個に統一されている。方形の2個の子勾玉が子勾玉の両端を表現した結果として考えることもできるが、この場合にも子勾玉の数が統一されたものになる。そのため本例を、異形の子持勾玉として把握している。

子持勾玉は単独出土や祭祀遺跡出土例が多い。これに続いて、古墳および集落出土例も認められている。また他の玉類や手押土器などの祭祀遺物と共伴している例が多い。このような出土状態からも、子持勾玉は祭祀または信仰上の遺物として一般的には把握されている。

関東地方は、子持勾玉の出土遺跡が多く分布している地域である。国立歴史民俗博物館研究報告第7集「共同研究「古代の祭祀と信仰」附篇 祭祀関係遺物出土地名表」では、茨城県28例、栃木県15例、群馬県25遺跡47点、千葉県8例、東京都1遺跡4点、神奈川県5例、これに本例の埼玉県1例で、合計83遺跡108点の子持勾玉が検出されている（国立歴史民俗博物館1985）。佐々木幹雄「子持勾玉私考」では、茨城県25遺跡26点、栃木県15例、群馬県31遺跡50点、千葉県9遺跡10点、埼玉県1例、東京都1遺跡4点、神奈川県3例で、合計85遺跡109点である（佐々木1985、註2）。これらのうち、群馬県伊勢崎市城山遺跡からは、子持勾玉が20点出土している。これと共伴する鏡

・白玉・刀子等の石製模造品に加えて、石製模造品の原石も認められている。これらのことから、製作遺跡として捉えられている。関東地方ではほかに、茨城県鹿嶋町鹿島湖岸北部条理遺跡が製作遺跡の可能性を指摘されている(国立歴史民俗博物館1985)。そのためか、群馬・茨城両県での出土例が際立って多い。

集落遺跡出土の子持勾玉は、祭祀遺構から検出されたものが多い。これに対し、住居跡から出土した例は比較的少ない。関東地方では、明確に住居跡から出土した例として、茨城県総和町向坪B遺跡、群馬県伊勢崎市・東村伊勢崎・東流通団地遺跡、前橋市富田遺跡群、高崎市八幡中原遺跡、千葉県成田市公津原遺跡例が挙げられる。

向坪B遺跡第1号住居跡では、石製模造品の勾玉10点、白玉3570点、滑石製紡錘車1点、土玉9点と土師器および須恵器高坏(TK73~TK216)が共存している。玉類は一カ所に集中している。報告では甕・碗・坏形土器等の日常生活具が出土していることから、「祭祀に関係のある者の日常生活の場であった可能性が高く、祭祀だけを行った特別な遺構ではない」と考えられている。また玉類が集中出土していることにたいして、「祭祀が行われたのではなく、祭祀用具の保管の場の可能性」を示唆している(中沢1981)。

伊勢崎・東流通団地遺跡1-11-5号住居跡からは、土師器、須恵器(MT15~TK10)が伴出している(群馬県企業局1982)。

富田遺跡群第16号住居跡では、土師器が共存している(前橋市教育委員会1981)。

八幡中原遺跡では、2軒の住居跡から子持勾玉が出土している(神戸他1982)。第84号住居跡は古墳時代後期の住居跡で、白玉および坏形土器と共存している。子持勾玉は本来の形状からは程遠い特異な形をしている。子勾玉は親勾玉を無理やりに割り込んで、辛うじて表現している。親勾玉は勾玉本来の形状とは著しく異なり、破損品ではあるが全体的に長方形を呈している。第156号住居跡の子持勾玉は、床面中央部から出土している。この部分には滑石製の勾玉、剣、白玉等の石製模造品も集中している。これらと共存して、土師器(埴・坏・甕等)や須恵器(甕)、手捏土器が砕かれたような状態で検出されている。特に底部を中心に、打ち砕かれたようなものが多い。覆土中程から上層部にかけても同様で、特に上層部では須恵器が多くなる。炉跡やカマドは認められておらず、また子持勾玉・石製模造品や土器類の出土状況等から、祭祀的な意味あいの強い遺構とも考えられている。

公津原 Loc. 19-2 第205A 住居跡は古墳時代後期のもので、3軒の住居跡が重複している。石製剣形品1点、土製勾玉1点、土製丸玉2点のほかに土師器、須恵器(TK208~TK219)が共存している(玉口他1975)。

上敷免遺跡第84号住居跡は古墳時代後期の住居跡である。子持勾玉は、カマドの焚き口部から出土している。しかし、長期間にわたって熱を受けたような痕跡は認められていない。さらにカマド周辺からは、カマドを取り囲むように白玉が検出されている。これらと共存して、土師器も出土している。いずれも日用什器であり、祭祀的な破砕行為等は確認されていない。また手捏土器の存在も認められていない。

以上が、関東地方において、住居跡内から子持勾玉が出土した例である。詳細が明確ではないも

のものもあるが、子持勾玉の出土がすべて住居跡内において祭祀を行なった証拠とはならない。また祭祀行為が行なわれた可能性が高いものについても、祭祀行為そのものを復元することはたいへん難しい。しかし子持勾玉だけでは、決して祭祀が行なわれていないことは明白である。必ず、他の石製模造品や手捏土器および土師器・須恵器を祭祀用具として伴っている。

集落で執り行なわれた祭祀は、祭祀遺構として把握されている集落としての祭祀、住居祭祀、カマド祭祀に分類されている。しかし住居祭祀とカマド祭祀との違いは明確にはなっていない。本例の場合、子持勾玉がカマド焚き口部から出土し、さらにカマド周辺には石製模造品（白玉）が存在している。この点からすれば、カマド祭祀が執り行なわれた可能性がひじょうに高いものである（註3）。これに加えて、本住居跡は同時期の住居跡のなかでは際立って規模が大きく、また単一的な住居跡グループの中心的な位置に構築されている。このことから、グループのリーダー的な存在の者の住居であったとも想定される。とするならば、本例の子持勾玉を用いた祭祀は住居内におけるカマド祭祀とは性格を異にするものであろう。グループのリーダー的な存在の者が、代表して祭祀を執り行なった集落内祭祀であった可能性が想像される。しかし子持勾玉を出土した住居跡の敷例を見ても、伴出遺物や出土状況等はそれぞれが異なったありかたを示している。そのため本稿では、子持勾玉がカマドから出土した一例として紹介するにとどめておく。

3 土製模造鏡

上敏遺跡第88号住居跡から土製模造品の鏡が出土している（以下土製模造鏡）。住居跡・括資料であり、残念ながら原位置は不明である。土製模造鏡は鏡を粘土によって模倣したもので、祭祀遺物の1つとして把握されている。紐は棒状の粘土を貼付して表現しているが、欠落している。また棒状の工具による刺突によって文様も表現されている。大きさは62.5×62.0×13.0mm、重さは現存で59.23gを測る。

土製模造鏡は、埼玉県内において本例が6例めである。岡部町今泉（猪山）祭祀遺跡では石製模造品（勾玉・白玉・剣）、土製模造品（丸玉・人形品・動物形品・棒状具）、手捏土器と伴っている（小沢1956）。本庄市西富田新田遺跡第7号住居跡からは、古墳時代中期の土師器が伴出している（菅谷1972）。東松山市大西遺跡第2号住居跡では石製模造品（剣）と土師器（古墳時代中期）が（東松山市1981）、草加市東地総田遺跡第1遺構では土師器（古墳時代前期）が伴っている（草加市1988）。坂戸市上谷遺跡では、出土遺構が不明である（田中1976・坂戸市1992）。また浦和市須黒神社遺跡からは、古墳時代の土製円板が出土している（濱野1986）。グリッド出土であり、所属遺構は不明である。土製円板は、ほかにも敷例知られている。

関東地方において、土製模造鏡は比較的多くの遺跡から検出されている。群馬県1例、千葉県7例、東京都8例、神奈川県2例である。茨城・栃木両県ではいまのところ出土例は認められていない（註4）。分布は南関東地域に偏っているが、埼玉県・神奈川県では少なく、東京都・千葉県の東京湾周辺を中心に分散している傾向がある。

群馬県山楽町笹遺跡第8号住居跡は、弥生時代後期から古墳時代後期の5軒の住居跡が重複して

いる。ここから土製円板が出土しているが、どの住居跡に属するものかは明確ではない。石製模造品(白玉・剣)、土製模造品(勾玉・管玉・丸玉)と滑石剥片が共存している(橋沢1963A・1963B)。

千葉県では、土製模造鏡は5遺跡から出土している。柏市戸張南台遺跡(第一次・不動山遺跡)第1号住居跡では土師器(古墳前期)が伴っている(古宮1978)。成田市公津原遺跡Loc.19-2の5軒の住居跡が重複している第163A号住居跡では、土製模造品(丸玉)、手捏土器、土師器、須恵器(TK23orTK47)が共存している(玉口他1975)。館山市沼つるとば遺跡からは土製模造鏡、土製円板、石製模造品(白玉)、土製模造品(勾玉・丸玉・鈴釧・鐸)、土師器、須恵器が伴出している(千葉県1963、神尾1967、森谷1971)。ほかに館山市大戸館の前からは土製模造鏡とともに土製模造品(勾玉・丸玉)、手捏土器が出土している(千葉県1963、森谷1966)。千葉市木戸作遺跡第020号住居跡からは報告では蓋形土製品とされている土製模造鏡と手捏土器、土師器(古墳後期)、須恵器が共存している(三森・飯田1979)。古墳時代の土製円板は2遺跡から出土している。千葉市有吉遺跡第127号住居跡では手捏土器、土師器(古墳後期)、須恵器が伴出している(種田・飯田1978)。市原市番後台遺跡第039C号住居跡では手捏土器、土師器(前期)、鉄鋳?、不明鉄製品が共存している(藤崎1982)。

東京都では北部の足立区・北区と西部の八王子市に土製模造鏡が出土している遺跡が分布している。足立区伊興遺跡狭間地区(常福寺地区)では石製模造品(勾玉)と土師器(古墳中期)(大場他1962・1975、西垣1967)、足立区(水神橋際)遺跡では土師器(古墳中期)が共存している(西垣1967)。北区赤羽台遺跡八幡神社地区第3号祭祀跡からは古墳時代前期の土師器が伴出している(鈴木他1990)。八王子市では3遺跡5例が知られている。北八王子野野遺跡第6号住居跡(宮塚他1974)、船田遺跡B-29号住居跡、船田遺跡C-4号住居跡、船田遺跡E-64号住居跡(大場・玉口1970)、中田遺跡C'地区第2号住居跡(岡田他1967)では、いずれも古墳時代後期の土師器を伴っている。

神奈川県横浜市戸塚区上郷猿田遺跡第1号住居跡では土製模造鏡と奈良時代の土師器、須恵器が共存している(横浜市上郷猿田遺跡調査団1983)。秦野市模九鳥遺跡からは土製有孔円板と石製模造品(有孔円板・管玉・白玉・黄玉)、土製模造品(勾玉・丸玉)が伴出している(曾根・福田1978)。

以上のように、土製模造鏡は石製・土製模造品等の祭祀遺物を伴っている例が多い。また住居跡内から出土している例が多いことも特徴としてあげられる。しかし伴出する石製・土製模造品の種類には統一性がなく、なかにはこれらを共存しない例もある。

上敷免遺跡第88号住居跡は古墳時代後期の住居跡である。土製模造鏡に伴って、土玉、手捏土器(甌・壺)が出土している。いずれも原位置が不明であり、祭祀形態を復元することはできない。しかしこれらの祭器が土製品に統一されている点には注目される。土製品は石製品に比べて安易に製作することができる。これに着目すれば、石製品を用いた祭祀よりも軽易なものであった可能性があろう。さらに飛躍させるならば、石製の祭器による祭祀を執り行った人物よりも、階層的ランクが劣る人物による祭祀であったとも想像できる。だが、原位置をつかめていないこともあり想像

を越える言及はできない。本例は住居内から土製模造鏡が出土した一例として、紹介するとともにしておく。

現在の考古学研究において、集落内における祭祀の解明には程遠いものがある。現段階においては、祭祀の対象物や祭祀形態などはまだまだ想像の域を脱しきれてはいない。土敷免遺跡においても、多くの住居跡からさまざまな石製模造品、土製模造品等が出土している。第84号住居跡の手持勾玉を用いた祭祀や第88号住居跡の土製模造鏡を用いた祭祀をはじめ、これらの祭器を用いた祭祀が繰り返行なわれていることが推測される。しかしいずれの場合も、共存遺物や出土状況等が千差万別であり、これら进行操作・分類することは難しい。わずかに遺跡においてもこのような状況である。同時期の祭祀遺跡、遺構、遺物を論理的に操作・分類を行っていき、古代祭祀の解明に至るまでには、相当の困難を要する。まず祭祀遺物一つとってみても、個々に意味するものがある。これと同時に、「三種の神器」のように鏡・剣・玉のセットによって、より大きな意味合いを示すものもある。特に古墳時代においては、政治的祭祀である古墳祭祀が存在し、これと他の祭祀との関連性や質的な違いも明確になっていない。また同じ古墳祭祀であっても、前方後円墳に代表される大型古墳において繰り返行なわれる首長層の祭祀と、彼らとは物的・質的な格差が歴然と存在している被葬者が埋葬されている群衆墳祭祀との相違や格差および関連性等のもっている意味・意義すらも明らかにはなっていない。さらに遺構・遺物という物質証拠や出土状況等の状況証拠から出発する考古学研究において、これらの証拠が残存しにくい精神文化の一端である祭祀を追求することは、なおさら困難を究めるものである。今後の研究課題となろう。

註1 模造品の例として、福島県茨城村建鉾山二森地区第Ⅰ地点が知られている（国立歴史民俗博物館1985）。

註2 その後、茨城県勝田市西端遺跡でも出土している（茨城新聞92. 10. 3）。

註3 カマド祭祀の一要素として、「火」の祭祀を想定している。

註4 出土例数は国立歴史民俗博物館1982によるもので、その後の明確な数値は把握していない。土製模造鏡は紐部が欠落している場合には土製円板と見間違しやすいものである。土製円板は石製の有孔円板と同様に鏡を模倣した祭祀遺物として扱うことができる。年代的には弥生時代から奈良・平安時代まで存在し、一方、土製模造鏡は古墳時代に時期が限定されている。このため、遺跡数には古墳時代の土製円板を出土している遺跡も含めてカウントしている。

引用・参考文献

- 赤熊浩一 1988 『岩塚塚・古井戸—歴史時代掘削—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第71集
浅野晴樹 1989 『北島遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第81集
磯崎 一 1989 『新田森・明戸東・原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第85集
磯崎 一・中村吉司 1990 『坂倉神社前遺跡—一本松古墳—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第39集
井上高明 1986 『袴輪塚・古井戸—古墳—歴史時代掘削—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第64集
岩瀬 謙 1991 『磯崎・砂田前』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第102集
梅沢重昭 1963A 『笠遺跡—鍋川流域の滑石製品出土遺跡の研究—』群馬県立博物館研究報告 1
梅沢重昭 1963B 『笠遺跡—鍋川流域の滑石製品出土遺跡の研究（遺物編）—』群馬県立博物館研究報告 3
大谷 徹 1991 『北島遺跡Ⅲ（第12・13地点）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第103集

- 大場幹雄他 1962 『武蔵伊興』同学院大学考古学研究室報告 2
- 大場幹雄他 1975 『武蔵伊興遺跡』伊興遺跡調査団・足立区教育委員会
- 大場幹雄・王口時雄 1970 『船田・八王子船田遺跡における集落址の調査Ⅰ』八王子市船田遺跡調査会
- 大平 茂 1989 『子持勾玉年代考』『古文化談叢』第21集
- 岡田淳子他 1967 『八王子市中田遺跡』資料編Ⅱ 八王子市中田遺跡調査会
- 小倉 均 1982 『井沼方・大北・和田北・西谷・吉場遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書 第20集
- 小沢国平 1956 『岡部町今泉出土の祭器』『武蔵野史談』第3巻第3号
- 柳沼幹夫・笹森健一他 1977 『前高・島之上・出口・芝山』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第12集
- 柳沼幹夫・小久保徹他 1978 『東谷・前山2号墳・古川藏』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第16集
- 神尾明正 1967 『古代祭祀遺跡にみられる安房国の地域性』『千葉大学教養部研究報告』B-9
- 川口 潤 1989 『本郷前遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第78集
- 神戸聖治他 1981 『八幡中原遺跡』高崎市文化財調査報告書第31集
- 栗原文蔵他 1972 『水深』埼玉県遺跡調査会報告 第13集
- 群馬県企業局 1982 『伊勢崎・東流通団地遺跡』
- 群馬大学 1966 『船野遺跡発掘概報』昭和37・8年度における発掘調査。尾崎研究室調査報告第1掲
- 国立歴史民俗博物館 1982 『共同研究「古代の祭祀と信仰」附篇 祭祀関係遺物出土地名表』国立歴史民俗博物館研究報告第7集
- 胸宮史朗 1987 『埼玉県出土の古式須恵器』『第8回二界シンポジウム 東国における古式須恵器をめぐる諸問題』北武蔵古代文化研究会・群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所
- 胸宮史朗・宮谷浩之 1978 『埼玉県(旧武蔵北部地域)』『歴史時代土器の研究Ⅰ—東日本に於ける土器編年—』歴史時代土器研究会
- 埼玉県立歴史資料館編 1981 『六反田』岡部町六反田遺跡調査会
- 酒井清治 1984 『関東地方』『日本陶磁の源流—須恵器出現の謎を探る—』柏書房
- 酒井清治 1991 『8南東』『古墳時代の研究』第6巻 土師器と須恵器 雄山閣
- 坂戸市 1992 『坂戸市史』古代資料編
- 坂本和俊 1984 『Ⅲ関東』『古墳時代土器の研究』古墳時代土器研究会
- 佐々木幹雄 1985 『子持勾玉私考』『古代探叢』Ⅱ—早稲田大学考古学会創立35周年記念考古学論集—
- 澤出見越 1985 『上敷免遺跡(第2次)・上敷免北遺跡』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第11集
- 澤出見越 1991 『深谷市内道跡Ⅲ』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第28集
- 澤出見越・占池晋徳 1991 『明戸南部遺跡Ⅲ』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第29集
- 寒川 旭 1992 『地蔵考古学—道跡が語る地蔵の歴史—』中央公論社
- 中野靖寿・輝岡真一 1978 『上敷免遺跡』深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書
- 菅谷浩之 1972 『西富田・新田遺跡—古墳時代発掘調査概報—』本市市教育委員会
- 鈴木敏弘他 1990 『赤羽台遺跡—八幡神社地区—』東北新幹線赤羽地区遺跡調査会・東日本旅客鉄道株式会社
- 草加市 1988 『草加市史』自然・考古編
- 曾根博明・福田敏一 1978 『秦野市根丸島遺跡の調査』『第2回神奈川県遺跡調査研究会発表会発表要旨』
- 澁瀬芳之他 1990 『東川端遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第94集
- 立石盛詞他 1982 『後張Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第15集
- 立石盛詞他 1983 『後張Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第26集
- 田中 一郎 1976 『上谷遺跡』坂戸市教育委員会
- 田中広明 1992 『新尾放東・本郷前東』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第111集
- 種田齊寿・飯田正一 1978 『千葉県南部ニュータウン3—有古遺跡(第1次)—』日本住宅公団首都圏宅地開発本部・(財)千葉県都市公社

- 玉口時雄他 1975 『公津原』千葉県企業庁・千葉県地域振興公社
- 利根川章彦 1982 『新ヶ谷戸』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第9集
- 千葉県 1963 『千葉県史料 原始古代編 安房編』
- 中沢時宗 1986 『向坪B遺跡』『一般国道改築工事地内埋蔵文化財調査報告書1(総和地区)』茨城県教育財団文化財調査報告第38集
- 中村倉司 1989 『北高遺跡Ⅱ(第9・10・11地点)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第88集
- 中村倉司 1979 『宇佐久保遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書 第38集
- 中村倉司他 1980 『京遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書 第41集
- 西畑隆雄 1967 『原始古代の足立』『新修足立区史』上
- 長谷川勇他 1987 『社具路遺跡発掘調査報告書』本市埋蔵文化財調査報告第5集 3分冊
- 濱野美代子 1986 『須黒神社遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第56集
- 東松山市 1981 『大西遺跡A』『東松山市史』資料編第1巻
- 藤崎芳樹他 1982 『市原市番後台遺跡・神明台遺跡』千葉県土木部・(財)千葉県文化財センター
- 古池晋祐・青木克尚 1992 『深谷市内遺跡Ⅲ』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第35集
- 古宮隆信 1978 『南台遺跡発掘調査報告書(第1次・第2次)』豊四季遺跡発掘調査報告書。南台遺跡巻四西遺跡発掘調査書
- 樋口萬吉 1986 『埼玉県北部でみられる古代の噴砂について』『歴史地誌』第2号 東京大学地質研究所
- 樋口萬吉・角田史雄・町田明夫・益岡 明 1985 『埼玉県深谷バイパス遺跡で発見された古代の“噴砂”について』『埼玉大学教養部紀要(自然科学編)』第21巻
- 前橋市教育委員会 1981 『富田遺跡群』昭和55年度
- 増田逸朗・柿沼吟夫・小久保徹他 1979 『下田・諏訪』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第21集
- 水村孝行他 1982 『松山窯跡群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第7集 水村孝行・井上 啓他 1978 『舞台Ⅰ』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第17集
- 水村孝行・井上 啓他 1979 『舞台Ⅱ』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第18集
- 三森俊彦・飯田正一 1979 『千葉東南部ニュータウン2-木戸作遺跡(第1次)』日本住宅公団首都圏宅地開発本部・(財)千葉県都市公社
- 宮塚義人他 1974 『北八王子西野遺跡』東京西線及び北八王子安電所遺跡調査会
- 森谷ひろみ 1966 『祭祀対象不明の祭祀遺跡とその神積地質について—館山市東長田および大戸館ノ前の場合—』『千葉大学文理学部紀要』4—4
- 森谷ひろみ 1971 『千葉県館山市沼つるとば祭祀遺跡の発掘結果からみた遺跡付近の小地誌』『千葉大学教養部研究報告』D—4
- 安岡路洋他 1981 『東北原遺跡—第5次調査—』大宮市遺跡調査会報告 第2集
- 山形洋一他 1989 『御蔵山中遺跡-I』大宮市遺跡調査会報告 第26集
- 大和 修他 1983 『若宮台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第28集
- 山本 靖 1991 『利根川南岸地域の前方後円墳の展開』『専修考古学』久保哲三先生追悼号 専修大学考古学會
- 山本良知 1986 『飯野遺跡』『群馬県史』資料編2 原始古代2
- 横浜市上郷飯田遺跡調査団 1983 『上郷飯田』

VIII 附篇

胎土分析

株式会社第四紀地質研究所 井上 巖

第11・19・232号住居跡（古墳後期・中期・後期）、第2号井戸跡・第19号住居跡（平安前半）から出土した遺物のうち、50点の試料に対して分析を実施した。第11・19・232号住居跡および第2号井戸跡45・46、表採3が土師器で、ほかは須恵器である。土器胎土に含まれている粘土鉱物および造岩鉱物の同定はX線回折試験を行ない、土器胎土の組織、粘土鉱物およびガラス生成の度合については電子顕微鏡によって観察した。

実験結果は胎土性状表に示すとおりである。胎土性状表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物および造岩鉱物の組成が示してある。左側には各胎土に対する分類を行なった結果を示している。

土器胎土の組成分類は、Mo—Mi—Hb 三角ダイアグラムおよびMo—Ch、Mi—Pb 菱形ダイアグラムの位置分類によっている。焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量から、I—Vの5段階に区分した。タイプ分類は三角ダイアグラム・菱形ダイアグラムの位置分類の組合せと、焼成ランクに基づいて分類を行なった。

1 実験結果

(1) タイプ分類

A タイプ…SJ19—117B (甕)・61 (高坏)

Mont, Mica, Hb, Ch の4成分を含む。

C タイプ…SJ232—56 (坏)・115 (甕)、SJ19—40 (椀)・29 (椀)

Mont, Mica, Hb の3成分を含み、Ch成分に欠ける。Bタイプに類似している。

E タイプ…SJ232—29 (坏)・23 (坏)・75 (椀)・116 (甕)、SJ19—123 (甕)

SJ11—4 (坏)、表採3 (高台付椀)

Hb成分を含み、Mont, Mica, Chの3成分に欠ける。

G タイプ…SJ19—129 (甕)

Mica, Hb, Chの3成分を含み、Mont成分に欠ける。

I タイプ…SJ19—52 (高坏)・9 (坏)・15 (坏)、SJ11—6 (坏)、SE2—45 (高台付椀)

Mica, Hbの2成分を含み、Mont, Chの2成分に欠ける。

J タイプ…SJ232—114 (甕)・117 (甕)、SJ19—117A (甕)・39 (椀)、SJ11—1 (坏)

Mica, Hb, Chの3成分を含み、Mont成分に欠ける。Gタイプに類似している。

K タイプ…SJ232—59 (坏)・6 (坏)・47 (坏)・86 (小型甕)・87 (小型甕)・108 (甕)

上敷免遺跡胎土性状表

試料 No.	タイプ 分類	形状	ラック	高さ	Mo-K _α	Na-K	Ca	Mg	Si	Al	Fe	Mn	Co	Ni	Cu	Zn	As	Sb	Bi	Pb	Cr	Au	方寸	備考
S232-059	K	II	II	20	119	85				2366	284												中粒	胎土
S232-060	K	II	II	20	80	85				2473	469												中粒	胎土
S232-058	K	II	II	20	146	113	60			2744	374												中粒	胎土
S232-056	S	II	II	20						3395	337												中粒	胎土
S232-057	S	II	II	20	114	85				3210	483												中粒	胎土
S232-054	S	II	II	20						2710	348												中粒	胎土
S232-053	S	II	II	20						2814	488												中粒	胎土
S232-052	S	II	II	20						2863	508												中粒	胎土
S232-051	S	II	II	20	91					2988	292												中粒	胎土
S232-043	M	II	II	20	126					1830	228												中粒	胎土
S232-045	E	II	II	20	186	109				2517	631												中粒	胎土
S232-046	E	II	II	20	89	81				2517	631												中粒	胎土
S232-047	E	II	II	20						2510	310												中粒	胎土
S232-048	C	II	II	20	136	114	105			4551	516												中粒	胎土
S232-049	C	II	II	20	114	105				2852	352												中粒	胎土
S232-044	E	II	II	20	82					1799	254												中粒	胎土
S232-041	S	II	II	20						2469	266												中粒	胎土
S232-042	S	II	II	20	93	66				2289	450												中粒	胎土
S232-041	J	II	II	20	162	109				2760	820												中粒	胎土
S232-040	J	II	II	20	175	114				2687	842												中粒	胎土
S232-039	J	II	II	20	186	146	101			3167	1044												中粒	胎土
S232-038	J	II	II	20						2977	478												中粒	胎土
S232-037	J	II	II	20	154	93				2619	713												中粒	胎土
S232-036	J	II	II	20	93					3611	608												中粒	胎土
S232-035	J	II	II	20	162	109				5156	533												中粒	胎土
S232-034	J	II	II	20	142	127				5156	533												中粒	胎土
S232-033	J	II	II	20	126	116				3013	297												中粒	胎土
S232-032	J	II	II	20	135	154				4616	1074												中粒	胎土
S232-031	J	II	II	20	132	101				3449	448												中粒	胎土
S232-030	J	II	II	20	100	83				3126	360												中粒	胎土
S232-029	J	II	II	20	163	87				2787	500												中粒	胎土
S232-028	J	II	II	20	109	109				3469	581												中粒	胎土
S232-027	J	II	II	20	142	114				4280	591												中粒	胎土
S232-026	J	II	II	20	142	114				3680	776												中粒	胎土
S232-025	J	II	II	20	204	188	153			4589	616												中粒	胎土
S232-024	J	II	II	20	164	119				3101	616												中粒	胎土
S232-023	J	II	II	20	81	104				2985	418												中粒	胎土
S232-022	J	II	II	20	81	81				2688	1288												中粒	胎土
S232-021	J	II	II	20	20	20				3217	507												中粒	胎土
S232-020	J	II	II	20	174	20				1058	497												中粒	胎土
S232-019	J	II	II	20	121	108				1550	357												中粒	胎土
S232-018	J	II	II	20	63					3328	705												中粒	胎土
S232-017	J	II	II	20	99					1923	42												中粒	胎土
S232-016	J	II	II	20	58					1919	284												中粒	胎土
S232-015	J	II	II	20	86	82				1864	180												中粒	胎土
S232-014	J	II	II	20	0	0				1184	183												中粒	胎土
S232-013	J	II	II	20	0	0				1184	183												中粒	胎土

Mo: モリブデン K: カオリ Ca: 雲母類 Mg: 角閃石 Ch: 結晶石 Ni: ニッケル Cu: 銅 Pb: 鉛 Bi: 碲 As: 砒 S: 硫黄 Fe: 鉄 Mn: マンガン Cr: クロム Ba: バリウム Sr: ストロンチウム Zr: ズルコニウム Hf: ハフニウム Ti: タンタル Nb: ニオブ Ta: タングステン Sn: 錫 Sb: 亜鉛 Te: 碲 Se: 硒 Br: 臭素 I: ヨウ素 Cs: セシウム Rb: ルビウム Y: イトリウム Zr: ズルコニウム Hf: ハフニウム Th: トリウム U: ウラン Pa: パラタングム Ac: アクチノイド

上敷免遺跡化学分析表

試料	SiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	CaO	MgO	Na ₂ O	K ₂ O	SO ₃	CO ₂	H ₂ O	Total
SE02-020-1	0.370	0.452	13.620	57.148	0.193	2.110	1.420	5.200	21.595	0.604	0.290
SE02-028-2	0.220	1.202	14.040	55.790	0.022	2.420	1.490	0.180	21.980	0.000	0.000
SE02-022-1	0.890	0.695	16.010	62.490	0.980	1.810	1.330	0.320	19.450	0.000	0.140
SE02-022-2	0.430	0.912	15.100	62.410	2.580	1.550	1.540	0.180	12.040	0.000	0.135
SE02-023-1	0.770	1.200	13.780	54.950	0.965	1.860	1.700	0.950	22.190	0.000	0.716
SE02-023-2	0.635	0.820	14.280	57.320	1.100	1.920	1.650	0.032	21.660	0.000	0.920
SE02-043-1	0.770	1.452	16.010	56.720	2.280	2.320	2.800	5.160	14.010	0.070	0.390
SE02-045-2	1.020	3.470	19.260	57.750	2.020	1.930	1.990	0.120	17.730	0.080	0.360
SE02-046-1	0.470	1.190	15.850	64.460	0.970	2.020	1.260	0.240	6.285	2.130	0.460
SE02-046-2	0.625	0.650	14.470	61.300	0.900	2.725	1.205	0.910	16.970	0.240	0.200
SK19-018-1	0.285	2.050	21.950	56.100	2.180	2.525	1.680	0.120	9.800	0.000	0.110
SK19-018-2	0.210	1.730	21.610	58.330	2.170	1.675	1.740	0.110	6.750	0.000	0.100
SK19-013-1	0.200	2.310	16.510	61.210	1.960	0.750	1.820	0.200	12.060	0.150	0.250
SK19-013-2	1.200	1.140	16.240	61.230	2.065	0.950	1.480	0.960	15.690	0.900	0.600
SK19-016-1	0.410	1.355	16.970	62.980	2.260	0.880	1.350	0.470	11.840	0.000	0.370
SK19-016-2	1.160	1.240	17.240	63.720	2.370	0.760	1.230	0.100	11.330	0.020	0.120
SK19-021-1	0.650	1.250	16.070	61.590	2.230	0.860	1.610	0.260	12.950	0.020	0.310
SK19-021-2	0.930	1.430	16.710	60.710	2.320	0.860	1.525	0.210	12.120	0.120	0.560
SK19-003-1	0.660	1.660	16.910	65.440	0.670	1.430	1.225	0.010	10.860	0.000	0.620
SK19-002-2	0.790	1.120	17.470	60.210	0.740	2.220	1.160	0.050	7.340	0.120	0.460

SJ19-132 (甕)・115 (竇)・121 (甕)・65 (高坏)・111 (甌)

SK19-18 (坏)・21 (坏)

Mica, Hb の 2 成分を含み、Mont, Ch の 2 成分に欠ける。

Mタイプ…SJ232-37 (坏)、SJ19-60 (高坏)、SE 2-46 (筒形土器)

Mica 成分を含み、Mont, Hb, Ch の 3 成分に欠ける。

Sタイプ…SJ232-20 (坏)・14 (坏)・83 (碗)・89 (小型壺)・91 (小型壺)

SE 2-28 (高台付碗)・22 (高台付碗)・33 (高台付碗)、SK19-12 (坏)・16 (坏)
Mont, Mica, Hb, Ch の 4 成分に欠ける。

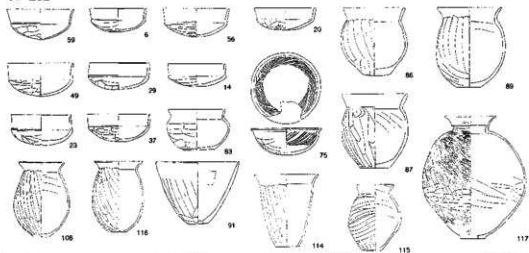
以上の結果から明らかのように、最も多いタイプは K タイプである。これと組成が類似する I タイプは、強度が異なっている。これらが在地あるいは在地近傍の可能性が高い。また J タイプも個体数が多く、在地あるいは在地近傍の可能性が高い。ほかに C・E・S タイプも認められ、これら 6 タイプが胎土の組成として主流のタイプになるのではなからうか。

第 232 号住居跡の試料は、K タイプが 6 点と最も多い。続いて S タイプの 5 点、E タイプの 4 点で、分散傾向にある。特に、S タイプは第 11・19 号住居跡では検出されていない異質なタイプである。S タイプは $nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot lH_2O$ (アルミナゲル) で構成され、第 232 号住居跡に特有のものかもしれない。

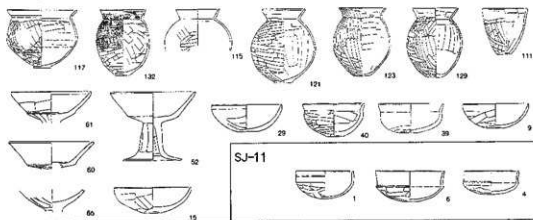
SJ19-117A と SJ19-117B は同一個体のサンプルである。異形な甕で、上部 2/3 と下部 1/3 の胎土に違いが認められる。境界付近ではクラックが目立つ。その原因を解明するために、上部・下部それぞれからサンプルを採取した。上部のサンプルは SJ19-117A で、J タイプである。下部サンプルが SJ19-117B で、A タイプに属している。組織的には Mont, Mica, Hb, Ch のうち 4 成分を含むものが A タイプ、Mont を除いた 3 成分を含むものが J タイプである。Mont は焼成されると収縮する性質がある。そこで下部が収縮して、境界にクラックを作ったのではなからうか。

第 11 号住居跡の試料は椀・甌・坏である。SJ11-1 は J タイプ、SJ11-6 は I タイプ、SJ11-4 は E タイプであり、胎土のタイプが異なっている。これら 3 タイプは、いずれも上敷免遺跡では多数派に属するもので、胎土としては異質なものではない。

SJ-232



SJ-19



SJ-11



SE-2



SK-19



SH

第2号井戸跡、第19号土坑の試料のうち、EタイプとKタイプは上敷免遺跡では多く検出されているタイプである。Sタイプのうち焼成ランクが高いものは本来の組成である鉱物が熱によって分解し、ガラスになったために、4成分が検出されなかったものであろう。焼成ランクの低いものは本来の鉱物組成を反映しているもので、第232号住居跡では多く検出されている。このような結果から判断して、土師器と須恵器の胎土の類似性が窺われる。

上敷免遺跡の東に隣接する深谷市新屋敷東遺跡でも、同様の胎土分析が行なわれている。E・Kの2タイプが共通し、関連性が窺われる。

(2) Qt (石英) - P1 (斜長石) の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は、粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作る。このことは、個々の集団が持つ、土器製作上の個有の技術であると考えられる。

自然状態における各地の砂は、個々の石英と斜長石の比を有している。この比は、後背地の地質条件によって各々異なってくるものである。言い換えれば、各地域における砂は、各々個有の石英-斜長石比を有しているといえる。この個有の比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは、各々の集団の有する個有の技術の一端である。

Qt (石英) - P1 (斜長石) 相関図において、I - IIIのグループに分類された。またQt (石英) の強度は2200を境に、P1 (斜長石) の強度は1000を境にして、4ブロックに分けることができた。なおグループの分類には、同様の実験を実施した深谷市柳町・新屋敷東・熊谷市北島・小敷田・岡部町樋詰遺跡の土器も参考としている。

上敷免遺跡の試料はII・III・IV・V・VI・VIIの6グループに分布している。また第19号住居跡の試料は第232号住居跡のものと比較して分散する傾向が強い。

1ブロック

Iグループ…P1 (斜長石) の強度が高いことで特徴付けられる。

IIグループ…SJ19-52

北島遺跡の土器が主体となるグループで、上敷免遺跡のなかでは異質である。

2ブロック

IIIグループ…SJ19-61

全体的に分散傾向にあり、新屋敷東遺跡の土器が特に集中している。ほかに柳町・北島遺跡のものも共存している。上敷免遺跡のなかでは異質である。

IVグループ…SJ232-75・116

個体数が少なく、北島遺跡の土器が共存している。第232号住居跡の試料はEタイプのもので、集中度も高い。

3ブロック

Vグループ…SJ19-117A・132、SJ11-4

分散傾向にあり、柳町・北島遺跡を主体として、樋詰遺跡の土器が共存するグループである。このグループには小型の甕や甕が多く、第19号住居跡の甕もここに属している。またSJ11-4の横微坏は異質である。

4ブロック

VIグループ…SJ232-59・6・56・20・47・29・14・23・37・83・86・87・89・108・91・114・117、SJ19-117B・115・121・129・60・65・111・40、SJ11-1・6

このグループは、集中度が比較的高いのが特徴である。

個体数も多く、胎土もKタイプを主体としていることから推察して、在地あるい

は在地近傍の可能性が高い。

Qt (石英) — Si (斜長石) 相関図に示すように、Ⅴグループのなかでは中心部分に坏類が集中している。一方、壺・甕類はこのまわりに分かれて分布し、器種による差がみられる。

Ⅴグループ…SJ232—115、SJ19—123・39・9・15・29

第19号住居跡の試料が集中し、坏を主体とする小型の土器で特徴付けられる。確証はないが、これらが第19号住居跡を代表する土器の可能性はある。

Ⅵグループ…分散傾向にあり、小敷田遺跡の上器のみが属している。

第232号住居跡において、ⅣグループのSJ232—75は群馬系の内斜口縁の暗文土器であり、SJ232—116 (甕) と組成は一致している。しかしⅣグループのものとしては、異質のように見受けられる。そこで高崎市小林山台遺跡の胎土分析の結果 (実験条件は同様) と照合したところ、75と同じ組成をもつことが明らかになった。小林山台遺跡の試料5点のうち4点がMont, Mica, Hb, Chの4成分のうちHb成分のみを含むタイプである。SJ232—75の組成とひじょうに類似性が高く、しかも同じグループに属するとすれば、関連性はさらに高くなる。

第19号住居跡の117Aと117B (同一個体) は、胎土のタイプが異なる組成をしていることが判明している。石英と斜長石の相関においても、117AがⅤグループ、117BがⅥグループに属し、両者の砂の混合比も異なっている。このことから推察して、明らかに異質の粘土によって構成されているものと判断される。

上敷免遺跡の土器はⅤグループに多く属している。このグループには柳町・北島・新居敷東・畑跡遺跡のものが共存し、これらの遺跡との関連性が窺われることが特徴である。

第11・19・232号住居跡と年代の異なる第2号井戸跡・第19号土坑の試料は、大きく分けてⅢ・Ⅳグループと“その他”に分類された。ⅢグループにはSE 2—22・33・46があり、高台付碗が主体となる。一方、ⅣグループにはSE 2—45、SK19—18・12・16があり、須恵器の坏が集中する。その他のSE 2—28は石英の強度が低く、異質である。SK19—21は石英の強度が高く異質である。しかしこの位置は第19・232号住居跡のものが分布する領域である。表探3は斜長石の強度が高く、北島遺跡などで構成されるⅡグループに属している。

2 化学分析結果

第2号井戸跡・第19号土坑および表探の試料10点を対象として、化学分析を行なった。分析はH本電子製エネルギー分散型X線分析装置JED—2000で実施した。分析結果は化学分析結果表に示すとおりである。

【 SiO_2 — Al_2O_3 の相関について】

SiO_2 — Al_2O_3 図に示すように、Ⅰ・Ⅱグループと“その他”に分類された。

Ⅰグループは SiO_2 が60%以下で、SE 2—28・33・45の3点が集中する。

Ⅱグループは SiO_2 が60%以上で、SE 2—22・46、SK19—12・16・21、表探3の6点が集中する。

“その他”は Al_2O_3 が20%以上で、ほかとは明らかに異質である。

以上の結果からすると、Ⅰグループは須恵器の高台付碗、Ⅱグループは須恵器の坏が集中する。

【 Fe_2O_3 - MgO の相関について】

Fe_2O_3 - MgO 図に示すように、Ⅰ・Ⅱグループと“その他”に分類された。

Ⅰグループは Fe_2O_3 が10-15%の範囲に分布し、SE 2-22、SK19-18・12・16・21、表採3の6点が集中する。

Ⅱグループは Fe_2O_3 が15%以上の領域に分布するもので、SE 2-28・33・45の3点が属する。

“その他”はSE 2-46のみで、 Fe_2O_3 が10%以下に分布する。

Ⅰグループは須恵器の坏、Ⅱグループは須恵器の高台付碗が集中し、 SiO_2 - Al_2O_3 の相関とよく類似する。

【 K_2O - CaO の相関について】

K_2O - CaO 図に示すように、Ⅰ-Ⅲグループに分類された。

ⅠグループはSK19-12・16・21の3点が集中し、須恵器の坏で構成されている。

ⅡグループはSE 2-45、SK19-18の2点で構成される。

ⅢグループはSE 2-28・22・33・46、表採3の5点で構成される。須恵器の高台付碗3点と土師器の筒形土器（SE 2-46）、ロクロ土師器（表採3）が共存している。

以上の結果から推測して、SE 2-28・33・45とSE 2-45・22・46、SK19-18・12・16・21、表採3の2つのグループに分かれるように見受けられる。

3 まとめ

土器胎土のタイプ分類

第232号住居跡の土器胎土は、6タイプに分類された。Kタイプが6点と最も多く、Sタイプが5点となっている。Sタイプの胎土は第11・19号住居跡、柳町遺跡では検出されておらず、異質である。しかし、個体数の多いことからすれば、Kタイプと同様にSタイプも在地あるいは在地近傍の可能性が高い。第232号住居跡の土器はこの2タイプを中心として作られており、器種による胎土の統一性はない。坏でも小型甕・甍も両タイプの胎土で製作されている。

第11・19号住居跡の土器胎土は、8タイプに分類された。Kタイプが5点、Iタイプが4点、Jタイプが3点で、これら3タイプで60%を占める。この傾向は柳町遺跡でも認められ、関連性が窺われる。

第2号井戸跡・第19号土坑の土器胎土は、E、I、K（2）、M、S（5）の5タイプに分類された。E、K、Sタイプは第232・11・19号住居跡でも、多く検出されているタイプである。Sタイプの一部には、高温で焼成された際に鉱物が分解してガラスに変化したものが含まれている。

電子顕微鏡によるガラスの分析

第232・11・19号住居跡の試料の電子顕微鏡によるガラスの分析では、SJ232-89、SJ11-4を除くすべてに、中粒のガラスが生成し、焼成ランクはⅢである。SJ232-89、SJ11-4は中-粗粒の

ガラスが生成し、焼成ランクはⅡ～Ⅲと幾分高い。

第2号井戸跡・第19号上坑の試料のうち、SE2-28・SK19-16の2点は、焼成ランクがⅠあるいはⅠ～Ⅱと高い。ほかの8点はⅡあるいはⅡ～Ⅲ、Ⅲと幾分低い。

石英と斜長石の相関

第232号住居跡の土器は、Ⅳ・Ⅴ・Ⅵグループに分類された。Ⅴグループには20点のうち17点が属し、Ⅵグループの中心部分には坏が集中し、その周辺に小型甕や甗・甑などが3つの小グループに分かれて分布する。小型の甕や甑、甗などは坏とは異なる砂の混合比で作られていることは明白である。Ⅳグループには群馬系の内斜口縁暗文土器(75)があり、116(甕)と共存している。両者はともにEタイプで、共通性はある。75の胎土組成と、高崎市小林山台遺跡のものとの類似性はひじょうに高い。また同じグループに属するとなれば、関連性はさらに高くなる。

第11・19号住居跡の上器は、Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶグループに属している。Ⅱ・Ⅲグループには各々1点ずつであり、北島・新原敷東遺跡との関連性が窺われる。Ⅴグループは小型の甕・甗で構成されている。北島・樋詰・柳町遺跡のものと共に、関連性が窺われる。Ⅵグループには20点のうち10点が集中し、甕と坏を主体としている。土器胎土はおもにKタイプで、第232号住居跡、柳町遺跡の傾向と類似する。このグループにも北島・新原敷東・樋詰遺跡のものが共存し、これら4遺跡との関連性が窺われる。Ⅶグループは第19号住居跡が集中し、器種も坏を主体としている。特徴的であり、第19号住居跡独自の土器であるのかもしれない。

第2号井戸跡・第19号上坑の土器は、石英の強度が2400以下の領域に分布し、第232・11・19号住居跡のものとは異なる。北島遺跡に近い関係にあるものと推察される。Ⅲ・Ⅳグループと“その他”に分類された。ⅢグループはSタイプの胎土で作られた須恵器の高台付碗と、土師器の筒形土器が共存している。Ⅳグループは須恵器の坏が集中し、土師器の甕(SE2-45)と共存している。“その他”はSE2-28、SK19-21、表採3の3点である。SE2-28は石英の強度が低く、異質である。SK19-21は石英の強度が2400以上で、第232・11・19号住居跡が分布する領域にある。表採3は斜長石の強度が高く、北島遺跡の土器で構成されるⅡグループに入る。このようにみえてくると、石英の強度が2400以上の領域の影響が強いようである。

化学分析

化学分析結果ではSE2-28・33・45の3点と、SE2-22・46、SK19-18・12・16・21、表採3の7点の土器とでは、組成が異なっている。前者は須恵器の高台付碗と土師器の甕が共存し、後者は須恵器の坏が集中する。

実験条件および実験結果の取扱いについては、埼玉崇徳蔵文化財調査事業団報告書 第111集『新原敷東・本郷前東』(1992)を参照されたい。